

勝賀城跡 III

— 総括報告書（考察編） —

二〇二三年十一月

高松市教育委員会

勝賀城跡III

— 総括報告書（考察編） —

2022年11月

高松市教育委員会

考 察 編 目 次

第1章 勝賀城跡の立地

| | | |
|--------------------|-------|---|
| 第1節 高松平野の地質環境..... | 梶原 慎司 | 1 |
| 第2節 勝賀山の地形・地質..... | 梶原 | 7 |

第2章 勝賀城跡と香西浦

| | | |
|---------------------|---------|----|
| 第1節 中世以前の香西..... | 梶原 | 8 |
| 第2節 香西氏関連の中世城館..... | 梶原 | 14 |
| 第3節 香西浦の状況..... | 橋詰 茂・梶原 | 18 |
| 第4節 近世以降の勝賀城跡..... | 梶原 | 22 |
| 第5節 香西所在の寺社..... | 橋詰・梶原 | 23 |

第3章 南北朝期～戦国期の香西氏

| | | |
|-------------------------------------|-------|----|
| 第1節 香西氏の出自と伝承..... | 田中 健二 | 27 |
| 第2節 近世における香西氏像..... | 田中 | 27 |
| 第3節 南北朝期～室町期の香西氏..... | 田中 | 31 |
| 第4節 戦国期讃岐・瀬戸内の状況 一本太合戦から元吉合戦へ一..... | 橋詰 | 39 |
| 第5節 長宗我部氏の侵攻と香西氏..... | 橋詰 | 45 |

第4章 豊臣大名の讃岐統治

| | | |
|---------------------------|----|----|
| 第1節 豊臣勢力の讃岐侵攻..... | 橋詰 | 49 |
| 第2節 仙石氏の入部から生駒氏の入部まで..... | 橋詰 | 50 |
| 第3節 国絵図からみた生駒期の讃岐国..... | 田中 | 52 |

第5章 考古学的検討

| | | |
|-----------------------------------|----------|-----|
| 第1節 全国的な事例からみた勝賀城跡の位置づけ..... | 中井 均 | 56 |
| 第2節 讃岐における中世城郭の特徴と勝賀城跡..... | 梶原 | 71 |
| 第3節 天霧城跡・雨滝城跡・聖通寺城跡の出土遺物..... | 梶原・松田 朝由 | 83 |
| 第4節 出土遺物からみた戦国時代末から織豊期の讃岐の城郭..... | 乗岡 実 | 113 |

第6章 総括 梶原 133

参照文献 141

例　　言

- 本書は、高松市教育委員会が平成 28 年度から令和 3 年度にかけて国庫補助事業として実施した勝賀城跡の総括報告書（考察編）である。
- 本書の執筆は目次及び文末に記している。また、編集は梶原が担当した。

挿　図　目　次

| | | | | | |
|----------|-----------------------------------|----|----------|-------------------------|----|
| 第 1-1 図 | 香川県の地質図 | 2 | 第 4-1 図 | 各絵図における引田城・高松城・丸亀城・觀音寺城 | 55 |
| 第 1-2 図 | 高松平野の地形分類図 | 3 | 第 5-1 図 | 勝賀城跡縄張図 | 56 |
| 第 1-3 図 | 高松平野の地形発達過程 | 4 | 第 5-2 図 | 鎌刀城跡大櫓平面図 | 57 |
| 第 1-4 図 | 勝賀山平面図 | 5 | 第 5-3 図 | 葦山城跡塩蔵 | 58 |
| 第 1-5 図 | 勝賀山断面図 | 6 | 第 5-4 図 | 長比城跡縄張図 | 59 |
| 第 2-1 図 | 旧石器・縄文時代の遺跡分布 | 8 | 第 5-5 図 | 二位谷奥付城跡 | 61 |
| 第 2-2 図 | 弥生時代の遺跡分布 | 9 | 第 5-6 図 | 十万寺所在の城跡縄張図 | 61 |
| 第 2-3 図 | 主要古墳の分布 | 10 | 第 5-7 図 | 鳥取太閤ヶ平本陣周辺の縄張図 | 63 |
| 第 2-4 図 | 古代の遺跡分布 | 11 | 第 5-8 図 | 鳥取太閤ヶ平本陣の縄張図 | 63 |
| 第 2-5 図 | 中世の遺跡分布 | 13 | 第 5-9 図 | 長比城跡の虎口調査平・断面図 | 65 |
| 第 2-6 図 | 香西氏関連の中世城館・寺社の分布 | 15 | 第 5-10 図 | 加佐山城跡平面図 | 66 |
| 第 2-7 図 | 佐料城跡地図 | 15 | 第 5-11 図 | 室山城跡・黄峰城跡平面図 | 69 |
| 第 2-8 図 | 佐料城跡周辺地図 | 16 | 第 5-12 図 | 黄峰城跡石垣 | 69 |
| 第 2-9 図 | 室山城跡・黄峰城跡平面図 | 17 | 第 5-13 図 | 引田城跡石垣 | 69 |
| 第 2-10 図 | 讃岐国香川郡笠居村之内字香西地引 図面に記載された「船入川」 | 20 | 第 5-14 図 | 比高差×主郭の広さ | 72 |
| 第 2-11 図 | 香西浦と海岸線の復元図 | 21 | 第 5-15 図 | 雨瀬城跡測量図 | 73 |
| 第 2-12 図 | 常善寺文書（教如書状） | 24 | 第 5-16 図 | 天王城跡縄張図 | 74 |
| 第 2-13 図 | 養福寺（泥塔・鬼瓦）所蔵遺物 | 25 | 第 5-17 図 | 内山城跡縄張図 | 75 |
| 第 3-1 図 | 『南海通記』に掲載された香西氏系図 | 28 | 第 5-18 図 | 関連する城跡の位置 | 76 |
| 第 3-2 図 | 本太城跡縄張図 | 39 | 第 5-19 図 | 堂山城跡縄張図 | 76 |
| 第 3-3 図 | 戦国期における主要な城跡の位置 | 40 | 第 5-20 図 | 勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡の 視覚領域 | 77 |
| 第 3-4 図 | 櫛梨山城跡縄張図 | 44 | 第 5-21 図 | 勝賀城跡南西部の標高色別図 | 78 |
| 第 3-5 図 | 西長尾城跡縄張図 | 46 | 第 5-22 図 | 香西氏時代の勝賀城跡（想像図） | 79 |
| | | | 第 5-23 図 | 天霧城跡出土遺物 瓦① | 84 |
| | | | 第 5-24 図 | 天霧城跡出土遺物 瓦② | 85 |

| | | | | | |
|----------|-----------------------|-----|----------|-------------------------|-----|
| 第 5-25 図 | 天霧城跡出土遺物 陶磁器類① | 86 | 第 5-45 図 | 雨滝城跡出土遺物 土師質土器② | |
| 第 5-26 図 | 天霧城跡出土遺物 陶磁器類② | 87 | | | 109 |
| 第 5-27 図 | 天霧城跡出土遺物 陶磁器類③ | 88 | 第 5-46 図 | 聖通寺城跡出土遺物 | 111 |
| 第 5-28 図 | 天霧城跡出土遺物 陶磁器類④ | 89 | 第 5-47 図 | 讃岐の戦国末から織豊期の城郭にある石積み・石垣 | 114 |
| 第 5-29 図 | 天霧城跡出土遺物 陶磁器類⑤ | 90 | 第 5-48 図 | 藤尾城の瓦 | 117 |
| 第 5-30 図 | 天霧城跡出土遺物 土製品・石製品 | 91 | 第 5-49 図 | 讃岐在地系とみられる瓦 | 121 |
| 第 5-31 図 | 軒丸瓦の範傷 | 92 | 第 5-50 図 | 同范・同文・同系の瓦 | 122 |
| 第 5-32 図 | 軒平瓦の範傷 | 93 | 第 5-51 図 | 中心飾り宝珠様系軒平瓦の文様系譜 | 124 |
| 第 5-33 図 | 雨滝城跡出土遺物 軒丸瓦 | 94 | 第 5-52 図 | 中心飾り下向き三葉岡山系軒平瓦の文様系譜 | 124 |
| 第 5-34 図 | 雨滝城跡出土遺物 軒平瓦① | 95 | 第 5-53 図 | 岡山と讃岐の軒平瓦の同范・同範的同文関係 1 | 124 |
| 第 5-35 図 | 雨滝城跡出土遺物 軒平瓦②・鬼瓦 | 96 | 第 5-54 図 | 岡山と讃岐の軒平瓦の同范・同範的同文関係 2 | 126 |
| 第 5-36 図 | 雨滝城跡出土遺物 丸瓦① | 98 | 第 5-55 図 | 16世紀～17世紀前葉の土師質土器の擂鉢と鍋 | 127 |
| 第 5-37 図 | 雨滝城跡出土遺物 丸瓦② | 99 | 第 5-56 図 | 戦国末～織豊期の城郭群 | 128 |
| 第 5-38 図 | 雨滝城跡出土遺物 丸瓦③ | 100 | 第 6-1 図 | 勝賀城跡の位置 (S=1/500万) | 133 |
| 第 5-39 図 | 雨滝城跡出土遺物 丸瓦④・棟込瓦 | 101 | 第 6-2 図 | 勝賀城跡の位置 (S=1/10万) | 133 |
| 第 5-40 図 | 雨滝城跡出土遺物 平瓦① | 102 | 第 6-3 図 | 勝賀山断面図 | 134 |
| 第 5-41 図 | 雨滝城跡出土遺物 平瓦② | 103 | 第 6-4 図 | 勝賀城跡縄張図 | 134 |
| 第 5-42 図 | 雨滝城跡出土遺物 中国産陶磁器・国産陶器① | 105 | 第 6-5 図 | 南西部土壌の位置 | 136 |
| 第 5-43 図 | 雨滝城跡出土遺物 国産陶器② | 106 | | | |
| 第 5-44 図 | 雨滝城跡出土遺物 土師質土器① | 107 | | | |

挿 表 目 次

| | | | | | |
|---------|--------------------|----|---------|--------------------|-----|
| 第 2-1 表 | 香西船の積載状況 | 18 | 年表 5 | 室町期における香西一族の主要な活動③ | 38 |
| 年表 1 | 南北朝期における香西氏の活動 | 31 | 第 5-1 表 | 讃岐の中世山城分類表① | 81 |
| 年表 2 | 香西常建・常慶の活動 | 32 | 第 5-2 表 | 讃岐の中世山城分類表② | 82 |
| 年表 3 | 室町期における香西一族の主要な活動① | 34 | 第 6-1 表 | 香川県内主要山城との比較 | 138 |
| 年表 4 | 室町期における香西一族の主要な活動② | 36 | | | |

第1章 勝賀城跡の立地

第1節 高松平野の地質環境

高松市は四国北東部に位置し、地形的には南から①和泉層群からなる讃岐山脈、②領家花崗岩類から構成される前山丘陵、③讃岐層群からなる丘陵・台地、④主として第四紀堆積物から構成される高松平野、⑤瀬戸内海に区分される。

本節では、勝賀城跡が立地する高松平野沿岸部の地質について詳述する。具体的には、基盤岩である領家花崗岩類、勝賀山や屋島の山頂部に分布する讃岐岩質安山岩を含む讃岐層群、勝賀山裾に広がる高松平野を対象とする。

1. 領家花崗岩類

領家花崗岩類は本市に広く分布する基盤岩類で、黒雲母花崗岩及び花崗閃綠岩などからなる。約9,000万～8,000万年前（白亜紀後期）に起きた激しい火成活動によって、地下数kmにマグマが貫入して冷却し、その後の隆起によって地表に顔を出したものである。このうち、五剣山西麓の庵治町と牟礼町の境界付近に広がる庵治花崗岩は細粒の黒雲母花崗岩で、「庵治石」と呼ばれ、最高級石材として全国的に著名である。

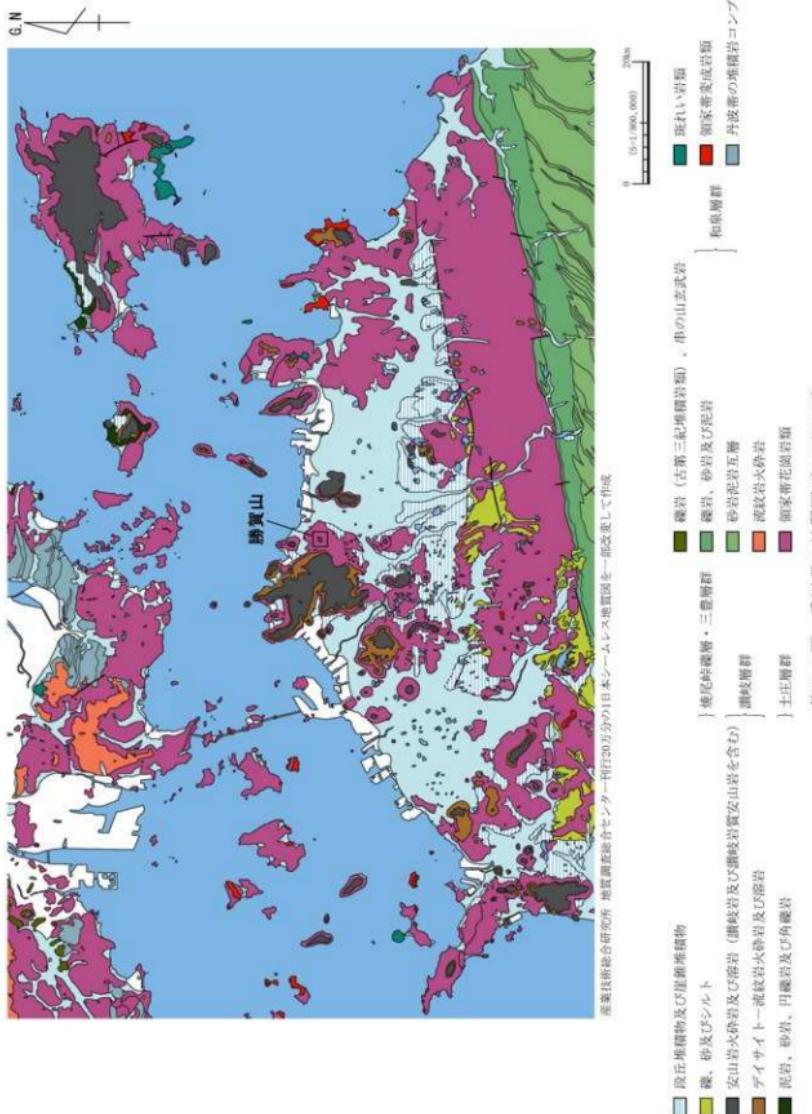
花崗岩類は風化を受け、地表付近では砂質又は礫質のマサ（花崗岩類が風化してできた砂）になっている。マサは場所によっては厚さ数十メートルに及び、降雨等により表層が崩落しやすい土壌を形成している。また、マサは河川によって運搬され海岸に砂浜を形成し、白砂青松の景観を生み出している。

2. 讃岐層群

約1,400万～1,000万年前（中期中新世）に起きた活発な火山活動（瀬戸内火山活動）の際に噴出した溶岩と火碎岩によって形成される。これらの岩石は瀬戸内火山岩類と呼ばれ、約1,600万～1,500万年前に日本海が急激に拡大した直後に噴出したと考えられている。瀬戸内火山岩類は、サヌカイトやサヌキトイド、ざくろ石ディサイト等の特徴的な岩石を産することで特徴づけられる。

勝賀山でも産出するサヌキトイドは、和訳すると讃岐岩類であり、サヌカイト（讃岐岩）やそれと類似した特徴を示す岩石を指す。旧石器時代から弥生時代に石器石材として多用される石材として知られるサヌカイトは、岩石学的には瀬戸内火山岩帶に産する非晶質古銅輝石安山岩を指す。斑晶は古銅輝石をわずかに含む程度で、ガラス質の基調が特徴的な黒色緻密な岩石である（藤井・佐藤1996）。サヌキトイドは斑晶量が少なく（多くの場合10%以下）、斜長石斑晶を含まない黒色緻密な火山岩である。サヌキトイドには玄武岩質と安山岩質があり、安山岩質サヌキトイド（讃岐岩質安山岩）には通常の安山岩に比べてMg含有量が高くFeO/MgOが低い（多くの場合1以下）高Mg安山岩（HMA）が含まれる（異2003）。

中期中新世に噴出した大量の火山灰・火山角礫・溶岩は谷や低地を埋め、広範囲に溶岩台地が形成されたが、その後の侵食によって削平され、メサやビュートとよばれる地形を形成した。

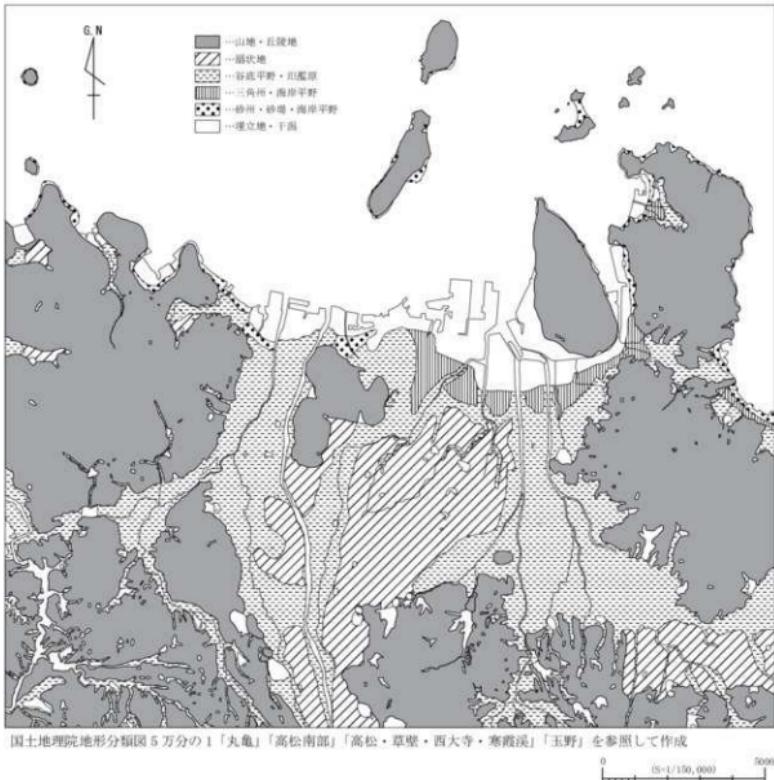


第1-1図 香川県の地質図 (S=1/80万)

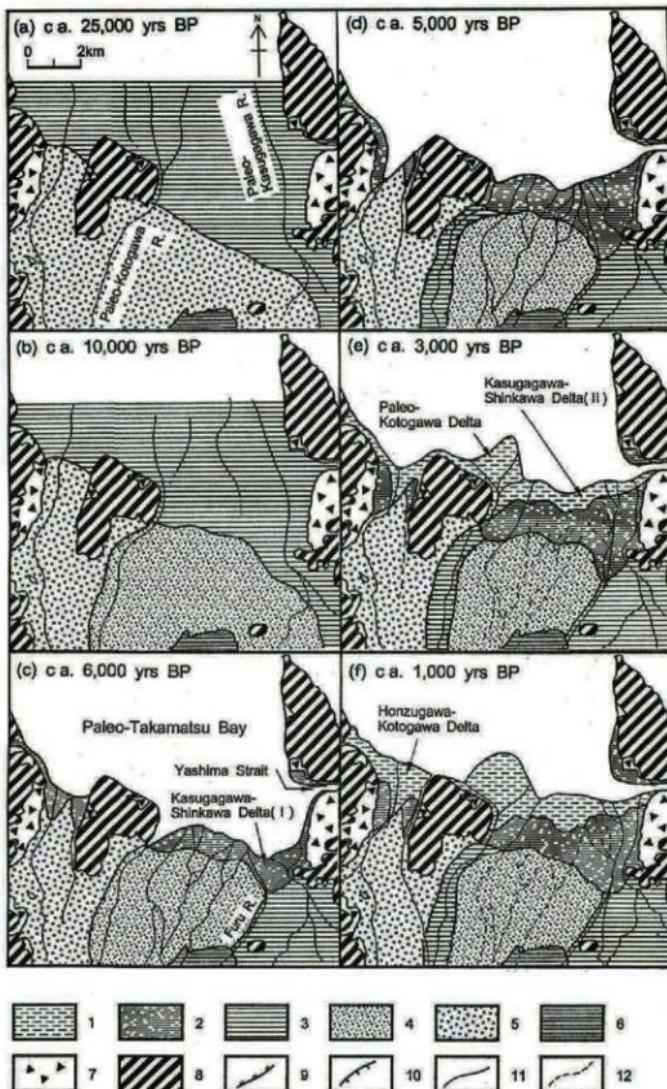
3. 高松平野

日本の沖積低地は、上流側から海に向けて扇状地・氾濫原・三角州が順に配列することが多く（海津 1994）、高松平野もその一つである。高松平野は讃岐山脈より流れ出た河川が運んだ堆積物により形成された。現在、高松平野には東から新川・春日川・詰田川・御坊川・香東川・本津川が北流しているが、中でも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼした（第1-2図）。現在の香東川は近世初期に生駒家の臣西鷲八兵衛によって一本化されたものであり、かつては石清尾山山塊の南麓から平野中央部を東北流する主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から林地区から木太地区にかけての分ヶ池・下池・長池・大池・旧ガラ池を結ぶ旧河道が数条存在していたことが判明しており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、近世初期の廃川直前の流路は御坊川として今でもその名残りを留めている。

高松平野の古環境については、高橋学氏や川村教一氏によって研究が進められてきた。高橋



第1-2図 高松平野の地形分類図 (S=1/15万)



Paleo-geomorphological map of Takamatsu Plain.

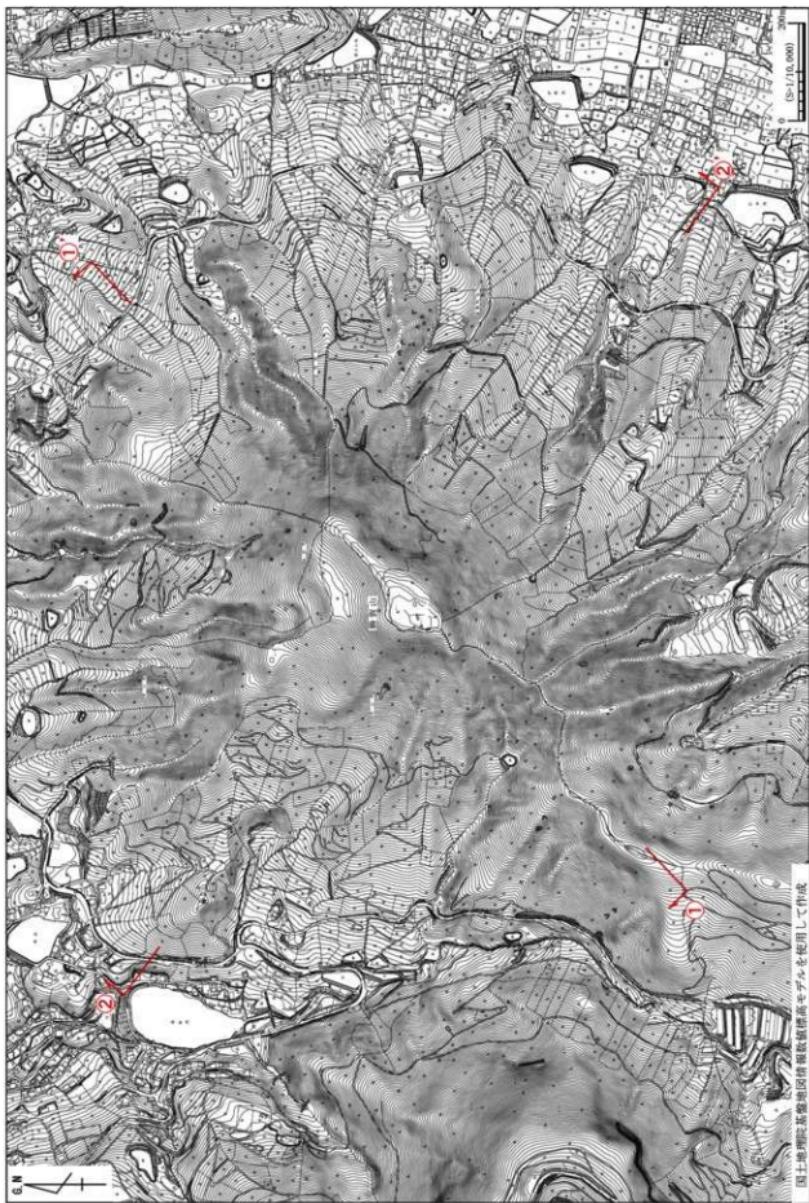
I: Paleo-Kotogawa Delta, 2: Kasugagawa-Shinkawa Delta, 3: natural levee zones, 4: Kotogawa Fan (stage P II), 5: Kotogawa Fan (stage P I), 6: terrace, 7: alluvial cone and talus, 8: hill and mountain, 9: lower terrace scarp, 10: Holocene terrace scarp, 11: river channel, 12: buried river channel

第1-3図 高松平野の地形発達過程 (Kawamura, 2003)

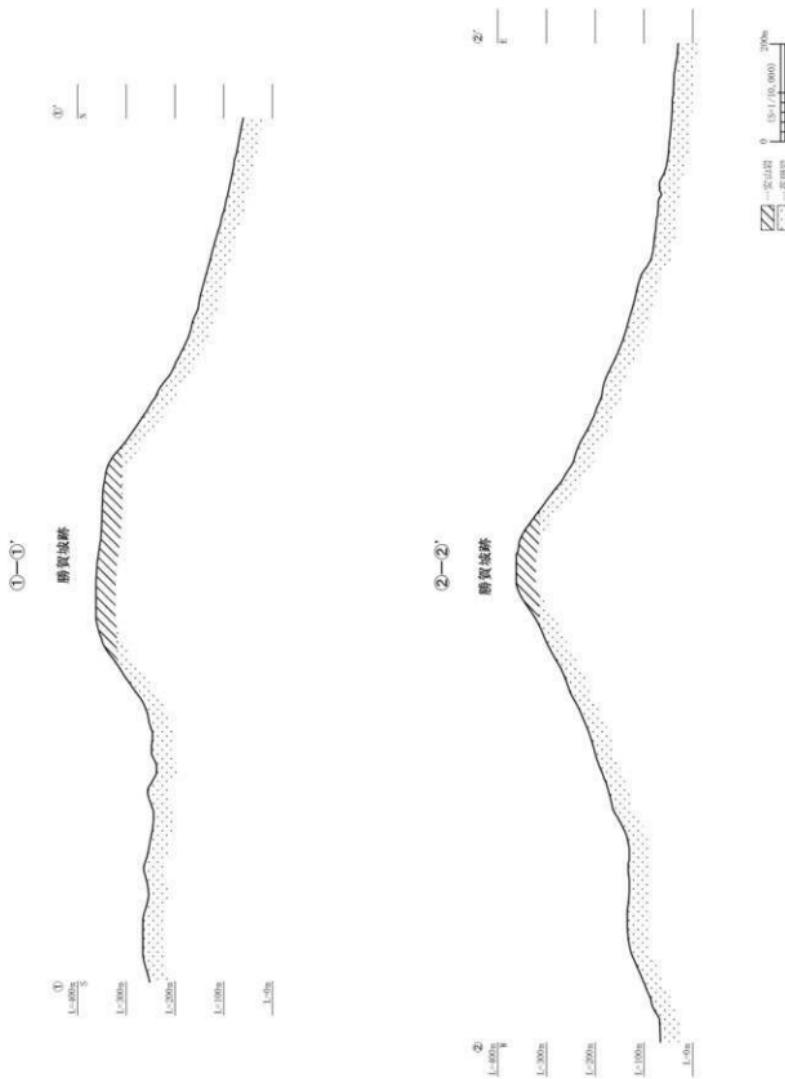
第1-4図 勝負山平面図 (S=1/10,000)

(S=1/10,000)

国土数研地図データを基盤として作成



第1-5図 勝賀山断面図 (S=1/10,000)



氏は、表層地質の観察や微地形分類等の分析に加え発掘調査の成果を踏まえ、100年単位の地表面における地形発達と人為的な土地利用の関わりについて論じた（高橋 1992）。一方、川村氏は岩相の分析、貝類化石を用いた堆積環境の推測、火山灰の広域対比、化石の放射性炭素年代、相対的海水準変動曲線、遺跡の分布に基づき、1,000年単位の高松平野における後期更新世以降の地形発達について論じ、第1-3図のような地形発達過程を想定した（川村 2000、Kawamura, 2002, 2003）。

（梶原）

第2節 勝賀山の地形・地質

勝賀山は、高松市鬼無町・香西西町・植松町・中山町にまたがり、五色台山系の東端に位置する。標高365mの山頂は平坦になっており、南北に連なる尾根筋のなかで一際高くなる。勝賀山の形状は台形状を呈している（第1-5図、調査編巻頭図版1）。断面図をみると、東西はどちらも似たような傾斜だが、南北では北側がやや緩やかな傾斜となっている。

勝賀山の基盤岩は花崗岩類であり、標高310～320mまでは砂状に風化した花崗岩類（マサ）がみられる。標高310～320mから山頂までは、讃岐岩質安山岩が分布する。この讃岐岩質安山岩により、山頂部の平坦面と周辺の急崖を構成するメサ地形が形成される。そのため、花崗岩類から讃岐岩質安山岩に変化する標高310m付近で急傾斜になり、天然の要害となっている。

勝賀山の地形・地質の変化は、曲輪の分布（調査編第2章第2節の分布調査の成果）とも対応しており、城の防備に効果的な地形・地質の範囲、すなわち花崗岩から安山岩へと変わり傾斜が急になる標高310～320mから山頂部までの範囲を勝賀城域としているものと考えられる。

（梶原）

第2章 勝賀城跡と香西浦

第1節 中世以前の香西

本節では、勝賀城跡が所在する高松平野西部（香東川以西の高松市域）を対象に、中世以前の歴史的環境を概観する。

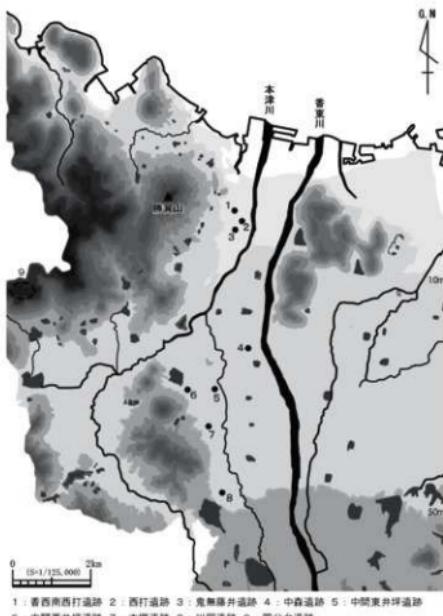
1. 旧石器時代

高松平野西部の本津川流域は、高松平野の中でも旧石器時代の遺構が集中して検出される地域である。中間西井坪遺跡では石器ブロックが数多く検出され、ナイフ形石器や角錐状石器など10,000点を超える多量の石器が出土した（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編2001）。他にも中間東井坪遺跡（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編2004）や中森遺跡（香川県埋蔵文化財センター編2004）で石器ブロックが確認されている。これらの遺跡は標高20～30mの平坦地に立地し、現水田面下0.3～0.6mという浅い表層部に旧石器包含層が遺存するという特徴がみられる。また、標高3～4mの香西南西打遺跡でも石器ブロックが検出されており（高松市教委編2000）、本津川流域では旧石器時代の遺構が広く分布していると想定される（森下2001）。中間東井坪遺跡で利用された石器石材はサヌ

カイトが多く、藁科氏による分析の結果、国分台や金山から採取されたことが明らかになっている。ただし、藁科氏の分析方法には問題があるため、産地を同定したと断定することは難しいが、遺跡周辺には生産遺跡として著名な国分台遺跡が所在する五色台があることから、遺跡周辺の石材産地から採取した可能性は高い。

2. 繩文時代

縄文時代の遺構はほとんど検出されておらず、遺物が散見される程度である。西打遺跡では、自然流跡から前期末の土器が出土している。また、晩期前葉の土坑（SK01）も検出されてい



第2-1図 旧石器・縄文時代の遺跡分布 (S=1/125,000)

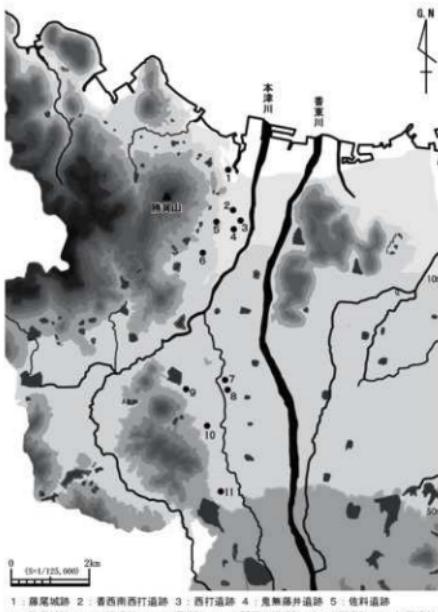
る。出土遺物は一括性が高く、一括遺物として良好な資料である（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2000, 2002）。**本郷遺跡**では、後期の貯藏穴が 1 基検出されている（香川県埋蔵文化財センター編 2008）。**鬼無藤井遺跡**（高松市教委編 2001）や**川岡遺跡**（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2004）では、自然流路跡から晩期の土器が出土している。

3. 弥生時代

弥生時代の遺構は、各遺跡で断続的にみられる。前期前半は遺構が検出されておらず、前期後半に**鬼無藤井遺跡**で二重環濠が確認されるのが初現である。環濠の規模は、長軸約 80 m、短軸約 60 m（推定）である。環濠内部から出土する土器に時期幅はみられず、短期的な環濠集落といえる。環濠内部については一部のみ発掘調査が実施されているため詳細は不明だが、堅穴建物跡 4 棟と掘立柱建物跡 1 棟が検出されており、環濠内部は居住域として利用されていたと考えられる。
（注）イカハ
兀塚遺跡では、前期末～中期前半の円形周溝墓の可能性が高い円形周溝状遺構が認められる（香川県埋蔵文化財センター編 2014）。主体部は削平されしており出土土器も少量のため詳細は不明だが、流路跡から前期末～中期前半の土器が出土していることに加え、近隣の**正箱遺跡**で落ち込みから中期前半の土器が出土していることから、周辺に集落があった可能性は高い。

中期後半～後期前半の遺物は散見されるが、遺構は確認されていない。後期後半になると遺跡数が増加する。この現象は、後期後半に低地部で集落が大幅に増加する、という高松平野における集落立地の傾向に沿っている（渡邊 2012, 2016）。勝賀山東麓では、**香西南西打遺跡**や**西打遺跡**、**佐料遺跡**（高松市教委編 2014）、**佐藤城跡**（高松市教委編 2021）で後期後半～古墳時代前期初頭の堅穴建物跡や溝などの遺構が検出されている。本津川中流域では、**中間西井坪遺跡**（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 1999）や**本郷遺跡**、**川岡遺跡**で後期後半～古墳時代前期初頭の堅穴建物跡や溝などの遺構が検出されている。以上のことから、本津川流域一帯に集落が広がっていたと考えられる。また、**藤尾城跡**では特殊器台が表採されている（高松市教委編 2008）。

勝賀城跡では主郭を廻る土堀の内部からスクレイバーが出土しており（遺物 No. 58）、勝賀



第 2-2 図 弥生時代の遺跡分布 (S=1/125,000)

山に高地性集落があった可能性が考えられる。

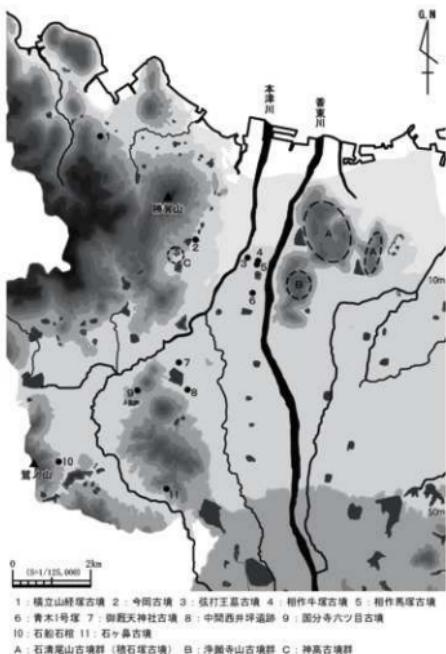
4. 古墳時代

古墳時代の遺構は散見されるが、集落はほとんど確認されていないため、古墳の動向を中心に述べる。

前期初頭から前期後半にかけて、石清尾山には積石塚古墳群である石清尾山古墳群が築かれる。石清尾山古墳群は、墳丘を石材で築造する積石塚古墳であること、双方中円墳という特徴的な墳形の古墳があることから、地域色の強い古墳群として広く知られる。また、前期前半には複数の古墳が築造されることから、一定期間複数の首長が共同墓域で古墳を築造した複数系譜型古墳群（広瀬 2018）であると考えられ、四国北東部における積石塚古墳の分布の中心地とみられる。前期後半になると築造数が減少し、石船塚古墳を最後に古墳の築造が終了する。

石清尾山古墳群を除くと、高松平野西部では古墳の築造は顕著ではない。前期後半古相に国分寺六ツ目古墳などで小型前方後円墳（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 1997）が認められ、前期後半新相には積石塚古墳である横立山経塚古墳（高松市教委編 2000）が確認される。そして前期末から中期初頭に全長 60～70 m の今岡古墳が築かれたのを最後に、前方後円墳の築造は古墳時代を通じて認められなくなる。今岡古墳の前方部は昭和 39(1964) 年に確認調査が行われ、組合式土製棺が出土した。近隣の中間西井坪遺跡では、今岡古墳と類似した形態・製作方法をもつ土製棺や埴輪の製作工房が検出され（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 1996）、今岡古墳の土製棺や埴輪は中間西井坪遺跡で製作された可能性が高い。中間西井坪遺跡の工人集団は外来的な技術体系を保持しており、今岡古墳の被葬者は在地的な積石塚古墳の被葬者とは異なる系譜であったと考えられる。

また、国分寺町新名に所在する鷺ノ山は、前期後半の削抜式石棺の石材産地として知られている。鷺ノ山産石棺は、香川県内では中・西讃地域に分布しており、高松市内では三谷石舟古墳と石清尾山古墳群の石船塚古墳で露出した状態で見つかっている。香川県外では、大阪府柏原市で玉手山 3 号墳出土と伝わるものが近隣の安福寺に移設されている。また、鷺ノ山の麓の石舟天満宮には未製品の石棺である石船石棺が祀られている。本来は近隣の石舟池畔にあった



第 2-3 図 主要古墳の分布 (S=1/125,000)

もので、鷺ノ山の麓で削抜式石棺が製作されていたことが窺える（藏本 2005）。

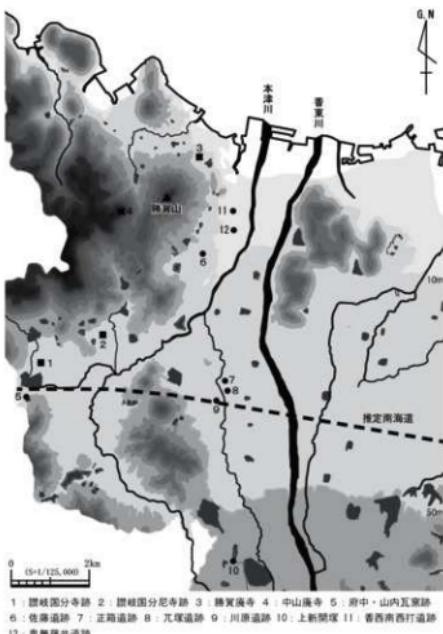
中期前半は高松平野全域において古墳の築造が認められない。その後、空白期間を挟んで中期後半になると本津川中・下流域で小規模な古墳が連続的に築造される。いずれも小規模な円墳ないし方丘部を有する円墳又は帆立貝形古墳で、系譜的な築造と考えられる。まず、中期中頃～後半（TK216～47型式）に御殿天神社古墳^{みやぢてんじんしゃ}が築造され（高松市教委編 2009）、中期後半（TK23・47型式）に相作馬塚古墳・弦打王墓古墳^{あいさこうづつか}が築造される（高松市教委編 2015, 2017）。その後、後期前半（MT15型式）に相作牛塚古墳^{あいさうしづか}（高松市教委編 2010）、青木1号塚の順で築造される。なお、未盗掘古墳で発掘調査が行われた相作馬塚古墳は渡来系竪穴式石室を有しており、木棺への鏡の使用、石室の土器副葬等の渡来系要素もみられる一方で、副葬品は全て国内に由来したものであった。

後期には、各地で群集墳が築かれるようになる。浄願寺山古墳群は、石清尾山山塊の浄願寺山山頂部に6世紀後半から築造が開始され、50基程度集中する大規模群集墳である。また、勝賀山東麓では巨石墳と呼ばれる大型の横穴式石室を有する神高古墳群^{かんだか}が築造される（高松市教委編 2005）。6世紀後半から7世紀前半にかけて古宮古墳、山野塚古墳、鬼無大塚古墳、平木1号墳の順に築かれおり、系譜的な築造と考えられる。平木1号墳からは吉備系の陶棺が出土している（網畠 2021）。

5. 古代

上新開塚^{かみしんかいづか}では8世紀中頃の藏骨器が確認されており（香川県教委編 2014）、古墳の築造は7世紀末には停止していたと考えられる。ただし、7世紀末～8世紀初頭においても追葬がみられる事例は多くあることから、8世紀初頭は火葬墓という新しい墓制を取り入れる一方で、旧来の古墳に伴う葬送儀礼は継続していたと考えられる。

律令体制下に入り国都制が確立すると、香西は香川郡に属するようになる。10世紀に編纂された『和名類聚抄』に記載されている香川郡が所管する郷は、大野郷・井原郷・多配郷・大田郷・笑原郷・坂田郷・成相郷・河辺郷・中間郷・飯田郷・百相郷・笠居郷の12郷で、香西は笠居郷に含まれる。香川郡は平安時代後期に香東条と香西条に二分され、南北朝時代から戦国



第2-4図 古代の遺跡分布 (S=1/125,000)

時代までは香東郡と香西郡に分割されていた。平安時代以降に荘園が成立すると、香東郡では皇室領野原荘と鷹司家領井原荘が、香西郡では平安時代に石清水八幡宮の平賀荘、鎌倉時代に九条家領の坂田領と笠居御厨が形成された。また、讃岐国のある円座を朝廷に納めるため、国司により便補された円座保がおかれた。

発掘調査により香東川中流域で集落跡が検出されている。兀塚遺跡で7～8世紀の集落が、正箱遺跡では8～9世紀の集落が検出されており、8世紀中頃から後半にかけての条里地割に伴う溝跡が検出されている。川原遺跡では南海道側溝と想定可能な溝(SD12)が検出されており、8世紀代から埋没が開始する。これらのことから、本津川中流域では8世紀頃に条里地割が施工されたと考えられる。

讃岐国分寺跡及び讃岐国分尼寺跡では史跡整備に伴う発掘調査が行われ、主要伽藍の規模や構造、配置に関する様々なことが明らかになっている。各伽藍の詳細については報告書(高松市教委編2017, 2018)に委ねたい。讃岐国分寺は奈良時代中頃(8世紀中頃)に創建されたが、律令体制の崩壊に伴い衰退する。その後、鎌倉時代後期に現本堂が講堂跡の礎石の上に建立される等の再整備が行われ、畿内の有力寺院と本末関係を結ぶ地方の一寺院として新たな歴史を歩み始める。近世には四国八十八ヶ所霊場の八十番札所に指定され、現在に至るまでお遍路さんが行き交う寺院としてにぎわっている。讃岐国分尼寺も奈良時代中頃(8世紀中頃)に創建され、発掘調査成果から12世紀までは建物の維持管理がされていたが、13世紀以降には主要伽藍の維持管理がされなくなったと考えられる。江戸時代になると、17世紀中頃に南門が建立されるなど再整備が行われ、現在に至る。讃岐国分寺から南西に約1km離れた場所には、讃岐国分寺と国分尼寺の専用の瓦屋として造営された府中・山内瓦窯跡がある。発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、創建期である奈良時代中頃(8世紀中頃)から少なくとも平安時代まで操業していたと想定される。讃岐国分寺跡は国の特別史跡に、讃岐国分尼寺跡と府中山内瓦窯跡は国史跡に指定されている。

高松平野西部における寺院関係では、勝賀山北麓に勝賀廃寺、五色台南東尾根に中山廃寺があつたとされる。勝賀廃寺は近隣の溜池から白鳳期～平安時代の瓦が採集されている。中山廃寺は周辺から平安時代の瓦が採集され、礎石2点が露出している。また、佐藤遺跡では9～10世紀の花瓶又は水瓶と思われる从具的な遺物が出土しており(高松市教委編2017)、寺院等の可能性が考えられる。

勝賀城跡では主郭を廻る土塁の内部から10～11世紀の土釜の鍔と甕の口縁部が出土している(遺物No.56, 57)。勝賀東麓では、香西南西打遺跡で10～12世紀の粘土探掘坑が検出されている(高松市教委編2000)。隣接する鬼無藤井遺跡でも同時期の遺構や遺物が散見されることから、近隣に集落が広がっていたと想定される。麓に居住していた人々が勝賀山を利用したと考えられる。

6. 中世の集落

香西における中世の集落遺跡で広範囲に発掘調査が行われた遺跡として、香西南西打遺跡と西打遺跡が挙げられる。西打遺跡では、11世紀後半から12世紀前半に集落が出現する。これらの集落は条里地割に沿って営まれており、坪界溝も集落と同時に出現している。加えて、東

西 58 m、南北 50 m の方形区画溝をもつ屋敷地が確認されている。12世紀後半から13世紀前半は遺構がみられず、13世紀後半から再び方形区画溝をもつ屋敷地が確認され、16世紀まで存続する（（財）香川県埋蔵文化財調査センター編 2002）。方形区画溝は一辺約 60 m（半丁程度）で、区画内には掘立柱建物跡が数棟検出された。また、香西南西打遣跡においても 15世紀後半から 16世紀中頃にかけての方形区画溝をもつ屋敷地が確認されている（高松市教委編 2000）。方形区画溝は一辺約 30 m で、区画内では井戸や掘立柱建物跡の柱穴と想定される多数のピットが検出され、土師質土器に加え備前焼や中国産陶磁器、土錐が出土した。

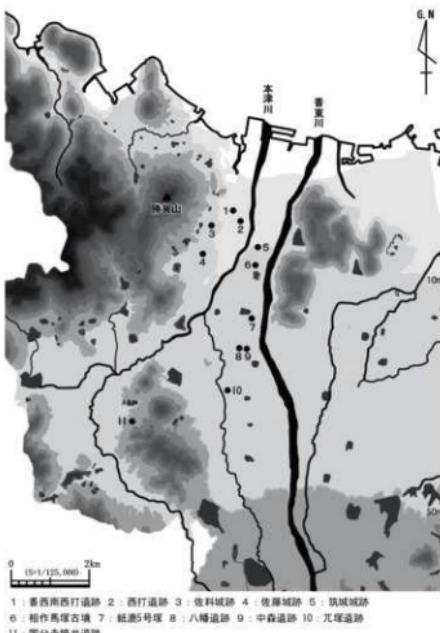
方形区画溝をもつ屋敷地は、高松平野では西打遣跡の例から 12世紀前後に成立した可能性が指摘されており（巖本 2018）、隣接する丸亀平野でも同時期に成立した可能性が高い。香

西氏の居城である佐料城跡においても区画溝の一辺と考えられる L字状の溝が残存しており、中世後半には領主層を含めた上位階層が区画溝をもつ屋敷地に居住していた可能性が高い。そのため、中世後半の香西浦では、区画溝をもつ屋敷地が点在していたと想定される。

『中世城館跡分布調査報告』（香川県教委編 2003）では、香西周辺に多くの平城が比定されているが、比定地の根拠は地割や伝承などである。発掘調査が行われた城跡としては、筑城城跡（高松市教委編 1999）と佐藤城跡（高松市教委編 2021）が挙げられ、検出された遺構の多くは 13～14世紀代である。ただし、筑城城跡では 16世紀の遺構も確認されており、佐藤城跡も発掘調査面積が矮小であることから、周辺に方形区画溝をもつ屋敷地が広がっている可能性がある。

本津川中流域の兀塚遺跡では 12～14世紀の集落がみられる。また、中森遺跡と八幡遺跡では 14～16世紀の集落が条里地割に沿って営まれており、坪界溝も集落と同時に出現している。このことから、本津川中流域では、段丘上の平坦化と高燥化が進行するにつれて段階的に条里地割が施工され、集落が形成された可能性が高い。

また、国分寺楠井遺跡では、13～14世紀の土師質土器を焼成した窯跡や土器溜まり、掘立柱建物跡などが検出されている。



第 2-5 図 中世の遺跡分布 (S=1/125,000)

7. 中世墓

狭川真一氏によると、西日本において中世墓の変遷は同様な傾向がみられる（狭川 2011）。12世紀後半から13世紀中頃に屋敷墓が盛行するが、13世紀後半から14世紀中頃にかけて各地で火葬墓が受容されるようになると屋敷墓が衰退し、墓所は屋敷地の外へ移動するようになる。東四国地域において火葬墓を受容した時期については、当地域の中世墓を集成した藏本晋司氏が論じている。藏本氏は、土師質土器壺などを転用した藏骨器が14世紀代に確認され、14世紀中頃には円筒形の専用藏骨器が出現し、16世紀まで使用されることを明らかにした（藏本 2017）。このことから、東四国地域では他地域と同様に14世紀に火葬墓が受容されたことがわかる。

このような変遷は、高松平野西部においても断片的な資料ではあるがみられる。西打遺跡では13世紀後半～14世紀前半の屋敷墓が、相作馬塚古墳では14世紀代の藏骨器が確認されている。

高松平野西部の鬼無町から檀紙町にかけて、土砂や礫を盛り上げた「塚」が多数みられる。一括りに「塚」といっても築造契機は様々であり、古墳時代まで遡るものもあれば近代～現代のものもある。近年発掘調査が行われた相作馬塚古墳は、5世紀後半に円墳が築造された後、14世紀前半に一部古墳を変更し藏骨器や石塔を伴う石組区画墓が形成された。石組区画墓は石塔の年代から16世紀前半まで継続する可能性が指摘される。その後、17世紀から18世紀にかけて上部に盛土が施工され、塚の頂上には祠が設置されていた（高松市教委編 2015, 2017）。また、発掘調査が行われた紙塚5号塚は15世紀前半に石組区画（墓）が築造され、18世紀に再度盛土して新たに石組区画（墓）を形成していた（高松市教委編 2021）。

狭川氏は全国的な中世墓の傾向から相作馬塚古墳の築造課程を推測している（狭川 2022）。初めに集石墓とされている場所に経塚として造営され、埋葬によって聖地化し、以後周囲に墓地が形成されてゆく。その後は方形区画墓が展開すると並行して小型の石塔が建立され、墓地の景観は大きく変化する、と想定した。高松平野西部に分布する多様な塚のなかには、このような方形区画墓を含むものが一定数存在すると考えられる。

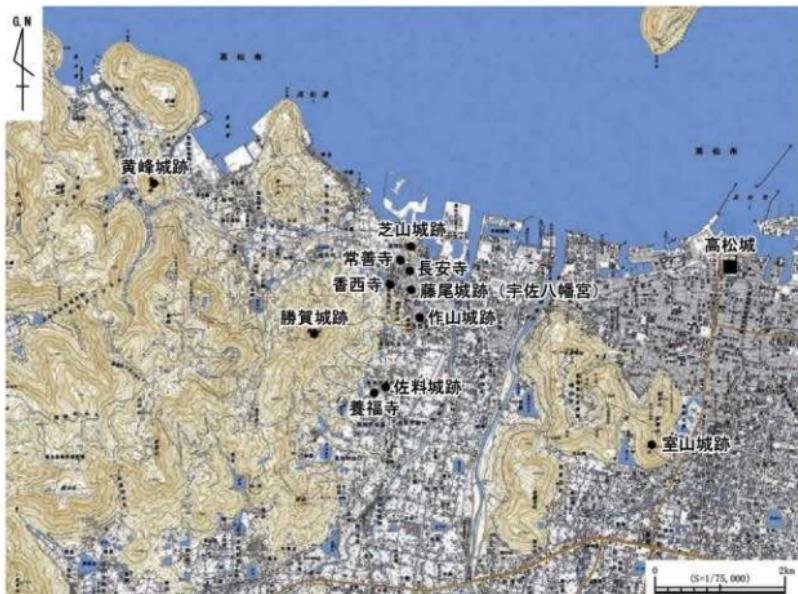
（梶原）

第2節 香西氏関連の中世城館

『中世城館分布調査報告』（香川県教委編 2003）には、香西周辺に所在する香西氏に関連する中世城館が数多く記載されている。本節では、そのような中世城館のなかでも、現在も中世城館に関連する可能性がある遺構を有する城跡や、発掘調査が行われ土地の履歴が明らかになつた城跡について紹介する。

1. 佐料城跡

佐料城跡は、勝賀山東麓に所在する平城である。香西氏累代の居城といわれており、詰城であった勝賀城跡に対し、里城の性格を有する。天正5(1577)年に藤尾城に移るまでこの城に拠つた。勝賀城でみられる、地域のランドマークといえる山に築かれた大規模山城と山麓館のセツ



第2-6図 香西氏関連の中世城館・寺社の分布 (S=1/75,000)

ト及びその構造は、典型的な国人衆の城を表している。

城跡は、標高約13～15mで、勝賀山から延びた丘陵尾根の先端に位置する。城跡の南北側は緩やかな谷状地形をなし、城跡はやや微高地である。

現在、佐料城跡には、L字形の堀跡が残っているのみである。堀の幅は約4～5m、長さ約80mである。本来は正方形状に囲繞する方形区画構の一部だったのだろう。周辺地形から推測すると、一边約65mの方形区画溝をもつ屋敷地だったと考えられる。

『勝賀城跡』(高松市教委編 1979)の報告では、踏査が行われ、城跡周辺の屋号などが明らかになって



第2-7図 佐料城跡地図 (高松市教委編 1979)

いる（第2-7図）。現在も残っている堀は、「内堀」（第2-7図では、「内堀」「北堀」と記載されているが、「内堀」「北堀」の誤りと思われる）といわれ、名東県時代（明治6～8年）の地引図にも記載されているようである。「内堀」の北側は「城の内」、「城の内」に接する北西隅が「北堀」といわれる。また、北東の一角に「御屋敷」、南東の一気に「城の新屋」の屋号が残っている。他にも、「城の内」から北へ200mほどのミカン畑は「城の台」、西へ200mほど上った貴船神社の北側の谷

は「馬場の谷」、東へ200mほどには「東門」の屋号がみられる（第2-8図）。このように、周辺にも城跡に関連する屋号がみられることから、徳島県藍住町勝瑞城跡や高松市西打遣跡のような方形区画溝をもつ屋敷地が連続していた可能性が考えられる。

2. 藤尾城跡

藤尾城跡は、勝賀山東麓に所在する。城跡は標高約20mで、神宮寺山から北東に延びる尾根の先端に位置する。現在は宇佐八幡神社によって改変されており、縄張り等の構造は不明である。

『南海治乱記』には、天正3(1575)年に香西氏が藤尾山にあった八幡宮を遷し、築城したと記されている。発掘調査が行われたが、中世の遺構は検出されておらず、近世～近代の遺構が確認された（高松市教委編2008）。包含層から中世に遡る丸瓦が出土したが、藤尾城跡と比定できるものではなく、他にも13～14世紀の遺物が包含層から出土していることから、藤尾城築城前後の八幡宮に伴うものである可能性も考えられる。

3. 作山城跡

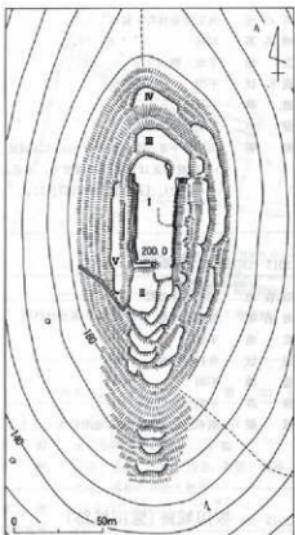
作山城跡は、勝賀山東麓に所在する。城跡は標高約16mで、薬師山から北東に延びる丘陵の先端に位置する。現在は開発によって破壊されており、縄張り等の構造は不明である。発掘調査が行われたが、中世の遺構は検出されておらず、近世～近代の遺構が確認された（高松市教委編2008）。

4. 芝山城跡

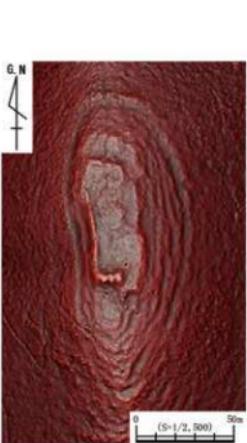
芝山城跡は、勝賀山の北側、標高44mの芝山の山頂部に位置する。山頂部の南端は芝山神社によって改変されており、中世山城の遺構として可能性があるのは、山頂部中央にある約30×20mの方形状の削平地のみである。



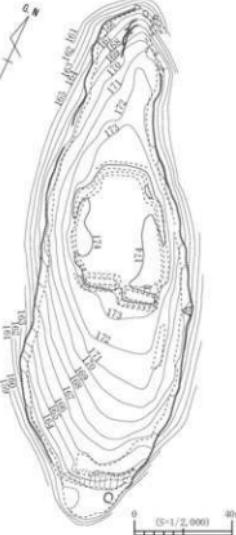
第2-8図 佐料城跡周辺地図（高松市教委編1979）



室山城跡縄張図（香川県教委編 2003）



室山城跡赤色立体地図



黄峰城跡測量図

第2-9図 室山城跡・黄峰城跡平面図

5. 室山城跡（第2-9図）

室山城跡は、標高 200 m の室山の山頂部に位置する。頂部に長方形状の主郭があり、南北約 63 m 、東西約 25 m 、面積約 1,800 m² の広さがあり、平坦である。主郭の西端から南端にかけて L 字型に土壘がみられる。西端の土壘は高さ約 0.5 m で、頂部は幅約 1 m である。内側に土留めの石が 1 段のみ配置されている。南端の土壘は高さ約 2 ~ 3 m で、頂部は幅約 3 m である。土壘と切岸によって喰い違い状の虎口となる。主郭の東側は高さ約 3 ~ 4 m の石垣が構築されており、中央に直角に近い折れがみられる。石垣は現在土に覆われており、詳細は不明だが、自然石又はほとんど加工していない巨石を積み上げた、いわゆる野面積みである。北側は北東隅が虎口となる。

主郭の北側には、東西約 27 m 、南北約 10 m の半円形状の曲輪がある。また、主郭の南側には、東西約 10 m 、南北約 20 m の楕円形状の曲輪がある。そして、主郭及び曲輪を取り囲むように幅約 2 ~ 5 m の帯曲輪がみられる。

6. 黄峰城跡（第2-9図）

黄峰城跡は、標高 175 m の黄峰山の山頂部に位置する。山頂部を取り囲むように、高さ 1 ~ 1.5 m の石積みがみられる。石積みの内側は土砂等によって上端まで盛られており、石積み上端から幅約 2 ~ 3 m は平坦面が造成される。石積みの全長は約 500 m で、地形に沿って形成されて

いるため、最高所と最低所の比高差は約 10 m ある。石積みの石材は安山岩で、形状は短辺約 0.2 ~ 0.4 m、長辺約 0.4 ~ 1 m の棒状又は扁平状である。長辺を石積み面に対し垂直に置く（縦に置く）ように積んだ、いわゆる牛蒡積みである。

山頂の南部には、幅約 25 m、長さ約 13 m の半円形状の曲輪があり、その南端には土壘と思われる高まりがある。曲輪の北側は約 3 m の切岸がみられ、その上端には、石積みが東西に喰い違うように築かれる。

山頂の中央部には、方形の土壘群がみられる。土壘内は、東西約 35 m、南北約 45 m で、約 1,150 m² の広さがあり、平坦である。土壘の四隅は内に折れ曲がり、いわゆる入隅となる。土壘の高さは約 1 ~ 2 m で、頂部は幅約 2 ~ 3 m である。南側で土壘が喰い違うことによって形成される喰い違い虎口となる。

山頂を取り囲む石積みの積み方は讃岐の中世山城でみられるものではなく、時期も不明である。また、中央の方形土壘群の部分に伴う遺構かどうか判断できない。今後の検討課題である。

(梶原)

第3節 香西浦の状況

1. 香西浦と香西氏

勝負山の北麓に瀬戸内海に面して海浜の集落が存在するが、これが香西浦である。本津川の下流域にあり、河口を利用するかのように湊が形成された。室町時代に東大寺が摂津国に設置した兵庫北閘に讃岐船籍船が多数入閑しているが、香西もその一つである。文安 2(1445) 年 1 月から約 1 年余りの北閘に入閑した船から關稅を徵収した關稅台帳である『兵庫北閘入船納帳』が残るが、そこには「香西」とも「幸西」とも記載されている。

『兵庫北閘入船納帳』に記載された讃岐に比定できる湊は 17 箇所を数える。ここに記載された湊が当時の讃岐の港津の全てではないが、代表的な港津といえる。『入船納帳』に見る船籍地の数は播磨国に次いで第 2 位である。入閑回数は延べ 237 回あり、摂津・備前・播磨に次ぎ第 4 位となっている。積載品は 30 品目にわたるが、そのうち塩が 8 割を占める。塩の輸送は 17 船籍中 13 あり、讃岐全体から輸送されていた。このことから讃岐国内各地で塩の生産が行われており、塩の産地であったことがわかる。しかし、全てが船籍地周辺の生産とは限らず、他地域で生産された塩の輸送も多く見られた。塩の輸送から讃岐が瀬戸内水運に占める比重が大きいことを知ろう。

香西船は 5 月・9 月・10 月・11 月が各 1 回、12 月が 2 回の計 6 回の入閑を数える。香西船の積載状況を示すと、第 2-1 表のようになる。積載品欄に見るタクマ・しわく・方本・小シマは、地名指示商品いわゆる塩のことである。それぞれの当地産を示している。香西周辺での塩の生産は見られず、遠隔地の塩

第 2-1 表 香西船の積載状況

| 入閑日 | 積載品・積載量 |
|-------|-------------------|
| 5・15 | タクマ350石 |
| 9・13 | 赤米15石・米20石・タクマ30石 |
| 10・20 | 小麦10石・米25石・しわく15石 |
| 11・27 | 方本15石・マメ18石・コマ3石 |
| 12・15 | 小シマ25石・米50石 |
| 12・19 | 米30石・赤米10石・マメ15石 |

輸送を行っていたのである。塩輸送をするほとんどの船が特定の産地塩輸送といった形を取っているが、香西船は広範囲にわたる輸送船団であったといえる。小シマは備前の児島で、讃岐以外の地域産の塩輸送をしている。児島は香西の対岸に位置しており、以前から交流があったからであろう。また、ここで注目できるものとして赤米がある。『入船納帳』に記載された赤米輸送は10船あり、うち7船が讃岐船である。これは赤米が讃岐の特産物であったことを示す。西讃地方で多く見られるが、高松周辺では香西船での輸送のみである。このことから香西周辺で栽培されていたと考えられる。赤米は貧弱な土地でも栽培できる。米の輸送量からみると、多くの米生産が行われていたとは考えにくく、香西周辺は決して豊かな穀倉地帯ではなかったといえるのではなかろうか。本津川流域で生産されたものが、河川を利用して河口の香西浦に集積され、湊から積み出されたと考えられる。

この香西浦を支配したのは、勝賀山東蘿の佐料城を居城としてその地域に勢力を張っていた香西氏である。香西氏は香西浦を拠点とした瀬戸内海水運を掌握することにより、経済的基盤としたといえる。ではなぜ香西氏が香西浦を掌握するに到ったかは、これ以前の瀬戸内海の状況がある。

平安時代末期から瀬戸内海を航行する船を襲う海賊が横行する。そこで度々海賊を追捕する旨が下知されるが、十分な成果を挙げることは出来なかった。海賊の横行に苦慮した中央政府は、有力豪族を追捕使に任命して、鎮圧をはかった。これを機会に平氏は西国へ勢力を拡大し、瀬戸内海地域の在地武士と深く結びつき、政権の基盤とした。その平氏を滅ぼし政権を握った源氏は鎌倉に幕府を開くが、西国に基盤を持たないため、瀬戸内海地域では海賊がまたも横行するようになる。幕府は西国沿岸の地頭に海賊を召し捕るように命じた。そこで寛元4(1246)年3月、讃岐国御家人である藤左衛門尉は海賊を搦め捕り六波羅探題へ送った(『吾妻鏡』寛元4年3月18日条)。この藤左衛門尉は香西氏の家臣ともいわれている。

また、時代は下るが応永27(1420)年に李氏朝鮮の官人宗希環が回礼使として日本を訪れた際の紀行文である『老松堂日本行録』に、瀬戸内海の海賊が居している所を記している。海賊衆は海賊行為を行わない代わりに海上警固と称して、酒肴料・中立料などの名目で警固料をとった。宗希環が都からの帰途、備前を過ぎる時に護送の一員であった膳資職が乗船してきて酒を飲んだが、『老松堂日本行録』、これは酒肴料を支払ったことを示すものである。膳資職は香西資載のことと、当時の香西付近を航行する船の警固衆として存在していた。この基地が香西浦にあったといえる。つまり、鎌倉期から香西氏は海を媒介として瀬戸内海一帯へと勢力を伸ばしており、その拠点となるのが香西浦であった。香西浦は軍港と商港を兼ね合せた湊として存在しており、船が多数係留されていたであろう。船と水運に関わる人々によって形成された集落が早い段階で見ることが出来る。

加えて、『南海通記』に香西氏と塩飽に関わる記事が見られる。『南海通記』は享保4(1719)年に香西成資が古考からの聞き書きを基に著した書であるが、成資の祖の香西家資について記している。祖先の功績を過大評価するなど、史料的に問題を含む面も多分にもれないが、当時の様相を知る手立てにはなる。これによると藤ノ左衛門家資は香西浦宮下に勢揃いし、手島比々より押し出し捕虜百余人在六波羅探題へ送った。その功績により讃岐諸島の警護役に任じられ、直島と塩飽に息子を置いて統治したとある。これが、直島の高原氏、塩飽の宮本氏の祖と伝え

る(『南海通記』卷廿一)。

このように香西氏は、鎌倉期から備讃瀬戸一帯に勢力を伸長し、海上輸送に携わる船舶への警固役と称して警固料を徴収するなどして、莫大な利益をあげていたであろう。香西浦がどの程度の集落規模であったかは不明だが、多数の軍船が存在していたであろうことは推定できる。室町期になると、産業経済の発展に伴い、各地から多くの物資が瀬戸内海を利用して輸送されるようになる。香西湊へも周辺地域から物資が集積され、畿内へ輸送されるとともに、各地へと出向きその地の特産物などを輸送する輸送船が活動するようになる。それが前述の『入船納帳』に記された状況である。香西浦は以前以上に繁栄を遂げていき、規模も大きくなつたであろう。

2. 香西浦の地形

本津川の下流域に香西浦が形成されたが、浦の湊はどこにあったのだろうか。

生駒時代の状況を示したといわれる「讃岐国絵図」には、「香西浦釣」「香西浦本津」が記載されている（史料編絵図参照）。釣・本津ともに本津川の河口部に記載されており、いずれも香西浦の湊が所在した地を示す。

また、本津川の支流である
愛染川は江戸時代後期の絵図

には「舟入川」、明治期の地図には「船入川」と記載されている（第2-10図）。その名が示すように、その河口部に舟入が存在したと推測する。現在の香西港も愛染川の河口部に築かれており、そこには多くの漁船の船溜まりがある。

以上の史料から、本津川の下流で分かれるように瀬戸内海に流れ出た愛染川の河口に湊が形成されていたと考えられる。香西氏はこの湊を水運・水軍の拠点として、備讃瀬戸へ海上勢力を伸張させていった。天正3(1575)年から藤尾城が築城されたといわれているが、湊は城のすぐ北に位置する。藤尾城の築城は湊と連携する地を選んで決定したであろう。

では、当時の香西浦はどのような地形だったのだろうか。北山氏は、地形図や現地踏査の成果から中世の香西浦を復元している（北山 2009, 第 2-11 図）。北山氏によると、本津川の河口に比較的大きな砂堆があり、その内側に港湾機能をもつ入り江があったことが想定されている。しかしながら、国土地理院地図で 1 m ごとの等高線を確認したが、北山氏によって砂堆と示された場所が微高地にはなっておらず、第 1 章第 1 节でみた扇状地の形成過程からみても本津川が運んだ堆積物によって香西浦は陸地化したと考えられ、砂堆があったとは考えにくい。

また、これまでの発掘調査成果においても北山氏が入江とした部分で中世の遺構が確認され

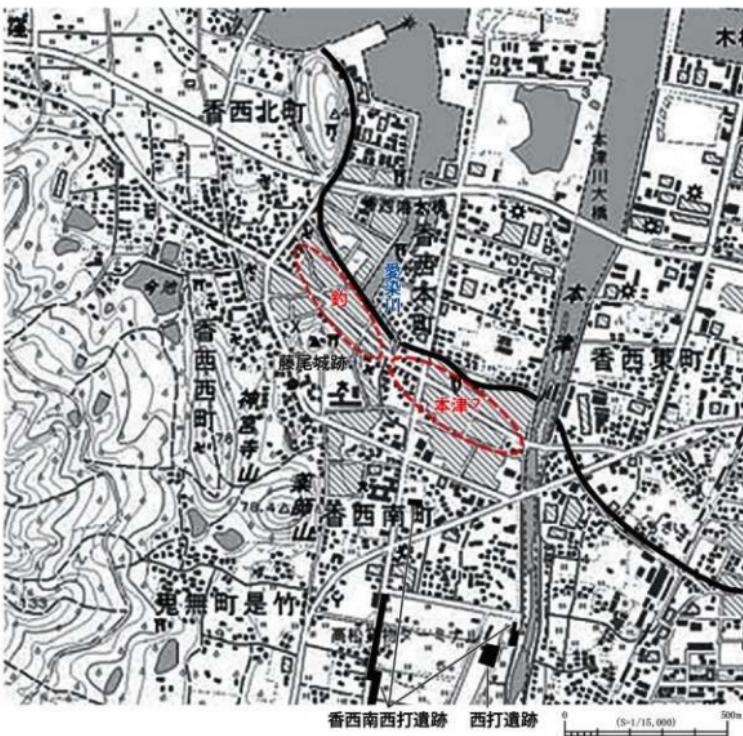


第2-10図 讀岐国香川郡笠居村之内字香西地引図面に
記載された「船入川」(高松市歴史資料館所蔵)

G.N.
+



北山氏の香西浦復元図（北山 2009）



第2-11図 香西浦と海岸線の復元図

ている等、明らかな誤りがみられるため、香西浦の復元については再検討が必要である。中世の香西浦の状況を示した史料は存在しないため、香西浦周辺の発掘調査成果及び近世・近代の絵図等から中世における香西浦の復元を試みる。

中世における香西浦に最も近い状況を示しているのは、高松市歴史資料館が所蔵する「讃岐国絵図」だろう。慶長期の状況を示したものと言われている（第4章第3節参照）。前述したように、この絵図には「香西浦釣」「香西浦本津」と記載されており、釣は本津の西側に書かれている。釣は現在でも小字として残っており、愛染川河口の宇佐八幡宮の北側周辺、愛染川が直角に曲がった場所にある。釣地区が現在の位置と変わっていないとすると、本津地区は愛染川と本津川に挟まれた、旧道部分のことを指すのではないだろうか。明治期の地引図でも集落が描かれており、立地や周辺の状況から古くから続く集落であると考えられる。「讃岐国絵図」の海岸線の形状は、本津川から東に向かうと、さらに内湾するようになる。明治期の地引図で埋立地と判別できる箇所を除外すると、第2-11図のような海岸線が想定される。絵図から想定した海岸線のため、今後の発掘調査等による検証が望まれる。

さて、明治期の地引図には、船入川の岸に沿って家屋が並んでいる。湊から町中への通路は迷路化しており、袋小路・かぎ形の様相を呈している。現在の町並み・湊もほぼ同じ状況である。往時もそれと同様な町並みが形成されていたと推定される。

江戸時代には、漁業基地として多数の漁民が集住していた。「香西の町はむきむき」と称されるように、多数の民家が勝手な方向を向いて立ち並んで繁栄していた。平時は漁業に従事していたが、参勤交代の際には臨時御用として水主役が課せられたようである。

（橋詰・梶原）

第4節 近世以降の勝賀城跡

近世以降の勝賀城跡は、『讃岐国名勝図会』や『全讃史』に書かれているように、香西氏の城跡として知られていた。では、勝賀城跡を含めた勝賀山はどのように利用されていたのだろうか。

高松市歴史資料館が所蔵する「高松藩領絵図 香川郡西絵図乙」には、勝賀山の山頂付近に「百姓林」と描かれている（史料編絵図参照）。勝賀山の北端には勝賀御林と書かれているが、現在勝賀山西麓に国有林が一部あることから、その辺りを指すのだろう。高松藩領絵図は、19世紀中頃に描かれたことが明らかになっている（高松市歴史資料館編2014）ことから、少なくとも江戸時代後期には勝賀山は百姓林として利用されていたことがわかる。

現在は、勝賀山の山頂部は鬼無財産区と香西財産区が所有している。地元の人々からの聞き取りによると、幼少期に薪炭や肥料用などに落ち葉や枝木を拾いに来ていた、とのことである。このことから、近代以後も勝賀山は地元の人々に里山として利用され、近代には村の共有林、現代には財産区になったと想定される。

（梶原）

第5節 香西所在の寺社

香西氏は城を築き、その周間に町並みを形成していくが、そこにはいくつかの寺社が創建された。香西地域の寺社を見ると香西氏と深い繋がりを持ついくつかの寺社がみられる。本節では、それらの寺社について見てみる（第2-6図）。

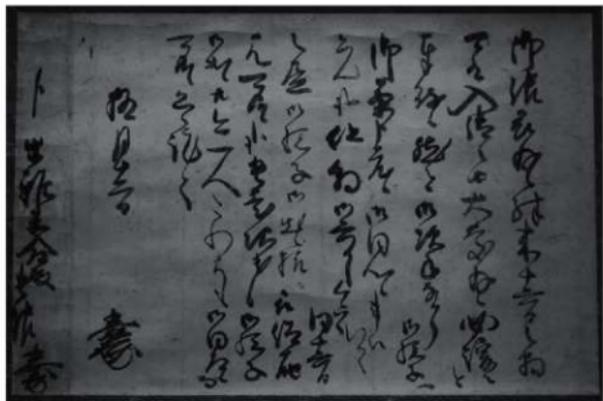
1. 常善寺

甲湯山常善寺と号し、浄土真宗東本願寺派である。『常善寺記録』によれば、開基は信濃国諫訪郡の諫訪幸成が親鸞聖人の弟子となり、覺円と号して甲斐国巨摩郡長沢にて淨蓮寺を創建。大永年中（1521～28）に兵火のため寺院消失し、孫教円が甲斐国から讃岐国香川郡笠居村に移り住み、その後天文元（1532）年に教円の子正尊の時に、香西大隅資載（資教）と門徒の懇志により荒神山に一宇を建立する。延宝元（1673）年に常善寺と給わり、同4年に柴山の麓に移り、その後宝永3（1706）年に今の地に移転すると伝える。なお、史料の残存状況はわずかに『常善寺記録』が残されているだけだが、教如から生駒親正宛の文書が残されている（第2-12図）。なぜこの文書が残されたかは不明だが、内容は親正宛の茶会への招待にかかるものである。年未詳だが、宛名が雅楽入道となっており、親正が閑ヶ原の戦い後に高野山へ入り剃髪し入道となつた以降で、慶長8（1603）年2月に死去しているため同5～7年のものと考えられる。教如は御茶を好み、多くの武人や茶人と交わりを持った。親正もその一人であったろう。御茶閑係の書状は後世茶掛として珍重される場合が多く、そのため本書が残されたと考えられる。親正と本寺の関係は定かでないが、当時常善寺は有力な真宗寺院であったため、教如と結びつきがあつたろう。それゆえ、教如の書状を所望し、本寺に伝わったのではなかろうか。

2. 養福寺

寺伝によると天台宗の白雲山北谷坊といわれていたが、明応年間（1492～1501）に西正法師が蓮教上人に帰依して浄土真宗に改宗し、四代教了が北谷山養福寺と改める。天正年中（1573～92）の藤尾合戦の際に、近藤藤右衛門と宮武六右衛門が討死。近藤氏の子息がこの坊に入り沙門となる。宮武氏の娘は坊の妻となると伝える。庫裡の庭に香西家資の息子である五郎の廟（五輪塔の一部）がある。家資が死去した際、五郎は幼少であったため叔父資邦を陣代として盛り立てようとしたが、五郎の母は承諾しなかった。九月月見の宴の時に五郎は何者かに殺され、母は狂乱し恨みを抱き自害した。その後城下では家臣の狂死や不可解な事件が頻発したという。地域の平穏を願っての鎮魂行事が行われ、五郎の菩提を祀った。

また、養福寺には泥塔と鬼瓦が伝えられている（第2-13図）。泥塔とは泥土を型抜きにして塔型に成形し、焼成したものである。中に経文を納められている例もあり、息災延命・病氣平癒などの現世利益や追善供養などを願つて製作されたと考えられる。泥塔には偏平型と立体型があり、養福寺のものは高さ7.5cmの立体型の宝塔で、底部には孔が開けられている。また、対角線に沿つて型による成形の痕跡が残されている。寺伝では、境内にある香西五郎の廟から泥塔がまとめて発見されたが、その後散逸し、現在は一基のみ残されていると伝わる。鬼瓦は、耳近くまで裂けた口から牙がのぞき、頭には二本の角が伸び、立派な顎輪を生やしている鬼が



御報畏存候殊來十六日之朝
 可有入御之由大慶存候必瀟々と
 奉致候然者御次手なから御猶子へ
 御茶申度候御同心候事へいかゝ
 候ハん哉但朝御六かしく候ハゝ同十六日
 之見御猶子御出候様ニ被仰届
 二て可有候哉貴老次第候御猶子
 御出候共今一人たれにても御同道候而
 可有候恐々謹言
 極月十二日 教如(花押)
(印封ウハ書)
(墨引)
 「」生雅楽入道殿
 貴報
 教如

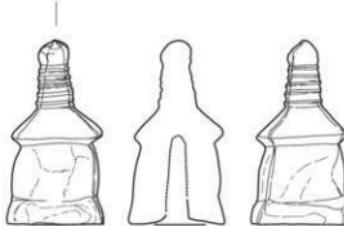
第2-12図 常善寺文書（教如書状）

立体的に表現されている。鬼面以外の文様はなく、一方を欠損している脚端は反らせる。鬼面は頭頂部から頸部にかけて中空となっている。調整はヘラナデや粗い指ナデで、焼成はやや硬い土師質である。成形方法から室町時代中期以降の新しい特徴が読み取れる。また、調整や焼成からは江戸時代までは下らないと考えられ、室町時代後半に製作されたものと推測される。

3. 長安寺

寺伝によれば、後水尾天皇の代に、石山戦争の際に戦功のあった正宗という人物の開基と伝える。初め正宗坊と称し、後に堂宇寺坊を改め、長安寺と号した。現在浄土真宗興正寺派である。石山戦争に使用されたと伝わる兜が残されている。

泥塔



0
5cm
(土器 5×1/2)

鬼瓦



第2-13図 養福寺（泥塔・鬼瓦）所藏遺物

このように見ると真宗寺院が多い印象を受ける。香西氏と真宗の関係をみてみると、天文12(1543)年に香西神五郎なる人物が本願寺へ初めて音信を遣わしている(『証如上人日記』天文12年7月13日条)。また同16(1547)年には香西五郎左衛門が先日の礼として太刀を持参している(『証如上人日記』天文16年7月8日条)。讃岐と本願寺を結ぶ香西氏の存在を知ることができる。彼らは真宗門徒と考えられ、どの寺に属していたかは不明だが、常善寺か養福寺の可能性が高い。香西氏一族には真宗に帰依する者が存在し、織田信長の元亀年間(1570~73)の本願寺攻めの際に参陣している者もいる(『信長公記』元亀元年8月20日条)。水運に従事する者に真宗門徒が多いが、香西浦の船に携わる者の中にも門徒が存在したのであろう。上記の寺々の門徒であったと考えられる。

4. 香西寺

宝幢山地蔵院と号し、真言宗大覺寺派である。『香西寺古縁起』によれば、天平11(739)年に行基が勝賀山に創建し、宝幢山勝賀寺としたのが始まりと伝える。弘仁8(817)年に空海が蘆に移転して奥の堂と称し、地蔵菩薩を本尊としたため地蔵院勝賀寺と号した。嵯峨天皇の勅願により1,000貫の寺領を賜り、天慶2(939)年には国内四談義所の一つとなったと伝える。その後寺運は衰退するが、鎌倉將軍九条頼經の命により香西資村が堂宇を修理し、香西寺と改める。さらに足利尊氏・細川頼春らにより修復される。その後文安5(1448)年に香西元資が本津に移転、堂宇を修理し、地福寺と改める。天正年間(1573~92)に兵火により焼失。慶長年間(1596~1615)の初めに生駒親正の命で尊福寺と改号するが、寛文9(1669)年に現在地に移り、香西寺に復号した。香西地域では巨刹として、地域住民の信仰を集めていたであろう。代々香西氏は本寺を保護しており、香西氏の姓名をとつて寺号としており、早い段階から擅越として本寺の興隆に関与していたといえる。

5. 宇佐八幡宮(藤尾神社)

磯崎山(藤尾山)山上に鎮座する宇佐神社は、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三神を祭神としており、藤尾八幡宮とも藤尾神社とも呼ばれている。社伝縁起によれば、嘉祥~安貞年間(1225~29)に香西資村が豊前国宇佐八幡を勧誘した。豊前からの一行は生島湾(宮の浦)に上陸し、壇上原に滞在した後、藤尾原に御神体を遷座する。その地にちなみ藤尾八幡と称した。その後、神社は香西浦磯崎山に移された。磯崎山に移ってからも先の遷座地の藤尾の名が残り、藤尾八幡、藤尾神社、藤尾の宮などと呼ばれ、磯崎山は藤尾山とも呼ばれるようになったという。だが、天正年間(1573~92)に香西氏は長宗我部氏の侵攻に備えるため、神社は西手の上の山に移され藤尾城が築城された。天正13(1585)年に秀吉の四国攻めにより城は破却され、慶長年間(1596~1615)にその地に再度八幡宮を復す。これが現在の宇佐八幡宮である。地域住民のよりどころになる神社として崇拝されていたであろう。

(橋詰・梶原)

第3章 南北朝期～戦国期の香西氏

第1節 香西氏の出自と伝承

讃岐香西氏の名字の「香西」の読みは、15世紀末の公家寺社の記録に平仮名書きで「かうさい」と見えることから、「こーさい」または「こーざい」であったと判断され、地名の香西にちむなことがわかる。また、当て字で「高西」と書かれることもそのことを裏付けている（田中2003）。香西の読みを『和名抄』郷名の笠居郷に掛けて「かさい」とする意見があるが、まったくの誤解であり根拠はない。

現在の香西の地名は、『兵庫北関入船納帳』の文安2(1445)年5月15日条に讃岐の湊の一つとして「香西」と見えるのが初見である。同文書の同年9月13日条には「幸西」との表記も見え、やはり「こーさい」または「こーざい」と呼ばれていたことがわかる。平安時代後期に全国的に起きた郡郷の改編で、香川郡が東西に分割されて成立した中世の郡の香西郡の遺称地である。

近世に成立した地誌類によれば、香西氏は鳥羽院政期に讃岐国の知行主であった中納言藤原家成の子章隆に始まる讃岐藤原氏の一流で、その始祖は承久の乱ごろの鎌倉御家人香西資村と伝わる。香西郡佐料城を本拠とし、勝賀城を根城としていたという。各種の讃岐藤原氏系図によれば、香西資村は新居資光の三男で、兄の香西信資の養子となり香西氏を継いだとみられる。讃岐出身の軍学者である香西成資が、寛文3(1663)年に著した『南海治乱記』と、その増補版である『南海通記』等によれば、細川勝元より「元」字を与えられた香西元資ののち、長子元直とその子孫は丹波篠山城におり、上香西と呼ばれ、次子元頼は讃岐の本領を相続して在国し、下香西と呼ばれたという。

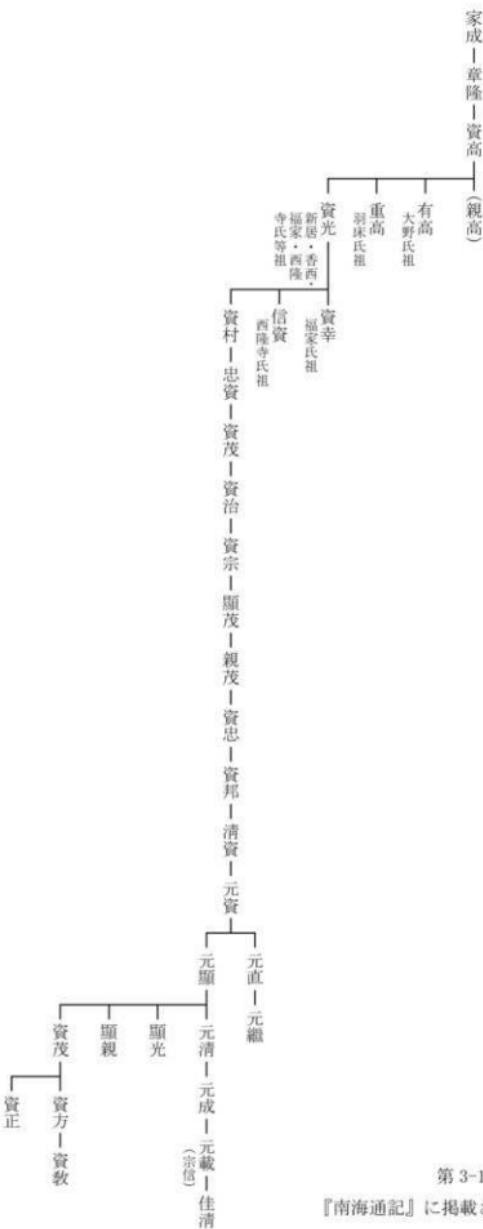
(田中)

第2節 近世における香西氏像

1. 近世の編纂物が伝える戦国期の香西氏

『南海治乱記』・『南海通記』は、戦国期の香西氏の動向を詳細に記していることから、讃岐戦国史の研究においてしばしば利用されてきた。しかしながら、その中には誤解・誤認とみられる記事が含まれている。一例として、香西元成を挙げよう。

『南海治乱記』によれば、享禄4(1531)年6月、摂津天王寺において細川晴元・三好元長と細川高国・三好宗三(政長)との合戦が起こり、讃岐香西氏の香西越後守元成は晴元方として参戦したとされる。三好宗三は細川晴元の寵臣であり、のち晴元に讒言して三好元長を討死させたため、その子範長(長慶)に恨まれ、天文18(1549)年6月の摂津江口の戦いで討死する。従って、『南海治乱記』が、宗三を細川高国方とするのは大きな誤りである。寛文3(1663)年の『南海治乱記』の成立前後に編纂された『讃岐國大日記』(承応元(1652)年成立)と『玉藻集』(延宝5(1677)年成立)には讃岐香西氏の元成に関する記事は見られない。『南海治乱記』に初めて元成が現れる。おそらくは『足利季世記』に見える晴元被官香西元成の記事に拠ったもの



第3-1図
 『南海通記』に掲載された香西氏系図

であろう。同書の最古の写本は天理図書館所蔵本であり、寛永から寛文年間の写本である（和田 1983）。『南海治乱記』が著されたころにはすでに流布していたとみてよい。

『足利季世記』や『細川両家記』に見える香西元成は丹波を本国とする波多野氏の一族で、細川高国の命により香西氏の名跡を継いだ元盛の親族と推定される（馬部 2018）。元成は晴元の側近であり、取次を務めている。名乗りは初め与四郎のちに越後守の受領名を名乗る。三好宗三の子宗渭と行動を共にし、終始晴元方として永禄年間まで三好長慶と戦った。

また、『南海治乱記』・『南海通記』は、天文 18(1549) 年、讃岐香西氏の越後守元成が摂津の三宅城を攻め落とし細川晴元を迎えたとするが、『細川両家記』・『足利季世記』によれば、それは晴元被官の越後守元成の事績である。『南海治乱記』はこのときが讃岐香西氏が細川京兆家に奉仕した最後と伝えるが、上に述べたとおり、晴元被官の元成はその後も一貫して晴元に忠義を尽くしている。

『南海治乱記』・『南海通記』の記事については、ほかの史料には見られないものも多く貴重なものではあるが、用いる場合は厳密な考証が必要であろう。

2. 近世の編纂物に見る香西氏の「家臣」と「幕下」

天正 5(1577) 年閏 7 月、毛利氏に家臣の乃美宗勝らが讃岐元吉城においての戦勝を報告した連署状文に、敵方の「国衆長尾・羽床・安富・香西・田村・三好安芸守三千程」が元吉城に取り詰めた、と見えるように、戦国大名毛利氏からみれば讃岐香西氏は讃岐の国衆の一人にすぎない。一般的に国衆とは、戦国大名に服属しつつも、一定の自立性を保持する領域的武家権力と理解される地域領主である。国衆は戦国大名と同様に本領を持ち、一元的な知行制による家中（直属家臣團を含む一家）を形成していた。この合戦当時、香西氏は阿波の三好氏に服従していたことが知られている。

『南海治乱記』によれば、香西家の家伝証文や家宝等を預けていた根香寺が、天正 13(1585) 年に盜賊の放火により焼失したという。香西氏の家伝証文は現存しておらず、そのため、香西氏の所領支配・家臣團編成については、近世の編纂物から考察せざるを得ない。

『玉藻集』には、永禄 11(1568) 年 9 月、香西宗信（宗心・元載）が一門・家臣など 350 騎・2500 人を率いて渡海し、備前本太城を攻めたときの着到帳と陣立書、宗信の子伊賀守好清（佳清）の感状が載せられている。陣定書によれば、旗本組は唐人彈正・片山志摩など香西氏の譜代の家臣、前備は植松帶刀・同右近など香西氏一門、先備・脇備は着到状で「外様」とされる新居・福家などの讃岐藤原氏、別姓の滝宮氏などを中心に構成されている。香西氏の家中に当たるのは旗本組・前備に組み込まれている者たちであろう。

『南海治乱記』・『南海通記』には、天文 18(1549) 年、香西宗信の父とされる越後守元成が三好長慶と敵対した細川晴元を救援するため、摂津中島へ出陣した際の記事に香西氏の「家臣」と「幕下」^{ばつか}が見える。この年に讃岐香西氏の元成が細川晴元支援のため摂津中島へ出陣したとするのは、著者香西成資の誤認であるが、そこに見える兵将と香西氏との関係は参考にできよう。

その詳細を記せば次のようである。まず、参陣について会合した際に、「我が家臣新居大隅守（資教）・香西備前守・佐藤五郎兵衛尉・飯田右衛門督・植松帶刀（資正、後号備後）・本津

右近。幕下には羽床伊豆守・瀧宮豊後守・福家七郎右衛門尉・北条民部少輔、其外一門・佐門・郷司・村司等」を招集した。留守中の額分の防衛のため、東は植田・十河両氏の備えとして、木太の真部・上村の真部、松縄の宮脇、伏石の佐藤の諸土を残し、西は羽床伊豆守・瀧宮豊後守・北条西庄城主香川民部少輔らの城持ちが守り、香西次郎綱光が勝賀城の留守、香西備前守が佐料城の留守、唐人彈正・片山志摩が海辺を守った。出陣の兵将は、香西六郎・植松帶刀・植松縁之助、飯田右衛門督・中飯田・下飯田・中間の久利三郎四郎・遠藤喜太郎・円座民部・山田七郎・新名・万堂など多数で、舟大将には乃生縫殿助・生島太郎兵衛・本津右近・塩飽の吉田・宮本・直島の高原・日比の四宮等が加わったといふ。

この記事から、香西軍は新居・香西・植松などの一門を中心とした「家臣」と、羽床・瀧宮・福家・北条などの「幕下」^{ゼッカ}から構成されていたことがわかる。『南海治乱記』にみえる「幕下」^{はたがしら}とは、有力者の勢力下に入った者を指す。「巻之十 譲州福家七郎被殺害記」では「旗頭」に對置して用いられており、本来同等な者が有力な者を頼る寄親・寄子の關係を指している。香西氏は、執事植松氏をはじめとする一門を中核とする家臣団を編成するとともに、戦国期には周辺の羽床・瀧宮・福家など城主級の武士を幕下（寄子）としていたとみられる。

3. 讃岐を離れた香西氏

『南海治乱記』によると、香西備前守一家と三谷伊豆守一家は出雲へ行き、香西縫殿助は池田輝政の元で三千石を賜つた、といふ。

出雲へ赴いたという香西備前守・三谷出雲守（『南海治乱記』では伊豆守）の子孫は、出雲松江藩平家の家臣となり幕末まで続いた（桃 1979）。松江藩士の香西氏の祖は香西太郎右衛門正安であるが、父は香西備前守で、「讃岐国香西と申す所の城主」であったと伝える。正安が仕えたのは越前国福井藩の結城秀康で、正安の姉（松光院）が三谷出雲守長基に嫁し、その女子（月照院）が秀康に召されて松江藩松平家初代となる直政を生んだ。そのため、正安および三谷氏は母方の縁で隨從していたとみられる。大坂の陣では、香西正安・正之父子は秀康の長子忠直の命と月照院の委嘱によって直政の初陣に付き添い戦功をあげた。

池田家に仕えたとされる香西縫殿助はどうであろうか。「岡山藩家中諸士家譜五音寄」（池田文庫）によると、池田家に仕えた香西氏の祖である香西主計について、「讃岐香西郡に居城あり。牢人して尾張へ移り、池田恒興の妻の父荒尾善次に仕えたと見える。その長男縫殿介は、池田恒興に仕え、姉川の戦いで討死した。次男の又市は恒興女子と三好信吉（のちの羽柴秀次）との婚儀に際し御輿副として遣わされ秀次に仕えたが、文禄4(1595)年の秀次の切腹後は、池田家に戻り輝政に仕えた。その子孫は池田家の移封に従い備前岡山藩士となったのである。『南海通記』・『南海治乱記』に見える香西縫殿助は、香西佳清の侍大将で天正14(1586)年の豊後戸次川の合戦に加わったとされるが、池田家との關係は見いだせない。香西主計の長男縫殿介と混同したものであろう。

(田中)

第3節 南北朝期～室町期の香西氏

1. 細川京兆家被官香西氏

香西氏は、建武2(1335)年に細川定禅に率いられて香西郡鷺田庄（坂田郷）で挙兵したといわれる『太平記』が、確かに初見は建武4(1337)年であり、足利尊氏方の讃岐守護細川頼氏(定禅兄)に従っている。

室町時代の香西氏は、管領細川京兆家の内衆として在京し、その分国である丹波国の守護代や攝津国の住吉郡守護代を勤めていた。讃岐国では細川氏所領香西郡坂田郷の代官や守護料所三野郡仁尾浦の代官も勤めている。このほか、醍醐寺領綾南条郡陶保の代官も勤めている。

まず、京兆家分国丹波国の守護代としての活動について述べる。『相国寺供養記』には、明徳3(1392)年8月28日に管領細川頼元に供奉した安富・香川両氏など郎党23騎の名乗りと実名が列記されているが、その中に香西氏は見えない。香西氏が京兆家内衆として現れるのは、応永19(1412)年の香西入道と呼ばれる香西常建が確かに初見である。常建が丹波守護代であったことを明記した史料は応永29(1422)年に見られる『康富記』が、高雄山神護寺文書から応永19(1412)年12月19日から26日の間に丹波守護代は細川頼益から香西常建へ交代したとみられる。

常建死後、香西豊前守元資が丹波守護代として活動していた。元資は出家後香西豊前入道常慶と名乗っていたようである。常建と常慶は丹波守護代・坂田郷代官の両職に相次いで就任し、出家後に豊前入道と名乗っていることが共通することから、おそらく親子であろう。永享3(1431)年には、丹波守護である細川持之が將軍足利義教に香西氏から内藤備前入道に丹波守護代を交代させる旨を申し出ており、義教は香西氏の守護代としての失政を責め、処罰するよう命じた。翌4(1432)年5月、内藤備前入道が丹波国雀部庄・桑田神戸田について遵行状を出

年表1 南北朝期における香西氏の活動

| 西暦 | 年号 | 記事 | 文献 |
|------|--------------------------|--|---------------|
| 1335 | 建武2年 11月26日 | 足利氏一族細川柳律師定禅、讃岐国鷺田庄で反建武政権の兵を擧げる。香西・詫間両氏、与力して300余騎に及ぶ。 | 太平記 |
| 1337 | 建武4年 6月20日 | 讃岐守護細川頼氏、香西彦三郎に讃岐国財田要害のことを守護代桑原左衛門五郎と談合し軍忠を致すよう命じる。 | 西野嘉右衛門氏所蔵文書 |
| 1351 | 正平6年 (観応2)年 12月15日 | 足利義詮、香西彦九郎に対し四国において忠節を致すとの細川頼春よりの注進を受け、感状を与える。 | 細川家文書 |
| 1352 | 観応3年 3月24日 | 足利義詮、細川頼有に京都南郊の八幡に拠点を設けた南朝方との戦いのため四国勢を率い摂津神崎を経て発向するよう命じる。ついで、翌4月20日、義詮・頼有の注進により、羽床・太田・牟礼・大庭ら讃岐国人の戦功を賞する。 | 細川家文書 |
| | 12月15日 | 足利義詮、香西彦九郎に対し四国において忠節を致すとの細川頼春よりの注進を受け、感状を与える。 ※本文書は、前出の正平6年12月15日足利義詮感状を写し間違えた可能性がある。 | 「水源師禮紀年録」所収文書 |

年表2 香西常建・常慶の活動

| 西暦 | 年号 | 記事 | 文献 |
|------|-------------------|--|------------------|
| 1412 | 応永 19年 12月 26日 | 香西常建、守護細川満元の命により同国よりの公方炭運上の通路を確保し通過させるよう又守護代本庄次郎左衛門に伝える。 | 高雄山神護寺文書 |
| | 日付なし | 香西入道常建、清水坂神護寺領讃岐國坂田郷の所務代官職を年貢 170 貨文で請け負う。 | 御前落居記録 |
| 1414 | 応永 21年 7月 29日 | 香西豊前入道常建、室町幕府より東寺領同国大山庄についての即位段銭の催促停止を命じられる。 | 東寺百合文書 |
| | 12月 8日 | 香西常建・元資、細川満元の白峯寺法楽百首和歌に加わる。 | 白峯寺所蔵松山百首和歌 |
| 1416 | 応永 23年 8月 23日 | 丹波守護代香西豊前入道常建、東寺領同国大山庄についての仙洞段銭の催促を止めるよう又代官三上三郎左衛門尉に命じる。 | 東寺百合文書 |
| 1417 | 応永 24年 10月 17日 | 香西元資、岐陽方秀の聖一国師の年譜校正と改刻に当たり銭 100 文を寄進する。 | 聖一国師年譜及語錄 |
| 1420 | 応永 27年 4月 19日 | 香西豊前入道常建、守護細川満元より、幕府の命に従い、天龍寺領同国六人部九ヶ村井畠富庄の課役を免除するよう命じられる。 | 鹿王院文書 |
| | 8月 4日 | 香西常建、幕府より相国寺・天龍寺の寺領についての段銭が停止されたことの不満を守護代本庄次郎左衛門へ伝える。 | 鹿王院文書 |
| 1422 | 応永 29年 6月 8日 | 丹波守護代香西常建、61 歳で死去する。 | 康富記 |
| 1425 | 応永 32年 12月 29日 | 丹波守護代香西豊前守元資、守護細川満元より、東寺領同国大山庄の人夫役を停止するよう命じられる。 | 東寺百合文書 |
| 1426 | 応永 33年 3月 4日 | 香西豊前守元資、東寺領同国大山庄についての人夫役を停止するよう代官初井民部に命じる。 | 東寺百合文書 |
| | 6月 13日 | 香西豊前守元資、守護細川満元の命により、祇園社領同国波々伯部保諸公事を停止するよう代官初井民部に命じる。 | 早稲田大学所蔵祇園社文書 |
| | 7月 20日 | 香西豊前守元資、守護細川満元より室町幕府の命に従い、同国何鹿郡内漢郷ならびに八田郷内上村を上杉憲実代官に引き渡すよう命じられる。 | 上杉家文書 |
| 1431 | 永享 3年 7月 24日 | 丹波守護細川持之、守護代香西常慶を罷免し内藤備前入道と交代させるよう願い出る。將軍足利義教、常慶を失政の咎により処罰するよう持之に命じる。 | 満済准后日記 |
| | 9月 6日 | 香西豊前入道常慶、讃岐國坂田郷の年貢未納を領主清水坂神護寺より訴えられ、将軍足利義教の裁定により所務代官職を罷免される。のち 12 月 10 日、守護細川持之の訴えにより、坂田郷の代官を交代させることで神護寺の直務を止め、知行を認められる。 | 御前落居記録 満済准后日記 |
| 1433 | 永享 5年 10月 23日 | 管領細川持之被官香西常慶、内裏絵所光国知行地に対する違乱により幕府へ訴えられる。 | 満済准后日記 |

しているので、守護代の香西氏から内藤氏への交代が実現したことがわかる。

また、同年に常慶が請け負っていた清水坂神護寺領讃岐国坂田郷の代官職について神護寺が幕府へ訴え出た。内容は、応永 19(1412) 年に故香西入道（常建）が請負って以来年貢を納めてきたが、近年滯納が続くので代官請負を止め寺家の直務としたいということであった。義教は常慶の訴えを退け、常慶の代官請負を止め、寺家の直務とすることを裁許している。しかしながら、坂田郷は細川頼之以来の京兆家の知行地であるにも関わらず、今回神護寺の直務とされたことは受け入れがたいとの細川持之の訴えにより、代官を交代させることで義教の了解を得ている。持之の訴えは「ことに讃岐国事は、丹波・摂州様の事にはあるべからざる間、一段執心」と見え、京兆家にとって讃岐国は分国のなかで摂津・丹波両国より重要と位置付けられていたことがわかる。

次に、讃岐国仁尾浦代官職についてみてみよう。嘉吉元(1441)年から翌年にかけて、鴨御祖社領三野郡仁尾浦の神人らは、本社に対し守護料所の代官香西豊前を罷免し別人に交代させるよう幕府へ訴えることを数度にわたって願い出している。仁尾浦神人による代官香西豊前排斥の原因の一つは、前年 6 月に起こった嘉吉の変に際し讃岐西方守護又代香川修理亮より兵船の催促があったにも関わらず、香西方が出船を止めたため守護より折檻されたことがある。香西方からは香西五郎左衛門より連絡があったという。

嘉吉 2(1442) 年の仁尾浦神人等目安案（仁尾加茂神社文書）には、香西豊前の父が嘉吉元(1441)年 10 月に死去したことが記されており、この人物が常慶であろう。香西氏のうち、この系統の当主は代々「豊前」を名乗っていたとみられる。この系統の香西氏は、春日社領越前国坪江郷の政所職や醍醐寺報恩院領綾南条郡陶保の代官職も請け負っていた。

長禄 2(1458) 年から寛正 4(1463) 年にかけて行われた、陶保代官職をめぐる本所の報恩院と代官の香西氏とのやり取りの中で、当時の代官香西平五元資は、当保の代官職は曾祖父豊前入道から祖父の故豊前、父美濃守と歴代請け負ってきたことを述べている。年代からみて、元資の曾祖父豊前入道は常建、祖父の故豊前は常慶に当たっていよう。このことから、丹波守護代および坂田郷代官を務めていた豊前入道常建・豊前入道常慶の流れは、嘉吉年間に仁尾浦・坪江郷の代官を務めた豊前（豊前入道）と陶保の代官を務めた美濃守とに分かれたと推測できる。

香西氏には「豊前」を名乗る系統のほかにもう一つ系統があったようである。それは、五郎右衛門尉を名乗る流れである。この系統は、仁尾浦神人の嘉吉元年の言上状に「香西豊前」とともに「香西五郎左（右）衛門」が見えるのを初めとする。嘉吉 3(1443) 年の史料上に現れる香西五郎右衛門尉之長は京兆家分国摂津国の住吉郡守護代であったとみられ、摂津国を中心として活動している（『建内記』）。また、時期は下るが、文明 18(1466) 年にも香西五郎左衛門が現れる（『蔭涼軒日録』）。細川政元の使者をしばしば務め、政元の内衆の一人であった。長寧 3(1489) 年に行われた政元主催の大追物には香西又六元長とともに射手を務めており、元長と同時代人である。こちらの五郎左衛門は、延徳 4(1492) 年 3 月に行われた備中国での守護細川上総介勝久と国人庄伊豆守元資との合戦に、政元が支援していた庄氏方として参加し討死している。このときの合戦において五郎左衛門が讃岐より軍兵を召し具したと見えることから、その本國は讃岐であったと判断される。こののちも史料上には五郎左衛門尉の名が見え、永正 4(1507) 年には香西又六元長とともに討死している。

表3 室町期における香西一族の主要な活動①

| 西暦 | 年号 | 記事 | 文献 |
|------|---------------|--|----------|
| 1441 | 嘉吉元年 10月 | 守護料所三野郡仁尾浦代官香西豊前の父、死去する。 | 仁尾賀茂神社文書 |
| | この年 | 守護料所三野郡仁尾浦神人、嘉吉の変に際しての兵船御用を妨げるなどの暴政につき代官香西豊前を守護細川氏に訴える。文中、香西五郎右衛門が見える。 | 仁尾賀茂神社文書 |
| 1442 | 嘉吉2年 10月 | 守護料所三野郡仁尾浦神人、香西豊前の代官職を罷免するよう守護細川氏に訴える。 | 仁尾賀茂神社文書 |
| 1443 | 嘉吉3年 5月21日 | 摂津住吉郡守護代香西五郎右衛門尉之長、万里小路時房に対し御厨子所率分（閑所）一所を同国堺北庄において請け負う。 | 建内記 |
| 1444 | 文安元年 6月10日 | 細川勝元、香西子息と前田子息の開幕において香西に助言したことにより、前田の恨みを買ひ刃傷沙汰となる。勝元、前田を親類に預け切腹させる。 | 建内記 |
| 1447 | 文安4年 1月19日 | 興福寺大乗院門跡経覚、香西豊前入道へ樽以下を贈る。 | 経覚私要抄 |
| | 2月16日 | 興福寺大乗院門跡経覚、香西五郎左衛門へ樽以下を贈る。 | 経覚私要抄 |
| | 2月21日 | 興福寺大乗院門跡経覚、香西氏が越前国坪江庄の年貢を請け負うことと了承する。 | 経覚私要抄 |
| | 5月21日 | 香西豊前入道、興福寺より寺領越前国坪江郷の年貢滞納により代官職を改易されたのちも、守護方の遵行を受け入れず訴えられる。 | 建内記 |
| 1451 | 宝徳3年 12月6日 | 中原康富、鷹司家領和泉国五ヶ畠年貢の件につき同国守護代香西藤井宅を訪ねる。 ※同様の記事が享徳4(1455)年1月24日条にもある。 | 康富記 |
| 1458 | 長祿2年 12月晦日 | 香西平五元資、醍醐報恩院領綾南条郡陶保の代官職を年貢50貫文で請け負う。 | 醍醐寺文書 |
| 1461 | 寛正2年 2月9日 | 醍醐報恩院降済、綾南条郡陶保代官香西氏が細川氏の被官でありながら寺領を押領していることを典厩家の細川持賢に訴える。 | 醍醐寺文書 |
| 1462 | 寛正3年 12月 | 報恩院雜掌、香西平五元資の寺領陶保押領を守護細川氏に訴える。 | 醍醐寺文書 |
| 1463 | 寛正4年 8月19日 | 報恩院雜掌、香西平五元資の寺領陶保押領を守護細川氏に訴える。 | 醍醐寺文書 |
| | 9月27日 | 香西平五元資、報恩院領陶保の代官職請負の件につき守護細川氏に釈明する。 | 醍醐寺文書 |
| 1470 | 文明2年 | これ以前、応仁末年以降に成立した「見聞諸家紋」に香西越後守元正の名が見える。 | 『群書類從』 |
| 1474 | 文明6年 7月10日 | カウサイ（香西）某、御料所丹波国上村の代官に就任した札として山科言国卿記 | 言国卿記 |

室町期の香西氏には、豊前守・豊前入道を名乗る系統と五郎左（右）衛門尉を名乗る系統との二つの流れがあり、いずれも讃岐との関わりが確認された。おそらく両者とも讃岐を本国とし、京兆内衆として京都に滞在していたのであろう。

応仁3(1469)年から文明2(1470)年の間に成立したとみられる『見聞諸家紋』には、「讃岐藤家左留畫公之孫」として、大野・香西・羽床・福家・新居・飯田などの讃岐藤原氏の家紋が掲げられており、いずれも三階松を基調にした文様である。香西氏については、香西越後守元正の名が見え、三階松並根様を家紋としている。その後、文明年間に摂津国住吉郡守護代の香西元忠とその子とみられる香西孫五郎元継や、香西彦二郎長祐などが史料上に現れる。

2. 山城守護代香西又六元長

香西氏は、戦国初期に細川政元政権下で京都・讃岐において一大勢力となっていた。その中心人物は香西又六元長で、棟梁的存在であった。『南海通記』所収系図では元直の子元継に当たる。元長は、政元の内衆の一人として山城国下郡守護代を勤めており、本拠は京都の嵯峨嵐山城であった。

元長と細川政元との関係が初めて確認されるのは長享3(1489)年で、細川政国が禅昌院において詩歌会を催した際である。このとき、元長が政元とともに列座している。その後も、若年で政元の近習としての役割を果たしていたことが史料上から窺える。

その頃の京都における香西氏についての貴重な記事が『蔭涼軒日録』に見える。それによると、香西党ははなはだ多数であり、伝えられるところでは讃岐藤原氏は7千人いてほかの侍はこれにおよばないという。半礼・鴨井・行吉なども香西と同姓である。京都に集まっている香西一族は300人ほどいるのではないか、ということである。香西氏は、集団からなる党的武士團であることが知られる。

ついで『蔭涼軒日録』には、当時の讃岐国情勢も見える。それによると、讃岐国は13郡からなり、うち6郡は香川氏が、7郡は安富氏が領有している。香川・安富両氏は京兆家分国讃岐国の西方・東方守護代で、分割統治を行っていた。西方は香川氏と国衆との間に寄親一寄子関係が結ばれ、円滑な関係にあったが、東方は、香西氏以下の国衆の独立性が強く、安富氏に従わないもののが多かった。明応4(1495)年には「讃岐国蜂起」があり、讃岐へ半礼父子が派遣されたが、同兄弟が攻め殺されたとの噂が都へ伝わり、安富元家が近江守護代を辞任して讃岐へ下ろうとして政元に制止されるという騒ぎが起こっている。このとき讃岐国で殺害されたのは、半礼兄弟の父と伯父であることが後に判明するが、守護代安富氏の管轄地域で不穏な状況が生じていたことは疑いない。

明応2(1493)年4月、政元は將軍足利義材を廃し、同義高（義澄）を擁立し専制政権を樹立する。同6(1497)年9月、政元は山城国の北5郡の守護代に香西又六元長を任命した。政元政権において元長が頭角を現すのはこのときである。山城国は將軍家御料国であり、当時の守護は伊勢備中守貞陸であったが、南山城においては守護方と京兆家被官からなる国衆との武力抗争が続いている。一方では、前河内守護畠山尚順ら義材派による周辺地域の制圧も進んでおり、政元は自らの内衆である香西元長を山城守護代に任命して伊勢氏と協同することで山城国を固め、影響力の拡大を図ったのである。このとき元長が守護代に起用された理由は京都において

年表4 室町期における香西一族の主要な活動②

| 西暦 | 年号 | 記事 | 文献 |
|------|--------------------|---|--------------------------|
| 1476 | 文明 8 年 2月 27 日 | 摂津住吉郡守護代香西元忠、細川氏の命により同国念佛寺領同国堺北庄についての段銭・臨時課役を免除するよう小守護代本庄上野介に伝える。 | 開口神社文書 |
| 1482 | 文明 14 年 3月 18 日 | 畠山政長と同義就の争いに関わり、細川政元の被官香西氏が摂津堺北庄へ入る。 | 大乘院寺社雜事記 |
| | 6月 7 日 | 香西孫右衛門尉、当知行地摂津国山田村を担保として同国守護代薬師寺元長に 542 貢文を借賃する。 | 賦引付 |
| 1484 | 文明 16 年 3月 9 日 | 香西孫五郎、安富与三左衛門尉らとともに細川政元邸においての大追物の射手を勤める。 | 蘆藩日記雜錄 |
| 1485 | 文明 17 年 2月 25 日 | 香西長祐、細川政元の一日千句連歌に加わる。 ※同様の記事が、文明 18(1486) 年 2 月 25 日条～永正 4(1507) 年 2 月 25 日条にわたり度々みられる。文明 17 年以来、長祐は細川政元の命により御発句御脇付第三の執筆に当たってきた。 | 薦亭文庫本「二月廿五日一日千句御発句御脇付第三」 |
| | 7月 16 日 | 香西某（元忠か）、死去する。 | 薦軒日録 |
| 1486 | 文明 18 年 7月 16 日 | 香西某の一周年忌が行われる。18 日、香西孫五郎元継が水陸会（施餓鬼）に列席する。 | 薦軒日録 |
| | 7月 25 日 | 香西又五郎、管領細川政元の室町殿出仕に伴衆として随従する。 | 薦涼軒日録 |
| | 11月 27 日 | 香西五郎左衛門尉、細川政元の両使を勤める。 | 薦涼軒日録 |
| 1487 | 長享元年 12月 7 日 | 香西五郎左衛門尉、管領細川政元の近江国鈎出陣に際し、伴衆を勤める。 | 薦涼軒日録 後編 |
| 1488 | 長享 2 年 6月 24 日 | 香西五郎左衛門尉、前將軍足利義政の普広院（足利義教）焼香に際し、警固衆を勤める。 | 薦涼軒日録 |
| | 10月 23 日 | 香西五郎左衛門尉、崇寿院領堺南庄代官職の件につき細川政元の使者として薦涼軒主を訪問する。 | 薦涼軒日録 |
| | 11月 3 日 | 香西氏が摂津国堺南庄へ打ち入るとの知らせが京都へ届く。 | 薦涼軒日録 |
| | 12月 13 日 | 香西五郎左衛門尉、鹿苑寺後住の件につき細川政元の使者として薦涼軒主を訪問する。 | 薦涼軒日録 |
| 1489 | 長享 3 年 1月 20 日 | 香西又六元長、近松寺馬場においての細川政元の大追物の射手を勤める。 | 小野均氏所蔵文書 |
| | 7月 3 日 | 香西又六元長、牟礼次郎元達らとともに細川政元の桜昌院（細川政國）法会の伴衆を勤める。 | 薦涼軒日録 |
| | 8月 12 日 | 香西党 300 人余、翌日の細川政元の大追物興行のために京都に集まる。讃岐藤原氏は 7000 人もおり、他の侍は及ばない。牟礼・鶴井・行吉らも香西氏と同姓であるという。 | 薦涼軒日録 |

の香西氏勢力への期待にあろう。

永正4(1507)年6月23日夜、管領細川政元が家臣に殺害される。香西元長は、弟たちとともに細川澄之方につき、京兆家の内衆とともに細川澄元を襲撃するが、近江へ逃げられる。このときの合戦で元長の弟元秋・元能は死亡する。8月1日、澄元方についた細川典庭家の政賢・高国父子、淡路守護細川尚春ら細川一門は、澄之方を攻め、澄之は自害、元長は討死する。この戦いで讃岐両守護代の香川満景・安富元治も澄之方として討死した。

元長と讃岐国との関係を示す史料は少ないが、元長が細川一門に攻められて討死する際に、「又六カ与力ニ讃岐国住人前田弥四郎ト云者」が元長に代わり彼の具足を着けて討死したことを見える(『細川大心院記』)。前田弥四郎はもともと京兆家の被官で、元長の寄子となっていたものであろう。また、元長邸から打って出て、元長とともに討死したものの中に「三野五郎太郎」が見える(『細川大心院記』・『瓦林正頼記』)。『多聞院日記』にこの日の合戦での討死者の一人に掲げられている「美濃五郎太郎」は同じ人物であろう。西方守護代香川氏の被官に三野氏がおり、その同族ではないだろうか。

3. 「上香西・下香西」のその後

元長兄弟が全員討死したことで、いわゆる上香西氏は滅んだ。永正4(1507)年には、「香西残党」が都において土一揆を起こし、澄元方から「香西牢人」を捕縛するよう祇園社執行が命じられており、その勢力はしばらくの間残っていた。先に触れたように、元長と同じ時期に香西孫五郎元継・同彦二郎長祐が政元に仕えていたことが知られるから、京都の香西氏は元長兄弟だけではない。細川高国が反澄元の兵を挙げた際、香川平五元綱らとともに香西孫五郎国忠が高国方に加わっている(『瓦林正頼記』)。名乗りからみて、元継の子であろう。また、高国政権期の大永3(1523)年には、高国の使者として香西三郎二郎が近衛尚通を訪れている(『後法成寺閑白記』)。元長兄弟とは別系統の香西氏が京都にいて高国に仕えていたのである。

細川澄元を追放して管領となった細川高国は、香西氏の棟梁的存在であった香西元長の系譜を繼がせるため、同じ藤原氏である丹波波多野氏一族の元盛に香西姓を名乗らせた(『幻雲文書』)。元盛は丹波の郡守護代や和泉国の半国守護代を務め、讃岐両守護代香川元綱・安富元成とともに、管領となった高国の内衆として活動する。ところが大永6(1526)年7月、細川典庭家の尹賢に澄元の跡を繼いだ晴元方に内通したとの疑いを掛けられ高国邸において謀殺された。この事件が元盛兄弟の波多野元清・柳本賢治の謀反を引き起こし、高国政権は倒壊する。なお、元盛のあと香西の家名は賢治の弟(甥とも)が繼いだが、翌年2月の山城桂川の戦いにおいて17歳で討死し、そのあとは「小童」が繼いだ。のち、細川澄元の跡を繼いだ晴元の側近として香西与四郎元成が現れる。元成は三好政勝(宗渭)とともに晴元を支え三好長慶と戦つた。先の「小童」の成長後の姿であろう。

下香西氏については史料にほとんど現れず、本願寺光教の日記である「天文日記」に散見される程度である。室町時代から戦国時代初めにかけての香西氏には、豊前守・豊前入道を名乗る系統と五郎左(右)衛門尉を名乗る系統との二つの流れがあったことを指摘したが、「天文日記」に現れる讃岐香西氏(下香西氏)の五郎左衛門は名乗りからみて、後者の系統と考えられる。

(田中)

年表5 室町期における香西一族の主要な活動③

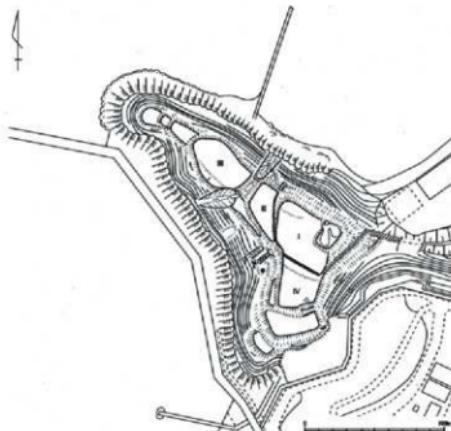
| 西暦 | 年号 | 記事 | 文献 |
|------|---------------|---|--|
| 1490 | 延徳2年 5月14日 | 細川政元の被官ら、物部伸六（上原元秀）・上野玄蕃頃元治の両派に分かれ争う。香西一党は上野方に加勢する。 | 蓮成院記録 |
| | 9月9日 | 香西五郎左衛門・香西忠兵衛尉・行吉・鴨居ら、細川政元母の長谷参詣に随従する。 | 北野社家日記 大乗院寺社雜事記 蓮成院記録 |
| 1491 | 延徳3年 3月3日 | 香西又六元長・牟礼次郎元遠・同弟新次郎・鴨居藤六元朝らの若衆、細川政元の奥州下向に随従する。香西孫五郎元継の実名が見える。 4月28日、奥州より帰洛する。 | 為広越後下向記 藤涼軒日録 北野社家日記 大乗院寺社雜事記 |
| | 5月5日 | 香西五郎右衛門尉、細川政元の使者として藤涼軒主を訪問する。 | 藤涼軒日録 |
| | 8月14日 | 両香西・奈良氏・牟礼若衆二人ら、細川政元の近江出陣に当たり、留守衆を勤める。 | 藤涼軒日録 |
| | 3月28日 | 香西五郎左衛門尉、備中において守護細川勝久と庄伊豆守元資との合戦において庄方として戦死する。讃岐より香西がいた軍兵の大半が討死する。この争いの原因是、細川政元が勝久を排斥したことにある。 | 藤涼軒日録 |
| 1492 | 5月4日 | 香西氏の舍弟、当時、堺郡代を務める。 | 大乗院寺社雜事記 |
| | 6月10日 | 香西一党ら、牟礼二郎と物部（上原）寄子石田との喧嘩に際し、牟礼氏方につく。 | 藤涼軒日録 北野社家日記 |
| | 明応元年 8月4日 | 香西千寿丸、鴨居美濃守元高の推举により北野社より妙法院門跡領野原を請け負う。 | 北野社家日記 |
| | 8月11日 | 香西藤五郎元綱宅において、正広、三首歌合を行う。 | 松下集 |
| 1493 | 明応2年 6月18日 | 織師羽田源左衛門、讃岐国的情勢を藤涼軒主に伝える。香西党は守護代安富氏に従わない。 | 藤涼軒日録 |
| 1495 | 明応4年 3月3日 | 讃岐において牟礼兄弟が攻め殺されるとの噂により、守護代安富元家、下向しようとして細川政元に制止される。 | 大乗院寺社雜事記 |
| 1497 | 明応6年 9月26日 | 香西又六元長、山城下五郡の守護代に任命される。 | 東寺百合文書 |
| | 10月25日 | 香西又六元長、山城守護代として弟孫六元秋とともに入国する。 | 後法興院記 |
| 1498 | 明応7年 5月29日 | 香西又六元長、内衆安富元家との喧嘩により山城守護代職を罷免される。 | 実隆公記 |
| | 11月12日 | 香西又六元長、山城守護代に還補される。 | 後法興院記 |
| 1507 | 永正4年 8月1日 | 香西元長、討死する。 | 後法成寺開白記 等多款 |
| | 12月7日 | 香西氏残党、京都において土一揆を起こす。 | 宣風録記 |

第4節 戦国期讃岐・瀬戸内の状況 一本太合戦から元吉合戦へ

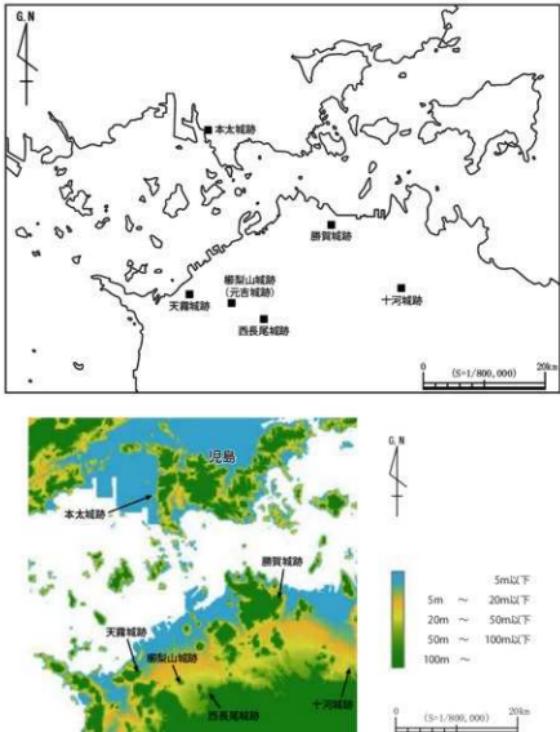
戦国期における香西氏の讃岐での動向はほとんど見ることが出来ない。その時期の史料の欠如にもよるが、文献上に大きく現れるのは、永禄11(1568)年の備前本太合戦である。これより先、天文11(1542)年の阿波三好氏の讃岐侵攻により、安富氏は降伏して東讃岐は三好氏の支配下に収まる。以後讃岐の国人たちは三好氏に服属する。勝賀城主香西元政も軍門に降り、三好勢の一員として西讃岐の香川氏攻めに参陣する。永禄3(1560)年から三好氏は香川氏攻めを開始し、西讃岐各地で戦いが繰り広げられる(秋山家文書)。香川之景は天霧城に籠城し戦うが、同8(1565)年頃天霧城から退城し、中国筋の毛利氏の元へと落ち延びていく。この間、三好家当主であった実休は和泉久米田の戦いで討死しており、その跡は長治が継承する。香川氏退城以後、讃岐は三好の家臣である篠原長房により支配される。

永禄初年に毛利氏は備中を手中に收めており、備中・備前の国境にある本太城は備前進出の拠点になる重要地であった。当時の児島は元々島であったのが陸続きになり、西部が備中と接していた。本太城は児島壇生のはずれの海中に突き出た天神鼻の半島部、三方が海に面している海拔約40mの丘陵上に位置する。まさに天然の要害の城である。本太城は能島村上武吉方の島越前守吉利が守っていた。

永禄11(1568)年5月、篠原長房に率いられた阿波・讃岐勢は本太城へ攻めかかる。讃岐では反三好勢力は一掃されていたが、対岸の備前には反三好勢力の毛利氏が進出する状況があつた。それを阻止するため、三好勢は毛利氏の拠点へと攻撃をかけたのである。この戦いに香西又五郎は本太攻めの一員として参陣していた。この合戦に香西氏は香西浦の船を用いて渡海役を担ったであろう。水運を掌握していた香西氏の参陣なくして本太城攻めは不可能であった。阿波・讃岐勢は下津井へ上陸し、一気に本太城へ攻めかかる。城は堅固な守りで、島氏の頑強な抵抗にあい城攻めは困難を極めた(屋代島村上家文書)。日が暮れ雨が降ったため撤退するが、やがて濃霧で視界がきかなくなつた。夜に城中から出た兵が香西軍を急襲、退却の途中香西又五郎は討死し、香西軍は讃岐へと帰国した(鷗家文書)。香西軍が帰国後、討死した又五郎の首は首桶に入れられ本太から送られてきたといふ(『備前軍記』)。又五郎の嫡子佳清は、この戦いで敵の武将吉田右衛門尉を討取った植松惣十郎の功を賞し、兼光刀一腰を与えている(『玉藻集』所収文書)。一方小早川隆景



第3-2図 本太城跡縄張図
(岡山県古代吉備文化財センター編 2020)



第3-3図 戦国期における主要な城跡の位置
(下図は国土地理院地図の色別標高図を利用して作成)

は、村上武吉に香西勢を討ち果した功を賞して太刀と馬を与えていた（屋代島村上家文書）。

この本太城攻めは『玉藻集』では、永禄11(1568)年に備中児島の四宮氏に誘われ香西駿河守宗信は兵を率いて渡海し本太城を攻め、その時に討死したと記す。だが『讃岐国大日記』では、元亀2(1571)年に香西宗心入道が加陽の城を攻めたとある。『南海通記』でも元亀2年のこととしているが、この記載を受けたのであろう。本太城攻防戦は二度あったが、それを混同したため、『讃岐国大日記』・『南海通記』は永禄11年の合戦の状況を元亀2年としたのである。又五郎の討死は香西氏に大きな痛手となる。香西又五郎は諸記録によれば駿河守宗信元載とする。

では第二次本太合戦はどのような経緯であったろうか。第一次合戦の後、事態は大きく変わっていく。戦いで勝利の功をあげた島吉利に対して、村上武吉は児島近くに所領を与えるが、これにより武吉の備讃瀬戸への勢力確立を図ったといえる。このような武吉の行動はやがて毛

利氏との対立を引き起こすのである。それまでは毛利氏と武吉は友好的な関係であった。毛利氏と大友氏は北九州を巡って敵対関係にあり、毛利方に属した村上武吉率いる水軍に大友氏は敗北を喫している。そこで大友氏は武吉を味方への取り込みにかかった。その仲介を島吉利が行つた。大友氏と関係を深め始め、不穏な行動を取り始めた武吉に対し、毛利氏は武吉をくい止める手立てとして、元亀元（1570）年9月に毛利元就・毛利輝元・小早川隆景の三者が起請文を武吉と交わし、互いが入魂の関係である事を改めて確認した（毛利家文書）。だが武吉は同2（1571）年2月には公然と反毛利の姿勢を取り、反毛利の三好氏との連携を取るのである。

ここで当時の毛利氏の置かれた状況を見てみたい。毛利氏は永禄9（1566）年に山陰に勢力を張っていた尼子氏を滅ぼすが、残党が勢力を伸ばし、大友氏と連絡を取りながら毛利氏を北方から脅かすようになっていた。また、備前・美作を領した浦上宗景と毛利氏は備中を巡り、毛利方についた国人と浦上氏の間で小競り合いが見られた。そのうえに、浦上氏は大内氏と手を結ぶ。毛利氏は北・東・西から反毛利勢力による包囲を受けていた。

このような状況下、毛利氏と敵対する浦上宗景が児島の占拠を窺うなかで本太城に兵を入れて、毛利方の児島守備隊の背後を脅かした。そこで小早川隆景が本太城討伐の兵をあげ、元亀2（1571）年3月に本太城を攻撃する（三原之城壁文書）。この動きに対して、三好勢は備前児島へと軍を進めようとする。前回とは異なり、毛利勢から攻撃を受けていた島氏救援のためである。浦上氏と連携をとった篠原長房が阿波・讃岐勢を率いて渡海し、児島地域で浦上・篠原連合軍が毛利勢と激戦を繰り返す。この戦いを第二次本太合戦と称する。

一方、毛利氏に反旗を翻した村上武吉だが、同2年7月に隆景が能島攻めの軍を起こし、来島村上・因島村上氏を中心とした水軍により拠点の能島城が攻撃をうける。武吉を支援するため阿波の岡田権左衛門と塙砲衆が兵糧を送るが、これに対して沼田警固衆と来島・因島警固衆が襲撃し、塙砲船3艘と船方數十人が討たれた（『萩藩閥閻録』所収文書）。このことは塙砲衆が武吉の支配下であったこと、武吉と阿波三好氏との連携があったことを意味する。翌3年まで能島の包囲と海上封鎖をされるという苦境に武吉は追いやられた。

篠原氏の児島侵入に対して、足利義昭は小早川隆景に早急に出陣するよう指示するとともに、香川氏と相談して讃岐へ渡海するように申し入れている（小早川家文書）。香川氏とは、三好勢の讃岐天霧城攻めにより備中へ逃れ、毛利氏の元で庇護されていた香川之景であろう。讃岐の状況を知っている香川氏を案内人として渡海させようとしたのである。また織田信長も隆景に讃岐攻めを指示している（小早川家文書）。だが、大友氏と対立していた毛利氏は渡海出来なかった。そこで義昭は大友氏だけでなく浦上宗景・宇喜多直家と毛利氏との和睦斡旋を図った。元亀3（1572）年10月、義昭は毛利氏の家臣井上元教に「四国退治之儀、幸備州江可打入人數相副香川遣之、至讃州可及行事、可為感悦候」と御内書を使わしている（『萩藩閥閻録』所収文書）。義昭が讃岐渡海をしきりに促すのは、畿内における三好勢力の追い落としを図るとともに、讃岐での三好勢力を抑えることを目的とした。毛利氏は備前・備中から三好勢の一掃を図ろうとするが、讃岐渡海にはいたらなかった。これらの背景には信長がうごめいており、義昭を中核として信長と毛利氏の連携は緊密に保たれていた。

だが、この後信長と義昭は不仲になる。天正元（1573）年7月、義昭は挙兵するが敗れ、室町幕府は滅亡した。一方、信長と毛利氏の間は、同2年の尼子勝久と山名豊国の争い、備前で

の浦上宗景と宇喜多直家の対立に信長が関与したため対立を深めていく。浦上・宇喜多間の争いに、備中松山城主三村元親は信長の誘いにより挙兵し、これを知った小早川隆景は元親を攻める。元親は姻戚関係にある讃岐由佐氏に救援依頼を、浦上宗景も安富盛定に協力依頼をするなど、讃岐国人は信長方についていたことがわかる。信長は四国進出を目指しており、細川信良を用いて讃岐の諸将に働きかけを行った。細川信良は管領細川晴元の息子で、元亀2(1571)年に足利義昭より偏諱を受けて昭元と名乗る。翌年信長のもとへ参上し、以後信長の庇護を受けるが、義昭の挙兵により信長側に属して信元と名を改め、その後信良と名乗る。信長は晴元以来の香川氏との繋がりを利用し、信良を用いて香川氏を味方に付けるため、度重なる文書の発給を行う（尊経閣文庫所蔵文書）。香川氏を中心に讃岐の反三好勢力をまとめて、抵抗しようと図るのである。一方、香川氏と小早川氏との関係は継続しており、その仲介役として信良の存在があった。このように、信長・毛利・香川氏の間を信良を通じて関係を保っていたといえる。やがて備前・備中・因幡で信長と毛利氏の間は険悪になってくるが、天正4(1576)年2月の義昭の鞆下向は対立を決定的なものとした。信長にとって讃岐は毛利氏との対決の拠点となる地であったため、讃岐国人を味方に置く必要性があった。

讃岐の状況を見てみたい。讃岐は永禄8(1565)年以降、三好氏の宿老である篠原長房によつて支配されていた。長房は宇多津を拠点にして対毛利体制を作り、備前の浦上氏と連携強化を図っていた。一方、阿波の三好本家は永禄5(1562)年に実休の死後長治が繼承する。畿内では三好長慶の死後義維が維ぐが、若年のため三好三人衆が後見役となり実権を握る。三好三人衆はやがて足利義昭を奉じて入洛した織田信長と対立し、都から追放される。しかし元亀元(1570)年に信長が都から撤収した隙に乘じて摂津中島に進出し、大坂本願寺に呼応する形として野田・福島に砦を築いて信長と敵対した。この戦いに篠原長房に率いられた阿波・讃岐勢が参陣したが、その中に香西某なる人物が存在する。名が示されていないが、篠原氏に率いられて十河氏と共に戦っているところから讃岐の香西氏と考えられる。つまり香西氏は三好勢の一員として存在していた（『信長公記』）。『玉藻集』では、香西伊賀守住清とし、1,500人の勢にて福島城に立て籠っている。

元亀2年の第二次本太合戦で篠原勢が敗退するや、三好氏の讃岐での支配力が弱体し始める。天正元(1573)年に篠原長房が主君三好長治に滅ぼされるが、これを契機に讃岐国人たちは三好氏と対立するようになる。この混乱期に、安富盛方は羽柴秀吉に通じるよう図っている。

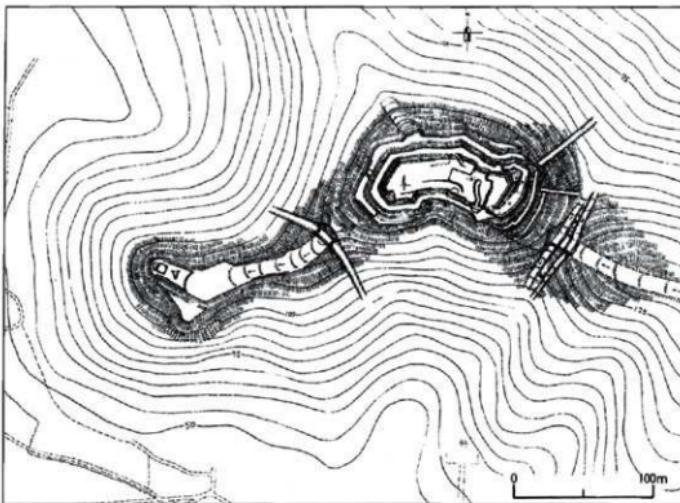
この頃の状況を知る手立てとしては『南海通記』によるしかない。天正2(1574)年に香川・香西氏が、長房が寒川氏から横領して長治に献上した大内郡四郷を返付するよう訴えたことから、激怒した長治は香西氏を討つため讃岐へと侵入、佐料城と勝賀城を攻める。だが、防御が堅く攻めあぐね阿波へと撤退する。また香川氏へは大西覺養が攻め入るが西長尾城主の長尾大隅守らが迎え撃ったため敗走する。これ以降、中・西讃地方での三好氏の勢力は半減する。翌3年に香川・香西連合軍が三好方にについて那珂郡を領していた金倉頸忠を攻め滅ぼしたという。以上は『南海通記』に記載された内容だが、他に裏付ける史料がないため、史実か否かは明らかでない。ここでは香川氏が帰国して三好勢と戦っているが、香川氏の帰国の時期が明らかでない。その時期が明確にされることにより、この記事の信憑性が示される。元亀3(1572)年の義昭の書状によれば、「香川其外讃州牢人事、度々如申遣急度彼国端迄成共乱入候様」とあり（「萩

藩譜録」所収文書)、毛利・小早川氏宛に香川氏と落ち延びた牢人とともに香川氏を帰国させるよう指示が出ている。だが毛利氏は義昭の再三の要求を果たすことが出来ていない。このことからこの時期に香川氏は毛利氏の元に存在しており、讃岐へ帰国していないことを知る。香川氏の讃岐での発給文書は永禄8(1565)年を最後に見られなくなっていたが、天正5(1577)年2月から確認できるようになる(帰来秋山家文書)。香川信景の初見文書で、之景に代わって信景が香川家の当主となっている。同年8月の足利義昭の文書に「至讃州、香川入国之儀、最可然候」とあり(吉川家文書)、香川氏はこれ以前信景発給文書が見られる2月頃に讃岐帰国を果たしたと考えられる。とすれば、前記の『南海通記』の記事は年代を間違っているか、他の出来事を記したものである。

一時は和平していた信長と大坂本願寺だが、天正4(1576)年4月に本願寺は籠城して信長と再度対決する。本願寺と深い繋がりを持っていた義昭は、毛利氏に信長に立ち向かうよう促した。これより先、淡路岩屋を巡って信長と毛利氏の抗争が見られる。岩屋は明石海峡に接する淡路の最北端に位置し、大阪湾と播磨灘を結ぶ接点である。岩屋の確保は本願寺への兵糧搬入路の保証であり、東瀬戸内海制海権の確保に繋がるもので、最も重要なことであった。7月村上水軍を主体とする毛利氏の水軍は、木津川河口で織田水軍を撃破して本願寺へ兵糧の搬入を行った。これに対して信長は、翌5年塩飽を支配下へ組み込み、瀬戸内海制海権の掌握を図る(塩飽勤番所蔵文書)。このような状況下に毛利軍は突如と讃岐へ侵入を図る。

天正5(1577)年閏7月、讃岐惣国衆が元吉城を攻撃し、毛利方との間で合戦が繰り返された。これを元吉合戦と呼ぶ。元吉城の城主は三好遠江守といわれ、毛利氏と結びつきを持っていた。もとは三好一族かと思えるが、三好支配下にある惣国衆にとっては裏切り者という疑念をもつていたかもしれない。この戦い以前に毛利氏は元吉城の普請を行い、軍勢を送って敵の来襲に備えていた。ここへ讃岐惣国衆が攻める。惣国衆とは「一昨日廿日至元吉之城ニ敵取詰、國衆長尾・羽床・安富・香西・田村・三好安芸守三千程」と見え(「毛利家四代実録考証論断」所収文書)、中・東讃の三好の勢力下に置かれた者達である。香川氏の勢力下の西讃岐の者は見ない。毛利方の援軍として乃美宗勝・井上春忠・村上武吉らが参陣して、磨白山に陣取る。元吉城の麓で戦いを繰り広げ、数百人を討取り勝利した(屋代島村上家文書)。毛利軍は堀江口(多度津)付近に上陸し、長尾・羽床衆と戦っているが、制海権の確保を図ろうとしたであろう。その後9月に足利義昭が三好氏と和議の交渉をし、毛利氏は長尾・羽床氏から人質を取り一部の軍勢を残して撤退、毛利氏と三好氏は和睦することとなる(厳島野坂文書)。合戦で勝利した毛利軍は、そこから冷泉元満を淡路岩屋死守のため援軍として派遣する。本願寺への流通路確保のための制海権奪回を図る目的であった。毛利氏は本願寺と連携して信長に対抗するため讃岐へ拠点を求めた。宇多津にある西光寺を中核として、本願寺救援の前進基地を図ろうとしたのである。

元吉城の所在地は、琴平町の櫛梨山と宇多津町の聖通寺山の二説あるが、櫛梨山と比定できる。櫛梨山は那珂郡と多度郡の境目に位置し、付近に南海道が通っており、讃岐の東西・南北が交わる交通要衝に位置している。西には香川氏の居城天露城があり、東方からの敵の侵入を防ぐ出城の役割を果たす城である。香川氏の軍港である多度津は、直線距離1里半で結ばれている。毛利氏にとっても、香川氏にとっても重要な城といえよう。



第3-4図 楠梨山城跡繩張図（香川県教委編 2003）

香川氏は元吉合戦に際して毛利氏の支援により先導役として讃岐へ帰国したのであり、毛利氏は香川氏を通じて西讃岐地域の掌握を図る。また、この惣国衆の中に香西氏が存在している。いわゆる三好方勢力の一員とするならば、香川氏とともに金倉頽忠を攻めた『南海通記』の記述は矛盾していると言わざるを得ない。

元吉合戦について記された記録類は、讃岐では皆無で毛利側の記録だけである。『南海通記』には元吉合戦としての記載は無い。「三好存保攻北条香川民部少輔記」として、元亀年中に三好存保に率いられた讃岐諸将に香川民部少輔の居城西庄城が攻撃され、民部少輔は三原へ渡り、小早川隆景に帰国援助を頼む。そこで足利義昭は隆景に帰国援助を命じた。隆景は浦兵部大輔・井上伯耆守を派遣、浦・井上は多度津へ上陸し、西庄城へ押寄せる。香西伊賀守の番勢は城を明け渡して兵を引き、その後香川氏が入城して本領を還付される、という内容である。まさに天霧退城と元吉合戦の状況を示している。永祿7、8年頃から天正5年までの二つの出来事を、元亀年間の記事に同一に記しているのである。退城した城は天霧城ではなく西庄城で、城主は香川民部少輔となっており、毛利氏との戦いは元吉城でなく西庄城となっているなど、記事には年代と人物と場所が錯認していることを知る。また、香川民部少輔なる人物は他の史料で見ることが出来ず、存在そのものに疑義を持つ。『南海通記』の作者である香西成資も民部少輔の存在に疑義を持っていたようだが、なぜ書き記したのか、その真意は不明である。

元吉合戦は、ただ単なる地方での戦いではなく、中央権力の抗争の中でどのような位置づけをするかが重要である。織田信長と大坂本願寺の瀬戸内海を巡る制海権の争い、そこには両者以外に足利義昭・毛利氏・三好氏・香川氏が互いに葛藤を繰り返す状況が浮き彫りにされてい

る。讃岐戦国史を語る上で、大きな意味合いを持つ合戦といえよう。

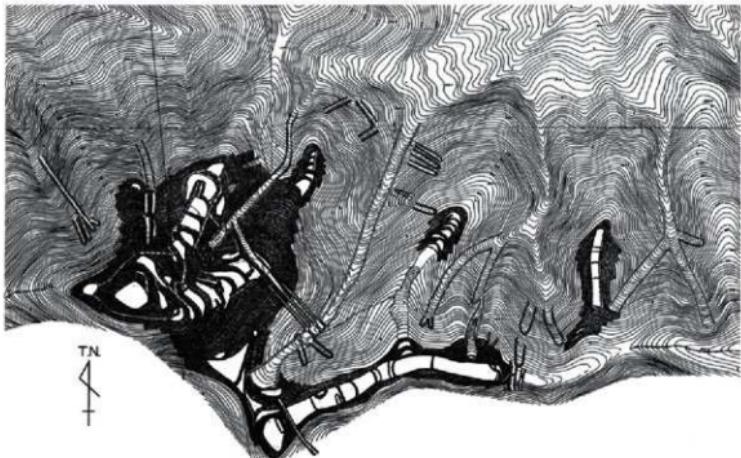
(橋詰)

第5節 長宗我部氏の侵攻と香西氏

天正6(1578)年から長宗我部元親による讃岐侵攻が始まる。長宗我部軍は、すでに同3年に阿波南部へ侵入し、翌年には三好郡の大西覺義を降した。4年末に三好長治が阿波守護家の細川真之に敗れて自刃し、国内は混乱状態になる。その隙に乘じて阿波侵攻を本格化していく。長宗我部氏は元吉合戦の直前には毛利氏・足利義昭と与しておらず、合戦後も支援する様相であった。讃岐は元吉合戦後、毛利氏の影響を強く受けている。阿波では三好家を継承した十河存保(三好存保)が毛利氏・足利義昭と結びつく。存保は香川氏攻めをした実体の実子で、東讃の十河氏の継承者であり、東讃地域の諸勢力を掌握していた。これは讃岐が三好氏の影響下になることで、香川氏にとっては受け入れがたい状況である。一方、長宗我部氏にとっても毛利氏と存保の提携は、阿波侵攻を否定するものである。同6(1578)年10月、元親の嫡男弥三郎が、信長から信の一宇を受けて信親と名乗る(石谷家文書)。長宗我部氏は織田信長と結びつきを持ち、織田陣営に属するようになるのである。また香川氏も毛利氏と存保が連携したため、毛利氏陣営からの脱却を図るのである。このような状況下、反三好勢力である香川氏と長宗我部氏が結びつくようになった。香川氏は細川信良を通じて信長とも結びつきを持つことが出来るのであり、信長陣営に属するのは何の抵抗もなかったであろう。

天正6(1578)年夏、長宗我部軍は豊田郡藤目城を陥落させ、在番を置き讃岐侵攻の拠点とする。これに対し、三好存保に属す長尾・羽床氏らは藤目城を奪回した。長宗我部軍は同年冬に再度藤目城を攻め、完全に掌握する。長宗我部軍の讃岐侵攻に香川氏は軍勢を派遣せず、軍門に降ったといわれているが、そうではなく以上の背景があった。同7(1579)年9月の長宗我部元親の起請文に「万一御身上に相懸被及御機遣儀候者、縦雖不蒙仰候、無二可令加勢候」と誓約しており(津野田文書)、両者の間で盟約を結んだといえる。香川氏は長宗我部氏の軍事力を背景に、讃岐での勢力を保持しようとしたのである。当主信景には男子がなく娘一人だけであった。そこで元親の次男親和を婿として迎え入れ、香川家を繼がせることとした。親和は五郎次郎と称したが、この名称は香川氏の家督相続者が名乗った名称である。信景の後継者の地位を認めたものといえる。信景が岡豊城へ赴いた際には盛大な饗応ぶりで(『元親記』)、征服者と服属者の関係とはいえない。これらのこととは同盟者としての関係をもつものである。香川氏は長宗我部氏とともに織田陣営に属し、毛利氏・足利義昭陣営に属する三好氏と対峙していく。

信景が元親との同盟を成立させた後、長宗我部軍は天正7(1579)年4月に中讃南部地域へと侵攻を開始する。まず三好氏に属する羽床氏攻めを行なうが、羽床軍は多勢に無勢で敗退、羽床一族の木村又兵衛の仲介で降伏する(木村家文書)。それにともない長尾大隅守・滝宮弥十郎をはじめとする周辺の国人はいずれも降伏する。元来中讃地域は香西氏の勢力下にあったが、南部地域は羽床氏が勢力を伸ばし香西氏の力は衰退していた。翌8年春には南部一帯を支配下に置き、西長尾に新城を築き、中讃岐の拠点とした。



第3-5図 西長尾城跡縄張図（丸亀市教委編 2006）

一方阿波では、篠原右京進が反三好方の一宮方に内通したため、三好存保は勝瑞城から讃岐・十河城へ逃れる。三好家内部の対立で阿波は混乱状況に陥り、長宗我部氏により阿波東部は支配される。その後も各地で長宗我部氏の勢力下に収まっていく。四国進出を目指す信長と元親は友好的な関係であったが、両者の勢力拡大に伴い阿波・讃岐を巡る国分問題が生じ、対立へと転換していく。9年の羽柴秀吉の淡路平定が決定的になり、両者は対立に至る。阿波・讃岐の諸氏の中には、長宗我部方から離れ信長方に属する者も現れるようになる。両者の対立が、その後長宗我部氏と毛利氏の同盟になる。「芸土入魂」なる言葉が史料上に見えるが（金子文書）、これは安芸毛利氏と土佐長宗我部氏の同盟関係を示したものである。この両者の仲介をとったのが香川氏であった。長宗我部氏は信長に対抗するために毛利氏と連携し、中国・四国連合で信長に対抗していくのである。長宗我部氏は香川氏と連携を持つことにより瀬戸内海への進出が可能になり、海を媒介として毛利氏との連携を持てるようになる。また、元親は東予の金子氏と同盟を結ぶが、西讃岐と東伊予を結ぶ軍事ラインが必要であり、その中核になるのが香川氏と金子氏である。両者の結びつきが可能になることで、伊予侵攻が容易になるのであった。信長の死後も、長宗我部氏と毛利氏の関係は継続されていく。だが、中国国分を契機に毛利氏が秀吉に組み込まれ、同盟は破綻し対立へと向かう。阿波では三好存保は信長方に付き、勝瑞城を本拠として元親との対立を深めていく。同10(1582)年8月、阿波へ攻め込んだ長宗我部軍は中富川で三好軍を撃破し、勝瑞城を陥落させる。三好存保は讃岐虎丸城へ撤退した。

讃岐における長宗我部軍の侵攻状況を見てみたい。この時期に一級史料はなく、『南海通記』に頼らざるを得ない。天正10(1582)年6月、西衆と称される東伊予・西讃岐の軍勢が西長尾に集結した。香川親和を總大將とし、後見役を香川信景が務める。西衆は那珂・鶴足郡へ進撃し、

聖通寺城主奈良太郎兵衛を敗走させ、藤尾城の香西佳清を攻める。香西氏の居城は佐料城から藤尾城に移していたが、この時の状況を『南海通記』では次のように記している。長宗我部軍が阿波に侵し三好氏の領国が侵される事態になったとき、讃岐国内の勢力や織田信長の方は頼むに足らず、宇喜多か毛利を頼むべしとして、方術として海辺に城を築くことにした。天正3(1575)年より藤尾山に新たに城を築きはじめ、5年に移住するが、造作が整わず家臣は7年まで佐料城に居している(『南海通記』卷之十三)。なぜ藤尾城へ移すのであろうか。佐料城は内陸部の平地にあり、防御には不向きである。勝賀城は勝賀山の頂部に築かれているため防御にも優れている。だが、戦いが不利になり落ち延びる場合困難を極める。藤尾城は香西の集落の中心であり、住民の掌握を図るに適していた。また香西浦にも近く、事あるときには浦湊から瀬戸内海へと逃れやすい地点でもあった。西衆の侵攻に備えての城移動である。現在、藤尾城跡には宇佐八幡神社があり、中世の城跡の遺構は認められない。

しかし、このころから香西氏は内輪もめが続いた。香西氏は中讃南部地域に勢力を張っていた羽床氏と姻戚関係を結び勢力を保っていた。だが、同6年夏に香西佳清夫妻が不仲になり離縁、妻の父親の羽床伊豆守が激怒して麾下から離反して抗争に至る。また、家督相続をめぐり佳清弟支持派の者が佳清派の者を殺害、その報復により佳清派が優位にたったが、二派の対立が続く。このようなことから香西氏の勢力は低下し、西衆の侵攻を防ぎきることが出来なかつた。この侵攻に対して、国分寺周辺での奇襲で西衆を足止めしたかに見えたが、8月に入り支えきれず伊勢馬場及び西光寺表で敗れ、落城寸前の状況下に香川信景の斡旋により、臣従することを受け入れ降伏した(『南海通記』卷之十五)。ここで中讃は長宗我部氏の支配下に收まるのであり、続いて十河城の攻撃が始まる。香西氏は西衆軍の一員として三好隼人の守る十河城を攻めるが、防戦が激しかったため、元親軍の到着を待つ。両軍合わせて再度十河城を攻めるが落城させることができず、冬になったため元親軍は土佐へ帰国した。

この間に三好存保は羽柴秀吉に救援を依頼した。そこで仙石秀久が援軍として派遣される。天正10(1582)年10月に「讃州引田表其外適地無昼夜境かせき申付由尤候、弥無油断可被申付候」とあるように(大阪城天守閣所蔵文書)、秀吉は秀久に引田が攻防の要であるため油断無きよう指示している。翌11(1583)年正月、秀久は引田城に森九郎左衛門を入れ、虎丸城の三好存保、雨滝城の安富肥前守と合力して、長宗我部軍を迎撃体制を整えた。4月元親は大窪越で寒川郡へ入り、大内・寒川郡境の田面岡に陣を構えた。これは三好方の拠点である虎丸城と雨滝城の分断を図る戦略であった。これに対して仙石軍は長宗我部軍を待ち伏せし奇襲攻撃をしかける。当初は仙石軍が優勢であったが、体勢を立て直した長宗我部軍の反撃に遭い、引田へ退き引田城に立て籠もる。長宗我部軍は城攻めを開始し、秀久軍は船にて逃れた(『改撰仙石家譜』)。この報を聞き存保は虎丸城から十河城へ入る。

一方、中央では秀吉と徳川家康・織田信雄が小牧長久手で戦っており、家康は元親に味方するよう呼びかけた。元親はこれに応じるかのように淡路出兵を計画、それを知った秀吉は防備を固めようとする。家康は出兵を促すが、元親は要請に応えず讃岐攻めに勢力を注ぐ。引田合戦の後、石田・雨滝城を陥落させた長宗我部軍は、寒川・由佐氏らを味方につけ、三好存保の籠もる十河城を攻撃した。現在の十河城跡は変更が進み、中世の城跡の遺構はほとんど認められないが、「此城ハ平阜ニシテ三方ハ深田、一方大手ニシテ、カラ堀フカク切立、土ノ性ヨク

持ケレバ、屏風ヲ立タルガ如シ」と記された堅固な城である（『南海通記』卷之十五）。だが、長きの籠城で城内は飢餓に陥っており、開城し城兵を屋島へ逃れさせたと伝える。十河城の落城は6月初旬と考えられる。これより先、存保は秀吉を頼つて逃げ落ちた。これにより讃岐はほぼ長宗我部氏に平定された。だが虎丸城は落城したという記録がみられないところから、平定とはいえないとの意見もある。

十河城を落城させた元親は、伊予の平定へと全力を注ぐ。すでに南予は平定されており、東予は新居郡金子城の金子元宅に命じて毛利氏の出兵に対応した。11月には中予の各城も落城し、翌年にはほぼ制圧された状況であったが、完全な攻略は出来ておらず、統一は必ずしも完成していないといえる。

(橋詰)

第4章 豊臣大名の讃岐統治

第1節 豊臣勢力の讃岐侵攻

天正 13(1585) 年 3 月、羽柴秀吉は紀伊雑賀攻めを行い紀伊を平定するや、長宗我部氏を討つため四国攻めの準備にかかる。これに対して元親は、羽柴軍を迎撃つため阿波白地に陣取り、阿波・讃岐・伊予の要所に軍を配置した。『南海通記』によると讃岐では西衆の国吉三郎兵衛や妻鳥采女をはじめ阿波脇城からの兵将が、香西氏の藤尾城へ集結し、羽柴軍を迎撃つ体制を整えていた。だが兵糧がなく、防御用の溝堀が整備されておらず大軍が駐留できない状況であった。佳清は妻子を安原山へ疎開させ、城下の者は垂水・乃生・木沢・青海の奥へ逃す。兵の中には逃亡する者も出ており、そのような状況下で戦うは無理として西長尾城へ移る。だが西長尾城でも大軍を養うことが出来ないため、もとの場所へ帰るよう指示され、香西氏は藤尾城へ帰城する(『南海通記』巻之十七)。もはや戦意喪失した状況で、羽柴軍の大軍と戦うのは不可能といえる状況である。

5 月 4 日、秀吉は黒田孝高へ来月 3 日に四国攻めの先鋒として淡路に出兵するように、また一柳直末には明石で待機するよう命じた(黒田文書・一柳家文書)。それとほぼ同内容の文書が那珂郡の旧庄屋家に残されている。「仙石権兵衛方、為案内至而便宜之地」とあるように、仙石秀久の案内役として出陣するよう命じている(横井家文書)。このように讃岐では反長宗我部勢力が残されており、秀吉側に付く武士も多くいた。特に東讃岐では顕著な例で現れる。安富氏は早い段階から秀吉に属しており、四国攻めにあたり仙石秀久に属して味方するよう指示されている(士林証文)。また、三好存保も反長宗我部方であった。

四国攻めは、阿波・讃岐・伊予の三方向への進軍が行われた。6 月 16 日、羽柴秀長を総大将とした軍勢は堺から淡路洲本へ渡り、明石から淡路に渡った羽柴秀次軍と合流し、阿波土佐泊へ上陸した。讃岐へは播磨から宇喜多秀家に率いられ、蜂須賀正勝・黒田孝高に仙石秀久が加わり屋島へと上陸する。伊予へは毛利輝元・小早川隆景・吉川元長が東予へ上陸した。屋島へ上陸した宇喜多勢 2 万 3000 は、まず香西氏の属城の喜岡城を攻める。仙石秀久は以前の戦いで攻めあぐねたため、先陣として攻略する。城に火の手があがるのを見た藤尾城の香西勢は逃げ度をし、攻め込まれたならば降伏の準備をする状況であった。讃岐では長宗我部方の戦力は半減しており、反長宗我部の者が現れている様子である。宇喜多勢は長宗我部右兵衛尉が守る植田城を攻めるが堅固であったため、無用の戦いで戦力を消耗させるべきでないとして、これを放置して阿波へ転進して羽柴秀次軍に合流した(『改撰仙石家譜』)。

香西氏は敗れ城は羽柴軍に占領された。讃岐ではもはや羽柴軍へ抵抗する勢力は西讃岐地域だけであった。香西氏を制圧後、羽柴軍は勝賀城を利用したと考える。眼下には香西浦があり、海への備えと兵船の係留にも適しており、東方は高松平野から南部にかけての領域を一望でき、在野の状況を把握しやすい。東方は十河・安富に制圧されており、後背を背かず存在はない。西方を見据え、長宗我部勢の拠点西長尾城と香川氏の居城天霧城に対応する拠点としては最適の地といえる。いわゆる長宗我部対策の陣城としたのである。戦乱の後、藤尾城は整っておらず、勝賀城は再利用しやすい状況であったろう。6 月には室山城が所在した室山に、秀吉から

禁制が出されている（「翁嫗夜話」所収文書）。これは戦乱の混乱を防ぐために出されたもので、秀吉の勢力がこの地に及んでいたことを示す。

阿波では牛岐城の香宗我部親泰と渭山城の吉田孫左衛門が土佐へ引き揚げたため、海岸地域の防御は崩れた。そして岩倉城と一宮城が陥落する。伊予では新居郡金子城の金子元春と桑村郡高尾城の金子元宅が討たれ、7月中旬までに大半の城が攻略された。状況を見た元親は、家臣谷忠澄の提言を容れ、7月25日に停戦条件を呑んで降伏する。元親の三男津野親忠が人質として大坂へ送られ、長宗我部氏は土佐一国が安堵され三国は没収となる。各地に駐屯していた兵は土佐へ帰国し、羽柴勢も大坂へ帰還した。讃岐では、居城していた有力武将は土佐へ帰国し、多くの城は廃城となった。香川氏は天霧城を退き、信景・親和父子も土佐へと移った。香川氏の土佐移住にともない多くの家臣が同道、そのため名族のいくつかは没落する。讃岐香川氏は滅亡するのであった。

秀吉の四国平定の後、国分が行われる。阿波は蜂須賀家政で内1万石赤松則房に、伊予は小早川隆景で内2万3000石安国寺恵瓊、1万4000石来島助兵衛、3000石得居太郎左衛門に与えられた。讃岐は仙石秀久に与えられ、内2万石は十河存保が領した（『多聞院日記』天正13年8月23日条）。「さぬきハ安富又十河孫六両人者為与力權兵衛ニ可引廻由申出候」と、安富氏と存保は秀久の与力として仕える。安富氏には郡切として領地が与えられた（毛利家旧藏文書）。秀久は十河存保の救援以後、讃岐各地で戦い讃岐の状況をよく知る適任者として命ぜられたであろう。また淡路には脇坂安治が入る。阿波・讃岐・淡路には豊臣系大名が配置されたが、いわゆる織田政権の国分構想が豊臣政権の国分に関与したといえる。

（橋詰）

第2節 仙石氏の入部から生駒氏の入部まで

天正13(1585)年に讃岐を押領した仙石秀久は聖通寺城に入り、森石見守村吉を家老として1万石を与え仙石筑後守と名乗らせる。まず8月に那珂郡松尾寺と豊田郡地蔵院に禁制を出して、入部直後の混乱を収めた。そして10月には金刀比羅宮へ10石寄進し、地蔵院には年貢免除を行った（金刀比羅宮文書・地蔵院文書）。翌年には金刀比羅宮・白峯寺・一宮神社へ寄進して寺社を保護するとともに住民の信仰心を掌握しようとした（金刀比羅宮文書・白峯寺文書・田村神社文書）。入国時の讃岐は、戦いの傷痕がなまなましく「土佐元親競望フナシ数年戦ノ街ト成テ國中馬蹄ニカカリ荒所トナリ、民庶困窮シテ年貢ヲ闕如ス」といった状況であった。荒廃した地域では一揆が起り、年貢未納の農民13人が聖通寺山の麓で釜ゆでの刑に処せられた。長宗我部方として戦った香西佳清の子女を隠まっていた谷により、香東郡安原山の山主安原基太郎とその頭12人を磔に処し、配下100余人が獄門に処せられたという（『南海通記』卷之十七）。新領地における徹底した厳罰主義による支配の様子を示している。

一方、在地武士たちには知行宛行状を発給し、家臣団への組み込みを図った。12月には平尾弥四郎に長宗我部氏との戦いの感状を出しており、翌年正月には金倉堅忠の跡職として金蔵寺村150石を与えた（平尾家文書・「新撰讃岐風土記」所収文書）。その後も木村又二郎へ鶴足郡岡田下郷を、由佐長盛に香東郡井原庄内2ヶ村と阿野郡新居郷内国分村を、由佐家盛に山田

郡木太郷内 6ヶ村など、長宗我部氏支配下の旧在地武士の知行を安堵して召し抱えた（木村家文書・由佐家文書）。領国統治には早急な家臣団の編成が必要であり、在地武士の登用を図ったのである。

天正 14(1586) 年 4 月、秀久は薩摩の島津氏を討つため、長宗我部元親・十河存保ら四国勢を率いて九州豊後へ出陣する。島津軍と戸次川で戦うが、四国勢は敗れ秀久は敗走し、長宗我部信親・十河存保・安富肥前守・羽床弥三郎らが討死する。古来からの讃岐の名族が多く滅亡するのであった。この敗戦で、秀久は秀吉から領知を没収された。同 15 年正月、秀久の後を受けて尾藤知宣が入部する。九州遠征の準備をするが十分な戦費が集まらないまま出陣、消極的な作戦を探ったとして、秀吉の怒りにふれて領知を没収された。秀久から引き継いだ讃岐領主の地位はわずか 4 ヶ月で終えた。

同 15(1587) 年 8 月、尾藤知宣の後を受けて、生駒親正が播磨国赤穂から讃岐へ入部する。親正は秀吉子飼いの大名で、堀尾吉晴・中村一氏とともに豊臣家三中老の一人といわれている。『生駒記』によると、讃岐を拝領した親正は、まず引田に入るが東に寄りすぎているため、宇多津平山に移るが手狭のため、那珂郡津森・山田郡由良を経て、香東郡野原庄に築城することとし、翌年からとりかかった（『生駒記』巻上）。これが高松城の前身である。高松城が完成するまでどこにいたのであろうか。秀吉から加藤清正へ宛てた書状がある。そこには「讃州江相越、平山城生駒雅楽頭相渡由」とあり、清正が平山城（聖通寺城）を親正に渡している（阿部四郎五郎所蔵古文書）。讃岐入部後高松城が築城するまでは聖通寺城を居城としていたであろう。以後高松の地を拠点として領国經營を図るのである。領主がめまぐるしく変わり領民は翻弄されており、親正の入部に抵抗する者も存在した。「国民貴物信納せず、其の張本人百余人、香東郡西浜の海辺において、これを燔る」と秀久と同様嚴罰で臨んだ（『讃岐国大日記』）。

親正は領国支配を進めるにあたり、在地の武士を家臣に取り立てていく。まず入部直後に香東郡由佐の由佐平右衛門・大内郡水主の大山入蔵を召し抱える（由佐家文書・大山家文書）。また香西氏の一族である香西加藤兵衛を始め武士 30 人、足軽数百人が召し出されたという。長宗我部氏の土佐退去に同道した者、仙石秀久に領知を没収された者、九州攻めで戦死した者など、多くの在地武士がいなくなっている、家臣を募るに苦慮したようである。同 17 年には末石五郎兵衛・佐藤志摩介・佐藤掃部・美濃四郎左衛門を配下にして、農村の支配にあたらせたという（『讃羽綱遺録』）。

秀吉から与えられた讃岐国だが、そこには秀吉の蔵入地 1 万石が置かれていた（生駒家文書）。親正が与えられた石高は 15 万石と考えられるが、その 1 割弱を占める。この蔵入地は四国平定と同時に設定されたが、九州攻めにおける兵糧確保の目的で設定された。仙石秀久の時に設定された蔵入地がそのまま存続したのは、朝鮮出兵の兵糧確保の為である。

秀吉は全国統一を完成させた後、朝鮮へ侵略を開始するが、朝鮮出兵の部隊編成にあたり、四国の大名を四国衆として捉えている。以前から蜂須賀氏と生駒氏は常に一体化する軍團として存在していた。四国衆は蜂須賀・生駒組を基本に組織されたもので、秀吉は東四国を主軸とする四国支配を早い段階から見据えていた。それは阿波・讃岐を一体と捉え、東瀬戸内の一部としての考え方からである。四国国分で阿波・讃岐に子飼いの大名を置いたのは対長宗我部政策であり、その中核となるのが生駒氏であった。豊臣政権下で重要な地位にあり、四国の目付役割を果たす存在といえよう。

(橋詰)

第3節 国絵図からみた生駒期の讃岐国

1. 生駒期の讃岐国絵図について

生駒期の讃岐国を描いた絵図として、もっとも著名なものは、寛永10(1633)年3月の年紀をもつ金刀比羅宮所蔵の「讃岐国絵図」である。裏書きによれば、本絵図は、高松藩主生駒高俊の命により製作され、同17(1640)年に金毘羅大権現に奉納されたものである（以下、「奉納本」と呼ぶ）。製作時期からみて、寛永10年の幕府巡見使派遣に伴って製作された国絵図が原型となった絵図と從来考えられてきた。

この寛永10年原本製作の「讃岐国絵図」（以下、「寛永10年国絵図」と呼ぶ）については、その写本が県内に複数存在している。それらのうち公益財団法人鎌田共済会郷土博物館が所蔵する絵図については、森下友子・御厨義道両氏の研究（森下1994、御厨2005）に詳しい。御厨によれば、その内の1点に奉納本と同じく寛永10年3月の年紀を持つが、ため池の数が少ない讃岐国絵図（以下、「鎌田本A」と呼ぶ）があり、奉納本とは別の写本と考えられる。奉納本は寛永17年奉納当時の景観を描いたもので、「鎌田本A」の元となった原本をもとにため池などの増補を加えて奉納されたと推定している。

ほかに丸亀市立資料館にも「寛永10年国絵図」の写本（以下、「丸亀本」と呼ぶ）が存在する（丸亀市教委編2015）。同館所蔵本は「奉納本」と、記載内容、表現、色遣いが酷似する。また、ため池の数も一致する。奉納本と同系統の写とみてよい。

「寛永10年国絵図」の諸本については、泉保安夫の研究（泉保2021）に詳しい。泉保が指摘したように、「寛永10年国絵図」は、幕府に提出された諸国の国絵図から製作された「日本六十余州図」（岡山大学附属図書館・岡山シティミュージアム編2012）の讃岐国図とは図形が大きく異なり、まったく別の国絵図と考えられる。

これらの「寛永10年国絵図」とは別系統の国絵図と推定されるものに高松市歴史資料館蔵の「讃岐国絵図」（以下、「高松本」と呼ぶ）がある。本図は、高松城近辺の野原東浜を野原東原と、また丸亀城近辺の津森を津木村と記すなど、しばしば地名を写し間違えていることから、原本ではなく写本と考えられる。元の表紙に壺型と角型の蔵書印が捺されているが、壺型の印文は「孫四郎」、角印の印文は、「別所信治」と読める。『寛政重修諸家譜』に、播磨三木城主別所氏一族で、徳川秀忠に仕えた旗本に別所孫四郎信治が見える。印章の持主は同人とみられ江戸時代の初めには製作されていたといえる。なお、同人の印章が捺された国絵図は、ほかに播磨・因幡・伯耆3か国分が確認されており、加納亜由子の研究（加納2017）で紹介されている。

「高松本」原本の製作年代について、まず手がかりとなるのは、那珂郡の満濃池があるべき位置に丸形で囲んで「池内」と記載されている点である。他の地名表記の例から、この「池内」は村名と判断される。「讃岐国名勝図会」巻11那珂郡上（国立公文書館所蔵）によれば、満濃池は、元暦元（1184）年の洪水により決壊し池の跡は500石ばかりの山田となり「池内村」と呼ばれていたという。満濃池が生駒家の重臣西島八兵衛により再築造されるのは寛永8（1631）年のことである（田中2019）から、本図の原本の製作年代は同年以前に遡ることは間違いない。

「高松本」と内容が酷似する「讃岐国図」2点が臼杵市教育委員会に所蔵（臼杵市立臼杵図書館蔵）されている（以下、「臼杵本」と呼ぶ）。この2点は江戸期において製作された

新旧の写本であり内容はほぼ一致する。旧臼杵藩主稻葉家伝來のものである（臼杵市教委編 2005）。「高松本」と同様の誤写がまま見られるが、同本で損傷している箇所や、欠落・誤写している記事を確認することができる貴重な史料である。

また、公益財団法人鎌田共済会郷土博物館には、讃岐国に関わる各種の国絵図の原本や写本が所蔵されており、慶長年間の情報が記された「四国古図」（原本）（（財）日本地図センター 2004、御厨 2005）や、幕府撰寛永国絵図の縮写図（川村 1995）の写本とみられる「讃岐国之図」・「讃岐国之絵図」（以下、「鎌田本B」と呼ぶ）などがある。

寛永年間、幕府は両度にわたり諸国に国絵図の調達を命じている。同 10 年の巡見使国回りに際してと、同 15 ~ 16 年の日本総図編成の際である。「鎌田本B」の引田・高松・丸亀 3 城についての記載を見ると、いずれも引田・丸亀両城を「古城」としており、一国一城令が出された元和元（1615）年（慶長 20 年）以降の状況を示している。なお、「鎌田本B」においては、「高松本」と同様に高松沖の男木・女木両島の島名が現在のものと逆になっている。このことは、これら 3 点の絵図が、同じ系統に属することを推測させる。

「高松本」と「臼杵本」のいずれも、丸亀城を古城（廢城）とし、引田城を現役の城としている。従って、これらの国絵図の記載情報の時期的な上限は、生駒家第 3 代正俊が家督を継ぎ丸亀城より高松城へ移り、城下の町人も高松へ移住させたと伝えられる慶長 15（1610）年（『南海通記』「讃州高松府記」・「綾北間尋抄」）に求められ、その下限は、引田城が一国一城令により廢止されたとみられる元和元年（慶長 20 年）に求められる（東かがわ市教委編 2016）。

『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』（臼杵市教委編 2005）によれば、「臼杵本」は、寛永 15（1638）年、幕府から再提出を要請された中国筋の国々の国絵図の写本の一つと判断されている。しかし、寛永 15 年再提出が命じられた国々は、現在判明している限り中国の 10 か国と出羽国のみであり、讃岐国は含まれていない（川村 1984）。また、「臼杵本」の新旧両図については、航路（『報告書』の筆者は、おそらく、村の所属を示す吊り線を航路と見誤っている）・村ごとの石高・一里山の記載を欠くなど、寛永 15 年再提出の詳細な記載が見られる国絵図とは異なる点が多くある。寛永 10 年提出絵図の写本とするべきである。ほぼ同じ内容を持つ「高松本」も寛永 10 年の提出分とみてよい。また、臼杵市教育委員会所蔵の絵図の中には数か国分をまとめた地方図といえる古地図が存在し、寛永期の国絵図の内容に類似することも指摘されている。さらに内容を精査する必要があるが、前出の「四国古図」は、同様の地方図ではないか。

「高松本」・「臼杵本」に見られる引田・高松・丸亀 3 城の状況は一国一城令以前のものであり、また、寛永 8（1631）年の満濃池の築造により消滅した池内村を記していることが示すように古い情報に基づいて製作されている。幕府の担当者が提出された絵図について現状に基づき引田城を古城に修正した結果、「日本六十余州図」の讃岐国図が成立したと推測する。

それでは、幕臣の別所氏や稻葉氏のもとに写本が伝来した讃岐国絵図の原本はなんであろうか。それは幕府が慶長 10（1605）年に西国筋の大名に提出を命じた、いわゆる慶長国絵図を修正したもの以外には考えられない。描かれている内容は慶長 15（1610）年の丸亀城廢城（上限）以後から同 20（1615）年（元和元年）の引田城廢止以前にかけての状況であり、生駒家は慶長讃岐国絵図の一部を修正したうえで提出したとみられる。

2. 生駒期の讃岐国絵図に見える城・城跡について

生駒期の讃岐国絵図である「高松本」・「白杵本」・「丸亀本」から、引田・高松・丸亀3城と「古城跡」の記事が見える観音寺城について該当箇所の図版を掲げ、若干の説明を加える(第4-1図)。なお、生駒期の引田・高松・丸亀3城および観音寺城については、森下友子(森下 1996)・御厨義道(御厨 2008)・『歴民シンポジウム—戦国から太平へ—戦国武将生駒氏と引田・高松・丸亀の3城』(高松市歴史民俗協会編 2010)・佐藤竜馬(佐藤 2016)・田中健二(田中 2017)などの研究、『讃岐丸亀城研究調査報告書』(丸亀市教委編 1988)・『香川県中世城館跡詳細分布調査報告書』(香川県教委編 2003)・『高松城史料調査報告書』(高松市教委編 2009)・『引田城跡総合調査報告書』(東かがわ市教委編 2016)などの報告書がある。

左から順に、引田・高松・丸亀・観音寺の該当箇所を掲げている。

これらの3図を比較すれば明らかのように、「高松本」・「白杵本」と「丸亀本」とは大きく異なっており、「高松本」と「白杵本」が同系統の絵図であることが知られる。描写は「白杵本」の方が詳細であるが、そこに記された情報は同じである。引田・高松・丸亀においての海岸線や河川流路の変化については、田中の研究(田中 2008, 2010, 2017)を参照されたい。観音寺については、「高松本」・「白杵本」と「丸亀本」とで、河川の流路が異なって描かれている。「高松本」・「白杵本」では図面ほぼ中央の「観音寺浦町」の近くに河口を持つ作田川が、「丸亀本」では図面上方(南方)に描かれており、この間に付け替え(流路変更)が行われたことが知られる。

引田城については、『引田城跡総合調査報告書』(東かがわ市教委編 2016)で指摘されているように、生駒一正の三男基助正信が引田城を預かっていたとの伝承がある。「生駒家廢亂記」・「讃羽綱遺録」によれば、正信は、元和元(1615)年の大坂夏の陣に際して大坂方につき、大坂城落城により讃岐へ逃れ、自害したという。『翁姫夜話』(香川県立ミュージアム所蔵)・『増補三代物語』(高松市立図書館所蔵)などの讃岐の地誌によれば、正信は大内郡1万石を分知し引田城に居城していたという。

高松城については、「白杵本」に「居城」の右に「野原」、左に「高松トモ云」と注記されているのが注目される。野原は高松城築城以前の城地名であり、高松城が初め「野原城」と呼ばれていたことを示す記事である。

丸亀城については、「高松本」・「白杵本」とともに、「圓亀古城」と記されており、絵図製作当時廃城となっていたことが知られる。一般に丸亀城は元和元年の一国一城令により廃止されたとされているが、先に述べたように、それ以前の慶長15年に実質的に廃城となっていた可能性が認められる(『南海通記』・『生駒記』・『讃羽綱遺録』)。

「高松本」・「白杵本」に観音寺浦町について「古城跡有」と注記されている「古城」については、『香川県中世城館跡詳細分布調査報告書』(香川県教委編 2003)で、高丸城跡(観音寺城跡・景全城跡)として掲げられているものに当たろう。生駒期には豊臣秀吉の与力高坂丹波守が城主として豊田郡内1万石を領したが、元和の一国一城令により廃城となつたと伝える。「古城跡有」との注記は、寛永10年の絵図提出の際になされたものと推定する。

(田中)

第4-1図 各絵図における引田城・高松城・丸亀城・觀音寺城



第5章 考古学的検討

第1節 全国的な事例からみた勝賀城跡の位置づけ

はじめに

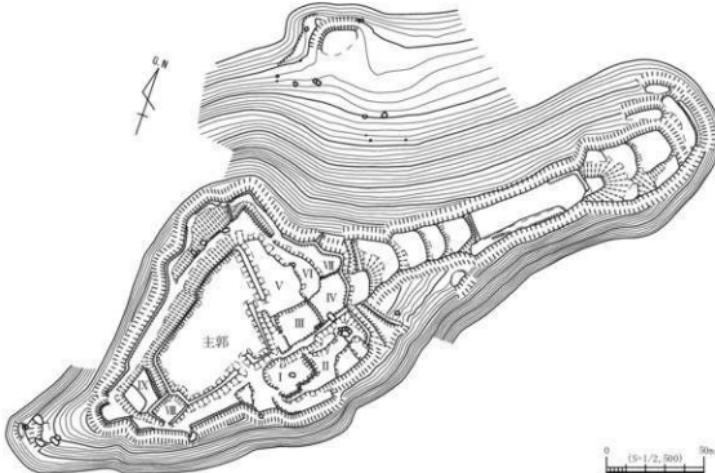
勝賀城跡は大きく南西部と北東部から構成され、両部の構造は大きく異なっている。北東部の城郭構造は尾根筋に階段状に曲輪を配置するだけで、堀切や土塁も伴わない。一方南西部の城の中心部は巨大な土塁を矩形に配し、虎口は喰い違いとなる。さらにその周囲には方形区画された曲輪群と、それらを囲い込むように土塁が巡り、その外側は急峻な切岸としている。一見して戦国時代後半の繩張りであることがわかる。特に中心部の土塁で囲繞された主郭は圧倒的な土木量で構築されている。

ところが主郭の発掘調査では建物跡が一切検出されず、遺物も極めて少なく、発掘調査の結果からだけでは築城年代や築城主体を絞り込むことはできなかった。圧倒的な土木と建物の無存在、そのギャップこそが勝賀城跡南西部の城郭の本質であることを物語っている。ここでは全国的な事例と比較しながら勝賀城跡の築城年代や築城主体を考えてみたい。

1. 勝賀城の繩張り

さて、分析を加える前に勝賀城跡の繩張りを今一度概観しておきたい（第5-1図）。勝賀城跡は標高365mの勝賀山に築かれている。山麓の居館と言われる佐料城跡が標高15m前後に位置しており、その比高は約350mとなり、極めて高所に築かれた山城といえる。

城跡は前述したように南西部と北東部、そして山腹部から構成されている。ただし、南西部



第5-1図 勝賀城跡繩張図

と北東部の構造は異なるが分離するものではなく、尾根上で続いている。

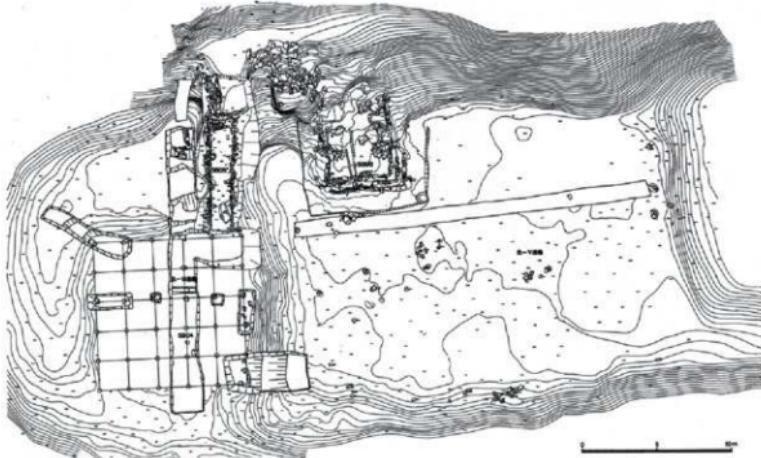
南西部の城郭構造が勝賀城跡を最も特徴付けるもので、分厚く、高い土塁に囲繞された主郭を中心に構成される。その土塁は高さ1~2mにおよぶ巨大なもので、土木施設としての山城のあり方を端的に示す遺構である。さらに土塁は巨大であるというだけではなく、西辺中央で1ヶ所、南辺中央で1ヶ所に折を設け、横矢が効くように構えられている。

虎口については東辺北寄りに1ヶ所、北辺中央に1ヶ所構えられている。東辺の虎口が大手と見られるが構造は平虎口となる。一方、北辺の虎口は土塁をずらせて喰い違い虎口としている。こうした土塁の構造や虎口構造からは戦国時代後半の普請であることを示している。

また、南辺土塁では折の付く部分に南側へ方形に土塁で囲った小曲輪（曲輪VII）が付属する。この小曲輪は南東隅部で開口している。一見すると穴藏とみられ、鎌刀城跡（滋賀県米原市）の大櫓、並山城跡（静岡県伊豆の国市）の塩蔵の構造に類似する（第5-2,3図）。

主郭の外周には北側と東側に方形に区画された曲輪が構えられている。曲輪I、曲輪IIIでは周囲に土塁を設けているが、その規模は極めて小さい。軍事的な防御空間としての曲輪と言うよりは屋敷地の可能性が高い。

そしてこれら主郭、方形区間に囲い込むように土塁が廻る。ほぼ曲輪群を囲繞しているが、東辺北側の、曲輪I、IIの前面には設けられていない。これは山麓からの登城口にあたるためであるとともに、防御正面が西側であったことを示しているものと考えられる。その西側は主郭と外郭との間を帶曲輪とし、土塁は凸状に張り出させて両側に横矢が掛かるようにしている。注目したいのはこの西側土塁の外側斜面である。垂直に近い急峻な崖面となっており、敵の登攀を阻止している。もちろん自然地形ではなく、城の正面として人工的に削り込んだ切岸である。



第5-2図 鎌刀城跡大櫓平面図（米原市教委編 2006）

南西部の虎口は城の南端にある。土星は南端で凸状に張り出しており、現在はその中央部から出入りができるようになっているが、これは凸状に突出した土星を破壊しており、近世以降の山道であることがわかる。詳細に観察すると凸状土星の北西入隅部が開口しており、ここが本来の虎口であったとみられる。凸状に突出した土星はこの虎口に対して横矢を効かすためのものであった。

一方、北東部の城郭遺構は尾根筋先端部に階段状に自然地形に沿った曲輪が数段配置されている。南西部と分離する構造ではなく、南西部の北端からも尾根筋に端部の曲輪群まで階段状に曲輪が配置されている。北東部の曲輪に一部土星状の高まりが認められるが、南西部の城郭に構えられた土星とは比較にならない小規模なもので、同時代のものとは考えられない。

なお、北東部の曲輪群だけでは山城として成り立たない。南西部が勝賀山の頂上であり、ここを城域に取り込みますに北東部の曲輪群だけでの城域は考えられない。おそらく北東部の曲輪群の中心部も勝賀山の山頂部に構えられていたものと考えられる。後にそれらを破壊して現存する南西部の城郭が構えられたものと考えられる。つまり南西部の城郭遺構と、北東部の城郭遺構には年代差が存在するようである。さらには後に築かれた南西部に城郭が構えられた段階では北東部部分は城郭としては利用されず、城域外となつたのであろう。そのため古い段階の曲輪群が残されたわけである。

南西部城郭の北端は土星で尾根筋を遮断するとともにその外側には堀切を設けている。この堀切は東斜面に向かって巨大な堀ととなり、尾根筋を完全に遮断している。南西部の城郭はここで遮断線を設け、その南側を城域としたのである。

このように同一の城域に時期差の存在するものとしては岩村城跡（岐阜県恵那市）にも認められる。岩村城跡では石垣による近世城郭の尾根筋に堀切が残り、さらに階段状の削平地も認められる。これらは戦国時代の岩村城の遺構であり、近世城郭として石垣を築く際には城域外として捨て去られたものである。同様に近世城郭に戦国期城郭の遺構も残る城として但馬竹田城跡（兵庫県朝来市）、村上城跡（新潟県村上市）などがある。

2. 縄張りから見た勝賀城跡

勝賀城跡では石積みも部分的に認められるが、基本は分厚い土星によって築かれた山城として理解できる。その最大の特徴は折の効く土星と喰い違い虎口である。こうした構造は戦国時代後半の陣城に見られる。例えば天正6(1578)年から8(1580)年に繰り広げられた三木城（兵庫県三木市）攻めの陣城や同9(1581)年の鳥取城（鳥取県鳥取市）攻めの陣城、同18(1590)年の蘿山城攻めの陣城などに共通する。



第5-3図 蘿山城跡塙蔵

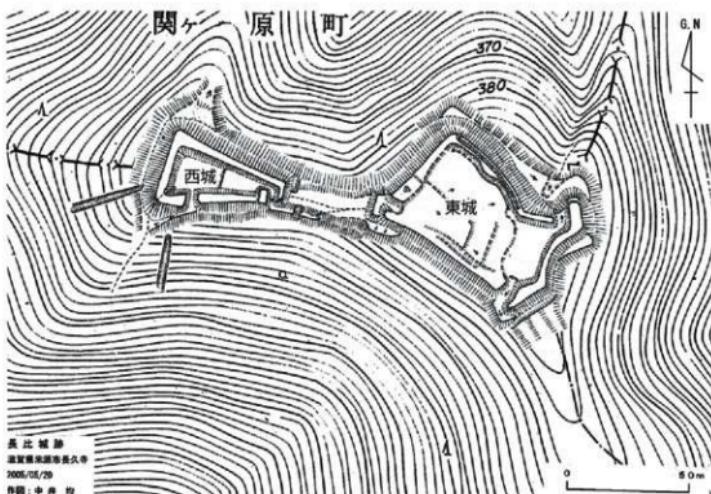
そうした陣城でも元亀元（1570）年に江濃（近江・美濃）国境に築かれた長比城（滋賀県米原市）および莉安城（同前）が年代的には古い事例となろう。元亀元年に北近江の戦国大名浅井長政は織田信長を突如見限る。敦賀で朝倉・浅井軍の挾撃を受けた信長であったが、近江の朽木谷を経て京都に脱出し、近江から伊勢を経て岐阜に帰城した。

信長の岐阜帰城に対し、浅井長政は信長の近江侵攻を阻止するために江濃国境に境目の城を築く。『信長公記』には「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ・かりやす両所に要害を構へ候」（元亀元年6月条）と記されている。たけくらべとは長比城跡のことで、かりやすとは莉安城跡のことである。

長比城跡の縄張りは東城と西城の、近世軍学にいう「別城一郭」構造で、いずれもが土塁によつて囲繞されている（第5-4図）。特に西城の土塁は分厚く高い。虎口は南辺の東端と、西側の2ヶ所に配されているが、東端の虎口は喰い違いとなっている。こうした長比城跡の西城の構造と土塁の規模は極めて勝賀城跡に類似する構造となっている。

一方の東城は土塁の規模は西城の土塁に比べると極めて小規模なものとなっているが、東辺土塁は分厚く造られている。これは美濃方面こそが敵正面であることを示している。さらに東城では虎口が北東隅、南東隅、南西隅の3ヶ所に設けられているがいずれも樹形構造となつている。

莉安城跡は、永正2（1505）年に江北の守護京極高清によって築かれた上平寺城を利用したもので、標高669mの伊吹山の一支脈上に構えられている。長比城跡と同じく分厚く高い土塁に囲繞された曲輪が階段状に配置されている。なかでも正面に配置された虎口は見事な外拠形を構えている。



第5-4図 長比城跡縄張図（中井均作図）

長比城・薺安城ともに国境を警備する境目の城であり、極めて軍事的緊張段階で臨時に築かれた陣城と呼ぶべき城である。この両城の縄張り構造、土塁や虎口は勝賀城跡に極めて類似する。

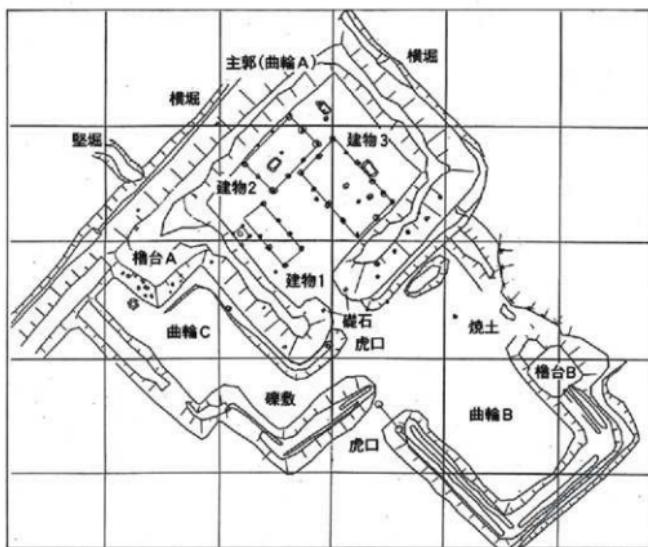
天正6(1578)年に播磨三木城主別所長治が織田信長から離反する。この長治が籠城する三木城に対して織田信長は息子信忠を総大將に攻城戦を開始する。信忠・羽柴秀吉軍は三木城を取り囲むように30以上の付城を構え、さらに三木城と魚住を結ぶ補給路を遮断するために多重に土塁を構えた。史上「三木の干殺し」と呼ばれる包囲戦である。

この信忠方の陣城のいくつかが残存しているが、なかでも二位谷奥付城跡では土塁に囲繞された方形の主郭とそれを囲い込む方形の副郭の複郭構造となっている（第5-5図）。虎口は平虎口であるが、その縄張りは勝賀城跡に類似する。三木城攻めの陣城も攻城戦にのみ築かれた臨時的な軍事施設であった。

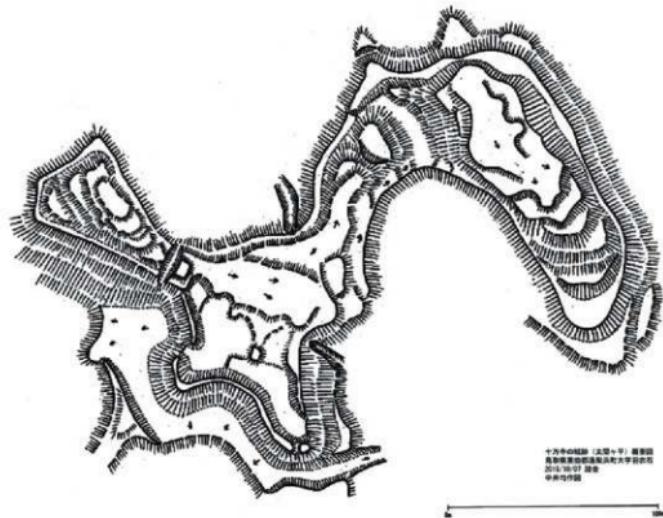
天正9(1581)年に伯耆では南条元統が毛利氏から離反し、立て籠る羽衣石城が吉川広家に攻められる。秀吉は南条氏救援に駆け付ける。『信長公記』には「十月廿六日、伯耆国に南条勘兵衛・小鴨左衛門尉兄弟兩人、御身方として居城候處、吉川罷出て、南条表取巻きの由注進候。眼前に攻殺せ候ては、都鄙の口難無念の由候て、羽柴筑前守後巻として罷立ち、東西の脣を合せ一戦に及ぶべき行にて」とある。この時秀吉が布陣したのが御冠山と伝えられてきた。しかし、御冠山には織田信長・豊臣秀吉の対峙戦や攻城戦で見られる陣城の遺構が認められず、また、羽衣石城を望むこともできず、ここに秀吉が陣を構えたことには疑問が残る。一方、羽衣石城跡の南に位置し、羽衣石城を眼下に望み、太閤ヶ平と呼ばれる山頂に城郭遺構が残されている（第5-6図）。曲輪は未整形で平坦地とはならないが、分厚い土塁に囲繞されており、極めて臨時に構築された陣城遺構である。この十万寺所在の城跡（鳥取県湯梨浜町）のあり方は織田・豊臣の攻城戦、対峙戦を考えるうえで極めて重要な遺構である。縄張りは自然地形に制約を受けて矩形とはならず、虎口も平虎口ではあるが、典型的な陣城という点では勝賀城跡の機能を考える上で注目できる城跡である。

天正8(1580)年に羽柴秀吉は鳥取城を攻め、城主山名豊国は降伏するが、毛利氏によって奪還される。毛利氏は同9(1581)年3月に吉川経家を城督として鳥取城に入れ置いた。ここに秀吉による2度目の鳥取城攻めが開始される。秀吉は鳥取城を望む東方の山に本陣を構え、鳥取城を取り囲むように陣城と土塁、横堀を構えて包囲戦を展開する。そのあり方は三木城攻めと同じである。

『信長公記』には「とつとりの東に、七・八町程隔て、並ぶ程の高山あり。羽柴筑前守彼山へ取上り、是より見下墨、則、此山を大將軍の居城に拵へ即時にとつとりを取りまかせ、頓て又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取切り、是又、鹿垣結ひまはしとり籠め、五・六町、七・八町宛に、諸陣近々と取詰めさせ、堀をほつては尺を付け、又、堀をほつては堀を付け、築地高々とつかせ、透間なく二重・三重の矢蔵を上させ、人敷持の面々等の居陣に、矢蔵を丈夫構へさせ、後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、堀・尺を付け、馬を乗りまはし候ても、射越の矢にあたらぬごとに、まはれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜るは手前々々に篝火たかせ、白中のごとくにして、廻番丈夫に申付け、海上には警固舟を置き、浦々焼払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵糧届けさせ、此表一着の間は、



第5-5図 二位谷奥付城跡（三木市教委編 2012）



第5-6図 十万寺所在の城跡縄張図（中井均作図）

「幾年も在陣すべき用意生便敷次第なり。」と陣城の構築について詳細に記されている。

このなかで「大將軍の居城」と記されているのが太閤ヶ平と呼ばれる陣城跡である（第5-7,8図）。従来秀吉の陣城と言われているが、大將軍とは織田信長のことを指すのではないと考えられ、秀吉が鳥取城攻めに信長の出陣を想定して築いた陣城とみられる。

その構造は分厚く高い土塁に囲繞され、外周には深い横堀が巡らされている。平面構造は東辺と南辺に虎口を設け、その両方に横矢が掛かるように南東隅部が突出している。また、北西隅と南西隅の土塁が方形に突出しており、櫓台として構えられたものであることがわかる。特に南西隅部の櫓台からは南辺の虎口に横矢を効かせている。これによって南辺の虎口には南東隅と南西隅からの相横矢が掛かる。虎口はいずれも平虎口ではあるが、このように土塁線上の櫓台から横矢が掛かることにより防御力は極めて高い。なお、主郭の外側には階段状に削平地が構えられており、将兵の駐屯地として構えられたものと考えられる。

太閤ヶ平の構造、特に土塁の規模や折などは勝賀城跡の南西部の主郭構造に類似しており、勝賀城が陣城として構えられたものであることを示唆している。

3. 発掘調査から見た勝賀城跡

3-1. 遺構について

勝賀城跡の発掘調査では興味深い成果が得られている。それはこれまで述べてきたように勝賀城跡の南西部の遺構は見事な土木施設であり、誰の目から見ても人工的な城郭遺構と認識し得るものである。さらに矩形の主郭平面と、折の設けられた土塁、喰い違い虎口は16世紀後半の城郭構造とみてよい。ところがこの土塁に囲繞された主郭からは遺構が一切検出されず、出土遺物もわずかであった。

こうした状況は主郭にとどまらず、主郭の南東隅部の土塁に囲まれた小規模の曲輪空間（曲輪Ⅶ）からも遺構は検出されず、遺物も一切出土しなかった。また、主郭の東面に構えられた方形区画の平坦地（曲輪Ⅰ）からも遺構は検出されず、遺物も数点しか出土していない。

ここでまず遺構の未検出を考えたい。遺構が検出されなかった理由のひとつとしては遺構面がすでに後世に掘削されている可能性が考えられるが、勝賀城跡では囲繞する土塁の状況からは考えられない。つまり勝賀城跡で遺構が検出されなかつたという事実は、土塁が構築された築城では建築に関して遺構の残らないような作事であったと考えられる。

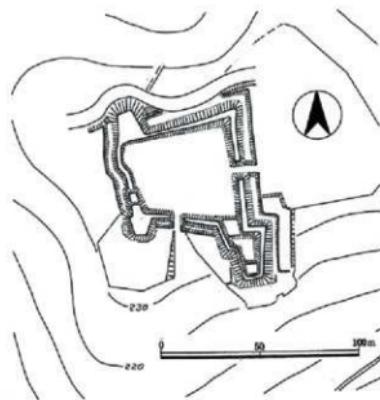
現存する土塁のなかで注目できるひとつとして見事な開口部が存在しており、これは主郭への出入口となる虎口であることはまちがいない。これほど明確な虎口は類例を見ない。ここが単純に開口していただけとは考えられず、発掘調査前には確實に門が構えられていたと考えられていた。

ところが発掘調査の結果、東辺の平虎口、北辺の喰い違い虎口からも柱穴は検出されなかつた。あるいは虎口両側の土塁は幅広となっており、土塁上に梁を架けた櫓門の可能性も考えられるので、土塁上での遺構検出を心掛けて調査されたが、ここでも遺構は検出されなかつた。

ではこの遺構の存在しない主郭内部の空間や、虎口をどう考えればよいのだろうか。元亀元～2(1570～71)年に織田信長は、浅井長政の最南端の境目の城である佐和山城(滋賀県彦根市)を攻める。この佐和山城攻めについて『信長公記』には「七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、



第5-7図 烏取太閤ヶ平本陣周辺の縄張図（鳥取市教委編 2010）



第5-8図 烏取太閤ヶ平本陣の縄張図（中井均作図）

取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ、」とあり、信長の攻城戦のあり方として、攻める城の周囲に付城を構え、それぞれの付城間には鹿垣と称する柵列を巡らせる包囲戦とした。この包囲戦に伴い付城の構造が発達し、定型化していく。

さて、この佐和山城攻め直後に信長は「佐和山おさへの諸執出（皆）之道具共、両人かたへ預け置くべく候、小谷表之普請之用にすべく候」と記した書状を木下藤吉郎と樋口三郎兵衛直房に宛てている。これは佐和山城攻めに築いた付城『信長公記』に記された百々屋敷の取出、北の山の取出、南の山の取出、彦根山の取出）に用いられた道具（用材）を城攻め後に藤吉郎と直房に預けて、これから開始する小谷城攻めに用いよと記したものである。道具とは付城の作事に用いた柱材や壁板材、屋根材や柵列の用材などであったと見られ、これらは事前に準備されており、城攻めや対峙戦に備えられていたものと考えられる。

こうしたストックされた取出構築の用材は組み合わせによって建てられるプレハブのような構造であった。『信長公記』には天正 10(1582) 年に武田勝頼を滅ぼした後に安土へ帰城するまでの道中で信長は度々御茶屋を立てている。例えば「四月十二日、富士山御覽じ候処、（略）爰に御茶屋立置き一献進上申さるゝ」、「四月十三日、富士川乗りこさせられ、神原（蒲原：静岡市）に御茶屋構へ、一献進上候なり」、「四月十四日、名にしおふ宇津の山辺の坂口に御屋形を立て、一献進上候なり」、「四月十五日、藤枝の宿より瀬戸の川端に御茶屋立置き、一献進上申さるゝ」。（略）のぼればば夜の中山なり。御茶屋結構に構へて、一献進上候なり」、「四月十五、十六日歟、鎌田が原（磐田市）・みかの坂（三ヶ野坂：磐田市）に御屋形立置き、一献進上なり」、「四月十七日、しほみ坂（汐見坂：湖西市）に御茶屋・御厩立置き、夫々の御普請候て、一献進上候なり」、「四月十八日、五位（豊川市）にて御茶屋美々敷立置かれ、（略）爰に山中（岡崎市）の宝蔵寺、御茶屋、面に結構に構へて、寺僧・喝食・老若罷出で、御礼申さるる」、「四月廿一日、垂井に御屋形立置き、ごぼう殿一献御進上候なり。今洲（今須：閑ヶ原町）に御茶屋立て、不破彦三一献進上候なり。柏原に御茶屋拵へ、菅屋九右衛門一献進上なり。佐和山に御茶屋立て、惟住五郎左衛門一献進上。山崎に御茶屋立置き、山崎源太左衛門一献進上なり。」などとある。この御茶屋も立置とあることより、凱旋の途中で建てられるものであり、信長の行軍に伴って持ち運ばれたものと見られる。

現存する遺構として沼名前神社（広島県福山市）の能舞台は組立式能舞台で、伏見城内にあつたものを元和 6(1620) 年に將軍秀忠より福山城主水野勝成に下賜され、万治年間（1658～61）に沼名前神社へ寄贈されたものである。舞台の各所に組立式の構造を留め、組み立てに便利なように各部材には番号や符号が記されている。屋根はパネル式の框組みとし、仕口は枘差しをしている。一般的に豊臣秀吉の伏見城と伝えられているが、秀吉の伏見城は慶長 5(1600) 年の閑ヶ原合戦で焼失しており、この能舞台も徳川家康によって再建された伏見城に用いられた能舞台と考えられる。移動式の能舞台も戦場や付城などに建てられ、戦争の合間に能が演じられたものと見られる。

このように茶室、能舞台とともに陣城も移動式建物の用材が準備されていたものと見られる。門なども柱穴を掘って据えるのではなく、枘穴の開けられた根太を配して、それに柱や梁をジョ

イントして組み立てたものと見られる。主郭内部の空間にもおそらくこのような組み合わせ型の小屋が建てられ、陣所としたものと考えられる。主郭の前面に構えられた曲輪Ⅷも同様の構造の建物が建てられ、発掘調査の結果、遺構が検出されなかったとみられる。

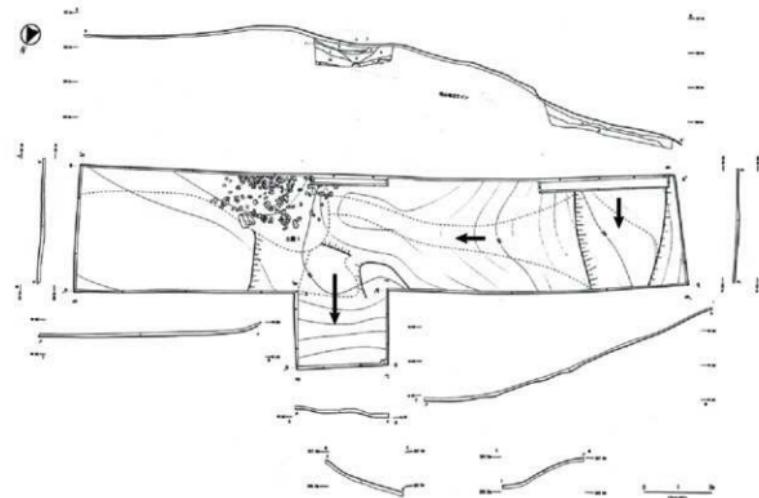
3-2. 遺物について

勝賀城跡では1979年に実施された1次調査において、主郭で15世紀後半から16世紀の遺物が出土しており、今回の発掘調査でも一定の遺物が出土している。その特徴として16世紀後半の土師質土器がまとめて出土している点と、輸入陶磁や備前焼といった陶磁器類は15世紀後半から16世紀後半までのものが見られることがある。なお、肥前陶磁が出土していないことより勝賀城は17世紀までには廃城となっている。

こうした遺物の状況より、勝賀城は少なくとも2時期にわたって機能していたものと見られる。15世紀後半から16世紀後半のものが香西氏の居城段階のもので、16世紀後半の土師質土器は現存する主郭の土塁が構築された段階のものとみられる。

縄張りで明らかにしたように主郭の土塁は16世紀後半の織豊系城郭であり、香西氏時代の構造とはとても考えられない。北東部に残る段階状に曲輪を削平した単純な縄張り構造が香西氏時代の勝賀城であり、その中心部は現存する主郭部分であった。香西氏時代の主郭部分も北東部と同じく段階状に曲輪を配置したものであったのだろう。それが16世紀後半に南西部の山頂付近のみを城域とした土塁によって囲繞される現存する構造の城に改修されたものと見られる。

こうした遺構の検出状況や遺物の出土状況について各地の事例と比較しておきたい。



第5-9図 長比城跡の虎口調査平・断面図（米原市教委編 2022）

長比城跡・須川砦跡

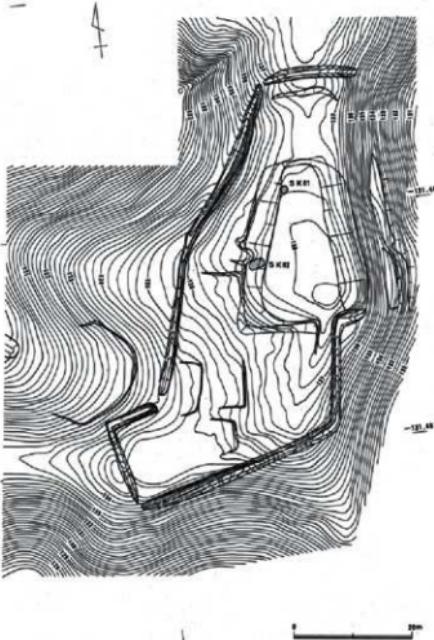
長比城跡では令和3年度に米原市教育委員会が発掘調査を実施している（米原市教委編 2022）。ここでは東城の南東隅部の喰違虎口部分と主郭内部、西城の南西隅部の虎口部分にトレーナーを設定して調査が実施されたが遺構は検出されなかった（第5-9図）。東城の南東隅部の虎口では削り出した土壁によって内部が左折れの樹形であることは明らかになっており、普請に関しては地山を整形したものであることが判明した。さらに土壁の開口は破壊等によるものではなく、明確に入り口として構えられた虎口であることも明らかであり、門の配置はこの開口部以外は想定できない。しかし、虎口部分では門柱を据え付けた柱穴は検出されなかつた。遺物も皆無であった。

長比城跡の北方尾根続きに位置する須川砦跡（滋賀県）も発掘調査が実施されたが、分厚く高い土壁に囲繞された主郭内部から遺構は検出されていない。（米原市教委編 2022）。おそらく須川砦も『信長公記』に記された「たけくらべの要害」の城郭を構成する構造であろうと見られ、この江濃国境の境目に築かれた陣城では遺構の残らない作事、それは根太などの基礎材を配して、その上に組み立てる建物であったと見られる。

さらに、ここでも遺物が皆無であった。これは守備期間中に割れるような陶磁器がなかったか、もしくは陶磁器以外の道具（竹、葉など）を用いていた結果と考えられる。

三木城攻めの付城群

三木城を攻めるために織田信忠・羽柴秀吉軍は別所長治の立て籠る三木城の周囲に数多くの陣城を構築している。そのうちのいくつかで発掘調査が実施されている。二位谷奥付城跡は、複郭構造で副郭に礎石建物も置かれ、一定量の遺物も出土している（三木市教委編 2012、第5-5図）。一方で加佐山城跡（兵庫県三木市）では矩形の土塁囲いの主郭に外郭が巡り、虎口には横矢が掛かる構造で、16世紀後半の陣城の特徴を示すが、発掘調査の結果遺構は検出されず、遺物としては鉄釘が1点のみであった（兵庫県教委埋文調査事務所編 1995、第5-10図）。同じく三木城攻めに築かれたと見られるシクノ谷峯付城跡、高木大塚城跡でも建物跡は検出されず、



第5-10図 加佐山城跡平面図
(兵庫県教委埋文調査事務所編 1995)

遺物は数点出土したに過ぎない。

十万寺所在の城跡（第5-6図）

天正9(1581)年に羽衣石城に立て籠った南条元続の救援に向かった羽柴秀吉が構えたと考えられる十万寺所在の城跡でも普請としての土壘は見事に残されており、その開口部が虎口であることも明瞭であった。しかし、発掘調査の結果、土壘が削り残された土壘と、盛土によって構築された人工的な土壘であることは判明したが、曲輪内部のトレーニチでは建物遺構は一切検出されなかった。また、遺物の出土も皆無であった（湯梨浜町教委編 2019）。

4. 陣城としての勝賀城跡

さて、16世紀後半の、特に織田・豊臣による攻城戦で築かれた付城、あるいは陣城と呼ばれる城郭施設についていくつかの事例を見てきた。陣城についてはさらに数多くの事例があるが、ここでは発掘調査された事例についてのみ検討を加えてみた。

その結果、網張り構造は分厚く高い土壘に囲繞され、平面構造は矩形で、土壘線には折がつけられ虎口に対して横矢が効く構造となる。虎口は土壘を開口させ、平入りの虎口では土壘線上から横矢が掛けられる場合が多い。また、喰い違い虎口となるものも多い。

こうした地表面に明瞭に残された遺構に対して、発掘調査の結果は門や駐屯地となるような建物遺構が一切検出されていない。これは礎石建物の礎石が移動してしまった可能性もなくはないが、これだけ共通して遺構が検出されないとということは、やはり陣城には遺構として残るような建物が建てられていないかったということであろう。簡単なプレハブ構造の門や小屋などが掛けられていたのだろう。

なお、数少ない陣城の具体的な作事を示す資料として「賤ヶ岳合戦図屏風」（岐阜市歴史博物館所蔵）がある。賤ヶ岳合戦図屏風としては大阪城天守閣所蔵本が有名であるが、そこでは賤ヶ岳合戦に構えられた賤ヶ岳砦や大岩山砦は石垣で築かれ、その上に漆喰壁で屋根瓦の載る近世城郭が描かれている。江戸時代の絵師は賤ヶ岳合戦に城塞が築かれたことは知っており、それを屏風に描いたわけであるが、残念ながら陣城の姿は彼らが見た近世城郭であった。

ところが岐阜市歴史博物館本の屏風では切岸上に土壁に板屋根の櫓や櫓が描かれており、極めて戦国時代の陣城の姿に近い描写となっている。特に土壁には2段の狭間が描かれ、上段の狭間からは矢が、下段の狭間からは鉄砲が出ていている。こうした描き方は弓矢の立射と鉄砲の座射を極めてリアルに描いている（土山2008）。賤ヶ岳合戦の城塞群は勝家の本陣となった玄蕃尾城跡（滋賀県長浜市・福井県敦賀市：国史跡）をはじめ、秀吉軍の陣城である田上山城跡・左禪山城跡・堂木山城跡・賤ヶ岳砦跡（滋賀県長浜市）などでは矩形の土壘を構え、その外周に横堀を巡らせた陣城遺構を残している。ここでも虎口には土壘線上から横矢が掛かるようになっている。こうした現存する遺構の上に屏風に描かれた櫓や櫓が構えられていたのである。その地表面に残る城郭遺構は勝賀城跡の現存遺構と類似しており、屏風に描かれた陣城の姿は勝賀城の作事を考えるうえで重要な資料である。

遺物に関しては、そもそも軍事施設である山城からの出土遺物は少ないものの、恒常的な山城では生活に必要な雑器や威信財などが出土しており、皆無ということはない。陣城での遺物の少なさは、在城時間が極めて短く、破損する陶磁器が少なかつたと考えられることと、臨時

的に築かれた陣城では遺物として残らない道具で飲食していたことも考える必要があるだろう。さらに遺物として残らない道具とは陣城外からの輜重部隊による配給によって飲食料が提供されていた可能性もある。

さて、こうした全国的な事例から勝賀城跡の性格を考えるならば、現存する南西部の土星によって構築された城郭遺構は、恒常的な山城として築かれたものではなく、軍事的緊張関係のなかで築かれた付城、あるいは陣城と呼ばれる城郭であったことがわかる。

さらにその築城主体者は在地権力ではなく、織豊政権によるものと見てよい。では具体的にはどのような状況で築かれたのであろうか。現在考えられるもっとも可能性が高いのは天正13(1585)年の豊臣秀吉による四国攻めの際に秀吉方が構えた陣城ということである。6月に秀吉は秀長を総大将に淡路から阿波へ、備前から讃岐へ、安芸から伊予への攻撃を開始する。讃岐へは宇喜多秀家・蜂須賀正勝・黒田孝高・仙石秀久らが屋島へ上陸し、喜岡城を攻め落とす。その後、四国平定後の国分により、讃岐には仙石秀久が聖通寺城に、十河存保が十河城に入れ置かれた。

しかし、天正14(1586)年の九州攻めの戸次川の戦いに敗北し逃亡した秀久は讃岐を没収され、替わって天正15(1587)年に生駒親正に与えられ、親正是引田城、さらに聖通寺城に移るが、天正16(1588)年に高松城を築いて讃岐の拠点城郭とした。

勝賀城跡の構造が香西氏時代のものではなく、豊臣段階のものとして再評価されると、生駒氏の高松城に対する詰城としての可能性も考えられるようになる。しかし、恒常的ではない構造であることは明らかで、平城に対する詰城とは考えられない。さらに天正16年段階で恒常的な山城を築くのであるならば石垣の築城が普請されるはずである。勝賀城跡では石積みも認められるが、裏込めの栗石が充填されないもので、豊臣期の恒久築城の石垣とは考えられない。こうした状況より勝賀城は高松城の詰城とは考えられない。

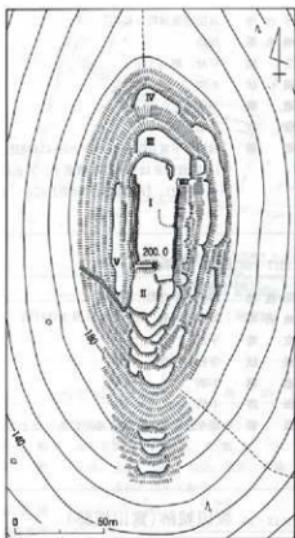
つまり勝賀城の改修年代は天正13年の秀吉による四国攻めに伴う陣城、さらには廃城とならず、その後の仙石秀久による讃岐支配のために支城として維持管理されていた可能性が高い。

ところで勝賀城跡周辺には勝賀城同様に在地勢力による山城とは考えられない縄張り構造の城跡が確認されている（第5-11図）。

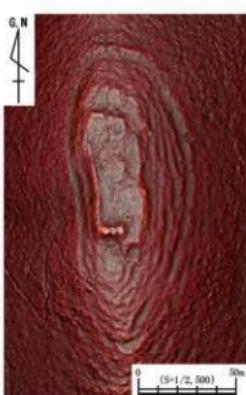
室山城跡（高松市室新町）は矩形に構えられた主郭に土星が巡り、随所に折を構えている。そして虎口は喰い違いとしている。その平面構造は勝賀城跡に類似する。ただし、土星は極めて低く防御壁とはならない。平面的には戦国期後半の織豊系の陣城として評価できるが、土木という普請に関してはほとんど手が加えられていない。

同様に黄峰城跡（高松市亀水町）もその平面構造は矩形の曲輪を構えて、随所に折を配した土星を巡らせている。そして虎口は喰い違いとしている。なお、黄峰城跡では縄張りのさらに外周に城を取り囲むように石垣が巡っている。扁平の石を垂直に近い傾斜で積み上げる工法は勝賀城跡の石積みとはまったく異なる構造である。城の縄張りが戦国期後半の織豊系の陣城に類似するのに対してこの石積みは織豊系の石垣とはとても考えられない（第5-12図）。

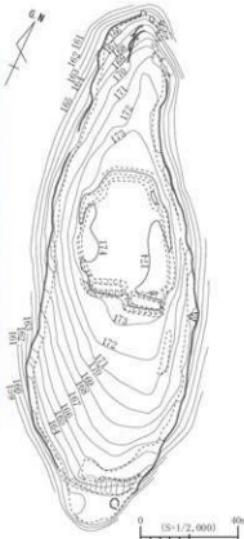
織豊系の石垣とは人頭大以上の石材を用い、石材と石材間の隙間に間詰石を詰めて築石面を平滑に見せようとする。さらに石垣の背面には栗石を充填させる。讃岐では引田城跡（香川県東かがわ市）の石垣がその典型である（第5-13図）。ただし、織豊系の陣城は臨時的な軍事



室山城跡縄張図（香川県教委編 2003）



室山城跡赤色立体地図



黄峰城跡測量図

第 5-11 図 室山城跡・黄峰城跡平面図

施設であり、土造りを基本としており、石垣を用いること自体はほとんどない。天正 18(1590) 年の小田原攻めに築かれた石垣山城が唯一の事例であろう。

黄峰城跡の石垣はこうした織豊系の石垣とはまったく異なるものであり、さらには縄張りとも遊離した構造で、その評価は非常に難解である。ここでは城郭として確実に評価できる土造りの縄張りの城郭についてのみの評価に留めておきたい。

室山城跡、黄峰城跡とともに平面的な縄張りは勝賀城跡南西部に類似する構造であり、三者には強い関係性を指摘することができる。土木的な差異は入れ置かれた守将の違いを物語るものと見られる。

天正 9(1581) 年の鳥取城攻めの場合、太閤ヶ平の城郭構造と他の陣城の城郭構造ではやはり土木量が全く違う。天正 11(1583) 年の賤ヶ岳合戦の陣城においても平面的な縄張りは類似しているが、勝家の本陣となつた玄蕃尾城跡の土木量は圧倒的である。



第 5-12 図 黄峰城跡石垣



第 5-13 図 引田城跡石垣

こうした織豊権力の陣城のあり方から、讃岐に上陸した仙石秀久が本陣として勝賀城を築き、さらに秀久の軍勢が何カ所かに駐屯地として陣城を築いたものが室山城と黄峰城であったと考えられる。

おわりに

勝賀城跡の地表面に残された遺構は立派なもので、誰の目にも城であることがわかる見事な土壘や虎口である。さらに矩形を呈し、折の掛かる土壘や喰い違い虎口などの縄張り構造は織豊系城郭を示していた。このため発掘調査では城門の遺構や、駐屯地における小屋掛けなどが明らかにされるものとして期待されていた。

ところが発掘調査を実施してみると遺構は皆無であり、遺物の出土量も少なかった。ただ、こうした遺構を伴わず、遺物もほとんど出土しないという結果こそが勝賀城跡の性格や築城年代を示しているものとして重要である。

従来は香西氏の居城として知られていた勝賀城跡であるが、全国的な事例との分析によって南西部の城郭遺構は天正13(1585)年の秀吉による四国攻めに際して築かれた陣城であることが明らかとなつた。

遺構に残らない城門や駐屯地としての陣小屋や兵士の小屋などは事前に準備された組み合わせ式のものであったのだろう。そして食器などの道具類も短時間の在陣で破損することなく退城時に持つて降りたのだろう。とにかく陣城は短時間に構えることが第一であり、それは土壘の構築や喰い違い虎口などの土木としての普請であった。

一方で勝賀城跡の北東部の遺構は香西氏段階の城郭遺構であることも明らかにできた。現存する勝賀城跡は香西氏時代と豊臣時代の2時期の遺構が残されているという極めて貴重な城跡と言えよう。

(中井)

第2節 讀岐における中世城郭の特徴と勝賀城跡

はじめに

前節の中井均氏の論考では、全国的な観点から勝賀城跡をみた場合、縄張りの類似や発掘調査で明らかになった遺構の検出状況や遺物の出土状況等から、勝賀城跡南西部・室山城跡・黄峰城跡が織豊系城郭の陣城（以下、織豊系陣城とする）であることを明らかにした。

「織豊系城郭」を端的に述べるならば、「織田氏、豊臣氏に関わる中で共通・類似する特徴を持つ」城である（高田 2017）。では、どのような特徴がみられれば織豊系城郭といえるのか、という織豊系城郭の定義については共通した見解がなく、研究者間でも議論が続いている。その理由として、高田徹氏が述べるように、「『織豊系城郭』とは、時期、築城主体、恒久・臨時性、必要性によって構造・遺構上の幅をもつ概念である」（高田 2017）ことが指摘される。そのような状況のなかで、多くの研究者が同意する定義としては、①主郭を中心として相互連携を図る曲輪配置、②技巧的な虎口、③自然地形に左右されない曲輪の形状（方形を志向する曲輪）が挙げられる（城郭談話会編 2017）。この定義に照らし合わせると、勝賀城跡南西部・室山城跡・黄峰城跡は織豊系城郭といえる。そして、縄張りや発掘調査成果から臨時の陣城である、と指摘する中井氏の論には整合性がある。ただし、上記の条件を満たした場合は必ず織豊系城郭である、といえるものではなく、上記の条件を満たす発達した縄張りをもつ非織豊大名の城郭である可能性もある。そのため、その地域の中世城郭の特徴を明らかにし、それらから飛躍的に発展したものであった場合は織豊系城郭である可能性が高いといえる。

一方、これまで香西氏の城と評価してきた研究者のなかには、香西氏が織豊系の影響を受けつつ在来の技術でつくった、とする主張がある（村田 2003 など）。すなわち、在地の中世城郭が発展した結果、勝賀城跡の縄張りが誕生したとする見解である。勝賀城跡の歴史的価値を確証するためには、中井氏の論に相反する上記の見解について検証する必要がある。そのため、本稿では讀岐における中世城郭の特徴を明らかにし、それらが勝賀城跡南西部へと連続的に発展したのか、または飛躍的に発展したのかについて検討する。

1. 讀岐における中世城館の研究

『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』（以下、県報告とする）のなかで、村田修三氏と池田誠氏が讀岐における中世城館の様相をまとめている。村田氏は、讀岐の城館の特徴として、①高山の大規模城郭、②中低丘陵の中小城館、③平地の居館があることを指摘している（村田 2003）。池田氏は、地理的条件に加え時代的な背景や城の機能により、①南北朝占地城郭、②山城・丘城系占地城郭、③平地城郭・城館・屋敷、④陣・狼煙・軍事遺構、⑤織豊系城郭の5群に分類した。比高差が 100 m 以上を越えるものを南北朝占地城郭、100 m 未満のものを山城・丘城系占地城郭、平地にあるものを平地城郭・城館・屋敷とした。また、石垣があるものは織豊系城郭としている。そして、個別に城郭を検討し、縄張りと遺構の有無により、在地系・長宗我部系・三好系・前期織豊系・後期織豊系との関連を指摘している。氏が○○系と認定する基準は別稿（池田 1995 など）に記載されているが、その基準が適切かについては検討を要する。

戦国期の史料には中世城館名がほとんどみられず、県報告で記されている城主は、『南海治

乱記』・『南海通記』や近世の地誌類から引用しているため、実態を反映しているとは言い難い。そのため、考古学的検討によって讃岐における中世城郭の特徴を明らかにし、それらと勝賀城跡を比較する。

2. 資料と方法

県報告に縄張図が掲載されている、島嶼部を除く全ての中世城郭を対象とした。ただし、佐料城跡（高松市）や中村城跡（善通寺市）などで認められる、土塁や堀によって方形に区画された平地城館跡や、ほぼ絶石垣の城郭で明らかに織豊系城郭である高松城跡（高松市）・丸亀城跡（丸亀市）・引田城跡（東かがわ市）・江甫草山城跡（観音寺市）は除いている。

分析方法は以下の通りである。まず、対象とする全ての中世城郭を踏査し、縄張図に描かれた遺構のうち、確実に中世城郭に伴うと考えられる遺構のみを取り上げる。村田氏も指摘するように、堅堀や堀切は自然の營為によると考えられるものを人為的な遺構と認識していることが多い（村田 2003）。そのため、遺構の状態に加えて配置や他の遺構との関係を考慮して取り上げる。

次に、精査した縄張りを基に属性を抽出した。対象とする属性は、立地・標高・主郭と山麓の比高差・主郭の広さ・遺構の有無である。遺構は、堀切・土塁・堅堀・堅土塁・石積み・石垣を対象とした。遺構の定義は、以下のように定める。堀切は尾根筋をV字状に切断した堀、土塁は盛土による堤防状の防壁、堅堀は斜面地に堅方向（等高線に対して垂直方向）に構えた堀、横堀は堀切を除く横方向（等高線に対して平行方向）に構えた堀、堅土塁は斜面地に堅方向（等高線に対して垂直方向）に構えた土塁。

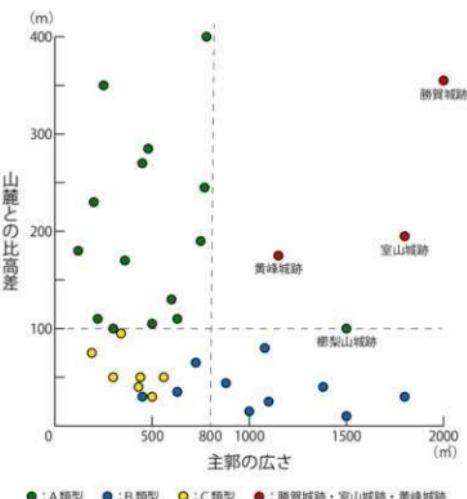
土塁を指す。石積みと石垣は石を積んだ防壁で、高さ1.5m以下を石積み、1.5m以上を石垣（乗岡 2014）とする。また、主郭の広さは測量図や縄張図から算出した。

そして、対象とした中世城郭を、先学と同様に、立地によって類型化した。立地で分類する理由としては、立地によって城の性格は異なると考えられるからである。

最後に、各類型について諸属性をみながら特徴を述べ、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡等と比較する。

3. 讃岐における中世城郭の特徴

まず、立地によって以下のようにA～C類型に分類する。ただし、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡は



第5-14図 比高差×主郭の広さ

分類から除く。

A類型：比高差 100 m 以上の、尾根頂部に所在する山城。

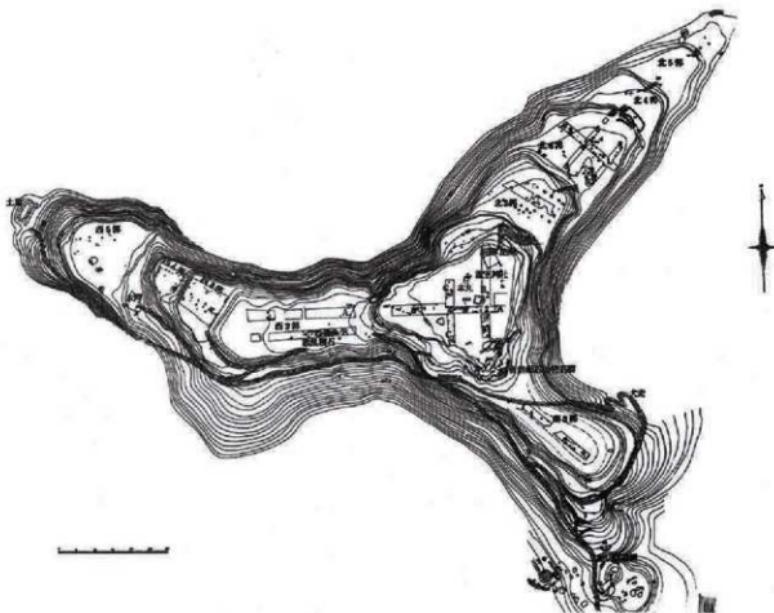
B類型：比高差 100 m 未満の、低平な丘陵の頂部に所在する山城。

C類型：尾根末端に位置する山城。比高差は 100 m 以下である。

次に、山麓との比高差と主郭の広さの関係をみてみよう。縦軸に山麓との比高差、横軸に主郭の広さとする散布図（第 5-14 図）をみると、L 字状に分布している。すなわち、比高差が高いものは主郭が狭く、比高差が低いものは主郭が広い、という傾向が見て取れる。

では、各類型についてみてみよう。A類型をみると、比高差が最も高いのは約 400 m の虎丸城跡（東かがわ市）で、主郭の広さは櫛梨山城跡を除くと全て 800 m² 以内に収まる。B類型をみると、比高差は 10 ~ 80 m で、主郭の広さは 450 ~ 1,800 m² とバリエーションに富んでいる。C類型をみると、比高差が最も高いのは約 95 m の金丸城跡（まんのう町）で、主郭の広さは全て 600 m² 以内に収まる。

比高差と主郭の広さの組み合わせでみると、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡は香川県内の中世城郭とは大きく異なる。すなわち、他の中世城郭と比べて比高差が高い（一番低い黄峰城跡でも 175 m）にも関わらず主郭が全て 1,000 m² 以上で広い、という特徴があることが明らかになつた。また、櫛梨山城跡も比高差が 100 m だが主郭は 1,500 m² と広い。第 3 章第 4 節でみた



第 5-15 図 雨滻城跡測量図（雨滻城跡発掘調査団編 1983）

ように、櫛梨山城跡は元吉合戦の際に毛利勢が城の普請を行ったことが一次史料にみえることから、毛利勢の陣城であることがわかる。後に詳述するが、遺構も堅堀や二重堀切など香川県内ではほとんどみられないものが存在する。以上のことから、香川県内における中世城郭の特徴を明らかにする際は、櫛梨山城跡は除外して考える必要がある。

では、各類型について縄張りや遺構から特徴をみてみよう（第5-1, 2表）。

A類型

頂部を主郭として尾根筋に曲輪を配置する、連郭式の城郭である。主郭は800 m²以内である。基本的には、自然地形に合わせて急峻な切岸、堀切、土塁が構築される。土塁や石積みは緩やかな谷筋に対して部分的に築かれることが多く、勝賀城跡や黄峰城跡のように土塁で主郭を囲むような例はみられず、土塁による虎口の形成もみられない。堅堀や堅土塁、横堀は基本的に認められない。讃岐外の勢力によって部分的に改修された可能性はあるが、A類型の典型例として雨滝城跡（さぬき市）を挙げる（第5-15図）。

A類型の城跡をみてみると、堅堀や堅土塁、石垣が築かれる例が数ヵ所みられる（第5-1表）。史料や出土遺物から、これらの遺構は讃岐外の勢力による改修の可能性が考えられる。

石垣が用いられる雨滝城跡（さぬき市）・天霧城跡（普通寺市ほか）からは瓦や礎石が検出されており、豊臣大名による改修の可能性が考えられる（遺物については本章4節の乗岡氏の論考を参照）。

堅堀が確認できる上佐山城跡・西長尾城跡・櫛梨山城跡も讃岐外の勢力の影響が窺える。先ほど述べたように、櫛梨山城跡は元吉合戦における毛利勢の陣城であり、堅堀のほか主郭を廻る帶曲輪や二重堀切などが認められる。西長尾城跡（丸亀市・まんのう町）は長宗我部勢における讃岐侵攻の拠点として普請されており、堅堀のほか堅土塁や石積み、二重堀切が認められる。上佐山城跡（高松市）には北端曲輪斜面に8本に及ぶ連続堅堀群が認められる。香川県下では唯一の連続堅堀群である。『元親記』や『改撰仙石家譜』などの軍記物には、秀吉軍を迎える長宗我部勢が「池田の城」（「植田城」とも）に陣を構えている様子がみられる。この「池田の城」（「植田城」）が上佐山城跡の可能性がある。

B類型

独立丘陵や尾根先端の丘陵の頂部を主郭とする城郭である。堀切や土塁、横堀が構築される一方で、主郭が広く比高差が50 m以下と低いものが多いため、恒常に居住していたと考えられる。A類型と比べ、主郭において土塁を多用する傾向がみられる。羽床城跡（綾川町）・天王城跡（三豊市）では広さ1,300～2,000 m²の主郭を土塁で囲む。B類型の典型例として天王城跡（別



第5-16図 天王城跡縄張図（三豊市教委編 2014）

名：橋城跡）は発掘調査が行われており、掘立柱建物が検出され、多量の土師質土器や陶磁器類、硯が出土した（三豊市教委編2014）。発掘調査成果からも恒常に居住していた可能性が高いことが明らかになった。

C類型

尾根末端を幅広の大きな堀切で断ち切り、堀切から先端部を城郭とする。堀切とセットで下手側に高い土星を築くものが多い。そして、土星の背後に曲輪を配置する。比高差も100m以下で、主郭は全て600m²以下と狭いものが多いことから、発掘調査事例がないため不明確ではあるが、日常的に居住するような城ではなく、臨時に使用する城跡であったと考えられる。C類型の典型例として内山城跡（普通寺市）を挙げる（第5-17図）。

以上より、讃岐の中世城郭を3類型に区分し、その特徴について述べた。では、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡と区分した3類型を比較してみよう。

まず比高差と主郭の広さだが、先にも述べたように、讃岐の中世城郭と比べて比高差が高いにも関わらず主郭が広い、という特徴がある。勝賀城跡は比高差約355mで主郭の広さ約2,000m²、室山城跡は比高差約195mで主郭の広さ約1,800m²、黄峰城跡は比高差約175mで主郭の広さ約1,150m²である。比高差が最も低く、主郭が最も狭い黄峰城跡でも、比高差は100mを優に超え、主郭の広さは1,000m²を越える。

次に遺構だが、勝賀城跡・黄峰城跡は主郭が土星で囲まれており喰い違い虎口が土星によって形成される。室山城跡では石垣が築かれ、土星は勝賀城跡と類似するつくりである。3城の土星には、全て直角に曲がる折が施されている。加えて、勝賀城跡では堅土星がみられる。このような遺構の一部は讃岐外の勢力によって改修されたことが明らかな城郭ではみられるが、讃岐の典型的な中世城郭ではみられない。

以上より、勝賀城跡南西部・室山城跡・黄峰城跡は、各属性において讃岐の地域的特徴をもつ中世城郭とは明らかに異なる様相をみせることが判明した。発展段階の途上にあるような城郭もみられないことから、讃岐における中世城郭が連続的に発展した結果として誕生した可能性は非常に低い、といえる。

勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡は全て香西氏が領有していた地域内にあるため、讃岐の国人のなかで香西氏のみ織豊系の影響を受け、飛躍的に発展したこれらの城郭を築いた、とする見解もある。『南海通記』にみられる香西氏と織田信長との繋がりや、畿内の香西氏との繋がりから想定された仮説である。第3章で明らかになったように、天正年間には畿内の香西氏は



第5-17図 内山城跡縄張図
(香川県教委編 2003)

讃岐の香西氏と血縁の繋がりはなかったと考えられること、香川氏・香西氏が織田信長に謁見したという『南海通記』の記事は当時の香川・香西両氏の関係性から信憑性が低く、この論が成立するのは難しい。

また、城郭の分布からみても成立し難い。香西氏領内において最も危機が迫ったのは、長宗我部氏による侵攻である。長宗我部氏は西長尾城跡を讃岐侵攻の拠点としていたため、侵攻経路としては五色台の南の羽床盆地を東に進むことになる（第5-18図）。香西氏が織豊系の影響を受けた築城技術を持っていたならば、侵攻経路の途上にある堂山城跡（高松市）は改修されるべきであろう。しかしながら、堂山城跡は典型的な讃岐の中世城郭である（第5-19図）。

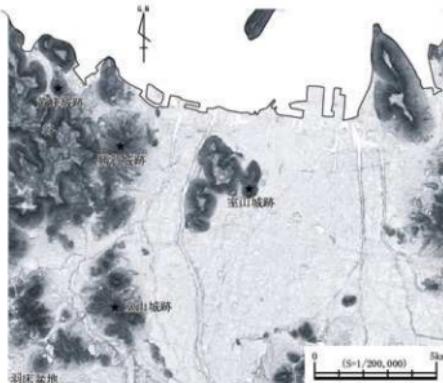
以上の分析と中井氏の論考から、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡は、香西氏によって改修されたのではなく、豊臣大名によって改修された織豊系陣城である、ということが明らかになった。

4. 織豊系城郭の視覚領域

織豊系城郭がどの範囲まで見渡せるのか、ということを分析することで、勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡がどのような目的で築城されたかを明らかにすることができる。第5-20図は3城の視覚領域を示したもので、カシミール3Dで作成した。

勝賀城跡からは、高松平野と高松湾を見渡せる。晴れているときは高松平野東端まで見渡すことができ、高松平野を牽制する場所として好立地である。ただし、石清尾山が壁となって高松平野中央部はみられない。

室山城跡からは高松平野中央部を見渡すことができ、勝賀城跡の視覚領域を補完するよう



第5-18図 関連する城跡の位置
(地理院地図(傾斜量図)を加工して作成)

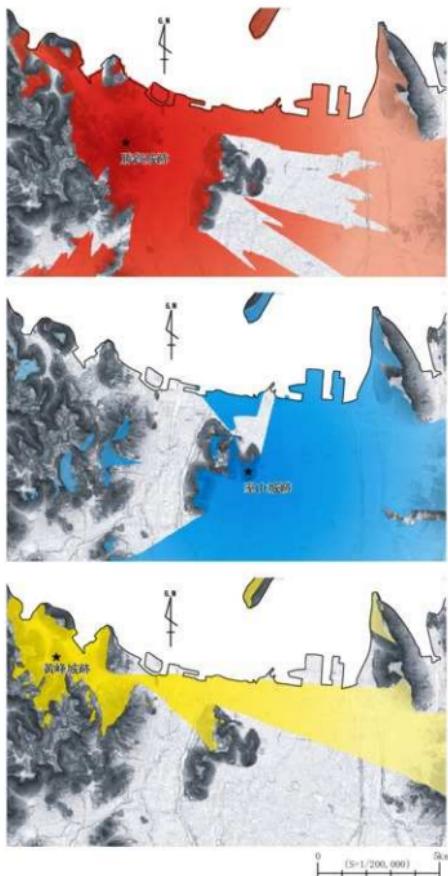


第5-19図 堂山城跡縄張図（香川県教委編 2003）

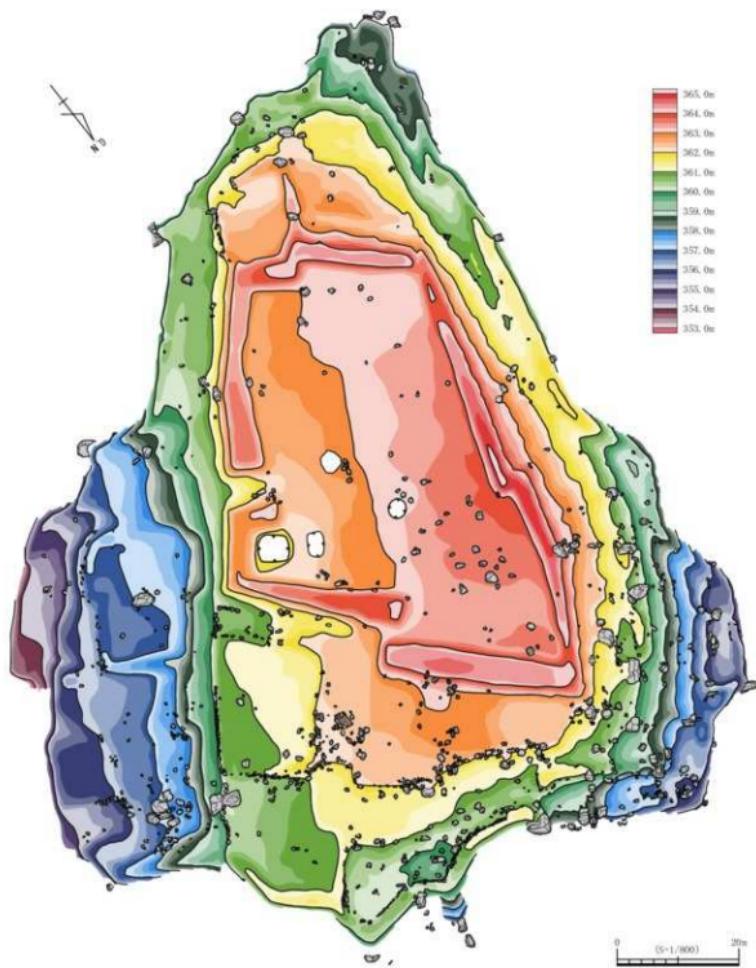
な役割を果たしている。室山城跡からは、峰山・淨願寺山が壁となって西を臨むことはできないが、峰山と淨願寺山の間の谷筋から勝賀城跡をみることができ、勝賀城跡と室山城跡は互いに視認することができる。室山城跡から高松湾を臨むには前方の稻荷山尾根が邪魔となるため、室山城跡は勝賀城跡の視覚領域を補完し、もっぱら高松平野東部を牽制するための役割を果たしているといえよう。

黄峰城跡からは生島湾と亀水湾および現在五色台トンネルが通っている谷を臨むことができる。この谷は西から高松に入る場合、勝賀城跡から視認されずに高松湾に到達できる唯一の経路である。白峯寺から根香寺への遍路道の途中で北方方向へ向かえば、谷筋へ行くことができる。また、勝賀城跡と黄峰城跡は互いに視認することができ、室山城跡と黄峰城跡は互いに視認することができない。

3城の視覚領域をみると、勝賀城跡からは室山城跡・黄峰城跡を視認することができ、高松平野および高松湾全体を見渡すことができる。そして勝賀城跡から視認できない場所については、室山城跡・黄峰城跡が補完するよう視認できる場所に立地している。以上の視覚領域を考えると、これらの織豊系陣城群は高松平野および高松湾に対しにらみを効かすための城であるといえる。天正13年の秀吉による四国攻めの際に築かれた陣城と考えるならば、第4章第1節で橋詰氏が指摘したように、高松平野以東は秀吉傘下にあった十河・安富氏の勢力下であり、後背を脅かす存在はない。高松平野を押さえれば、東讃は勢力下に入ったといえるだろう。さらに、兵站や兵船の係留、海への備えなどを考えても、高松湾は必ず押さえなければならない場所だったであろう。



第5-20図 勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡の視覚領域
(地理院地図(傾斜量図)を加工して作成)



第 5-21 図 勝賀城跡南西部の標高色別図

5. 香西氏時代の勝賀城

改修前の香西氏時代の勝賀城はどのような城だったのだろうか。改修時に大きく削平されているため、復元することは困難だが、測量調査の成果や香川県内の中世山城の縄張りから想像してみたい。

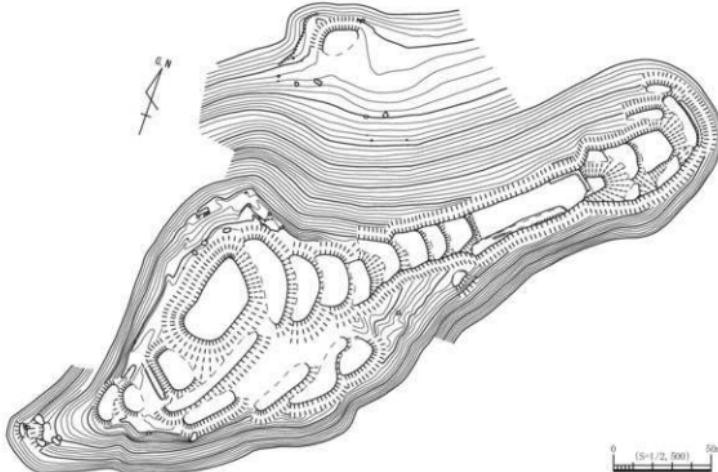
香西氏時代の勝賀城跡は、比高差が約350mで、尾根上に曲輪を並べた連郭式の中世山城であったと考えられることから、A類型だったと想定される。そのため、最も標高が高いところを主郭として尾根上に曲輪を配置する。

第5-21図は、現在の勝賀城跡南西部を標高別に色分けしたものである。この図をみると、最も標高が高いのは主郭西側の土星が折れている箇所周辺である。県内の主要な城の主郭の広さは約800m²なので、勝賀城も同様な広さだったと想定し、標高が最も高い場所を中心に、等高線をみながら約800m²の主郭を設定する。そして、主郭を中心に北東—南西方向が尾根になっているため、等高線をみながら尾根上に曲輪を配置する。

設定した主郭から北・南は緩やかに下がっているが、西側は傾斜が急になっている。現在も通路のような平坦面しかないことから、西側は曲輪が配置されていなかったと考えられる。一方、東側は現在主郭となっている部分までは傾斜が緩やかであるため、曲輪が配置されていたと思われる。ただし、現在の等高線からそれほど大きな曲輪はなかった可能性が高く、堂山城跡のように幅が狭く細長い曲輪が配置されていたと想定される。

また、曲輪IXの北端に残っている構状遺構は、香西氏時代の堀切だったと考え、堀切を設定した。現在では削平されて不明だが、他にも堀切や土星等が用いられていた可能性は高い。しかししながら、その痕跡は残っていないため、今回の想像図では設定しない。

以上の想定を基に、香西氏時代の勝賀城想像図を作成した（第5-22図）。学術的な根拠に乏



第5-22図 香西氏時代の勝賀城跡（想像図）

しいため復元とは言い難く、あくまで想像図であることを断っておきたい。多くの人が勝賀城跡の変遷を理解する際の一助になれば幸いである。

おわりに

本稿では、讃岐における中世城郭を3類型に区分した。そして、それらを勝賀城跡南西部・室山城跡・黄峰城跡と比較した。その結果、讃岐における中世城郭と勝賀城跡を含む3城は主郭の広さや付随する遺構等が全く異なること、讃岐の中世城郭の連続的な発展形として位置づけられないことが明らかになった。このことは、勝賀城跡が讃岐の国人によって築城されたものではなく、讃岐外の勢力である豊臣大名によって築城されたことを示している、と考えられる。

織豊系城郭であるということは、豊臣大名によって改修されたことになるが、その時期については以下の3つの可能性が考えられる。

1. 天正13年の秀吉による四国攻めに伴う城（1585年6月～7月）
2. 仙石秀久による讃岐統治のための支城（1585年8月～1587年1月）
3. 生駒親正による讃岐統治のための支城（1587年8月～）

城の縄張りや発掘調査成果からは臨時的な性格が強いことが明らかになっている。また、前節の中井氏の論考では、国内における他の織豊系城郭のなかでも陣城と類似することが示された。以上のことから、勝賀城跡が織豊系陣城であることは間違いないだろう。

さらに、城からどのくらいの範囲が見渡せるかという視覚領域の観点からみると、織豊系陣城群は高松平野および高松湾ににらみを効かすように配置されたことが明らかになった。

このような織豊系陣城の配置は讃岐内では他にみられないため、豊臣大名（仙石秀久・生駒親正）による讃岐統治のために築城されたとは考えにくい。また、豊臣大名の統治中に、高松平野で大規模な反乱が起こったという記録もみられない。

以上の状況から、これらの織豊系陣城群は、天正13年の秀吉による四国攻めに伴い築城された、と考えられる。

最後に、現在の城の等高線や香川県内の中世山城の縄張りから、香西氏時代の勝賀城を推定してみた。学術的根拠はなく不確かな想像図ではあるが、大きく異なっていることはないだろう。勝賀城の変遷を理解する上で役に立てれば幸いである。

（梶原）

※天王城跡など讃岐における中世城郭の評価について、本章4節の栗岡氏の評価と異なる部分があるが、勝賀城跡の評価に直接関わるものではないため、各執筆者の見解をそのまま記載している。

第5-1表 讃岐の中世山城分類表①

A型

| 名称 | 場所 | 立地 | 標高 | 山麓との 非高差 | 主郭の 面積 | 遺構 | | | | 特徴 |
|--------|--------|------|-----|-------------|-----------|----|----|----|----|-------------------|
| | | | | | | 堀切 | 土塁 | 柵垣 | 壁塀 | |
| 志丸城跡 | 東かがわ市 | 山頂 | 417 | 400 | 780 | ○ | ○ | | | |
| 南瀬戸城跡 | さぬき市 | 山頂 | 253 | 245 | 770 | ○ | ○ | | | ○ |
| 黒瀬戸城跡 | さぬき市 | 尾根頂部 | 458 | 230 | 200 | ○ | ○ | | | 石垣の高さが不明だが、3—4段あり |
| 堂山城跡 | 高松市 | 山頂 | 304 | 270 | 450 | ○ | ○ | | | |
| 上佐山城跡 | 高松市 | 山頂 | 256 | 190 | 750 | ○ | | | | |
| 戸山城跡 | 高松市 | 山頂 | 245 | 170 | 360 | △ | | | | |
| 内堀尾城跡 | 高松市 | 山頂 | 450 | 180 | 120 | ○ | | | | |
| 西長尾城跡 | 丸亀市ほか | 山頂 | 375 | 285 | 480 | ○ | ○ | ○ | ○ | 二重堀切 |
| 粟琴城跡 | 丸亀市ほか | 尾根面部 | 211 | 110 | 220 | ○ | | | | |
| 天籟寺城跡 | 香通寺市ほか | 山頂 | 382 | 350 | 250 | ○ | ○ | | | ○ |
| 柳梨山城跡 | 香通寺市ほか | 山頂 | 147 | 100 | 1500 | ○ | ○ | | | 石垣の高さが不明だが、3—4段あり |
| 中通山城跡 | まんのう町 | 山頂 | 375 | 105 | 500 | ○ | | | | 二重堀切 |
| 麻城城跡 | 三豊市 | 山頂 | 166 | 100 | 300 | ○ | | | | |
| 知行寺山城跡 | 三豊市 | 山頂 | 163 | 130 | 600 | ○ | | | | |
| 本瀬戸城跡 | 三豊市 | 尾根頂部 | 205 | 110 | 630 | ○ | ○ | | | |

B型

| 名称 | 場所 | 立地 | 標高 | 山麓との 非高差 | 主郭の 面積 | 遺構 | | | | 特徴 |
|------|------|---------|-----|-------------|-----------|----|----|----|----|---------------------|
| | | | | | | 堀切 | 土塁 | 柵垣 | 壁塀 | |
| 六瀬城跡 | さぬき市 | 尾根先端の丘陵 | 42 | 10 | 1500 | △ | | | | |
| 芝山城跡 | 高松市 | 山頂 | 44 | 44 | 880 | △ | | | | |
| 神内城跡 | 高松市 | 尾根先端の丘陵 | 88 | 35 | 630 | ○ | ○ | | | |
| 戸田城跡 | 高松市 | 尾根先端の丘陵 | 89 | 15 | 1000 | ○ | | | | |
| 田中城跡 | 高松市 | 尾根先端の丘陵 | 28 | 25 | 1100 | | | | | |
| 羽林城跡 | 琴川町 | 丘陵 | 82 | 30 | 1800 | ○ | ○ | ○ | | 主郭は土塁固め、土壁による平地口の形成 |
| 後藤城跡 | 琴川町 | 尾根先端の丘陵 | 108 | 30 | 450 | | | | | |
| 甲山城跡 | 善通寺市 | 丘陵 | 87 | 65 | 725 | ○ | | | | |
| 天王城跡 | 三豊市 | 丘陵 | 111 | 40 | 1380 | ○ | ○ | ○ | ○ | 主郭は土塁固め、土壁による平地口の形成 |
| 藤田城跡 | 観音寺市 | 丘陵 | 137 | 80 | 1080 | ○ | | | | |

第5-2表 讀岐の中世山城分類表②

C型

| 名称 | 場所 | 立地 | 標高 | 山麓との 非高差 | 主郭の 面積 | 遺構 | | | | 特徴 |
|------|-------|---------|-----|-------------|-----------|----|----|----|-----|-------------|
| | | | | | | 縦切 | 土塁 | 堀端 | 堅土壁 | |
| 鳥取城跡 | 高松市 | 尾根先端 | 192 | 50 | 560 | ○ | ○ | | | |
| 福家城跡 | 高松市 | 尾根先端 | 89 | 50 | 440 | ○ | ○ | | | 堅切+土壁で土塁は二重 |
| 曾根城跡 | 高松市 | 尾根先端の丘陵 | 210 | 75 | 190 | ○ | | | | |
| 牛川城跡 | 綾川町 | 尾根先端の丘陵 | 75 | 25 | 530 | ○ | | | | |
| 伊賀城跡 | 綾川町 | 尾根先端 | 98 | 40 | 430 | ○ | ○ | | | 堅切+土壁 |
| 内山城跡 | 善通寺市 | 尾根先端 | 82 | 30 | 500 | ○ | ○ | | | 堅切+土壁 |
| 金丸城跡 | まんのう町 | 尾根先端 | 230 | 95 | 340 | ○ | ○ | | | 堅切+土壁 |
| 和田城跡 | 銀音寺市 | 尾根先端 | 80 | 50 | 300 | ○ | ○ | | ○ | 堅切+土壁 |

勝賀城跡・室山城跡・黄峰城跡

| 名称 | 場所 | 立地 | 標高 | 山麓との 非高差 | 主郭の 面積 | 遺構 | | | | 特徴 |
|------|-----|----|-----|-------------|-----------|----|----|----|-----|-----------------|
| | | | | | | 縦切 | 土塁 | 堀端 | 堅土壁 | |
| 勝賀城跡 | 高松市 | 山頂 | 365 | 355 | 2000 | ○ | ○ | ○ | ○ | 土壁のみの主郭、塗り意口 |
| 室山城跡 | 高松市 | 山頂 | 200 | 195 | 1800 | ○ | ○ | ○ | ○ | 土壁が質實純謙と断る、無い意口 |
| 黄峰城跡 | 高松市 | 山頂 | 175 | 175 | 1150 | ○ | ○ | ○ | ○ | 土壁のみの方形曲輪、無い意口 |

第3節 天霧城跡・雨滝城跡・聖通寺城跡の出土遺物

はじめに

本節では、発掘調査が行われた香川県内の中世山城の中で、再評価をする必要がある天霧城跡・雨滝城跡・聖通寺城跡の未報告遺物を紹介する。紹介する3城跡は、勝賀城跡の1、2次調査が行われた時期と同じ1970～80年代に発掘調査が行われ、報告書が刊行された。そのため、当時の研究水準により遺物が選定されている。当時と比べ研究が深化した現在、未報告遺物を含めた出土遺物を総点検すると、これらの城跡の新たな歴史像が判明した。勝賀城跡の歴史像を明らかにするためには、これらの城跡の再評価が重要となるため3城跡の未報告遺物の再整理を行い、特に重要な遺物について報告する。

1. 天霧城跡

天霧城跡は善通寺市・多度津町・三豊市にまたがる標高382mの天霧山山頂に立地する。山頂より3方向に派生する尾根上に階段状の郭を配した連郭式の山城である。南北朝期～戦国期に西讃守護代の香川氏によって城跡が築かれ、一次史料にも記載されている。

昭和56(1981)年に発掘調査が行われ、多量の遺物が出土した。発掘調査の詳細については、調査報告書をご参照いただきたい(一市二町天霧城跡保存会編 1997)。出土遺物はコンテナ約40箱におよび、報告書では土師質土器と金属製品類が報告されている。また、藏本晋司氏が天霧城跡出土輸入陶磁器について報告している(藏本 1992)。出土遺物を全て精査したところ、土師質土器については報告書で概ね掲載されたとおりであることが判明した。一方、瓦や国産陶器を含めた陶磁器類・土製品・石製品については未報告であったため、本稿ではこれらの遺物について報告する。なお、近世～近代の遺物については取り扱わない。

1-1. 瓦(1～7)

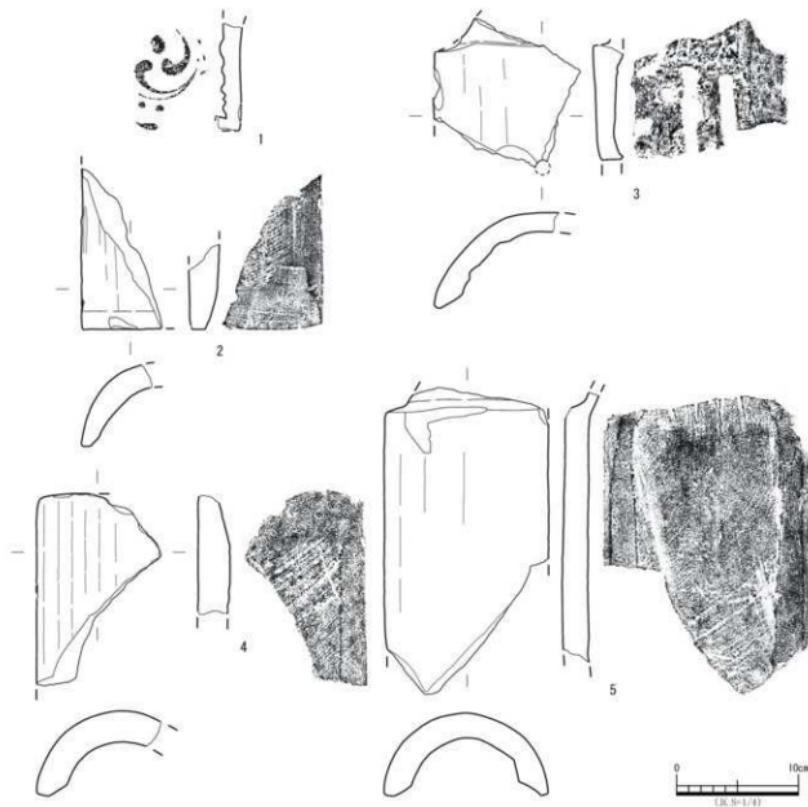
1は巴文軒丸瓦である。2～6は丸瓦で、凸面はヘラミガキが施され、端部はナデられる。凹面はコビキA・布目・吊り紐痕・タタキ痕・ナデが認められる。7は平瓦で、凸面は摩滅しており調整は不明で、凹面はヘラミガキ・ナデが施される。丸瓦・平瓦ともに焼成は良好である。

1-2. 陶磁器類

(1) 中国産陶磁器(8～59)

中国産磁器は、青花磁が多数を占める。多くは景德鎮窯系だが、漳州窯系も少数認められる。8～32, 35～40は景德鎮窯系である。8～20は碗である。8～15は口径に対し器高が深い碗である。12～14は端反りである。外面に蛟龍文(9)、唐草文(11, 12, 14)が描かれる。また、口縁部外面に波瀾文帶(10)が描かれるものもある。8, 13は内面青花磁で外面白磁である。口縁部内面に四方樺文帶が描かれる。8は饅頭心型である可能性が高い。16～20は口径に対し器高が浅い碗である。外面に三つ玉文様(16, 18, 19)、草花文(17)が描かれ、見込みには三つ玉文様(16)が描かれる。20は内面青花磁で外面青磁である。

21～23は低平な皿である。21, 23は端反りの口縁である。外面には唐草文(21)が描かれ、見込みにはアラベスク文様(21)、三友文(22)が描かれる。高台内には「○福○同」の文字(22)



第5-23図 天霧城跡出土遺物 瓦① (S=1/4)

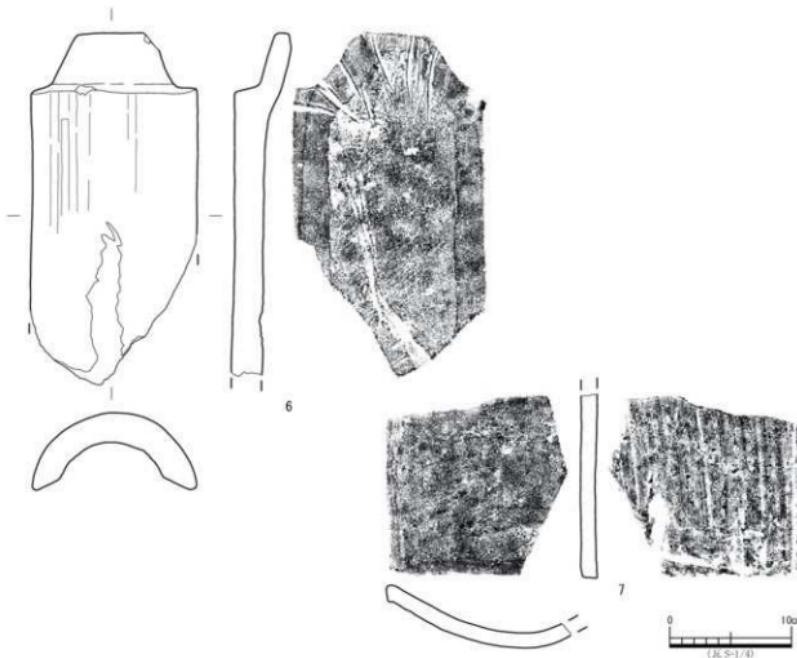
が描かれる。

24は合子である。外面に牡丹唐草文が描かれる。

25～30は碗又は皿の口縁部である。外面に花文(25, 27, 30)、三つ玉文様(26)が描かれる。31, 32は碗の高台である。35～37は皿の高台で、見込みに蛟龍文(35)が描かれる。38～40は基筒底の皿である。内面見込みに草花文(38)、花鳥文(39)、捺花文(40)が描かれる。

33, 34, 41～43は漳州窯系である。33, 34は碗又は皿の高台で、饅頭心型である。高台内に墨で二本の線、見込みには花文が描かれる。41～43は皿で、口縁部は直口である。外面に花文(41)が描かれる。

青花磁以外には、青磁と白磁が出土している。44～49は龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁



第5-24図 天霧城跡出土遺物 瓦② (S=1/4)

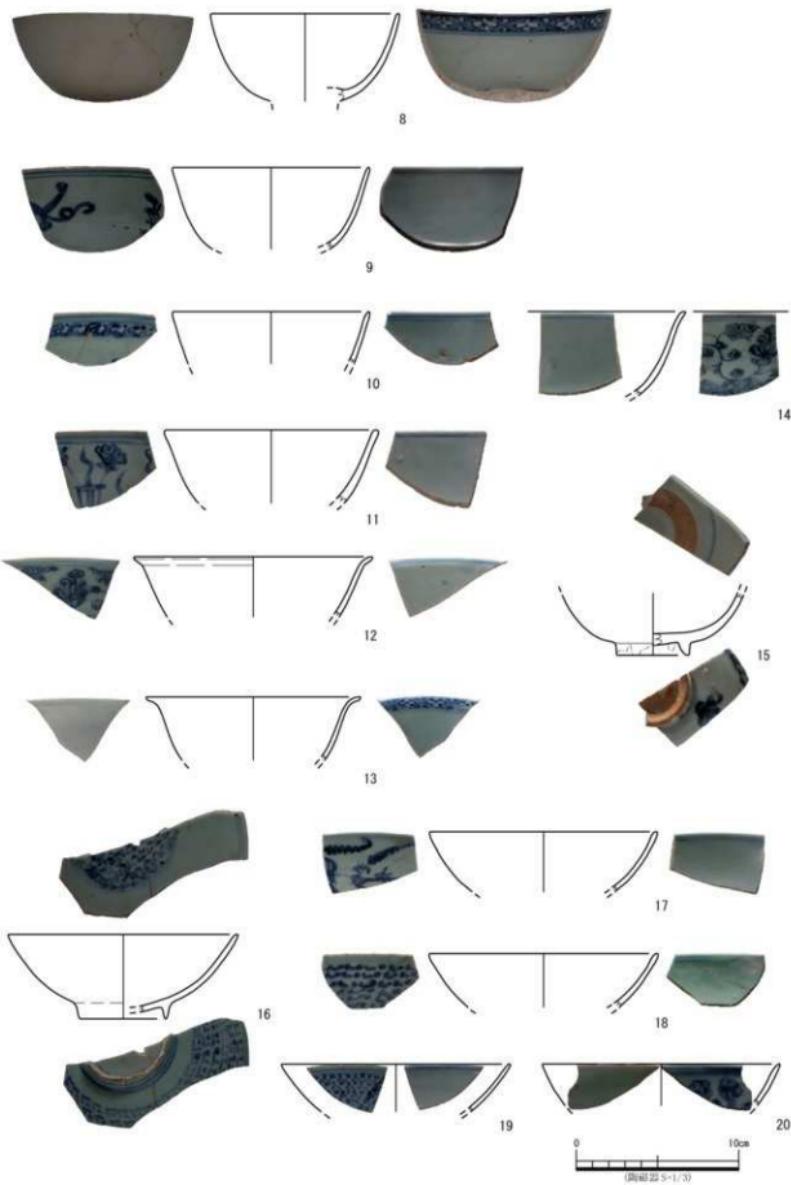
文が描かれる。44, 47, 49は上田編年のB-IV類で、45, 46, 48は上田編年のB-IV'類である。50は無文の青磁碗で上田編年のE類である。51は青磁で、型作りの菊花皿である。52は青磁碗又は皿の底部で、輪高台である。53～59は白磁皿である。器形は低平で、端反りの口縁である。高台は細く断面三角形状で、疊付部分のみ露胎である。森田編年のE-2群である。

(2) 国產陶器 (60～70)

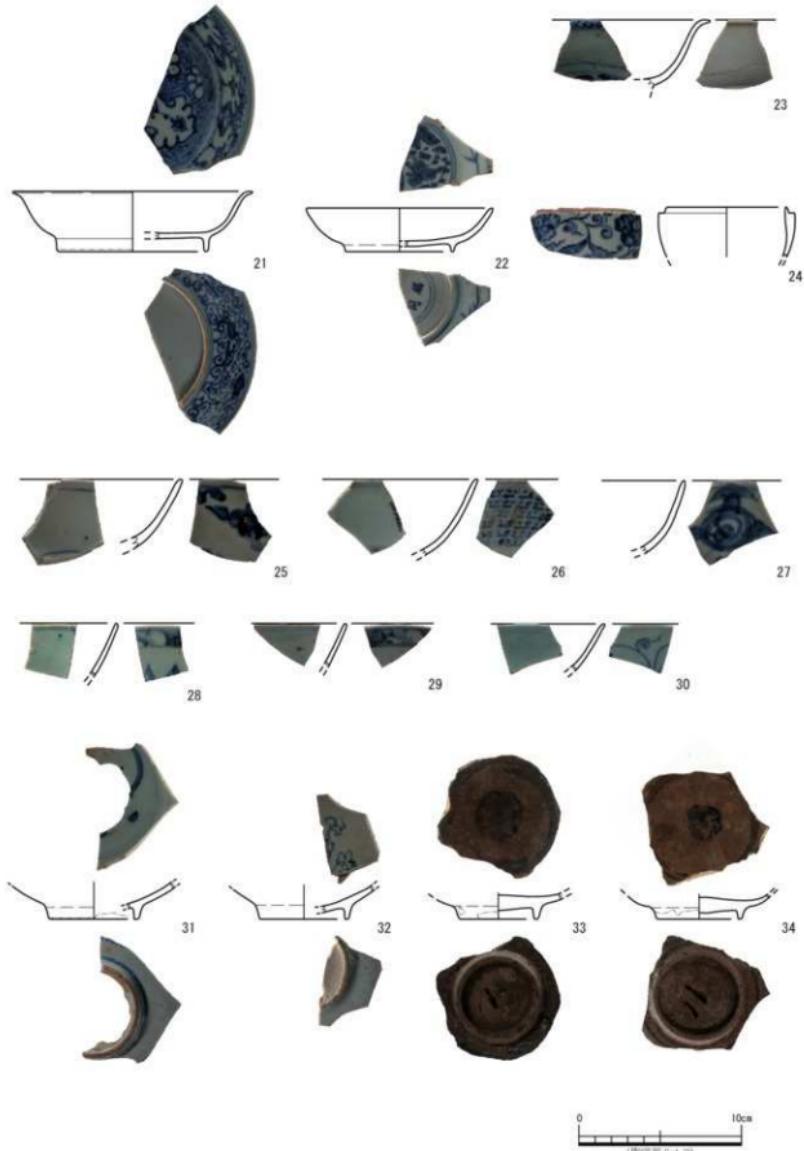
国產陶器は、瀬戸・美濃系陶器と備前焼が認められる。肥前系陶器の出土は皆無である。

60, 61は瀬戸・美濃系陶器である。60は鉄釉天目茶碗である。61は小皿である。見込に花文の印刻が彫られている。

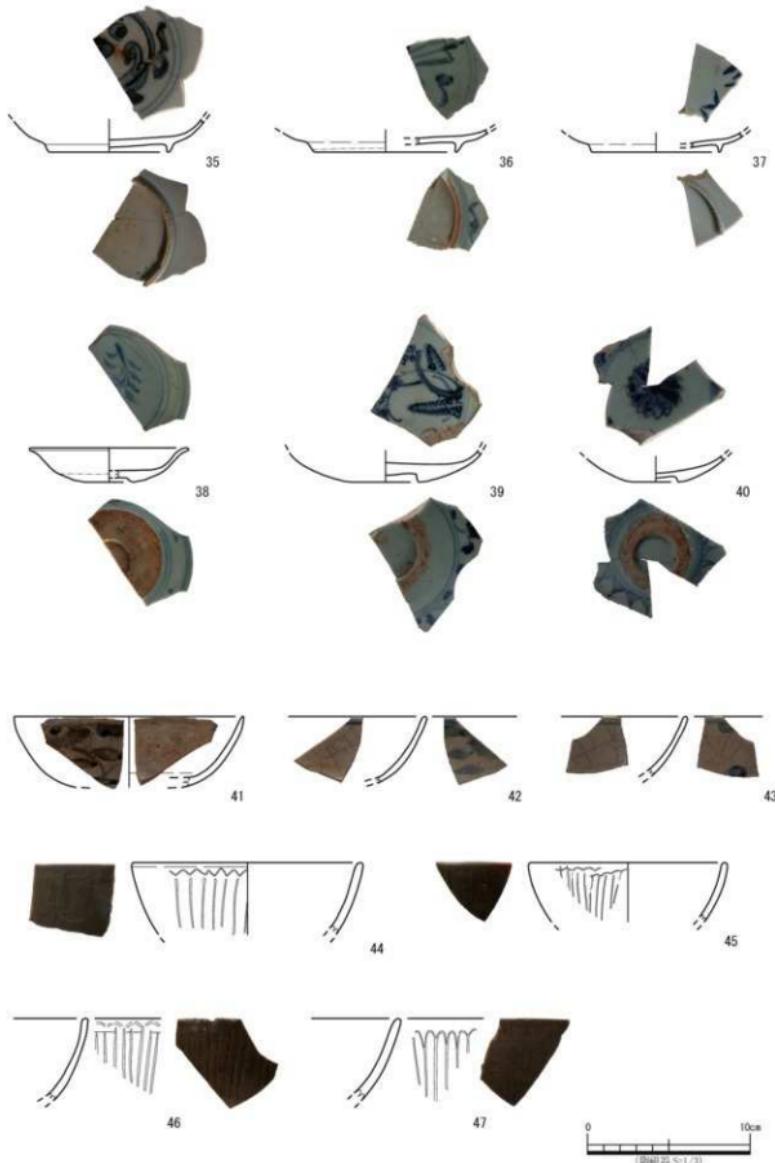
62～70は備前焼である。62, 63は擂鉢である。口縁部帶に1～2条の凹線が形成され、斜め方向の擂目がみられることから乗岡編年（乗岡2017）の近世Ib期である。64, 65は大甕の口縁部である。64は口縁部の折り返しが短く、口縁部帶には凹線は形成されていないことから乗岡編年の中世5期である。65は口縁部帶にシャープな凹線が2条形成されることから乗岡編年の中世6b期である。66は壺である。壺の口縁は胴部からやや外側に真っ直ぐに立ち上がり、端部は粘土折り返しによる玉縁をもつことから、乗岡編年の中世6a～6b期である。



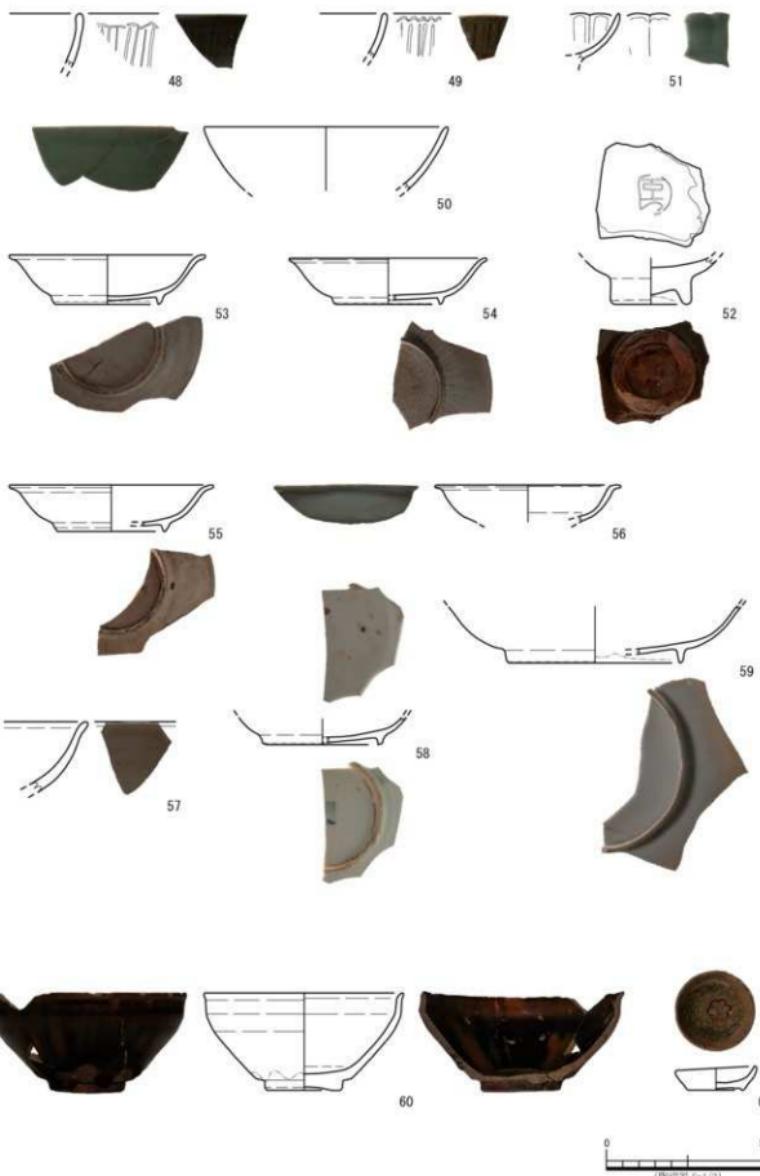
第5-25図 天霧城跡出土遺物 陶磁器類① (S=1/3)



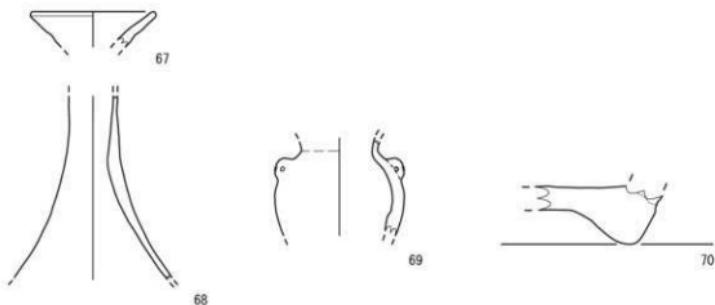
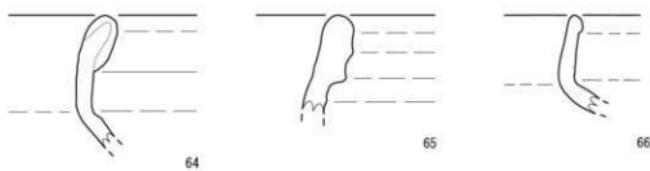
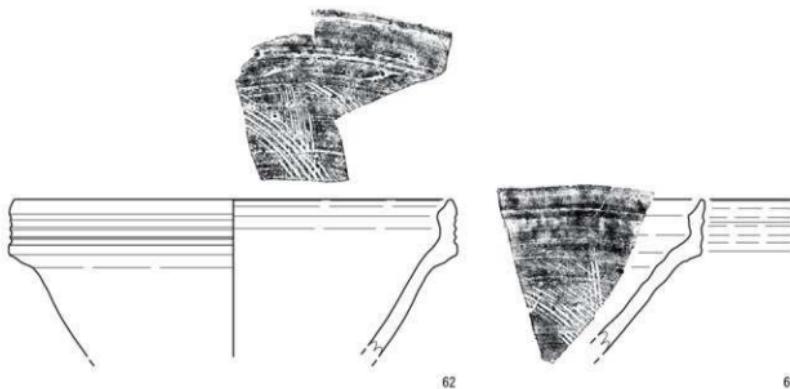
第5-26図 天霧城跡出土遺物 陶磁器類② (S=1/3)



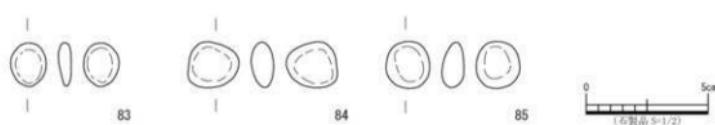
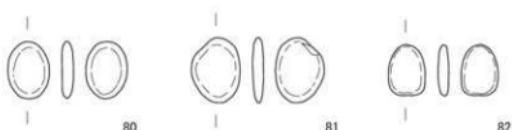
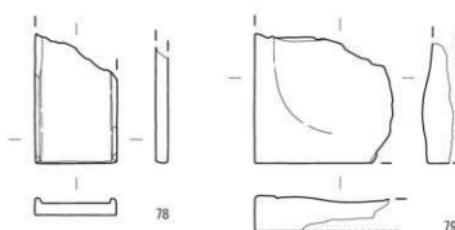
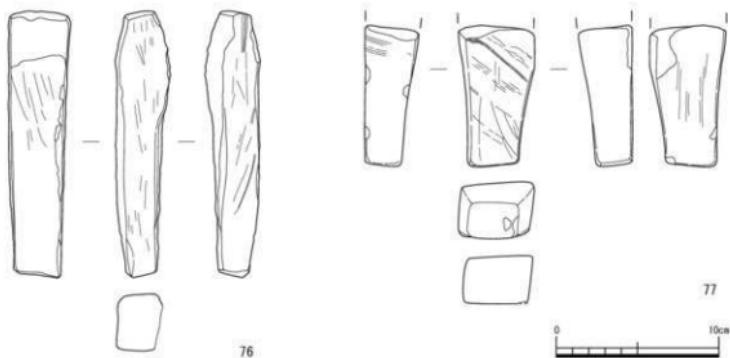
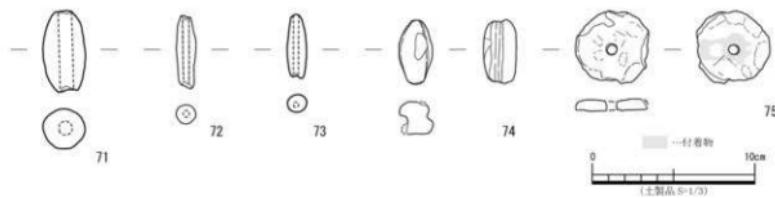
第5-27図 天霧城跡出土遺物 陶磁器類③ (S=1/3)



第5-28図 天霧城跡出土遺物 陶磁器類④ (S=1/3)



第5-29図 天霧城跡出土遺物 陶磁器類⑤ (S=1/3)



第 5-30 図 天霧城跡出土遺物 土製品・石製品 (S=1/3・1/2)

67, 68 は徳利である。乗岡編年の中世 6a 期以降に出現する器種である。69 は小形水差で、取手が付いている。70 は鉢類の脚部と考えられる。

1-3. 土製品・石製品 (71 ~ 85)

71 ~ 74 は土鍤である。75 は紡錘車である。76, 77 は砥石である。78, 79 は硯である。80 ~ 85 は基石である。

2. 雨滝城跡

雨滝城跡は、さぬき市に所在する標高 253 m の雨滝山の山頂に位置する。山頂部に主郭があり、3 つの尾根筋に曲輪が配置された連郭式の曲輪群である。江戸時代の軍記物や地誌には、南北朝期～戦国期に東讃守護代の安富氏によって城跡が築かれたと伝えられる。

昭和 45(1970) 年と 57(1982) 年に発掘調査が行われ、多量の遺物が出土した。発掘調査の詳細については、調査報告書をご参照いただきたい（雨滝城跡発掘調査団編 1983）。さぬき市では発掘調査出土遺物の他に、平成 7(1995) 年 1 月 5 日の採集資料を若干数と旧富田小学校及びさぬき市郷土館で保管されていた資料を保管している。本稿ではこれら雨滝城跡の遺物のうち、瓦・陶磁器・土器について報告する。なお、富田小学校保管資料と雨滝城跡の出土遺物において若干数認められる近世遺物については取り扱わない。

2-1. 瓦

軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦が保管されている。注記・台帳等の現状の記録からは出土地点の不明な瓦が多い。報告書には、昭和 45 年の調査では多数の瓦片が出土したが昭和 57 年調査では少なかったことが記載されている。よって残存状態の良好な瓦片の多くは昭和 45 年調査の西 5 庫出土瓦の可能性が高いが、ひとまず出土地点不明としておく。

瓦の色調は橙色といぶしのある暗灰色があり、数的には両者は拮抗する。質的には軟質で硬質に焼成された事例は認められない。胎土には細粒の長石・石英、赤色粒が少量認められ精良であるが、稀に直径 0.5cm の長石・石英等が観察できる。

(1) 軒丸瓦 (86 ~ 95)

①法量

瓦当面直径 15.6cm である。外縁を除く文様面は直径 11cm である。全形の確認できる事例は 86 のみであるが、他の破片も直径を復元すれば 15 ~ 16cm におさまり、ほぼ同規模であることが指摘できる。

②瓦当（文様）

三巴文である。巴文は左巻巴で尾が比較的長い。珠文は小さく多い（珠文 20 個）。珠点間は均等ではなく、向かって左側の間隔が狭く、右下側の間隔が広い。瓦当面には范傷が複数認められる（第 5-31 図）。この范傷を共有するのは 86 ~ 92



第 5-31 図 軒丸瓦の范傷

である。93～95は珠文の間隔が類似している。よって、軒丸瓦は全て同範であると判断される。

③瓦当貼り付け

丸瓦先端部の瓦当部への接合は丸瓦先端部を包み込んで接合している。89, 91, 92は丸瓦部が剥離した状態にある。瓦当面の接合面には刻み目が施されている(91, 92)。

④面取り

瓦当面縁部に面取りは認められない。

(2) 軒平瓦 (96～112)

①法量・形態

幅28.5cmである。そのうち文様部の幅は20cmであるため、瓦当側縁部は幅広になっている。瓦当側縁部の整形は粗く凸凹が目立ち、板状压痕を認める事例もある(96, 97, 109)。文様部高は2.6cmである。頸部はナデによって屈曲部には丸みがある。

②瓦当（文様）

三葉文を中心飾りとする均整唐草文で、左右に2つの唐草が展開する。唐草は三葉文下端部からそれぞれ伸び、また、三葉文の真下に伸びる細線もある。瓦当面には范傷が複数認められる(第5-32図)。この范傷を共有するのは96～98、100～102、107～110である。また、それ以外も文様表現は類似しており、全て同範であると判断される。

③瓦当貼り付け

全て頸貼り付け技法であり、貼り付け部で剥離した事例が目立つ。貼り付け面には約1cm間隔で並行する長さ3cmの刻みを入れた事例(98)や長さ1.5cmの太い刻みを連続して入れた事例(106)、方形状の刺突を2列に連続して入れた事例(112)等がある。

④面取り

四面狭端面に幅広の面取りを施している。中軸付近が幅広く側面部に向かって狭くなる舌形をしている。

(3) 鬼瓦 (113, 114)

2点ともに表面の色調はにぶい橙色を呈する。同一個体の可能性はあるが出土地点が不明で判断としない。部位は鱗部片の可能性があるが断定はできない。

(4) 丸瓦 (115～137)

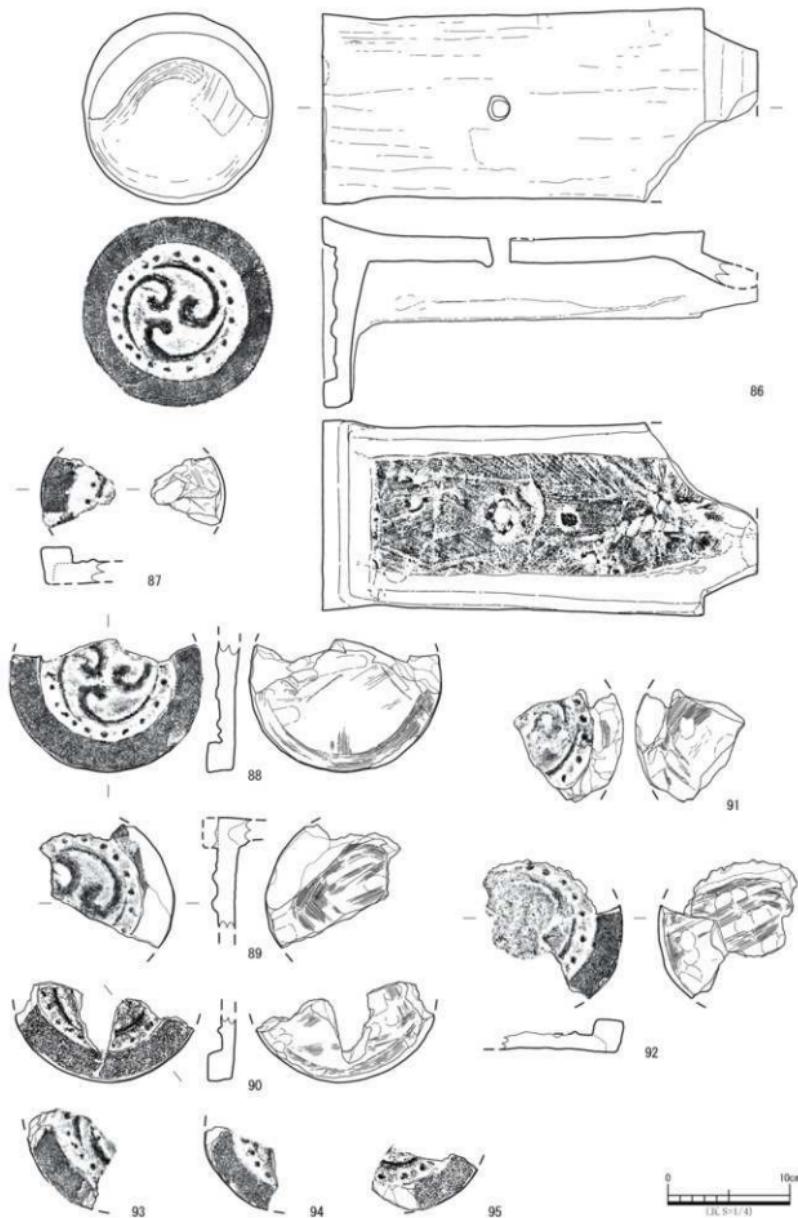
①法量・形態

86と115から全形がわかる。長さ33.4cm(胴部長30cm前後)、幅15～15.8cm、高さ7～8cmである。胴部の長さの約1/2が幅である。玉縁の長さは個体差があり、3.5～4.8cmである。法量は各個体で類似しており、丸瓦は全て同規模と判断できる。

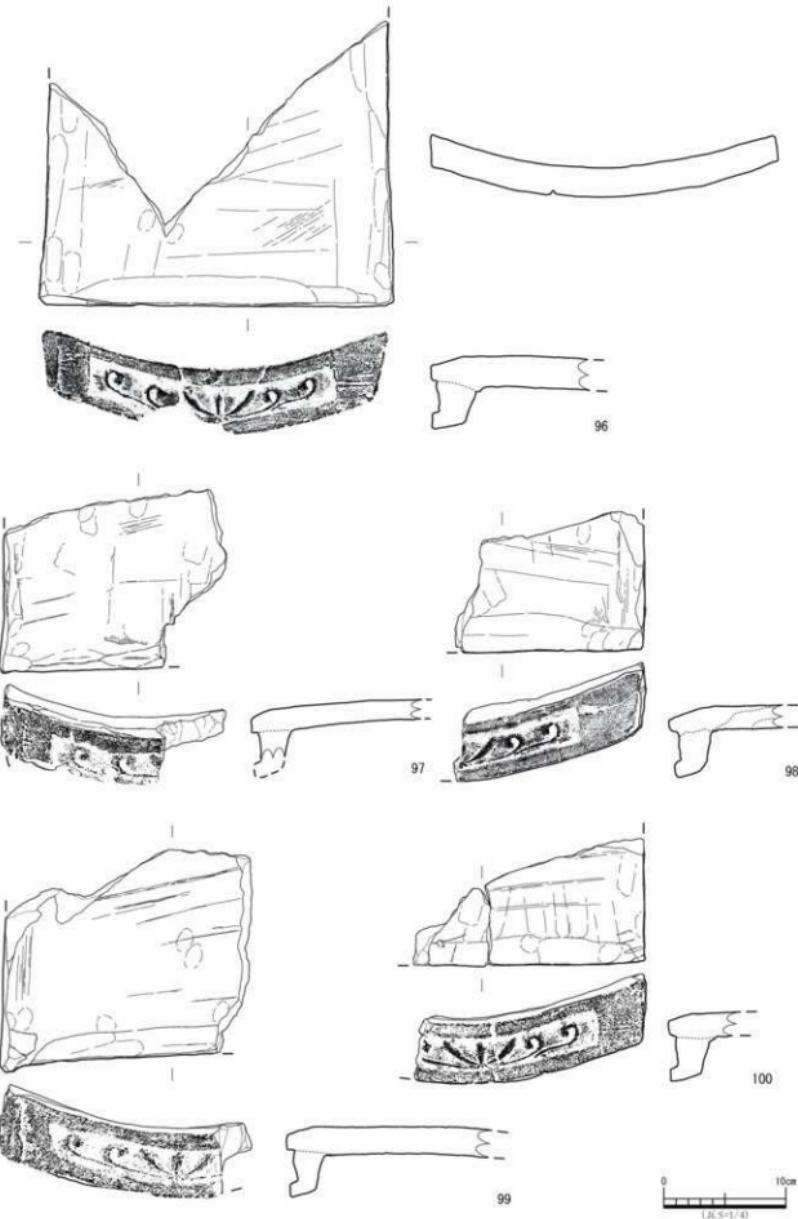
胴部中央には直径1.5～2cmの釘孔を1孔設けている事例(86, 132, 137)と釘孔を設けていない事例(115, 131)がある。側面端縁は幅1～1.3cmのやや丸みのある面をなす。器壁の厚さは1.8～2.5cmが多い。



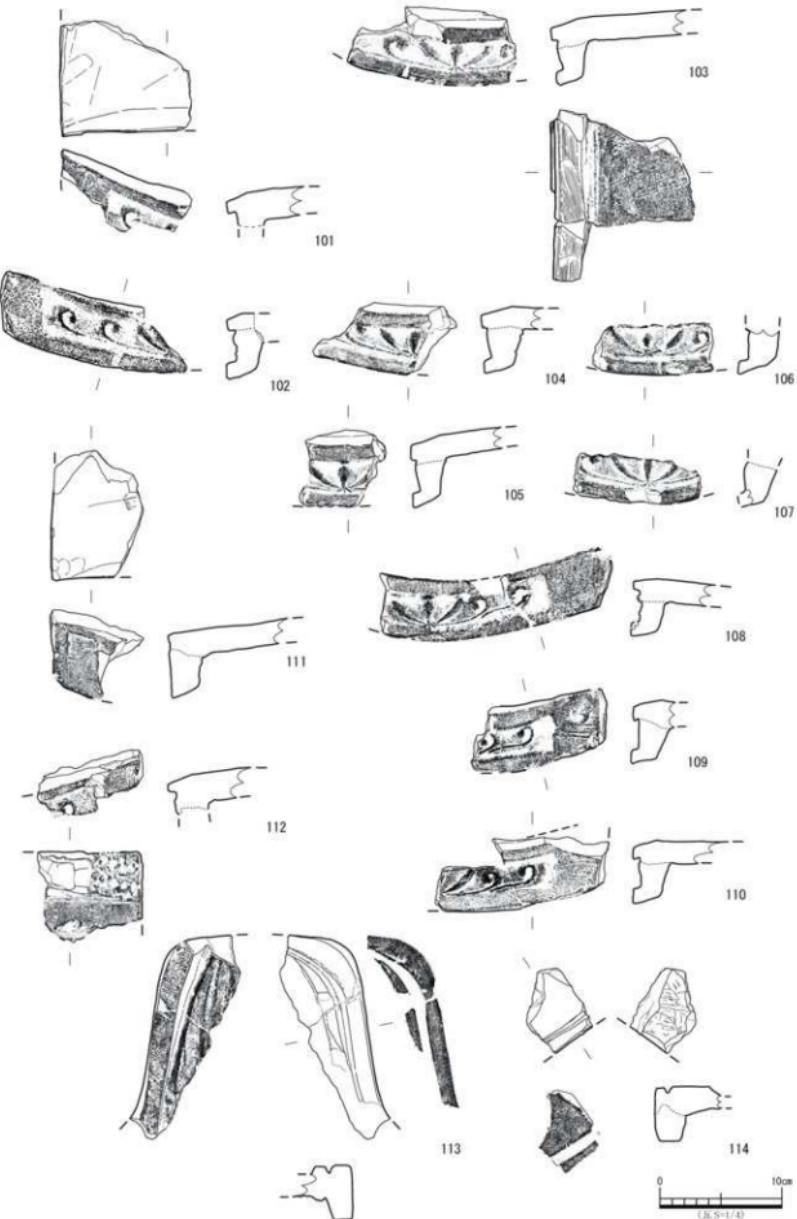
第5-32図 軒平瓦の范傷



第5-33図 雨滝城跡出土遺物 軒丸瓦 (S=1/4)



第5-34図 雨滴城跡出土遺物 軒平瓦① (S=1/4)



第5-35図 雨滝城跡出土遺物 軒平瓦②・鬼瓦 (S=1/4)

②凸面

表面の調整痕はナデのみで縄叩き痕を認める事例は皆無である。全体に横ナデを施した後に縦ナデを施す。横ナデは粗く並行する細線が残っている。縦ナデは幅1～1.5cmで、施した表面は平滑になっている。縦ナデは連続して施すが断続的である。整形が粗く先行する横ナデ痕を消し切れずには残している事例もある。それは特に側面端縁付近で顕著に観察できる。

③凹面

全て糸切り痕（コビキA）が見られ、鉄線切り痕（コビキB）は皆無である。糸切り痕の方向は玉縁を上にして右斜め上が多いが左斜め上の事例（131）、真上の事例（120）が例外としてある。糸切り痕は全体に密に残されている事例が多く、糸切り痕の顕著ではない事例や玉縁近くでは布目痕が観察できる。玉縁近くにはループ状に垂らした吊紐痕の確認できる事例が多数を占める。

⑤玉縁（面取り）

玉縁凹面側縁と胴部狭端肩部に面取りが施されており、両者が一続きの面取りになっている事例（116, 118, 121, 122, 124, 125）と分断されている事例（86, 115, 117）、両者が混在する事例（119）がある。玉縁側面部の面取りは認められない。また、分断された事例の肩部の面取りは三角形状を呈している。玉縁端部は面取りが認められない。

（5）棟込瓦（輪違瓦）（138）

先端部に向かってすぼまる形態である。この部分の凸面はやや膨らみをもつ。凹面は布目痕と吊紐痕がみられる。

（6）平瓦（139～149）

①法量

全形がわかるのは139である。長さ30cmである。幅は広端部で28.5cm、中央付近で27.5cmである。

②形態

縦横比はわずかに縦長で平面形は正方形に近い。中軸の縦断面形は反り気味である。器壁の厚さは1.8～2.3cmである。狭端・広端面の立ち上がりは垂直気味である。

③凹面

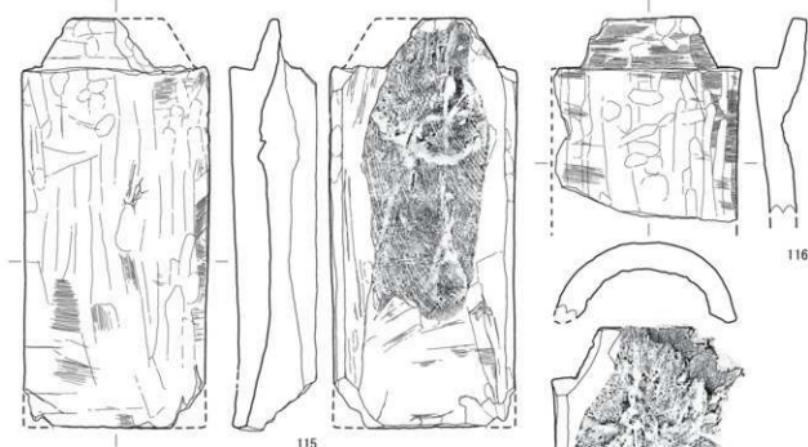
全体に横ナデを施した後にナデを施す。横ナデはやや粗く、仕上げのナデにより表面は平滑になっているが横ナデは比較的消しきれずには残されている。ナデは全体に及ぶが一部消しきれずには残された糸切り痕が残存している（96, 139）。布目痕の確認できる事例は皆無である。

④凸面

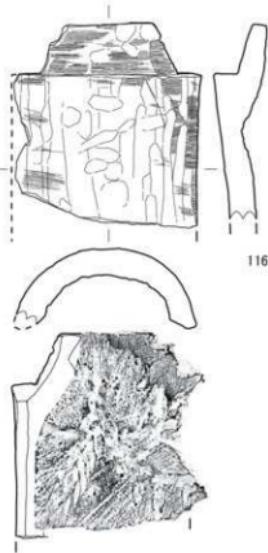
全体的に粗く、平面を平滑にするようなナデは認められない。少数糸切り痕の細線を残す事例（103, 144）や布目痕（144）がある。離れ砂を残す事例は皆無である。

⑤面取り

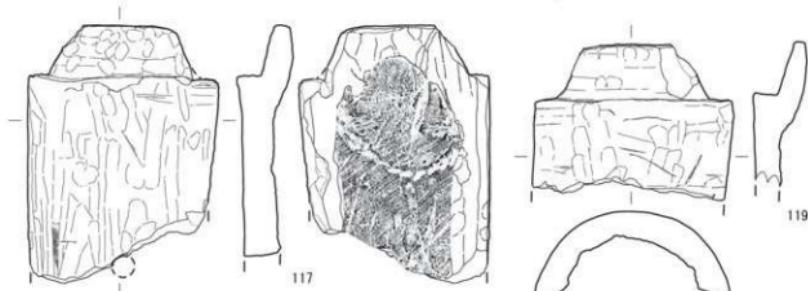
凹面狭端面は角度の深い面取りが施されている。中軸付近が幅広く側面部に向かって狭くなる舌状形の面取りである。同様の面取りは軒平瓦においても観察できる。広端面には幅0.5cmの狭い面取りが凹面に施されている事例（96）があるが、面取りを施さない事例が多数を占める。凹面側面角部は丸く整形した事例がある。



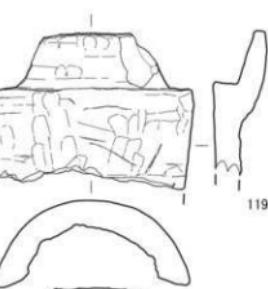
115



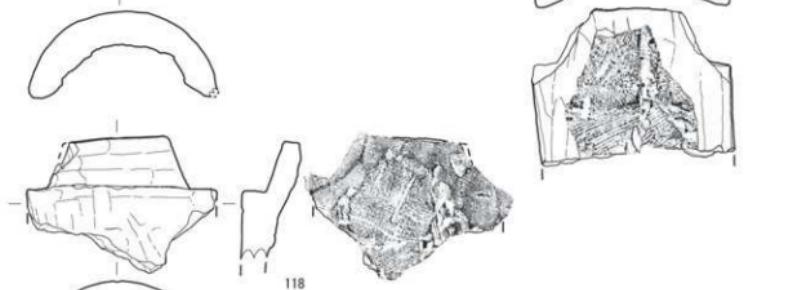
116



117



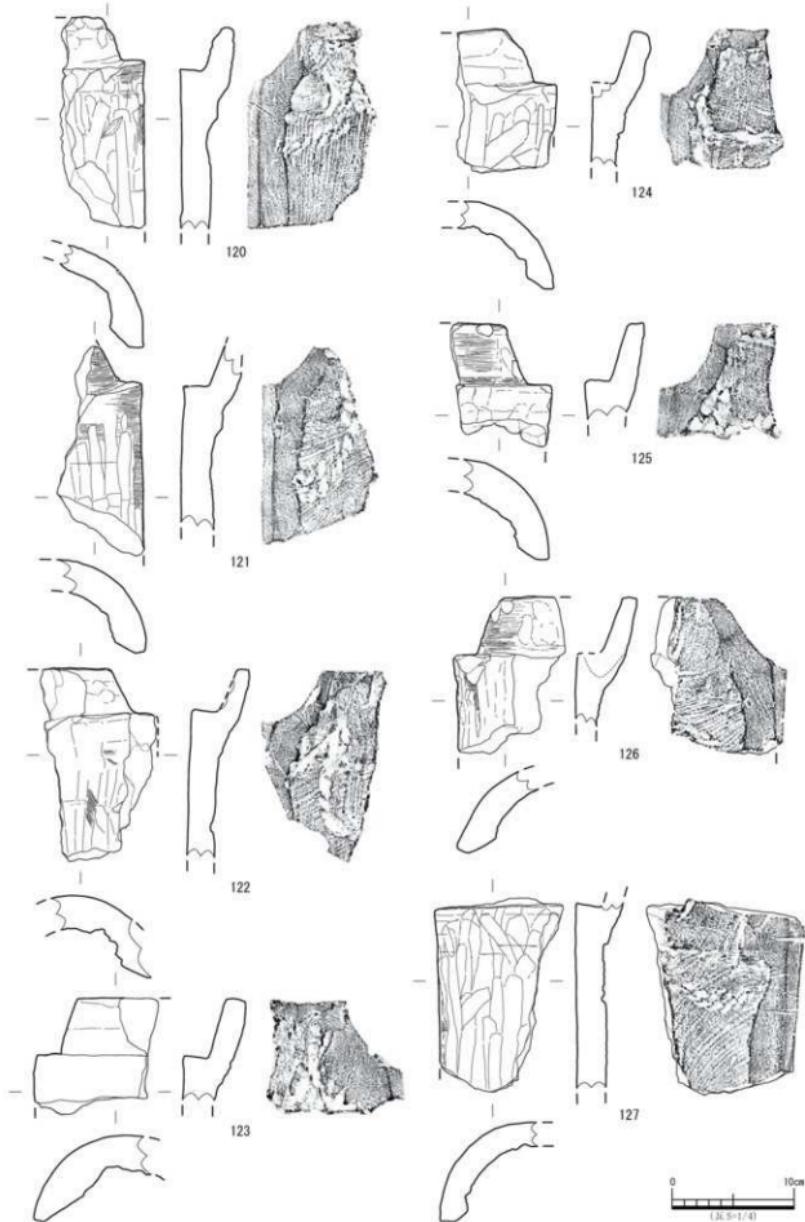
119



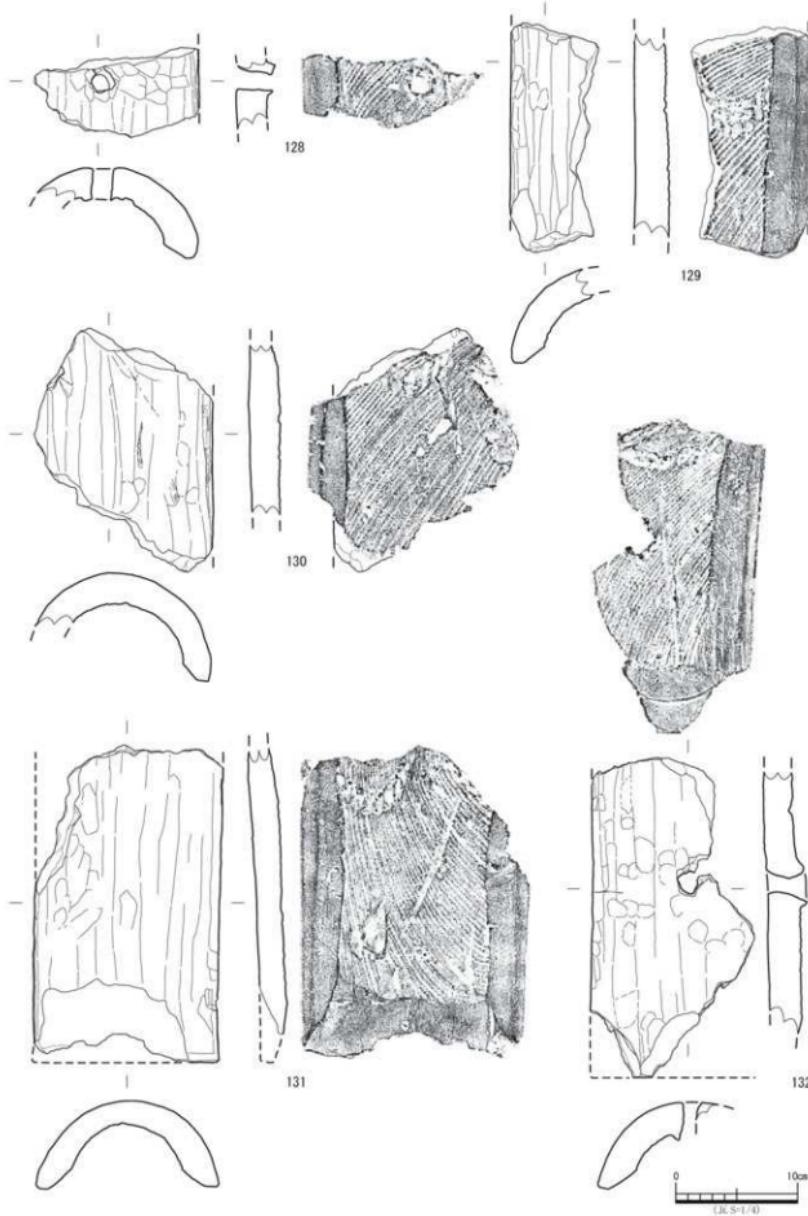
118



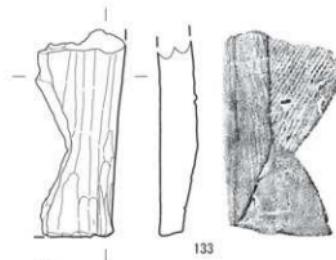
第5-36図 雨滝城跡出土遺物 丸瓦① (S=1/4)



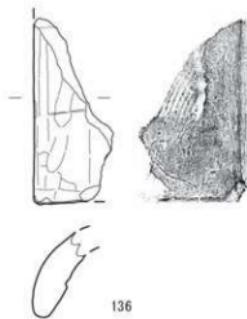
第5-37図 雨滝城跡出土遺物 丸瓦② (S=1/4)



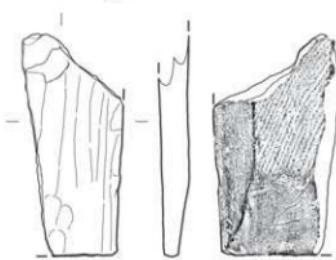
第5-38図 雨滝城跡出土遺物 丸瓦③ (S=1/4)



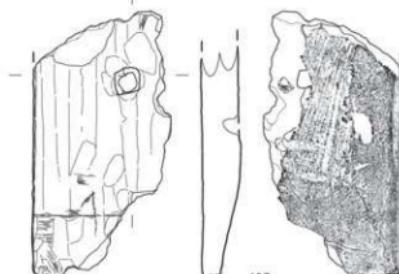
133



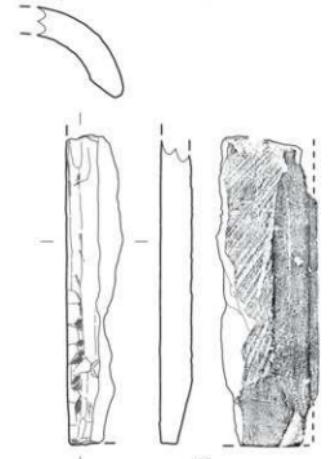
136



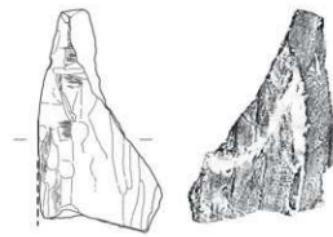
134



137



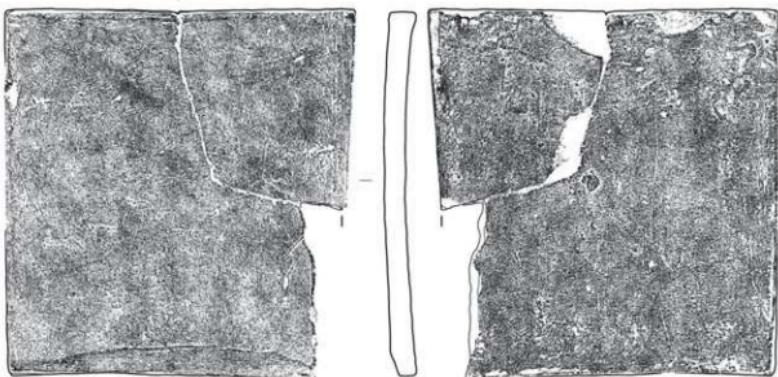
135



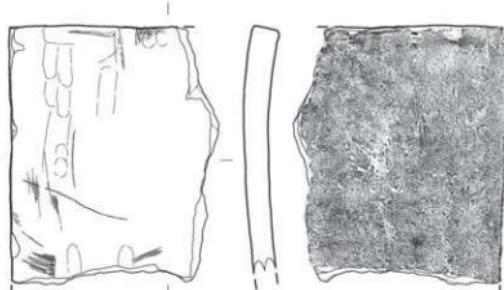
138



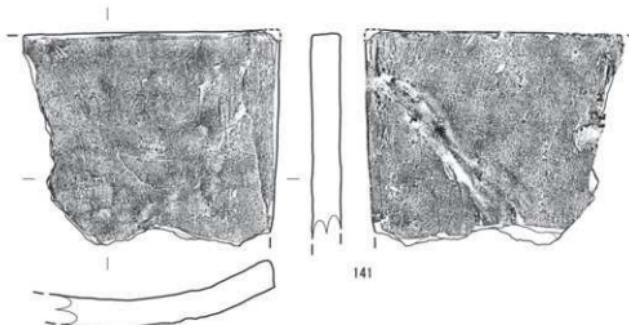
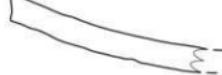
第5-39図 雨滝城跡出土遺物 丸瓦④・棟込瓦 (S=1/4)



139



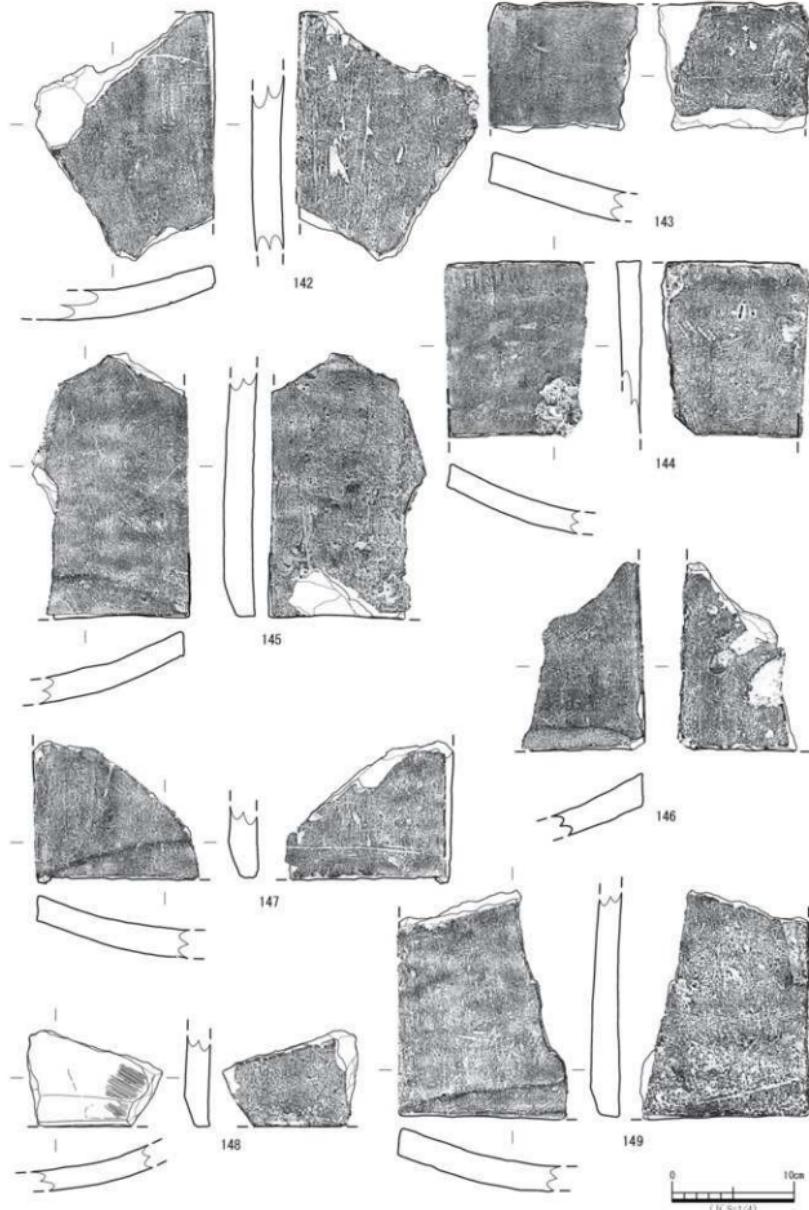
140



141



第5-40図 雨滻城跡出土遺物 平瓦① (S=1/4)



第5~41図 雨滝城跡出土遺物 平瓦② (S=1/4)

2-2. 陶磁器類

(1) 中国産陶磁器 (150 ~ 175)

中国産磁器は、青花磁が多数を占める。多くは景德鎮窯系だが、漳州窯系も少數認められる。

157 ~ 170 は景德鎮窯系である。157 ~ 162 は碗である。外面に人物文 (157)、花鳥文 (158)、唐草文 (159) が見られ、159 は口縁部内面にも唐草文が見られる。160 は饅頭心形の底部で見込みには牡丹唐草文が見られる。163 ~ 170 は丸皿である。163 は外面に唐草文、見込みに文様、高台内に方形枠付の銘が見られる。164 は見込みに團龍文、高台内に方形枠付の銘が見られる。165 は外面と見込みに文様が見られ、見込みは動物文である。166 は内外面に文様がある。類似した皿は六車城跡 (さぬき市) で出土している。皿は口縁部内面に文様のある事例が目立ち、外面には唐草文を表現した事例が目立つ。景德鎮窯産の青花の大多数は小野分類の染付碗E類、染付皿E類である。文様の描き方は輪郭を細い線で描き、中を淡くぼかした事例が多い。器形や文様等の類例資料として長崎県万才町遺跡 I 期資料 (1571 ~ 1601 年) が挙げられる。

171 ~ 175 は漳州窯系である。171 は皿で見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。172, 173 は基筒底の皿の口縁部片である。口縁部内外面に圍線が見られる。174 は口縁部内面に文様がある。呉須は滲んでいる。175 は口縁部が端反りとなる碗である。

青花磁以外では白磁があり、端反りの皿 (150 ~ 154) を主体とする。155 は碗で外面に暗花文が描かれている。156 は小壺の底部片で壠付は露胎である。青磁は認められない。

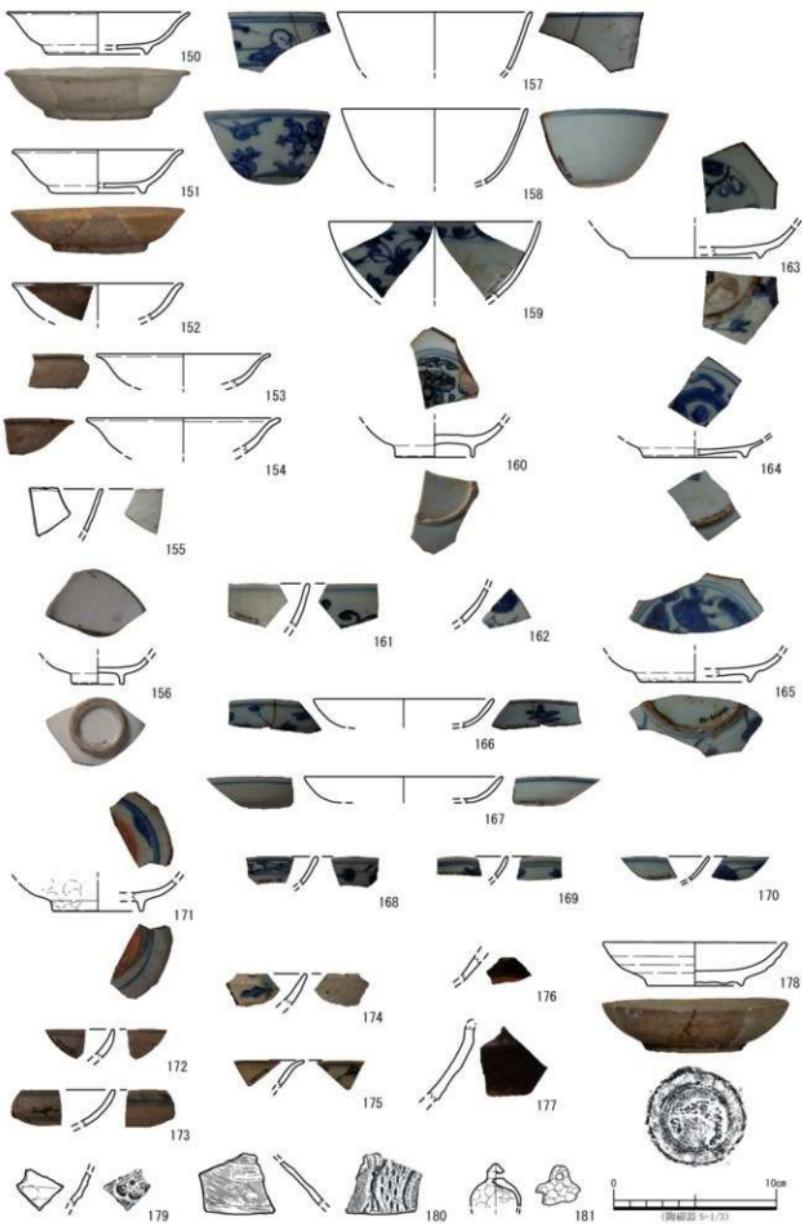
(2) 国産陶器 (176 ~ 196)

国産陶器は、瀬戸・美濃系と備前焼が認められる。肥前系陶器の出土は皆無である。

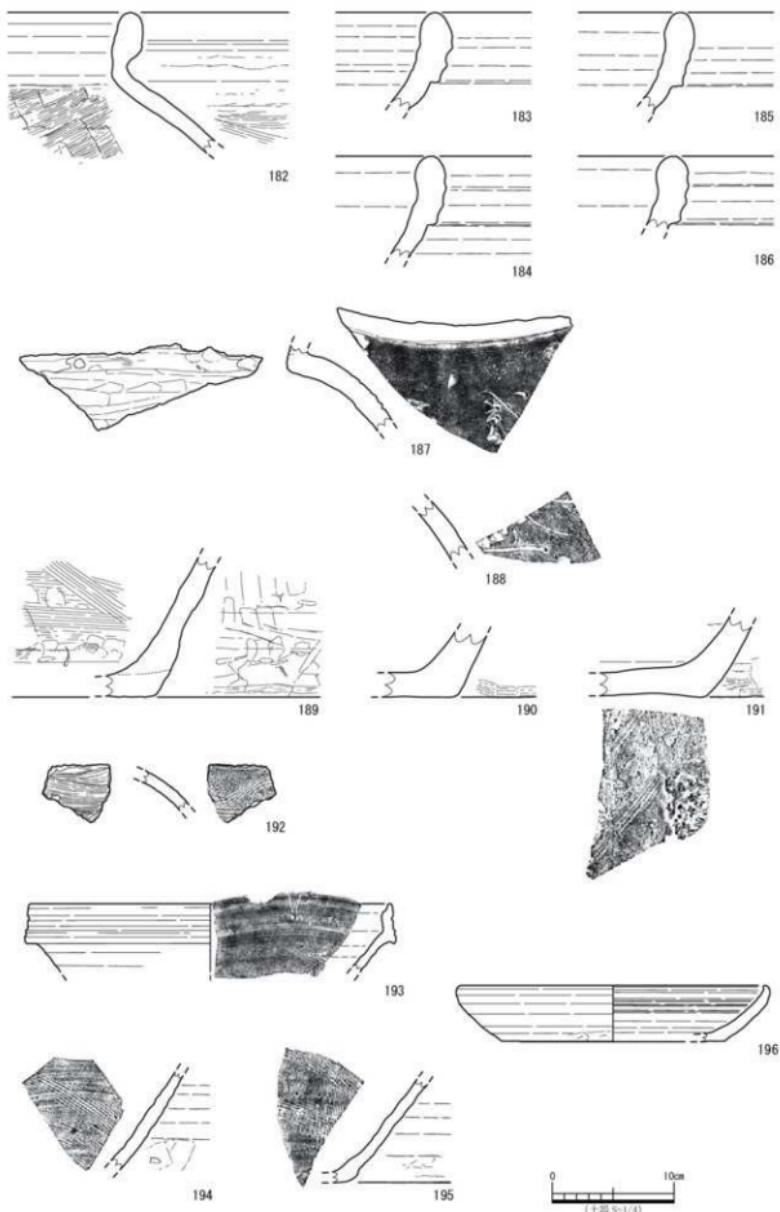
176 ~ 178 は瀬戸・美濃系陶器である。天目茶碗 (176, 177) は小片が 3 点出土しており、2 点を実測した。176 は胴部下半、177 は胴部上半から底部近くまで残存する。破片そのものに出土地点の注記はないが、報告書の遺物分布図では本丸 (A 地区 5) で「天目茶碗片」出土が表記されている。178 は瀬戸・美濃系灰釉丸皿である。高台内に重ね焼きの痕跡を残す。器面は貫入が顕著に認められる。16 世紀後半の年代が指摘できる。

179 ~ 181 は瓦質土器である。179 は本丸 (C 地区 -1 北西) から出土した小片である。外面に印文の花文が見られる。180 も同様に印文が外面に見られるが図の内容は判然としない。181 は吊り手と穿孔があり、土鉢形をした小片である。

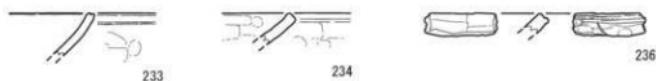
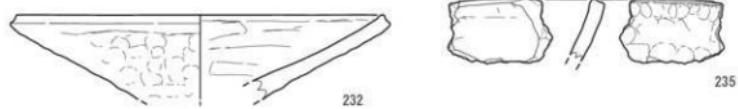
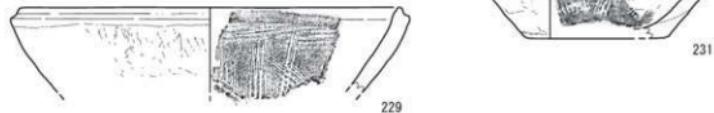
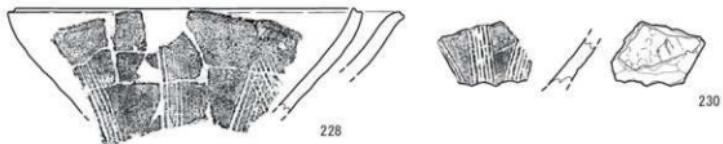
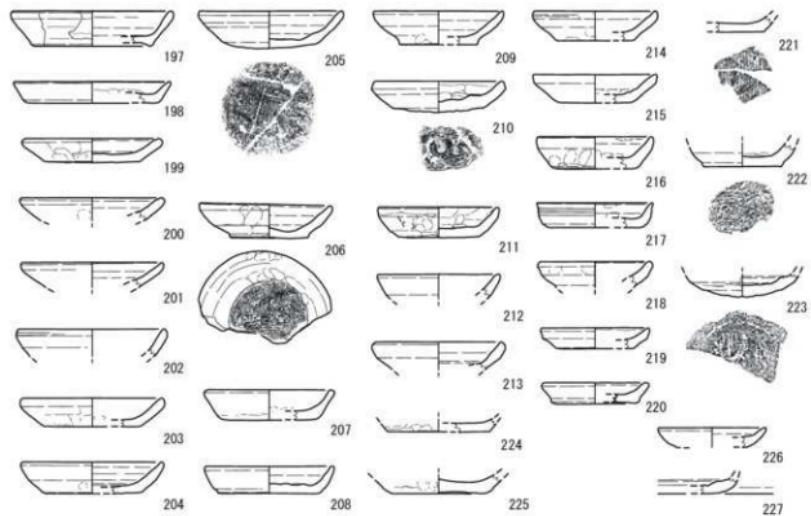
182 ~ 196 は備前焼である。器種は、壺・大甕・擂鉢・大皿 (盤) が認められる。出土遺物の多くは大甕片である。182 ~ 191 が大甕片である。182 は口縁部が直立気味で玉縁は扁平である。乗岡編年の中世 5a 期で、雨滝城跡出土遺物で唯一の 15 世紀に遡る資料である。183 ~ 186 は大甕口縁部片である。内湾気味に立ち上がり外面には 183 で 2 条、その他で 3 条の凹線が見られる。185, 186 は出土地点が不明であるが、報告書では本丸 (A 地区 5) で 3 条の凹線を有する口縁部の出土が記載されており、どちらかの破片がそれに相当すると考えられる。187 は体部上端部付近の破片で、外面に「式」の線刻がある。「式石入」の銘文の可能性が高い。188 も同様の線刻である。残存する銘文は一部で銘文の内容は判然としない。189 ~ 191 は大甕の平底の底部である。体部外面下端部には横方向のケズリが見られる。191 は底部外面に粘土塊の付着が見られる。192 は壺の体部肩部片である。外面に櫛刷波状文と櫛形直線文が見られる。193 ~ 195 は擂鉢である。193 は口縁部片で、口縁帯に 4 条の凹線が見られる。口縁外



第5-42図 雨滝城跡出土遺物 中国産陶磁器・国産陶器① (S=1/3)



第5-43図 雨滝城跡出土遺物 国産陶器② (S=1/4)



第5-44図 雨滝城跡出土遺物 土師質土器① (S=1/4)

角はつまみ上げられ口縁部内面は段になっている。口縁部下頸以上と以下では重ね焼きにより色調に差が生じている。194, 195は放射直線の擂目に加えて斜め方向のものが付加されている。196は大皿（盤）である。口端部を斜め上に小さくつまみ上げている。備前焼大甕の口縁部形態や擂鉢の口縁部形態並びに擂目の状況、大皿（盤）の存在・形態等は、乗岡編年の近世I b期に位置づけられる。

2-3. 土師質土器

(1) 杯・皿 (197 ~ 227)

昭和57年に行われた発掘調査の出土遺物の主体は土師質土器の杯・皿で、大多数は小片である。土師質土器杯・皿は大多数が類似した色調・胎土をしている。器壁が厚く、色調はにぶい黄褐色を呈している。底部外面は糸切り痕が多いが、若干数回転ヘラ切り痕が確認できる。口径10~11cm、器高2.5cm前後の事例が多い。一方、口径8~9cmの小皿が若干数認められるが、9~10cmの事例もあり、法量では明瞭に区分できない。226, 227は浅黄橙色をした少数派であるが、形態はにぶい黄褐色を呈する大多数の事例に類似する。

雨滝城跡出土土師質土器杯・皿の類例としてさぬき市本村遺跡資料、東かがわ市城ノ内遺跡資料が挙げられる。本村遺跡は石田城跡、城ノ内遺跡は虎丸城跡に隣接しており、ともに城跡との関連が指摘できる遺跡である。よって、雨滝城跡との関係が指摘できる。一方、さぬき市昼夜城跡や六車城跡とは大きく様相が異なる。

さぬき市本村遺跡は出土瓦の様相が引田城跡に極めて類似している点でも注目される。雨滝城跡とは類似した土師質土器杯・皿が出土している点に加え、後述する放射直線に加えて斜め方向の擂目を有する土師質土器擂鉢や類似する高台付鉢の存在も類似する。瓦の様相は異なりながらも両者の時期的な近さが指摘できる。

(2) 擂鉢・鉢 (228 ~ 236)

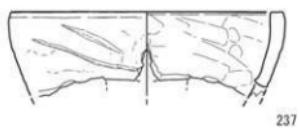
228~231は擂鉢である。口縁部形態は口端部内角をわずかにつまみ上げ、口端部はナデによって凹んでいる。また、体部上端部には横ナデを巡らしている。こうした形態は土師器釜に共通する特徴で、15世紀から続く在地土器の形態的特徴である。擂目は放射直線に加えて斜め方向のものが付加されており、備前焼擂鉢との共通点が指摘できる。また、同様の土師器擂鉢はさぬき市本村遺跡から出土している。

232は厚手の鉢で体部は直線的にゆるやかに立ち上がっている。口端部はナデを巡らして凹む。現存部の下端は肥厚しており底部付近と思われる。内面に煤の付着が認められるが外面には認められない。器種・用途は判然としない。233, 234は薄手の製品である。煤の付着はない。235は土師器鍋の口縁部である可能性もある。236は外面に斜線の線刻の一部が見られる。

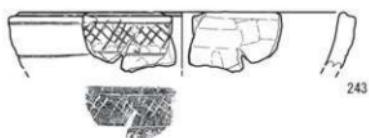
(3) 茶道具 (237 ~ 242)

237~240は体部にスカシが見られ、茶道具の風炉である可能性がある。ボウル形でスカシは口縁部から5.5cm下にある。237はスカシ上辺が斜め上がりである。238はスカシ上辺が横幅5.5cm以上水平になっている。239はスカシ側面が斜めに直線的にのびている。240は239と同一個体の可能性がある。直角気味に屈曲するスカシ片である。

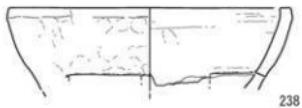
241, 242は茶釜である。口縁部は外反して短く立ち上がる。肩部は1対の穿孔を有し、その下側に把手をつけた形態である。242は把手部分が剥離している。2片は接合しないが同じ袋



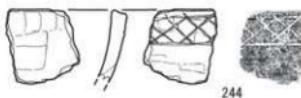
237



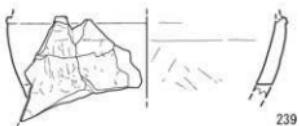
243



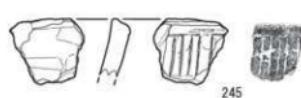
238



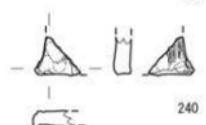
244



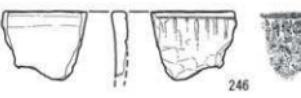
239



245



240



246



241



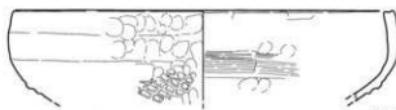
247



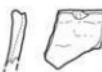
242



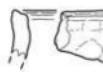
248



249



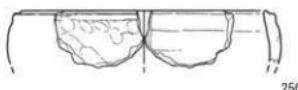
251



252



253



250



254



255



第 5-45 図 雨滝城跡出土遺物 土師質土器② (S=1/4)

に入っていた。15～16世紀の遺跡から出土例の多い在地土器である。

(4) 火鉢 (243～248)

口縁部外面の2条の沈線で区画した文様帶に線描の斜格子や縱連子の連続文が表現されている。247はスタンプにより円形、縱連子を表現している。口縁部外面に上下2条の沈線で区画した文様帶に連続文を施した類例は周辺地域ではさぬき市本村南遺跡、上辛立遺跡、六車城跡等で出土しており、15～16世紀の在地土器として評価できる。類例の文様表現方法はスタンプ文が多いのに対して雨瀧城跡では線描が主体であり、時期的な特徴が表出している可能性がある。248は高台を有する鉢形の形態をしている。内面は煤により黒ずんでいる。類例はさぬき市本村遺跡で出土している。

(5) 釜 (249～255)

釜は口端部内角をわずかにつまみ上げ、口端部はナデによって凹む口縁部形態をしている。また、体部下半外面の格子タタキ等、在地的な特徴が指摘できる。雨瀧城跡出土遺物では口縁部外角（体部上端部）に鍔状の突出の認められない事例が多いが、253はかろうじて痕跡的な鍔部が認められる。脚部片は唯一255が出土しており、足釜の存在が指摘できる。

3. 聖通寺城跡

聖通寺城跡は、坂出市と宇多津町にまたがる聖通寺山の山頂に位置する。聖通寺山は、標高122mの北峰と標高115mの中峰という2つの山頂部をもつ。北峰は公園等の開発により大きく削平され旧状をほとんど残していないが、尾根筋に曲輪が配置された連郭式の曲輪群であったと想定されている。中峰は鉄塔や駐車場等の開発が及んでいるが城跡の名残を留めており、連郭式の曲輪群がみられる。

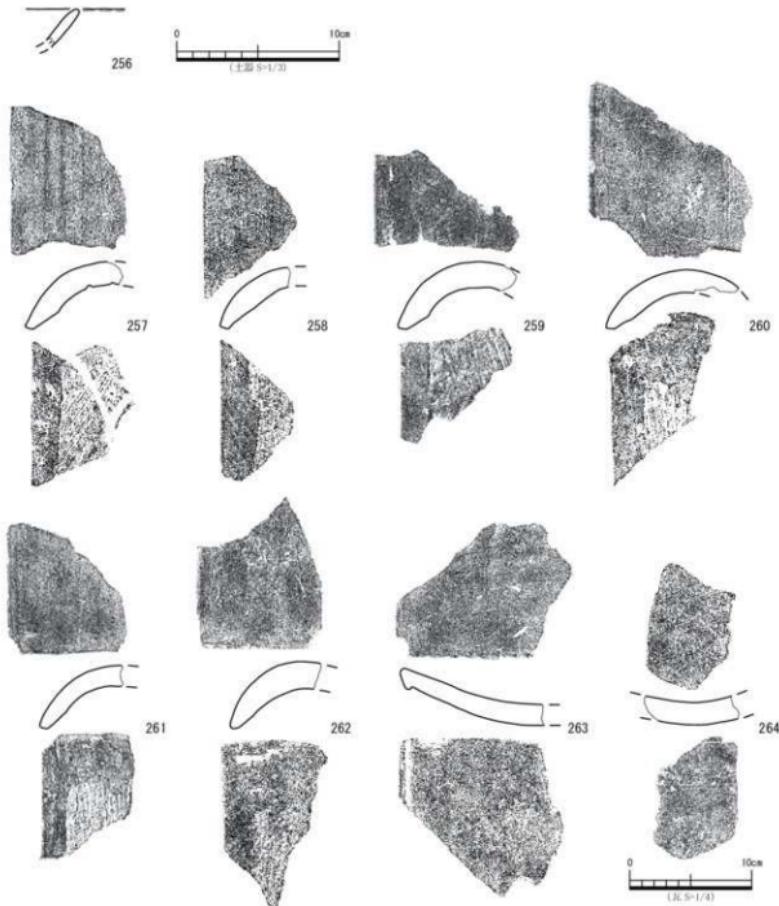
江戸時代の軍記物や地誌には、南北朝期～戦国期に奈良氏によって城跡が築かれたと伝えられる。その後、1585年に仙石氏が入部してから生駒氏が高松城を築くまで仙石氏・生駒氏の居城として利用された。そのため、奈良氏が築いた中世山城を仙石氏・生駒氏が改修した可能性が高い。

1984～1985年に香川県教育委員会による瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査で、計10本のトレンチが設定され発掘調査が行われた。各トレンチの発掘調査の詳細については、調査報告書をご参照いただきたい（香川県教育委員会編 1986）。本報告では、中峰頂部に設定した6トレンチの遺物を紹介する。

6トレンチからは丸瓦・平瓦片が多数出土した。軒瓦は認められない。他には銅錢・鉄製品・土師質土器が認められた。鉄製品は鉄釘と刀子が報告されており、銅錢は寛永通宝2点、開元通宝1点、天○通宝1点が報告されている（香川県教育委員会編 1986）。ここでは、土師質土器片および瓦片について報告する。

出土遺物

256は土師質土器の小皿である。257～262は丸瓦で、凸面はヘラミガキが施され、端部はナデされる。凹面はコビキA・布目・吊り紐痕・タタキ痕・ナデが認められる。263,264は平瓦で、凸面は摩減しており調整は不明だが、264にコビキBの可能性がある痕跡が認められる。凹面はヘラミガキ・ナデが施され、布目が残る。丸瓦・平瓦とともに焼成は良好である。



第5-46図 聖通寺城跡出土遺物 (S=1/3・1/4)

出土した瓦片は16世紀末～17世紀初頭の特徴をもつ。このことは、16世紀末～17世紀初頭に中峰頂部に瓦葺き建物が建てられたことを示す。時期的状況を考えると、瓦葺き建物は聖通寺城に関連する施設で、豊臣秀吉の四国平定以降に豊臣大名によって建てられたと考えられる。そのなかでも、最初に聖通寺城を居城とした仙石氏による可能性が高いだろう。

おわりに

香川県を代表する城跡で発掘調査が過去に行われた、天霧城跡・雨滝城跡・聖通寺城跡の出土遺物を再整理し、必要な遺物について報告した。執筆は、雨滝城跡についてを松田が、それ以外を梶原が担当した。その結果、これまで存在が指摘されながらあまり公表されてこなかつた3城跡の瓦について紹介することができた。また、天霧城跡や雨滝城跡では基石や天目茶碗などが出土しており、これまで想定されていたよりも居住性の高い城跡であったことが窺える。

面的に発掘された天霧城跡・雨滝城跡と勝賀城跡を比較すると、遺物量に大きな違いがみられる。前者は出土遺物が非常に多量で、どちらもコンテナ15箱以上の遺物が出土している。一方、後者の出土遺物は少量で、コンテナ3箱である。1節で中井氏が述べているように、その遺物量の少なさも勝賀城跡の特徴といえるだろう。

(梶原・松田)

報告した天霧城跡出土遺物は善通寺市教育委員会、雨滝城跡出土遺物はさぬき市教育委員会、聖通寺城跡出土遺物は香川県埋蔵文化財センターがそれぞれ所蔵しており、遺物の実測及び報告書の掲載あたり多くの便宜を図って頂きました。感謝申しあげます。

第4節 出土遺物からみた戦国時代末から織豊期の讃岐の城郭

はじめに

城跡から出土する遺物の生産年代は、城の年代を直ちに示すわけではないし、ある時期の遺物が確認できないからといって、その時期に城が使われなかったとは断定できない。モノが作られてから埋まるまでの期間の伝世の問題があるし、城としての機能時に常にモノが廃棄され続けるとは限らず、廃城時に継続使用が可能なモノは城外に持ち去られるのは当然のことである。しかし、出土遺物の年代は城の築城から廃城に至る年代を知る重要な手掛かりであることは疑いなく、特に一次的な意味での共伴遺物のうち生産年代が最新の遺物は城の下限＝廃城年代を探るうえで重要である。そもそも遺物の種類・組成や数量は、城の特徴や機能を反映しているに違いない、年代論と複合することで、その時期的変化を探ることもできる。城郭には改修が付き物であるし、同じ城でも機能が時期によって変化することもある。

本稿では戦国時代から織豊期を経て概ね元和元（1615）年までの讃岐の主要城郭跡からの出土遺物を点検し、勝賀城跡を評価することを目的とする。

1. 主要城郭の遺物

A：引田城（東かがわ市引田）

讃岐東部の海に臨む大規模山城である。秀吉による四国侵攻の橋頭堡となった城で、天正11（1583）年に仙石秀久が入城し長宗我部軍と交戦したと伝わる。天正15（1587）年に生駒親正が讃岐に入封した際に最初に入ったとされるのも当城で、史料の上でも生駒氏が高松城を築城した後も一国一城令が出される元和元（1615）年までは支城として維持されたと考えられる（橋詰2016）。

トレンチ方式の発掘調査が2011～2014年に実施され（東かがわ市教委編2016）、その成果を踏まえて2020年に国の史跡に指定された。複数の曲輪が自然石を積んだ石垣で囲まれ、北二の丸西の下方にある石垣は高さ5mにも達する（第5-47図1）。

瓦は広範かつ大量に出土しているのに対し、土器・陶磁器は絶じて少なく、8点が報告されているだけである。トレンチは限定的な部位で小面積に限られるのも一因とみられるが、それでも本丸、東の丸中の段、北二の丸で使われたとみられる遺物が出土し、建物礎石や瓦の存在状況と総合すれば、本丸に限らない複数の曲輪の平坦部には瓦葺きの礎石建物が複数あり、そうした建物を中心に居住や消費活動が行われたと判断できる。特に志野焼向付の所在などから上位者が茶の湯を伴って会食できる座敷的な部屋があったことも窺える。

下限年代に関しては、備前焼の擂鉢では斜め方向のスリメを入れるものがあり、16世紀後葉から17世紀ごく初め、筆者の備前焼編年（乗岡2017）の近世I期のものと判断できるし、唐津焼（肥前陶器）の碗や志野焼の向付の所在は大坂城の編年では慶長3（1598）年に始まる豊臣後期の様相（森2000・2015）である。岡山城との比較では慶長5（1600）年を下限とする2期（宇喜多秀家期）の陶磁器群（岡山市教委編1997、乗岡2002）よりは新しい様相で、瓦ではコビキ技法（森田1984）に着目すると重量比で約6%の比率でB技法のものが含まれること（東かがわ市教委編2016）や後述の瓦の同窓関係などは、城郭の最終段階として17世紀初頭



1. 引田城北二の丸北西



2. 雨瀧城本丸南



3. 室山城主郭東辺



4. 聖通寺城南峰主郭南



5. 西長尾城主郭下方の段



6. 天霧城主郭南西下方



7. 九十九山城中腹城門部



8. 和田城主郭北西辺

第 5-47 図 讃岐の戦国末から織豊期の城郭にある石積み・石垣

には高松城を本城とする生駒氏の支城として機能していたとの評価に結びつく。

B：雨滝城（さぬき市津田町津田・大川町富田中・寒川町神前）

大規模な山城である。史料の上では、安富氏歴代の居城であったが、天正 11(1583) 年に長宗我部方の攻撃を受けて落城し、その軍門に下った六車宗湛が入城した。安富盛定は秀吉を頼つて讃岐を退去し、天正 13 年の秀吉勢の四国進攻後は秀吉より仙石秀久の与力に付けられた。

1981・1982 年度の発掘調査（雨滝城跡発掘調査団編 1982）で出土した遺物は、本章第 3 節の通り（以下の〔 〕は同遺物番号）であるが、主郭を含む複数の曲輪で礎石建物が検出され、土器・陶磁器も複数の曲輪で出土しており、106 点が掲載されている。瓦も本丸・西 2 郭・5 郭といった複数の曲輪で出土しているが、軒丸瓦・軒平瓦とも各一種で、一元的な契機の一時期に限って複数の瓦葺建物が建てられた可能性が強い。本丸の局所で現存高 1.5 m 程度で大きな自然石を積んだ石垣が確認できる（第 5-47 図 2）ほか、複数の曲輪の斜面の一部に低石垣が積まれた形跡があるが、瓦葺き建物の直接の基壇を構成する位置関係ではない。

土器・陶磁器では土師質土器小皿が多いのが特徴で、土器の茶道具 [237 ~ 242] の所在も注目される。施釉陶磁器を含めて総合すると、座敷での饗宴や茶の湯、儀礼それに調理を行う場が城内にあったことを窺わせる。

下限年代に関しては、備前焼では斜めスリメの播鉢 [193 ~ 195] が近世 I b 期のものであるし、大皿（盤）[196] も口端のクセから近世 I b 期でも新相（16 世紀末）といえる。瀬戸美濃灰釉皿 [178] は藤澤編年（藤澤 1993・2001）の大窯 3 期後半（16 世紀第 4 四半期前半）の製品である。青花では、粗製品（福建省漳州窯製）[171 ~ 175] のうちでも高台部無釉品の所在、口縁が内湾する小皿 [166 ~ 170]、高台部が饅頭心型の碗 [160] の所在とその見込部の盛り上り度などは大坂城の編年（森 2000）では豊臣前期（1580 ~ 97 年）相当といえる。

土器鍋 [249 ~ 254] は格子タタキ痕を残すのが特徴的であるが、製作技法・形態を含めて播磨型の系統で、羽釜形 B 系列の最終段階のⅢ類（岡田・長谷川 2003）に該当する。出土品が播磨からの搬入品か讃岐産かの検討は課題としても、兵庫での編年観に照らすと 16 世紀末から 17 世紀初頭の製品とみなされる。瓦はコピキ A 技法によるものだけで、鍋と同様に播磨発とみられる後述の文様変化と総合すると 16 世紀末頃の製品とみられる。

以上の様な遺物群の生産年代は、唐津焼やコピキ B 技法による瓦を含まないことから、廃城年代を積極的に 17 世紀初頭にまで降らせる理由はないが、出土品の圧倒的多数は 16 世紀末の製品で、天正 13 年より新しいものが多く含まれていると見通せる。

C：昼寝城（さぬき市前山）

内陸山間部に立地する中小規模の山城である。史料の上では寒川元政（元隣）が阿波の三好氏に虎丸城を渡し、元亀 3(1572) 年から居城とした。天正 3(1575) 年には三好方により落城したというが、寒川光長は天正 11 年頃には長宗我部方として登場する。

1988・1989 年に主郭で発掘調査が実施された（長尾町教委編 1980）。国人層の城にしては狭い主郭であるが、土星囲みが特徴的でその内外面の護岸石積や建物礎石が検出され、鎧運弁青磁、白磁碗、青花細片、天目碗？細片、土師質土器小皿・土鍋・甕、銅錢、玉石（碁石）・砥

石などが出土した。施釉陶磁は少ないが、それに比べると土器の量が目立っている。小規模としても、やはり座敷的な部屋を含む居住用建物があったとみられる。

D : 高松城（高松市玉藻町）

海に臨む大規模な平城である。史料の上では天正 16(1588) 年に讃岐に入封した生駒親正が、城下町を從えた領国経営のための本城として翌年から築城を開始し、明治に至るまで近世城郭として機能した。

高石垣の林立が想定されるが、築城当初の縄張り・遺構の実体は不詳である。天守台石垣の解体修理に伴う調査によって、慶長年間前半と想定される現存の天守台構築に先行する陶磁器・土器・瓦などの遺物群がまとまって出土している（高松市教委編 2012, 2013）。また、浜ノ町地区、西の丸町地区、東の丸地区をはじめとする区域では、市街地再開発に伴う発掘調査で城下町関連の遺構が検出され、膨大量の陶磁器・土器・瓦などが出土している。その最古相の遺物群は「様相 1」あるいは見通しとしての「様相 0」として捉えられている（松本 2003、佐藤 2003a）。それらは個別遺物の生産年代としては 16 世紀後葉に遡るものも散見できるが、量的には唐津焼・志野焼共伴期以降のものが圧倒し、城下町関連遺構が本格展開したのは慶長年間ないしは 17 世紀初頭に降ると見通せる。

讃岐において 16 世紀末から 17 世紀前葉の城郭跡出土の遺物は、高松城跡に伴うものが圧倒的に多く、城下町を伴う領国経営のための中心拠点としての性格を如実に示している。

E : 藤尾城（高松市香西本町）

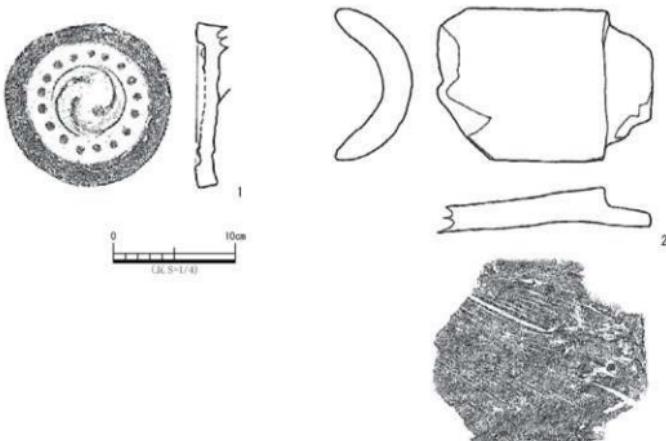
勝賀山の北東山麓に立地する臨海性をもつ小規模な丘城である。史料の上でも勝賀城との関連が深く、香西氏が東南山麓、内陸側の佐料城に代わる本拠として天正 3～5(1575～1577) 年に築城し、天正 13 年に長宗我部軍の攻撃を受けて落城したと伝わる。

防災工事に伴って 1997 年に小規模な発掘調査が実施され、遺構は不詳で城郭としての藤尾城に伴うものとの確証はないが、16 世紀末頃の製品とみられるコビキ A 技法による瓦片が出土した（高松市教委編 2008）（第 5-48 図）。軒丸瓦は尾部が長い左巻き三巴で珠文数は 17 個の瓦当文様をもつが、岡山城での瓦の編年観（乗岡 2001）や後述の天正 12 年の琴平松尾寺例に端を発する軒平瓦と組み合うとみられる文様面が深くて瓦頭上角が丸瓦部に対して大きく突き出す軒丸瓦と比べると、同じコビキ A 技法期のものとしても新相で、天正 13 年よりは新しい製品である可能性が強い。

F : 聖通寺城（宇多津町坂下・坂出市坂出町）

中世の港町として栄えた宇多津を見下ろす大規模な山城で、天正 13(1585) 年の秀吉による四国攻めの後、豊臣大名として讃岐に入封した仙石久秀の居城として整備されたと伝わる。

1985 年度に実施された発掘調査成果（香川県教委編 1986）のうち、中峰の主郭直下の第 6 トレンチからの出土遺物は本章第 3 節の通りである。コビキ A 技法による丸瓦が目立つが、B 技法による可能性がある平瓦も含まれ、16 世紀末～17 世紀初頭の中峰主郭に瓦葺建物があつたとみられる。その中峰主郭の斜面は現状では概して土段に見えるが、一部斜面には石材が配



第 5-48 図 藤尾城の瓦（高松市教委編 2008）

された場所があり（第 5-47 図 4）、別所での石の散乱と合せて石垣が廻っていた可能性が高い。

G : 丸亀城（丸亀市一番丁）

港湾の背後にある大規模な平山城である。慶長 2(1597) 年に生駒一正が高松城に次ぐ領国經營の拠点として築城を開始した。慶長 15 年ないし一国一城令により元和元(1615) 年にいったん廃城となり、山崎家治の西讃岐への入封により寛永 20(1643) 年から再築城された。

生駒期に遡る遺構は城郭部、城下町とともに不詳であるが、城郭部では石垣の林立が想定される。現在復旧工事が進行中の山崎期に構築された三の丸坤櫓の櫓台石垣の基底部付近から出土する生駒期に遡るとみられる瓦は、コビキ B 技法によるものもあるが、A 技法のものが目立ち、慶長 2 年の築城開始時ではまだ A 技法が卓越したと見通せる。コビキ A 技法が慶長年間の初め頃まで温存される状況は、近隣では岡山城などに瓦を供給した岡山の瓦工による製品（乗岡 2001・2021a）と近似する。

H : 西長尾城（丸亀市綾歌町岡田上・まんのう町長尾）

内陸部にある大規模な山城で、土佐に通じる陸路の要衝に立地する。史料のうえでは、天正 7(1579) 年までは長尾氏の居城であったが、同 8 年からは長宗我部氏の武将が入り、天正 13 年の秀吉による四国攻めにより、廃城となったという。

丸亀市教育委員会が保管する城跡内での採集遺物では、土師質土器の甕、備前焼の大甕の各細片が十数点あるほか、本丸、鞍部北側の曲輪で瓦の散布が確認できる。

本丸採集の軒平瓦（阿河 2006）の瓦当文様は、中心飾り宝珠の特徴的なものである。そうした瓦の散布との位置的な関連はないが、本丸から東に二段ほど下がった小曲輪には土留めを

主目的とするとみられる現存高1m余で裏栗石を伴う石垣が残る（第5-47図5）。

I : 天霧城（多度津町奥白方・善通寺市碑殿町・三豊市三野町大見）

やや内陸部にある大規模な山城で、国人香川氏の居城であった。史料によれば香川之景は永禄元（1558）年に阿波の三好氏の傘下に入り、天正4（1576）年には織田信長と連携した。天正7年になると香川氏は長宗我部氏の傘下となって養子を迎える、天正11年からは元親の子の親和が城主となつたが、天正13年の秀吉の四国攻めにより廃城になったという。

1981年度に採石に先立つて東方尾根曲輪が広範に発掘調査され（一市二町天霧城跡保存会編1997）、1990年に国史跡に指定された。複数の曲輪で現存高1.5m、地山石を用い裏栗石を伴う石垣を伴う（第5-47図6）。

出土遺物はコンテナ約40個分あり、陶磁器などは本章第3節の通り（以下の〔 〕は同遺物番号）であるが、実は量の大半は土器である。

遺物群の年代について、陶磁器では、生産が15世紀から16世紀前半に遡る青磁〔44～52〕や備前焼壺〔66〕、16世紀前半から中葉を中心に盛行した青花の蓮子碗〔16、31、32〕や基筒底皿〔38～40〕など史料にみる香川氏全盛期の製品が確認できるいっぽう、備前焼では斜めスリメを入れた近世I b期の播鉢〔62〕、高台無釉のものを含む粗製の青花（漳州窯製）〔15、33、34、41～43〕を一定量含むこと、瀬戸美濃産の天目碗〔60〕は全形の扁平化が進んで藤澤編年の大窓3期（1560～1590年）に比定できるほか、青花でも口縁が内湾する小皿〔22〕の所在も、龍の意匠をもつもの〔9・35〕と合せて16世紀後半の内でも新相で、大坂城の編年（森2000）に照らすと、豊臣前期（1580～97年）との共通性が窺え、史料から廃城とされる天正13年よりも新しい製品を含んでいる可能性が高い。

土器については小皿が圧倒的に多く今後の編年作業の進展が待たれるところであるが、播鉢のうち、第5-55図94などは口縁が「く」の字に折れて、14世紀段階における備前焼播鉢の模倣形態を起点とする製品からの乖離（片桐1992）が相当に進み、高松城下出土の16世紀最終末から17世紀初頭の製品（（財）香川県埋文センター編2003など）に近似した形態をもつし、取手付鍋（第5-55図95）も口縁外角の突起が退化して新相で、陶磁器から窺える年代観と整合する。

遺物組成からは、茶の湯に関わりそうなものを含む中国産・瀬戸美濃産の施釉食器類、大量の土器小皿、また墓石・石硯が含まれて上位者の恒常的な居住や饗宴・儀式・遊戲・文書作成が行われた建物もしくは空間があつたことが想定される。一方で、碗では施釉陶磁器ばかりではなく土器製がまとまって所在し、播鉢では備前焼より土器製が多く、さらに土器製鍋も量的に目立つことは、城に関わる人々の階層が幅広くて人数も多く、盛んに消費活動が行われ、多数の兵員のための陣中食の調理も行われた状況が彷彿される。

そのほか、各種の鉄鎌、金具、銅錢などの金属器が出土している。また、先の恒久的な建物が所在したとの見通しと整合して、主郭周辺や東方尾根発掘地で瓦の散布が確認されている。

J : 橋城（天王城跡）（三豊市財田町財田）

内陸部の谷間を見下ろす丘陵部に立地する中規模の山城で、史料上は大平氏の居城であった

とされる。長宗我部氏の侵攻により落城したと伝わるが、土壘囲みの主郭の構造などの縄張り論から、長宗我部氏の城として改修されたとの評価がある（松田 2003）。

主郭を主対象として 2013 年度に発掘調査が実施され、土壘内側の石積み、郭内の掘立柱建物跡などが検出された（三豊市教委編 2014）。土壘に伴う護岸の低石積は、石材が小さめの玉石が目立ち、先述の昼寝城の石積みと同じく、長宗我部氏の本拠で多数確認できる「土佐型土壘石積み」（乗岡 2021b）として捉えられるもので、縄張り論からの評価と整合する。

後世の混入遺物を別として、出土した施釉陶磁は華南三彩鳥形水滴の細片が 1 点のみである。備前焼は数点あるが 15 世紀代の甕の口縁などである。他は總て土師質土器で、うちでは小皿が圧倒的に多く、10 本のトレンチを併せて 300 点以上が出土した。その他の土器では擂鉢を中心とし、こね鉢を含めた鉢類、つまり調理具が十数点以上あって目立っている。その他、石硯が 1 点出土している。

上位者の恒久的な居住も僅かに垣間見えるが、儀礼と恐らく兵員向けも含むと思われる調理（飲食）行為が色濃く窺える遺物組成である。

2. 瓦からみた城郭群

2-1. 瓦葺き建物を伴った城郭

先に出土遺物の概要を記した 10 城のうち、8 城までで一定量の瓦が確認でき、瓦葺き建物があつたと判断できる。このうちコビキ B 技法による瓦があるのは引田城、高松城、丸亀城、可能性として聖通寺城の 4 城で、他はコビキ A 技法によるものだけで 17 世紀に入ると少なくとも新調瓦を用いた形での建物整備は行われなかつたとみられる。このことは、16 世紀の最終末ないし 17 世紀のごく初頭から本格的な全国流通が始まる唐津焼、志野焼、磁器質で疊付に砂が付着する粗製で磁器質の青花碗 F 群（森 2000）などが確認できるのは引田城、高松城、丸亀城の 3 城で、他では未確認である状況とよく整合している。

なお、上記 8 城以外では、本村遺跡（さぬき市寒川町石田東）の井戸などからコビキ A 技法を主に少量の B 技法の製品を交えた瓦が出土しており、隣地にあった石田城に生駒氏の支城的施設があった可能性が指摘されている（さぬき市教委編 2014）。

また、大名や有力武将の居城として整備された織豊系城郭の特徴は、瓦・礎石建物・石垣が共存ないしは有機的に結合していることにある（中井 1990, 2017）とされるが、瓦葺きの城郭建築の基礎としての石垣は高松城で確認できる。また詳細不明とは言え一般論として丸亀城で想定できるほか、引田城でも確認できる。建物の直接的な基礎とは言えないにしても曲輪レベルでの石積み・石垣と瓦の共存は雨滝城と天露城で確認できるが、西長尾城は瓦と石垣があるのに地点レベルでの共存関係がない。いっぽう、何らかの石積み・石垣があるのに瓦が未確認な城郭として、昼寝城と橋城のほか、室山城（高松市室新町）（第 5-47 図 3）、黄峰城（高松市生島町黄峰山）、沙弥城山城（坂出市沙弥島）、九十九山城（観音寺市室本町）（第 5-47 図 7）、和田城（獅子ヶ鼻城）（三豊市豊浜町和田）（第 5-47 図 8）、それに勝賀城が挙げられる。

2-2. 同範・同文関係

16 世紀後葉から 17 世紀初頭の城郭に伴う瓦は、他の城郭などの瓦と同範ないしは同系統の

文様をもつものが多く、瓦工人の動向や产地を知るだけなく、城郭における瓦葺建物の整備年代や支城網を探る上でも重要な鍵になる。以下では、注目される瓦群について記述する。

A類：最古相で讃岐在地系

A a：中心飾り宝珠の軒平瓦（第5-49図3～5）

文様は、中心飾りに立体感がある宝珠を据え、左右の唐草は宝珠の下端から蔓状に伸び、子葉が内から外に上・上・下の順に巻く。同範ないしは同範的同文（同範の可能性が強いが、現状では範傷の比較などによる確定に至っていないもの）の製品が西長尾城、高松城（広範な複数地点）、引田城で確認できる。いずれも側端では蔓状部が切断された形である事から、更に左右に続いている瓦筋を切詰めた結果で、元の瓦筋による未知の製品が存在した可能性がある。

この文様の軒平瓦は、現状では分布が讃岐の3城に限られ、岡山や播磨、土佐など他地域では確認できないことから、讃岐の在地性をもった工人による製品とみられる。

3城の出土品とも、瓦筋の剥離剤に「離れ砂」を用い、胎土に大量の砂礫を含み、貼付け式の頸部が分厚く瓦当断面が長方形気味で、側区が狭いという特徴をもつ。

A b：中心飾り三葉の軒平瓦（第5-49図6～10）

文様は、中心飾りに四つの小さな菱形を細線で繋いだような「三葉」を据え、蔓草状に連なった唐草が内から外に上・下・下と巻く。また、唐草のさらに下方に縫い目状の直線が通るという特徴的文様である。

A a類と同じく同範ないしは同範的同文の製品が高松城と引田城で確認できるが、加えて松尾寺（琴平町川西）の仁王堂にもあった（渡邊2018）。仁王堂の軒平瓦には「天正十二」（1584）の刻銘があり、また同棟札の「瓦大工 ウタツ三郎左衛門」の文言から、宇多津（宇多津町）に住所をもつ瓦工の製品と判断できる。さらに、この一群の軒平瓦の瓦筋は、佐藤竜馬氏の検討（佐藤2014）により、0・1・2段階：完形⇒3段階：下縁切り落とし⇒4段階：両端切り落とし、と推移したことが判っており、0～2段階のものが松尾寺、高松城（広範な複数地点）、引田城にあるのに対し、3・4段階のものは高松城にしかない。天正13年以前、すなわち長宗我部氏の勢力下段階に端を発し、生駒氏段階に至るまでの長きに渡る製品と言える。

少なくとも2城の第1～3段階の出土品は、瓦筋の剥離剤に「離れ砂」を用い、胎土に大量の砂礫を含み、貼付け式頸部が分厚くて瓦当断面が長方形気味、側区が狭いという特徴をもつ。

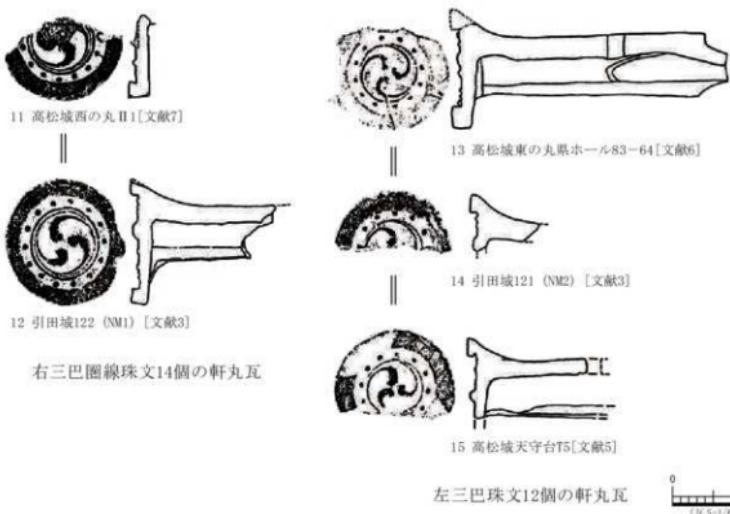
A c：圓錐内に右巻き三巴+珠文数14の軒丸瓦（第5-49図11～12）

高松城（広範な複数地点）と引田城の出土品で同範ないしは同範的同文関係が確認できる。コピキ痕が確認できる個体は總てがA技法により、瓦当文様面が外縁に対して深く、瓦当上角が丸瓦部に対して鋭角に張出す度合いが顕著で古相を呈す。また瓦筋の剥離剤に「離れ砂」を用い、胎土に大量の砂礫を含む。

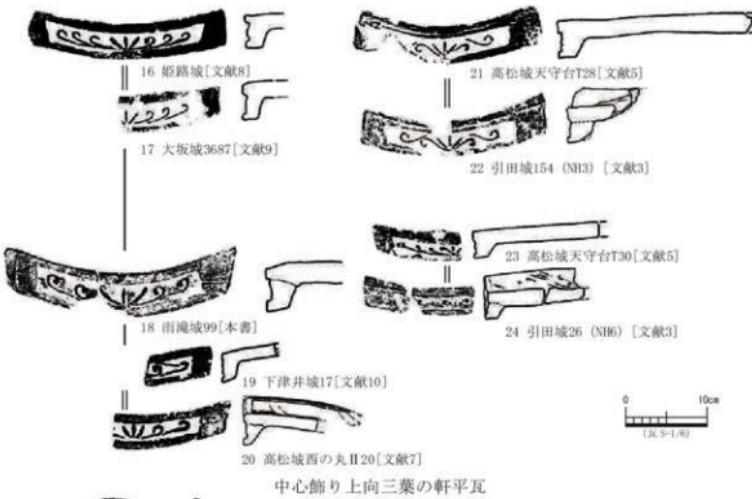
A d：左巻き三巴の尾部が連結し珠文数12の軒丸瓦（第5-49図13～15）

A c類と同じく高松城（広範な複数地点）と引田城の出土品で同範ないしは同範的同文関係が確認でき、製作技法、形態、胎土の特徴なども近似する。

A類の軒瓦は城郭レベルでもその内の曲輪・地点レベルでも、しばしば共存状況にあり、離れ砂の使用や胎土の砂粒の多さ、あるいは断面形などを含めた形態や製作技法の共通



第5-49図 讃岐在地系とみられる瓦



第5-50図 同範・同文・同系の瓦

性が強いことから、全体としてセット関係にあり、少なくとも天正 12 年段階には宇多津に居た瓦工による製品の可能性が高そうである。さらに言えば、微妙な新古觀や引田城での地点レベルでの共存関係や量比からすると、本来的には A a 類と A c 類、A b 類と A d 類がそれぞれ組み合った可能性が指摘できる。

B 類：播磨周辺系とみられる雨瀧城の瓦

B a：中心飾り上向き三葉の軒平瓦（第 5-50 図 16～20）

雨瀧城出土の軒平瓦は、中心飾りが上向きの三葉で、唐草が上に 2 転するが、唐草が 3 転するなど先行的な文様の軒平瓦が姫路城と大坂城で確認できる（田中 1994）。両者は同范とみられ、秀吉の姫路城や大坂城が築城される天正 8～11（1580～1583）年もしくはそれ以降の製品とみられる（山崎 2008）。一方、雨瀧城例より後出的な製品が慶長 8（1603）年から大改修される下津井城（倉敷市下津井）と高松城西の丸地区で同范関係をもって確認できる。雨瀧城例は古ければ天正年間後半であるが、唐草 2 転、側区の広がりなどに注目すればさらに新相で天正末～文禄年間頃の製品の可能性が強そうである。また、姫路城・大坂城例は、瓦当上角の面取りが行われないなど、その作り方からして姫路系以外と評価されるが（田中 1994）、雨瀧城の軒平瓦は讃岐からみれば秀吉の居城の瓦に通じる外來系で、この種の三葉の中心飾り文様をもつ軒平瓦を作った工人の故地は姫路ではないにしても、文様系譜上の起点は播磨周辺に違いない。なお、雨瀧城例は、平瓦部凹面の瓦当寄りは幅広にナデが及んで面取り状である。

B b：巴頭部が C 字の左巻き三巴で珠文数 20 の軒丸瓦（第 5-50 図 25・26）

雨瀧城出土品と同じく頭部が C 字状で珠文数 20 個程度の軒丸瓦と同文異范で、コビキ B 技法による後続的な軒丸瓦が高松城本丸から出土している。

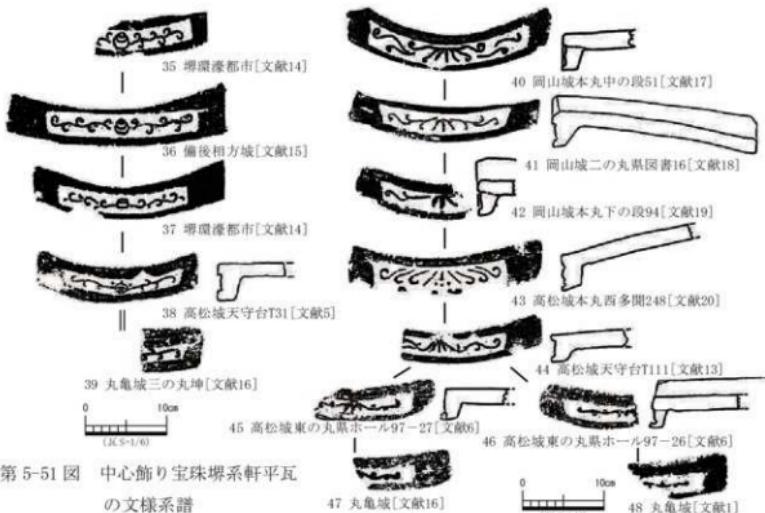
B a 類には新相品が所在することと合せて、雨瀧城の瓦を作った工人の系譜が一時期讃岐に定着した可能性が窺える。

C 類：コビキ A 技法期を中心とする他の同范～同文瓦（第 5-50 図）

軒平瓦では中心飾りが上向三葉で唐草 2 転のもの（第 5-50 図 21・22）と同じく上向三葉で、小さな唐草が 3 転するものについて、高松城と引田城間の同范的同文関係が確認（阿河 2016）できる。また、軒丸瓦では左巻き三巴で珠文数 18 個のもの（第 5-50 図 30～32）に備前下津井城（倉敷市下津井）、引田城・高松城で同范的同文関係が確認できるが、下津井城例はコビキ A 技法によるに、高松城天守台例では B 技法によっていて、コビキ技法の転換期に供された瓦范であったことが分かる。また、左巻き三巴で同じく 18 個でありながら前掲より大きめの珠文をもつもの（第 5-50 図 33・34）も引田城・高松城で同范的同文関係が確認できる。以上は、高松城と引田城の本城支城関係が瓦の同范的同文関係に反映した事例として評価できる。

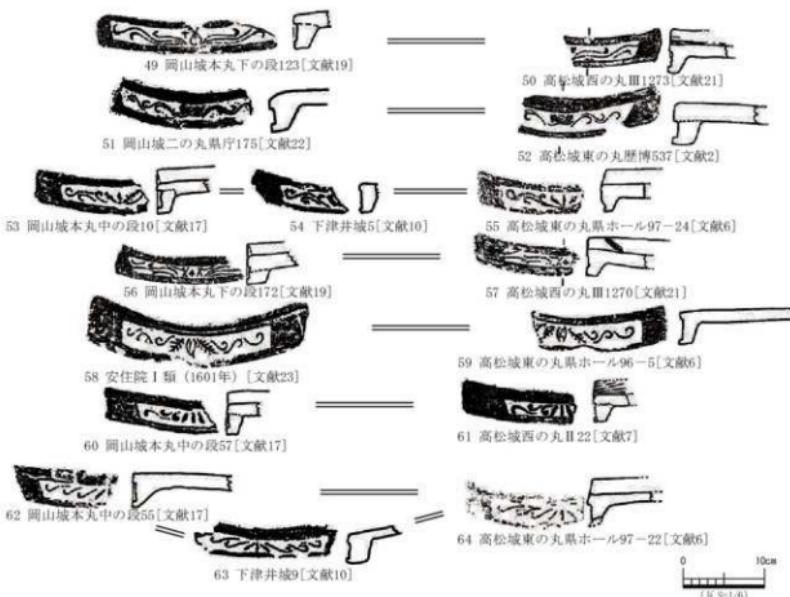
D 類：中心飾り宝珠の堺系の軒平瓦（第 5-51 図）

中心飾りが凸線表現の宝珠で蔓草状の唐草が左右に延び鉤形の子葉が前後に付くのが特徴的な文様の軒平瓦は、高松城と丸亀城（第 5-51 図 38・39）で同范的同文関係が確認できる（丸亀市教委編 2022）。この文様の先行形態とみられるもの（第 5-51 図 35）は堺環濠都市遺跡（堺市）



第5-51図 中心飾り宝珠堀系軒平瓦の文様系譜

第5-52図 中心飾り下向き三葉岡山系軒平瓦の文様系譜



第5-53図 岡山と讃岐の軒平瓦の同范・同范的同文関係1

や備後の相方城（福山市新市町）などで確認されており、和泉の堺系瓦工による製品と評価（山崎 2008）されている。堺の瓦工の系譜を引く一派が慶長期の讃岐にやって来た可能性があり、生駒氏の本城・支城の瓦を生産したという図式がみえてくる。文様系統を俯瞰すると、讃岐側の製品は文様が相當に崩れていて、相対的に新しいと評価できる。

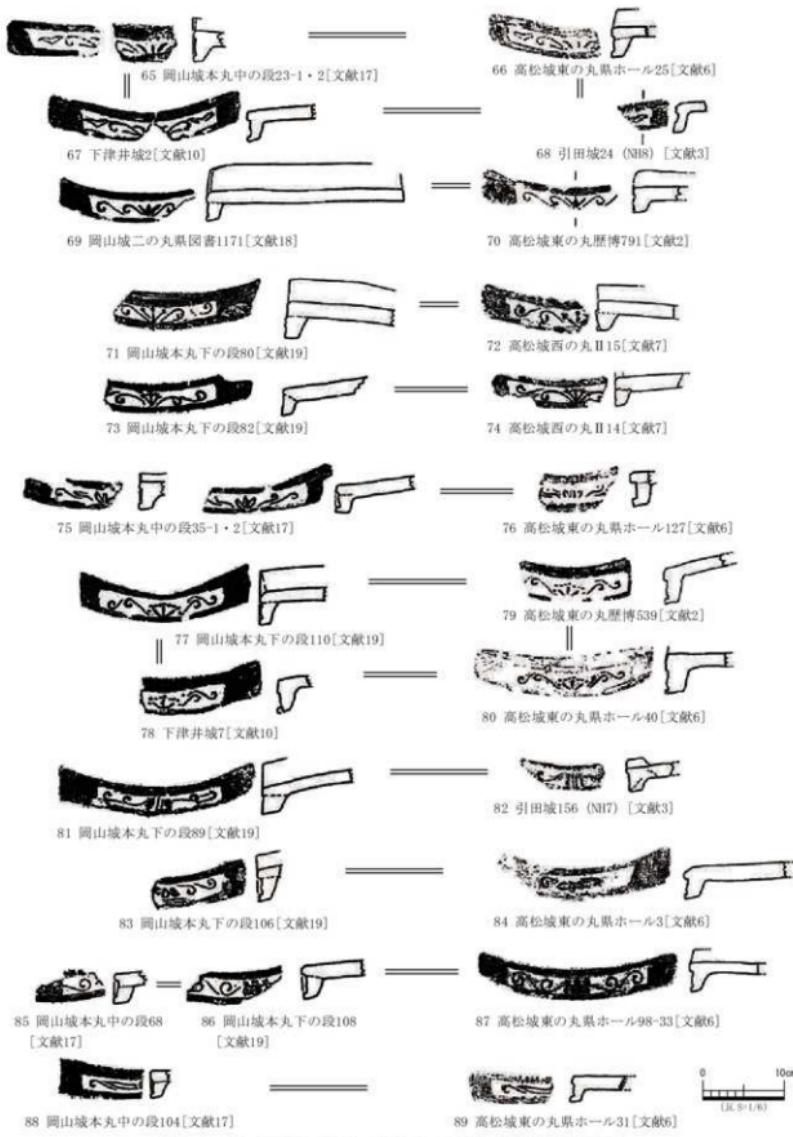
E類：中心飾り下向き三葉の岡山城2式期中の段51の流れをくむ軒平瓦（第5-52図）

中心飾りが下向き三葉で唐草が左右に伸びて瘤状の子葉が三つ付くのが特徴的な軒平瓦（第5-52図45～48）は高松城と丸亀城のそれぞれ複数地点で確認できるが、両城のものは同文異範関係にあって、生駒期における本城支城関係を反映している。細かくみると、丸亀城例の方が微妙に萎縮が進んでいて新相であるが、これらの前身とみられるものは高松城や備前岡山城で確認できる。最も先行的であるのが岡山城本丸中の段51（第5-52図40）（岡山市教委編1997）で、その同范品とみられるものは、備前常山城（岡山市南区・玉野市）や大坂城三の丸で確認できる（黒田・乗岡2000）。岡山城本丸中の段51は岡山城2式（宇喜多秀家期）、大坂城例は豊臣前期でも新相に帰属し、天正末から文禄年間を中心とする時期の製品とみられる。文様系譜を俯瞰すると、古い製品の分布の中心は岡山側にあったのに対し、新しい製品の分布の中心は讃岐側にあり、岡山城本丸中の段51を作った瓦工の系譜を引く工人の一派が岡山から讃岐に移って一時的にせよ土着化し、慶長期の生駒氏の本城支城の瓦を作った可能性が窺える。D類と同じく当初は国外で育まれた文様が讃岐に移ると急激に崩れて萎縮化を辿ったことも注目される。

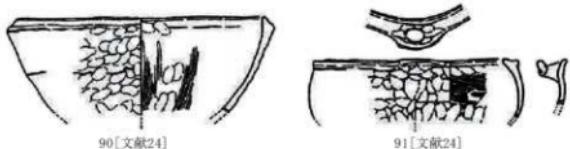
F類：コピキB技法期を主とする岡山城出土品と同范の軒平瓦（第5-53、54図）

C類、D類、E類は直接的な同范もしくは同范の同文関係が岡山城と讃岐の城郭出土品間では未確認であるのに対し、F類はそれが確認でき、かつコピキB技法期のものを主体とする。これらの分布の重心は下津井城と同范関係をもつものを含めて岡山城側にあり、またその系譜を引くとみられる文様がその後の岡山城で確認できるものも含まれ、岡山から讃岐の高松城、引田城に向けた製品搬出、さもなければ岡山の工人（乗岡2021a）の一時的な讃岐での出張製作によるものと評価できる。この類型として今回示した軒平瓦の組合せは、既に指摘されていたもの（乗岡2001、佐藤2003a、阿河2016）を含めて19組に達する。コピキB導入初期の高松城に供された新調瓦の多くと引田城に供された補足瓦の大半は岡山の工人による可能性が高いことになる。なお同期前後の丸亀城の瓦の軒平文様は先述以外については現状不明である。

第5-53図の49, 51, 53は、岡山城側（乗岡2001）では岡山城2式期（コピキA技法期）に帰属し、讃岐側の製品もコピキA技法段階まで遡る可能性がある。また同58は岡山城出土品ではなく、岡山城近隣に岡山城主小早川秀秋が慶長6（1601）年に建てた安住院本堂（乗岡1993）に供された岡山城3式（コピキB技法最初期）の軒平瓦である。同60も岡山城3式の製品である。それらを除けば、讃岐の城郭より先行的に製作開始と見通せる岡山城側の瓦は、慶長8（1603）年に岡山城主となった池田忠継と続く池田忠雄初期に対応する岡山城4式（下限は寛永初め頃）に帰属する。



第5-54図 岡山と讃岐の軒平瓦の同範・同範的同文関係2



15世紀後葉～16世紀（90・91）



天露城（92～95）

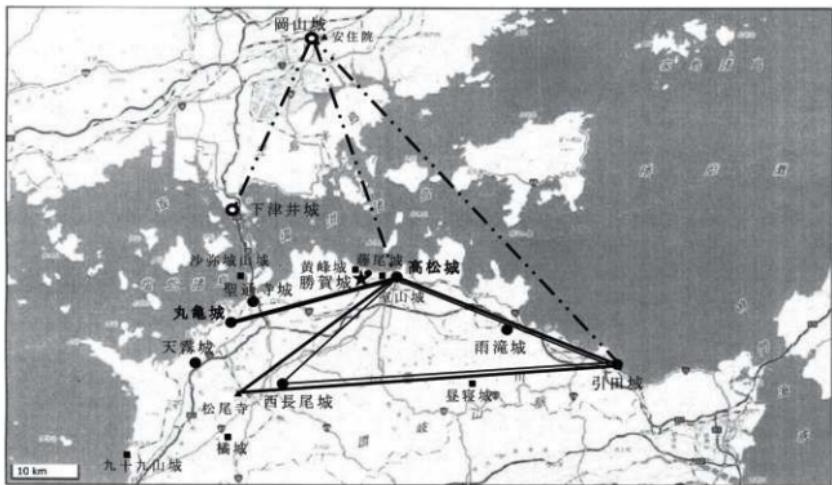


勝賀城（96～110）



高松城下（111～125）

第5-55図 16世紀～17世紀前葉の土師質土器の擂鉢と鍋



● 瓦共伴 ■ 石積・石垣共伴（瓦未確認）

瓦の同范・同范の同文関係：

— I - 1 中心飾り宝珠（讃岐在地系） — I - 2 中心飾り三葉（讃岐在地系）

— II 中心飾り宝珠（堺系退化型）・中心飾り下向き三つ葉（岡山系退化型）

— III 岡山系各種

第5-56図 戦国末～織豊期の城郭群

2-3. 城郭ネットワークの諸段階（第5-56図）

他所にあった建物の古瓦を流用して新築建物に葺かれる事もあり、遺物としての瓦の製作年代が常に建物が建てられた年代を示すとは限らないが、いっぽうで瓦葺き建物の整備は一つの城でも数次にわたることは織豊期以降の城郭では全国各地で普遍的に行われた。遺跡的な諸関係を総合的に見極めながら、瓦の製作年代を糸口に建物の整備年代を考える手順は有効で、讃岐における戦国末から織豊期の城郭群の動向を見通しておきたい。

0段階・I段階：讃岐在地系A類を用いた天正期の瓦葺き建物整備

少なくとも天正12(1584)年には宇多津に居た瓦工の系統による瓦を用いて、西長尾城、高松城、引田城の瓦葺き建物の整備が想定できる段階である。

西長尾城は現状では量的保証が乏しいが、続く段階の瓦の併存が確認できること、城郭構造や縄張り、それに史料から窺える天正13(1585)年廃城とされる城史に照らして、最も先行的である。ここで確認されている中心飾り宝珠の軒平瓦とは別文様であるが、同じ系統と考えられる中心飾り三葉の軒平瓦が、先述した様に長宗我部勢力下の天正12年に松尾寺にあることは注目される。西長尾城の城主であった長尾氏の一族の「宥雅」は琴平宮の前身で近隣にあつ

た松尾寺の創建者で、「元亀四年棟札銘」(1573年)にその名がある(唐木2003)。すなわち、長尾氏は宇多津の瓦工との関わりが深く、西長尾城の瓦は、天正13年直後の仙石氏など織豊系大名の統治下まで城が持続された結果の可能性も否定しきれないとは言え、状況として秀吉軍侵攻直前に長尾氏ないしは長宗我部氏勢力によって瓦葺き建物が建てられたことを示す可能性が十分にある。長宗我部氏は秀吉の軍門に降る前である天正年間前半に、本城の土佐の岡豊城などで既に瓦葺き建物を導入しているという実績がある(松田1994)こと、また西長尾城では未だ地点レベルでは瓦と石垣が共存しておらず織豊系城郭より先行的な様相であることも留意される。

以上の西長尾城例を0段階とすれば1段階は織豊系城郭としての高松城と引田城の建物整備が行われた段階となる。両城の最古相の瓦は、想定される城郭構造と城史に照らして、天正13年を上限とする豊臣勢力下での城郭整備によるものであろう。2城の瓦は、城郭外にあった建物の瓦が慶長年間にあってから二次的に流用された可能性も残るが、この類型の瓦が両城とも広範な複数の地点で一定量が確認できることから、天正後半から文禄年間にかけて、すなわち生駒氏初期段階に瓦葺き建物の造立があり、その後の建物改修で新古の瓦が混在した可能性の方が高い様に思われ、同範囲は両城の本城支城関係を反映していると評価できる。ただし、高松城における瓦範を切り落した段階の製品の存在は、この類型の瓦を用いた建物の造立か補修が、以下に記す新段階にも継続併行して行われたと見通せる。

なお、高松城で様相1に位置づけられている軒平瓦(佐藤2003a)のうち、中心飾が宝珠や三葉で唐草が3転して側区が狭いもの、すなわち歴博[314・321・536]((財)香川県埋文センター編1999)なども、型式学的にみて同じく天正後半に建てられた建物に供された可能性が高いと見通せる。

II段階：播磨周辺系B類を用いた天正末～文禄年間頃の雨滝城の瓦葺き建物整備

中心飾り上向き三葉で唐草2転の軒平瓦と頭部がC字状の三巴で珠文数20個の軒丸瓦の組合せという播磨周辺系とみられる外来系譜の瓦を用いて、雨滝城で瓦葺き建物が整備された段階である。すなわち、雨滝城の瓦葺き建物は高松城と引田城の瓦葺き建物の最初の整備より遅れる可能性が高い。

III段階：岡山・堺など外来系C～F類を用いた天正末から慶長年間の瓦葺き建物整備

III a段階：天正末から慶長ごく初めのコピキA技法段階(岡山城2式併行期)

生駒氏による高松城、引田城、丸亀城で相当数の瓦葺き建物が建てられたとみられる。外来系のほか、高松城では在地讃岐系の瓦によるものも継続して含まれる。さらに瓦工系統は不詳であるが、聖通寺城や天霧城で瓦葺き建物が建てられたのもこの段階の可能性が高いし、本村遺跡出土の瓦が石田城に伴なったもので良いとすれば石田城、藤尾城跡出土の瓦が藤尾城に伴なったもので良いとすれば藤尾城でもこの段階に瓦葺き建物が建てられたとみられる。なお、III a段階は曆年代としてはII段階と重複していた可能性がある。

III b段階：慶長年間を主体とするコピキB技法段階(岡山城3・4式併行期)

生駒氏による高松城、丸亀城を中心に引き続き瓦葺き建物の新築や補修が相当数行われたとみ

られる段階。引田城でも瓦の差し替えを含む補修が行われたとみられる。少なくとも高松城と引田城の新調瓦は岡山の瓦工の製品、あるいは讃岐からみれば外來の系譜を引く文様の製品に大半を負っていた。また、瓦工系統は不詳であるがコビキB技法による瓦の少量所在から石田城や聖通寺城でも建物が維持された可能性がある。

IV段階：讃岐に根付いた瓦工による製品を用いた慶長年間以降の瓦葺き建物整備

本稿の対象外であるが、岡山など他地域の瓦と同范関係や文様系譜が迫れない、中心飾り花など独自色の強い文様の瓦（佐藤 2003a の高松城様相 1 以降の瓦の一部）を用いた建物整備が行われた段階が以後に続く。

以上の瓦と年代観と城跡で確認できる製作年代が最新の土器・陶磁器の年代観を総合すると、天正 13 年に先行する長宗我部氏統治下で瓦葺き建物が建てられた可能性があるのが西長尾城、天正 13 年を上限とする繩豊期に入ってからの最初の瓦葺き建物の整備が生駒氏によって行われたのが高松城と引田城で、天正年間末から慶長年間ごく初め、つまり閻ヶ原合戦ないしは生駒親正期を下限とする時期には高松城、引田城、雨滝城、天霧城、聖通寺城、また可能性としての石田城と藤尾城、そして内での最終段階として丸亀城で瓦葺き建物が建てられ、城郭として維持されたとみられる。

その後の慶長年間で元和元（1615）年を下限とする生駒一正・正俊期で継続的に建物が建てられたり、城郭が維持された形跡が考古学的に迫るのは、現状では高松城、引田城、丸亀城、そして可能性としての聖通寺城だけとなり、元和元年以後の生駒領では周知の如く高松城のみが城郭として維持されるに至ったのである。

考古学的にみれば、文献史料から考えられている廃城年代よりも新しい時期まで機能した可能性が強い城郭があることも浮かび上がってきた。天正 13 年から元和元年に至る期間には、本城に加えて複数の支城の選択整備による城郭ネットワークの構築と支城淘汰の過程があったのである。なお、以上は現状で確認されている資料に限っての議論であり、例えば仙石氏の居城と伝わる聖通寺城の最初期の瓦葺き建物が仙石氏段階まで遡る可能性などは今後の課題となる。

3. 出土遺物からみた勝賀城

以上に示した諸城の状況を踏まえた上で、勝賀城跡の遺物群の特徴をまとめておく。

第 1 の特徴は、遺物量が少ない事である。1 次～8 次の調査により延べ 600 m² 以上を発掘したのに対し、明らかに後世の混入遺物は除いて、実測図を掲載できるレベルの破片は土器・陶磁器を含めて 53 点に過ぎず、しかも殆どがごく細片である。その他の遺物として金属製品や石製品も 16 点に過ぎない。発掘面積を勘案すると、勝賀城跡出土の遺物量は、前掲の戦国期の国人層の居城の多くに比べて相当に少なく、城郭としての利用形態や機能、あるいはモノの廃棄パターンが他の城郭と異なっていたとみられる。

絶対量が少ない勝賀城跡のうちでの遺物分布は、やはり規模が大きく平坦地も広い主郭に重心があり、他の曲輪は単位面積当たりの遺物量がさらに低下している。

第2点目は遺物群の年代観についてである。例えば、主郭出土の備前焼壺〔23～27〕は筆者の編年（乗岡2017）の中世5b～6a期、備前焼甕〔28〕は中世6a期、備前焼擂鉢〔30・31〕は中世6b期の製品である。つまり、これらは15世紀第4四半期～16世紀中頃の製品で、確かに香西氏の全盛が史料にみえる時期のものである。同様に、中国陶磁では龍泉窯系青磁は鎬運弁の表現の特徴から16世紀には下り得ないし、白磁や青花は16世紀中葉から後半の製品とみられ、16世紀末に降る漳州窯系の粗製青花などは含まないのも注目される。

しかし、陶磁器・土器全体の下限年代についてはもう少し細かな吟味が必要である。

備前焼の大皿〔32〕は中国製もしくは漸戸美濃製などの盤の模倣とみられる。同様の口縁形態をもつ備前焼の大皿は類例に乏しいが、大枠としての備前焼大皿は近世I b期、すなわち天正年間辺りから出現する器種である。

美濃漸戸製の天目茶碗である〔54〕は藤澤良祐氏の分類・編年（藤澤1993・2001）では、天目茶碗II類に該当する。高台部片のため全形が不詳ではあるが、あえて言えば1560年頃から始まる大窯第3段階辺りの形態かとも思えるが、高台周辺が鋸釉という特徴はむしろ1590年頃から始まる第4段階前半に主体となる属性である。

土師質土器では17世紀前葉に降る高松城の城下町跡出土のものに接近した形態の鉢や鍋の破片の存在が注目される（第5-55図）。鉢では15世紀の備前焼擂鉢模倣の形態からの乖離が相当に進んで、特に第5-55図〔103・104〕のように口縁がくの字に折れて外傾する個体を含む。また鍋でも体部の浅底化がみられたり、把手の立ち上りの傾斜が弱まったり、口縁上面の外向きの傾斜が強まったり、その外端の突起（元は鍔）が退化して、高松城跡出土の17世紀前葉の個体（第5-55図121～125）へ繋がって行く新相の個体を含んでいる。これら土師質土器の鉢と鍋は、大まかには16世紀第4四半期の製品を含むと見通せる。

勝賀城跡出土の新相の陶磁器・土器は史料から想定されている廃城年代である天正13（1585）年よりも新しい製品を確実に含むと断言できる状況にはないが、その可能性が窺える。逆に無理やり天正13年で切ろうとすればその間際のものが目立つという事になる。いっぽうで、唐津焼、志野焼、登窯系の美濃焼・瀬戸焼、中国製では粗製の青花碗で高台に砂を付着させるF群などは確認できない事から、廃城年代を17世紀初頭に降らせて考える必要性は浮かび上がってこない。

第3点目の特徴は遺物の組成についてである。

土器・陶磁器の内訳は掲載個体では施釉陶磁器9点、備前焼11点、土師質土器33点である。勝賀城では9点に過ぎない施釉陶器は、他城郭では抹茶碗を含む高級の食器類あるいは威信財が主体となるので、勝賀城跡では上位者の居住や高級品・奢侈品を含む食生活・喫茶などの痕跡が相対的に希薄であるとの評価に繋がる。ただし、その痕跡が新相品を含めて全くないという訳ではなく、上位者の存在を否定するものではない。

土器に比べて陶磁器が少ないのは他城でも一般的に認められるが、その主たる類型は、大量の土師質土器小皿を含むことであるのに対し、勝賀城跡では小皿よりも鉢や鍋の比率が高い事は特徴的である。他城で大量の土師質土器小皿が出土する事例は、普通食器としての皿と言うより儀礼用の使い捨ての盃、あるいは燈明皿として用いられたものが多いとみられることから、勝賀城では上位者を核に大人が集まって行う儀礼、あるいはそうした集合儀礼を行いうる大

広間をもつ建物、ないしは大量の燈明皿を同時に用いる御殿建築は想定し難いことになる。このことは、先述の施釉陶磁器の少なさに加えて、遊戯具である碁石や文書作成を示す硯石などが出土していない事や、遺構の上でも礎石建物はもとより掘立柱建物すら検出されていない事から、恒常に上位者の居住や高級な食生活が行われたとは考え難いこととも整合する。いっぽうで、土師質土器の鉢や鍋は合せて 20 点の掲載可能品が出土しており、調理行為は結構行われた形跡があり、天霧城の様な食器類とみて良さそうな土師質土器はここでは確認できないが、調理が行われた以上、飲食もそれなりに行われたに違いない。鉢類では備前焼擂鉢も含まれるが土師質土器が多い事も合せて、ここに居たのは階層的に低い兵員が多かったとの見通しに繋がってくる。

勝賀城では瓦は出土しておらず、発掘面積を勘案すると、本来的に不在であった可能性が強く、遺構の上でも礎石建物跡が検出されていないことと整合する。

以上に示したように勝賀城跡出土の遺物からは、恒久的な建物があつて国人クラスの上位者が継続的に居住して消費生活をおくったり、集合儀礼や饗宴を行なう場は想定し難く、また地域統治のための人員が詰める役所的建物があつたとも思えない。そのことは建物遺構、あるいは瓦が未確認であることと整合する。すなわち上位者が住むための居城、地域支配の拠点、政治の場としての機能は浮かび上がってこない。いっぽうで、鉢・鍋を用いた調理の場であったことは確かで、兵力駐屯地としての機能はもっていたようと思われる。

土器・陶磁器の製作年代では史料から窺える香西氏全盛期の製品を確かに含むことは重大であるが、最新相品に着目すると 16 世紀第 4 四半期段階、ことによると天正 13 年以降まで城郭が機能した可能性が浮かぶ。

仮にそうだとすると、この期の勝賀城は大規模城郭で広い主郭をもちながら瓦葺きないしは恒久的な建物の不在が大きな特徴と言え、先に示したような織豊期でも生駒氏段階の瓦葺き建物を伴う讚岐における本城・支城ネットワーク、すなわち地域支配のための拠点網の形成とは別次元の城郭として機能したと展望できる。

(乗岡)

図面で引用した文献

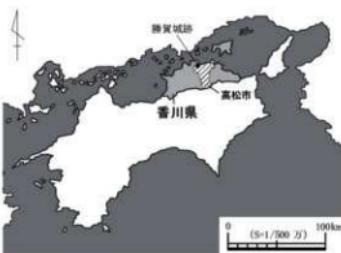
- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 文献 1 : 阿河 2006 | 文献 14 : 山崎 2008 |
| 文献 2 : (財) 香川県埋文センター編 1999 | 文献 15 : 新市町教委編 2003 |
| 文献 3 : 東かがわ市教委編 2016 | 文献 16 : 丸亀市教委編 2022 |
| 文献 4 : 渡邊 2018 | 文献 17 : 岡山市教委編 1997 |
| 文献 5 : 高松市教委編 2013 | 文献 18 : 岡山県古代吉備文化財センター編 2003 |
| 文献 6 : 香川県教委編 1987 | 文献 19 : 岡山市教委編 2001 |
| 文献 7 : (財) 香川県埋文センター編 2003 | 文献 20 : 高松市教委編 2016 |
| 文献 8 : 田中 1994 | 文献 21 : (財) 香川県埋文センター編 2003 |
| 文献 9 : (財) 大坂市文協編 1992 | 文献 22 : 岡山県古代吉備文化財センター編 1991 |
| 文献 10 : 藤原 2000 | 文献 23 : 乗岡 1993 |
| 文献 11 : 高松市教委編 2016 | 文献 24 : 片桐 1992 |
| 文献 12 : 東 1994 | 文献 25 : 一市二町天霧城跡保存会編 1997 |
| 文献 13 : 高松市教委編 2012 | |

第6章 総括

1. 立地と範囲

勝賀城跡は、香川県高松市鬼無町・香西西町・植松町・中山町にまたがる標高 365 m の勝賀山の山頂に位置し、城跡からは高松平野と高松湾が一望できる（第6-2図）。勝賀山は、標高 150 ~ 320 m まではマサ状に風化した花崗岩の露岩がみられ、320 m付近から頂上までは安山岩の露岩がみられる。安山岩は花崗岩に比べ風化しにくいため、安山岩の露岩が出現する標高 320 m付近から上は傾斜が急勾配になり、天然の要害となっている（第6-3図）。

先行研究では、勝賀城跡の範囲は、山頂部に加え山頂から 200 m 以上南へ降った標高 260 ~ 280 m の尾根上まで曲輪が点在すると考えられていた（香川県教委編 2003）。しかしながら、今回の調査で踏査を行い、標高 260 ~ 280 m の曲輪は、自然地形と判断し、踏査結果を踏まえ、縄張図を作成した（第6-4図）。その結果、勝賀城跡は勝賀山山頂部の安山岩が分布する範囲におさまり、山頂部全域の南北約 380 m、東西約 150 m に及ぶことが明らかになった。

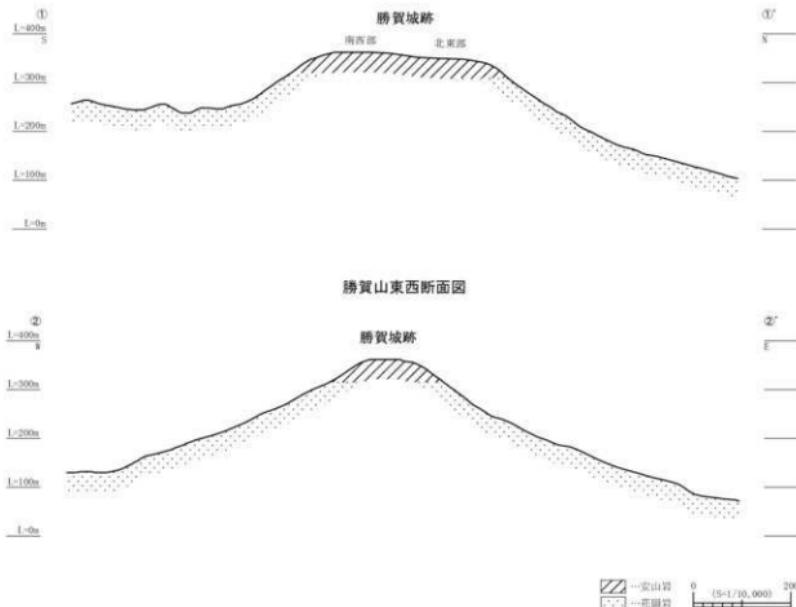


第6-1図 勝賀城跡の位置 (S=1/500万)

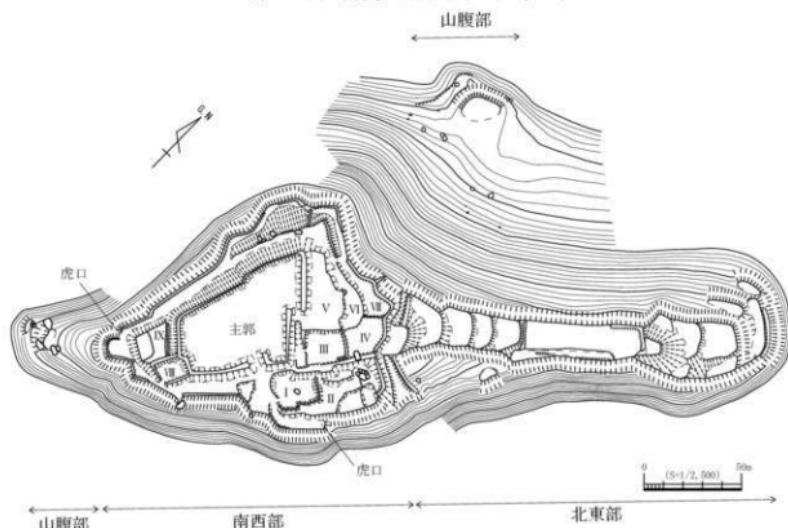


第6-2図 勝賀城跡の位置 (S=1/10万)

勝賀山南北断面図



第6-3図 勝賀山断面図 (S=1/10,000)



第6-4図 勝賀城跡縄張図 (S=1/2,500)

2. 勝賀城跡の構造

勝賀城跡は勝賀山頂部全城に及ぶ城跡だが、山頂部中央に堀切状の遺構と土壘（斜面部に堅堀と土壘とも言い換えられる）が組み合わさった遺構があり、それを境に南西部と北東部で構造が大きく異なる（第6-4図）。

南西部は主郭及び全体が土壘で囲まれた、主郭の求心性が高く曲輪が複雑に配置された構造で、喰い違い虎口や方形曲輪など16世紀後半に出現する新しい要素の遺構がみられる。その構造および発掘調査成果等から、織豊系城郭である可能性が高い。

北東部および山腹部は尾根上に曲輪が連なるように配置される連郭式で、讃岐の典型的な中世山城の構造と同様である。そのため、香西氏段階の構造を残していると考えられる。ただし、南西部における大規模改修の際に北東部も改修された可能性があり、縄張り自体が香西氏段階かは不明だが、連郭式の構造を変えるほど大規模な改修はされていない。勝賀山の形状を考慮すると、香西氏段階には標高が高い南西部にも連郭式曲輪が連続しており、現在の主郭部分が香西氏段階も主郭であった可能性が高い。そのため、香西氏段階の勝賀城跡の範囲は現在の縄張りの範囲とほぼ同様であったと考えられる。

以上を踏まえると、勝賀城跡は以下のようない変遷が想定される。まず、香西氏段階に山頂部全城に連郭式の中世山城が築かれた。16世紀末に豊臣（羽柴）勢力により南西部が大規模に改修され、織豊系城郭の構造へと変わる。北東部は改修されたかは不明だが、連郭式の構造を変えるほどの大規模な改修は行われておらず、香西氏段階の構造を地表に残すものである。

このことから、勝賀城跡は香西氏段階と豊臣（羽柴）段階という2時期の遺構が重複して残されている貴重な城跡である、といえる。

3. 南西部の構造

南西部は、主郭を分厚く高い土壘で囲み、南西部全体を低平な土壘で囲む、概して二重の土壘が特徴的である。また、内部は土壘や石積み、段によって曲輪群が方形状に区画され、複雑に配置されている。曲輪間を繋ぐ城内道には堅土壘や喰い違い状の土壘がみられ、城内においても横矢が掛かる構造となっている。南西部の虎口は東と南西にあり、正面の入口は東側の虎口と考えられる。南西の虎口は外周土壘によって形成されている。

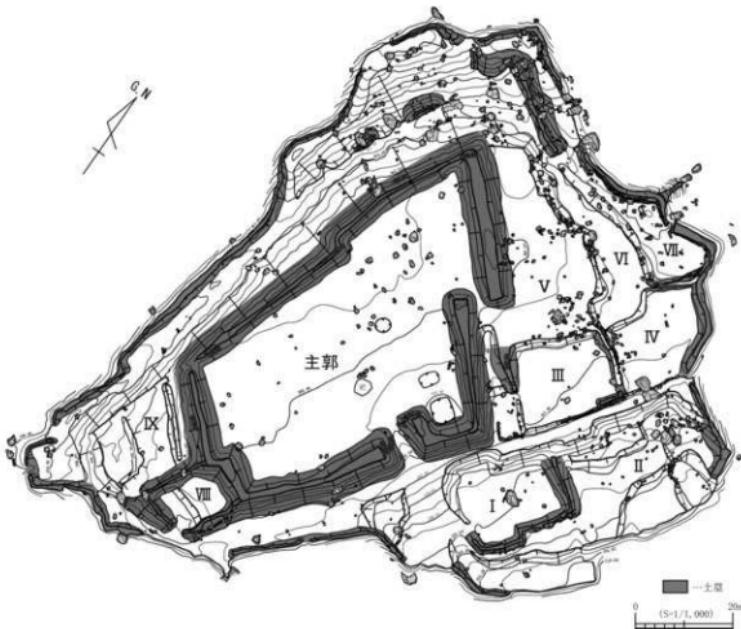
主郭は、短軸32～40m、長軸50～60m（土壘の内側）の長方形状である。面積は約2,000m²で、讃岐の中世山城の中で最大である。主郭を囲む土壘は高さ1～2mで四周を囲み、西と南で直角に近い折れがみられる。土壘により北と東に二つの虎口が形成され、北側は喰い違い虎口、東側は平虎口である。発掘調査の結果、土壘は曲輪造成などで削平した地山の土を盛り上げて築いたと考えられる。また、土壘裾部には石積みが廻ると考えられていたが、そのことを示す明確な遺構は認められなかった。

外周の土壘は高さ0.5mで、折れを多用するのが特徴である。折れの部分には随所に巨大な自然露岩を土留めとして利用しており、築城の妙が窺える。北側の外周土壘からは、土壘の折れの部分から派生するように外側に堅土壘が築かれる。南西部において北側は傾斜が最も緩やかな部分であるため、外周土壘の折れによる横矢や堅土壘により侵入を防ぐ工夫を凝らしている。外周土壘の内側裾部には安山岩が1～2石土留めとして配置されている。

内部には、主郭のほかに9つの曲輪（曲輪I～IX）がみられる。そのうち、主郭に隣接する曲輪I・III・VIIは土星で方形状に区画されており、その土星にも折れが認められる。

曲輪の成形方法が測量調査の成果によって判明した。土星によって区画された隣接する曲輪である、曲輪IIIとIVをみてみよう。曲輪IIIとIVを区画する土星が、全体が平坦に整えられた後に構築された場合、等高線は土星の部分を除くと直線状に繋がる。一方、全体が平坦に整えられる前に土星が構築された場合、等高線は土星の部分を除くと直線状に繋がらない場合がある。第5-21図をみてみると、曲輪IIIとIVは土星の部分を除くと、等高線は直線状に繋がらない。このような事象は、土星で区画され隣接する曲輪である曲輪VIIとIXにおいても同様にみられる。そのため、土星によって曲輪を区画した後に曲輪内を成形した可能性が高い。曲輪II・VII・IXの内部が平坦に造成されていないことを考慮すると、まずは主郭の造成と土星の築造を含めた縄張りの成形が優先され、後に各曲輪内部の造成が虎口付近など重要度の高い場所から順に行われたと考えられる。

また、勝賀城跡で唯一石積みが認められる曲輪III東端部は、発掘調査の結果、盛土で造成されたことが明らかになった。また、曲輪V北端部も発掘調査により、土留めとみられる巨大な安山岩の内側に盛土があることが判明した。外周土星にも内側裾部に石積みがあることや、外周土星の折れの部分には外側に巨大な自然露岩を土留めとして利用していることから、盛土部分には土留めとして石積みや自然露岩を用いる、という築造方法がみられる。



第6-5図 南西部土星の位置 (S=1/1,000)

以上をまとめると、南西部の現況遺構の大きな特徴として以下の7点が挙げられる。

- ①主郭を分厚く高い土壘で囲み、南西部全体を小さな土壘で囲む、概して二重の土壘をもつ。
- ②土壘線には折が多くつけられ、横矢が効く構造となっている。
- ③主郭虎口は土壘を開口し形成されており、2箇所認められる。東虎口は平虎口で、土壘線上から横矢が掛けられる。北側虎口は喰い違い虎口である。
- ④主郭周辺の曲輪群は土壘や石積み、段によって方形状に区画され、複雑に配置されている。
- ⑤曲輪間を繋ぐ城道には堅土壘や喰い違い状の土壘がみられ、城内においても横矢が掛けられる構造となっている。
- ⑥造成方法としては、まずは主郭の造成と縄張りの成形が優先され、後に各曲輪内部の造成が虎口付近など重要度の高い場所から順に行われた、と考えられる。
- ⑦盛土部分には土留めとして石積みや自然露岩を用いる、という築造方法がみられる。

4. 発掘調査の成果

調査区は、南西部の主郭と主郭虎口、主郭外にある方形曲輪内に設定した。

発掘調査の成果で特筆すべき点は、遺構がほとんど検出されなかつた点である。主郭では1、4次調査で南北に横断するようにトレンチを設定したが、建物跡などの遺構は検出されなかつた。主郭の喰い違い虎口、平虎口では門の上屋を示す遺構の検出を念頭にトレンチを設定したが、遺構は検出されなかつた。さらに、曲輪I・VIIでは曲輪を全面発掘し、曲輪IIIでも半分以上調査したが、遺構は全く検出されなかつた。

主郭については、主郭内に上面が平坦な安山岩礫が散乱していることから、『勝賀城跡』(高松市教委編 1979)では礎石建物があつた可能性を言及されているが、主郭以外の曲輪では遺構が検出されていないうえに安山岩礫もみられないことから、勝賀城跡では遺構として残るようないい建物が建てられなかつた可能性が高い。簡単なプレハブ構造の門や小屋などが掛けられたと考えられる。

ここで、面的に広く発掘調査された香川県内の主要な山城と比較してみよう（第6-1表）。検出された遺構や遺物から、雨滝城跡・天霧城跡とともに豊臣大名の支城として改修された可能性が高いが、城の構造自体は大きく変化しておらず、出土した遺物のなかには戦国期国人段階のものも含まれると考えられる。聖通寺城跡は仙石秀久の居城として改修されたと考えられるが、面的な発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。

面的に発掘調査が行われた雨滝城跡・天霧城跡を中心にみると、勝賀城跡南西部では認められない礎石建物と石垣、瓦が認められる。さらに、出土遺物の中には基石や硯、天目茶碗等陶磁器類が多数認められ、恒常に階層上位者の居住や高級な食生活が行われていた可能性が高いと考えられる。

一方、勝賀城跡では上で記したように恒常的な建物の痕跡は認められなかつた。遺構が認められないにも関わらず、鍋や鉢などの調理行為の痕跡を示す遺物が出土している点も勝賀城跡の特徴である。ただし、1～8次調査の出土総量がコンテナ3箱分で、雨滝城跡・天霧城跡の出土総量に比べ圧倒的に少ない。城郭としての利用形態や機能、モノの廃棄パターンが他の城郭とは異なっていたとみられる。恒常的な建物の不在、少量の出土遺物から、勝賀城南西部の

第6-1表 香川県内主要山城との比較

| | 天霧城跡 | 聖通寺城跡 | 勝賀城跡 | 雨滝城跡 |
|-------|----------------------------------|-------|-----------------|----------------------------------|
| 石垣 | ○ | ○? | 石積み | ○ |
| 遺構 | 礎石建物 | 不明 | なし | 礎石建物 |
| 出土遺物量 | ○ (コンテナ30箱以上) | 不明 | △ (コンテナ3箱) | ○ (コンテナ15箱以上) |
| 居住度 | 非常に高い 基石や硯、天目茶碗等 陶磁器類が多数出土 | 不明 | 希薄 陶磁器類は少量出土 | 非常に高い 基石や硯、天目茶碗等 陶磁器類が多数出土 |
| 瓦 | ○ | ○ | × | ○ |
| 土師質土器 | 16c代 | 不明 | 16c代 | 16c代 |
| 備前焼 | 15c後半～16c末 | 不明 | 16c前半～16c末 | ～16c末 |
| 中国陶磁器 | 景德鎮+漳州窯 | 不明 | 景德鎮 | 景德鎮+漳州窯 |

石垣は裏込めの有無が不明のため、高さによって区分した（東岡2014）。

1.5m以上を石垣、1.5m以下を石積みとする。

利用は短期間であったと考えられる。

さらに、施釉陶器が少ない点、土師質土器が小皿よりも鉢や鍋の比率が高い点、他城で認められる基石や硯などが出土していない点から、恒常的に階層上位者の居住や高級な食生活が行われていた可能性は低い。

遺物の年代は、多くが16世紀後半である。ただし、龍泉窯系青磁や備前焼には15世紀後半～16世紀前半のものが含まれており、一部香西氏時代のものが含まれると考えられる。備前焼には16世紀末のものも含まれているが、肥前陶器など確実に17世紀初頭まで下る遺物は認められない。

以上をまとめると、発掘調査成果として以下の5点が挙げられる。

- ①遺構がほとんど検出されなかった。勝賀城跡では遺構として残るような建物が建てられなかつた可能性が高い。
- ②遺構が認められないにも関わらず、抹茶椀を含む食器や調理行為の痕跡を示す遺物が出土している。
- ③遺物の年代は16世紀後半のものが多く、肥前陶器など確実に17世紀初頭まで下る遺物は認められない。
- ④出土遺物総量は他の讃岐の戦国期国人層の居城に比べかなり少ない。城郭としての利用形態や機能、モノの廃棄パターンが他の城郭とは異なっていたとみられる。
- ⑤恒常的な建物の不在、少量の出土遺物、出土遺物の時期からみると、勝賀城南西部の利用は短期間だった可能性が高い。
- ⑥施釉陶器が少量である点、土師質土器は小皿よりも鉢や鍋の比率が高い点、他城で認められる基石や硯などが出土していない点から、恒常的に階層上位者の居住や高級な食生活が行われていた可能性は低い。

5. 勝賀城跡と周辺の陣城群

発掘調査成果からは臨時の性格が強いことが明らかになった。このような性格を鑑みて城の縄張りや遺構をみてみよう。勝賀城南西部は分厚く高い土塁に囲まれ、平面構造は矩形で、土塁線には折がつけられ虎口に対して横矢が効く構造となる。虎口は土塁を開口させ、平入りの虎口では土塁線上から横矢が掛けられ、もうひとつは喰い違い虎口である。こうした地表面に明瞭に残された遺構に対し、発掘調査の成果は希薄である。このような特徴をもつ城は、織豊系城郭の中でも陣城と類似する（以下、織豊系陣城と呼ぶ）。

勝賀城跡周辺には、勝賀城跡南西部と類似した構造をもつ室山城跡と黄峰城跡が分布する。室山城の平面構造は矩形で、主郭の南端には分厚く高い土塁があり、喰い違い状の虎口を形成している。主郭の西端には勝賀城の外周土塁と同様な構造の土塁がみられる。主郭の東側は高さ約3～4mの石垣が構築され、中央に直角に近い折れがみられる。黄峰城の平面構造も矩形で、分厚く高い土塁に囲まれ、土塁により喰い違い虎口が形成されている。土塁の四隅は内に折れ曲がり、いわゆる入隅となる。

勝賀城・室山城・黄峰城の視覚領域をみると、勝賀城からは高松平野と高松湾を見渡せる。晴れているときは高松平野東端まで見渡すことができ、高松平野および高松湾を一望する場所として好立地である。ただし、石清尾山と五色台によって遮られて視認できない場所が存在する。そのような場所を補完して視認できるように室山城・黄峰城は立地している。城の構造と立地から、勝賀城と同時期に織豊系陣城へ改修したと考えられ。これらは高松平野および高松湾にらみを効かすための城であるといえる。

勝賀城を含めた讃岐の山城の分布や縄張り、出土遺物や出土状況から総合的に考えると、勝賀城を含む織豊系陣城群は、天正13年の秀吉による四国攻めに伴い改修された可能性が最も高い。

6. 勝賀城跡を取り巻く歴史背景

香西氏は、讃岐藤原氏の一流で、その始祖は鎌倉時代の承久の乱頃の御家人である香西資村と伝わる。香西氏は笠居郷を本拠にして活動しており、その居城は勝賀山麓の佐料城で、勝賀城は詰城として築城されたという。ただし、勝賀城がいつから築城されたかは明らかになっておらず、全国的に山城が築かれ始める時期を考えると南北朝期以降であろう。

室町時代に入ると、管領細川京兆家の内衆として在京し、その分国である丹波国や攝津国住吉郡の守護代を勤めた。また、讃岐国内では細川氏所領香西郡坂田郷の代官や醍醐寺領綾南条郡陶保の代官などを勤めている。細川勝元より「元」字を与えられた香西元資ののち、長子元直とその子孫は丹波篠山城において「上香西」と呼ばれ、次子元顕は讃岐の本領を相続して在京し「下香西」と呼ばれたという。

戦国時代初期には、香西氏は細川政元政権下で京都・讃岐において一大勢力となっていた。その中心人物は香西元長であり、当時の状況を著した記事が『蔭涼軒日録』にみえる。それによると、在京の香西党ははなはだ多数であり、ほかの侍はこれにおよばない、という。また、讃岐国13郡のうち、西讃6郡は香川氏、東讃7郡は安富氏が守護代として統治していたが、東讃は国衆の独立性が強く、香西党を主として安富氏に従わないものが多い、という。

しかしながら永正の錯乱（永正4年）で香西元長が討たれると、いわゆる上香西氏は滅び、その後は細川高国のもとで波多野氏・柳本氏が香西の名跡を繼いだ。

下香西と呼ばれる讃岐の香西氏の状況がわかる史料は少ないが、永禄11年の備前本太合戦で文献上に現れる。天文11年の阿波三好氏の讃岐侵攻以後、香川氏を除く讃岐国人らは三好氏に服属しており、香西氏も同様に服属するに至った。また、天正5年の讃岐元吉合戦においても三好氏配下の香西氏として文献上に現れる。

天正6年から長宗我部氏による讃岐侵攻が始まる。天正10年に香西氏は長宗我部氏に敗れ、長宗我部氏の配下となる。その後、天正13年6月に羽柴秀吉による四国攻めが起きると、香西氏は長宗我部氏の配下として参戦するが、7月末には長宗我部氏が降伏する。このときに秀吉勢が勝賀城南西部・室山城・黄峰城を陣城としたと考えられる。

天正13年に讃岐に入部した仙石秀久は、在地武士たちに知行宛行状を発給し、家臣団への組み込みを図っている。『南海通記』には、このとき香西氏は秀久の家臣とならず没落したといわれる。天正14年に九州出兵に出陣した秀久は戸次川の戦いで大敗し、讃岐の名族が多く滅亡した。この敗戦で、秀久は秀吉から領知を没収された。同15年正月、代わって尾藤知宣が入部したが、九州出兵で消極的な作戦をとったとして秀吉の怒りに触れ、わずか4カ月で領知を没収された。同年8月に尾藤知宣の後を受けて生駒親正が讃岐へ入部する。親正は引田城・聖通寺城に入り、在地の武士を家臣に取り立てて領国支配を進めた。そして、翌年から香東郡野原庄に築城することとした。これが高松城である。

親正は地域支配のための拠点として高松城の他にも領内に支城を形成し、引田城や丸亀城を中心に城内に瓦葺き建物を整備する。勝賀城では瓦葺きないし恒久的な建物が不在であることから、これらとは別機能の城郭、すなわち臨時の性格をもつ陣城であったと考えられる。勝賀城の利用は短期間と考えられることから、廃城時期は改修直後～高松城築城前後が想定される。

7. 勝賀城跡の本質的価値

勝賀城跡は北東部と南西部で大きく構造が異なり、北東部は讃岐の有力国人である香西氏の詰城として築かれた段階の遺構、南西部は天正13年の秀吉による四国攻めの際に改修された豊臣大名段階の遺構が残され、その変遷が明確にわかる希少な遺跡である。

細川京兆家の内衆として活躍した香西氏の城郭として築かれた勝賀城は、地域のランドマークである勝賀山山頂に築かれた。香西氏段階の勝賀城の構造は、尾根上に曲輪が連なるように配置される連郭式で、讃岐における有力国人層の城郭と同様である。

また、香西氏は香西浦を拠点として備讃瀬戸一帯に勢力を伸長していたことが史料から窺える。勝賀城は香西浦を含んだ瀬戸内海を一望でき、海上交通の監視等の役割も果たしていたと考えられる。

勝賀城跡南西部は、その構造や発掘調査成果、香川県内の他城との比較、周辺の同様な構造の城郭の分布によって、天正13年の秀吉による四国攻めの際に秀吉勢が改修した陣城であることが明らかになった。高松平野全体が視界に入るよう周辺の室山城・黄峰城も陣城とし、勝賀城を中心として高松平野及びその周辺で活動する長宗我部勢を牽制する軍事的拠点としての役割を果たしていたと考えられる。また、西方を見据え、長宗我部勢力の拠点である西長尾

城と天霧城に対応する拠点としても位置づけられる。

勝賀城跡の発掘調査成果である、遺構の希薄さや遺物量の少なさも臨時的な陣城の特色を示す好例である。豊臣秀吉が天下統一に向かう途上の、秀吉勢による明確な遺構が残る典型的な陣城として重要であり、保存状態も極めて良好である。

勝賀城跡は、細川京兆家の内衆である香西氏の詰城から始まり、戦国時代に三好氏や長宗我部氏の侵攻を受け、戦国末期に秀吉勢による陣城への改修、という四国統一をめぐる戦乱の舞台となった城郭であり、そのような歴史的変遷が遺構として残る重要な史跡である。

(梶原)

参照文献

【論文等】

- 阿河銳二 2006 「丸亀城跡」「西長尾城」「城郭瓦の変遷－織豊期から近世へ－」中国・四国地区城館調査検討会
- 阿河銳二 2016 「瓦について」『引田城跡総合調査報告書』東かがわ市内遺跡発掘調査報告書第7集、東かがわ市教育委員会
- 東信男 1994 「天霧城跡」「織豊期城郭の瓦」、織豊期城郭研究会
- 東信男 1997 「讃岐の城郭石垣」『香川考古』第6号
- 天野忠幸 2008 「三好政権と東瀬戸内」『歴史に見る四国－その内と外と－』地方史研究協議会（編）、雄山閣
- 天野忠幸 2013 「織田・羽柴氏の四国進出と三好氏」『四国と戦国世界』四国中世史研究会・戦国史研究会（編）、岩田書院
- 天野忠幸 2015 『増補版戦国期三好政権の研究』、清文堂出版
- 池田誠 1995 「城郭から見る天正期讃岐の動向」『中世城郭研究』第9号
- 池田誠 2003 「中世城館跡詳細分布調査から見た香川の城郭」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』、香川県教育委員会
- 伊沢肇一・斎藤賢一・松本豊胤 1979 「勝賀城跡」『日本城郭大系 第15巻』、新人物往来社
- 市村高男 2016 「中世港町の成立と展開－一中世都市論の一環として－」『中世港町論の射程 港町の原像：下』岩田書院
- 今谷明 1986 『守護領国支配機構の研究』、法政大学出版局
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2
- 海津正倫 1994 『沖積低地の古環境学』、古今書院
- 大橋康二 1987 「十六・十七世紀における日本出土の中国磁器について」『東アジアの考古と歴史 下』岡崎敬先生退官記念事業会編、同朋舎出版
- 大橋康二 2017 「日本などにおいて出土の明清の中国磁器（染付を中心に）」『日本における明清の中国磁器』、近世陶磁研究会
- 岡田章一・長谷川真 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号
- 岡寺良 2014 「曲輪配置」『中世城館の考古学』、高志書院
- 岡山大学附属図書館・岡山シティミュージアム編 2012 『日本六十余州図の世界』平成24年度池田家文庫絵図展、岡山大学附属図書館
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 織野智子 2017 「山城国守護代香西又六」『歴史民俗協会紀要』平成29年度高松市歴史民俗協会論文集
- 香川県編 1988 『香川県史 第一巻 通史編 原史・古代』、香川県
- 香川県立ミュージアム編 2017 『讃岐びと、時代を動かす』、香川県立ミュージアム
- 梶原慎司 2019 「香川県高松市 勝賀城跡」『織豊城郭』第19号
- 片桐孝浩 1992 「考察－古代から中世にかけての土器様相－」『川津元結木遺跡』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 加納亜由子 2017 「旗本別所氏旧蔵播磨国絵図の成立と伝来」『日本歴史』第831号
- 唐木裕志 2003 「西長尾城跡」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』、香川県教育委員会

- 唐木裕志・橋詰茂編 2005『中世の讃岐』、美巧社
- 川島佳弘 2018「元吉合戦再考」『四国の中世城館』四国地域史研究連絡協議会（編）、岩田書院
- 川島佳弘 2019「天正五年元吉合戦と香川氏の動向」『戦国・近世初期 西と東の地域社会』橋詰茂（編）、岩田書院
- 川島佳弘 2022「天正五年元吉合戦と讃岐の情勢変化」『湯築城歴史塾要旨集』、湯築城資料館
- 川村教一 2000「香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境」『第四紀研究』39(6)
- Kawamura, N. 2002, Sedimentary facies and changes of the depositional environments of Late Quaternary in the lowlands of the Takamatsu Plain, Kagawa Prefecture, southwest Japan. *Journal of Geosciences* 45(4)
- Kawamura, N. 2003, Late Pleistocene and Holocene sediments and geomorphological development of the Takamatsu Plain, Kagawa Prefecture, southwest Japan. *Journal of Geosciences* 46(5)
- 川村教一・西山賢一 2019「四国地方の主要臨海平野における上部更新統および完新統の対比:現状と課題」『地質学雑誌』125-1
- 川村博忠 1984『江戸幕府撰国絵図の研究』、古今書院
- 川村博忠 1995「寛永国絵図の縮写図とみられる『日本六十八州縮写国絵図』」『歴史地理学』第176号
- 北山健一郎 2009「中世港町の地形と空間構成」『中世讃岐と瀬戸内世界 港町の原像:上』、岩田書院
- 鬼無町誌編集委員会編 2007『ふるさと鬼無』、美巧社
- 頼昌歩 2021「高松市内の陶棺について」令和3年度文化財連載講座 探求!たかまつ遺産 第1回発表資料
- 木下晴一 2022「ため池を描いた国絵図」『香川地理学会会報』No. 42
- 木村守・松田朝由 2020「東かがわ市水主採集の中世土器について」『東かがわ市歴史民俗資料館年報・紀要』第17号
- 倉地克直編 1993『岡山大学文学部研究叢書7 岡山藩 家中諸士家譜五音寄1』、岡山大学文学部
- 藏本晋司 1992「香川県出土の中世後半期の輸入陶磁器について」『東山崎・水田遺跡』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局
- 藏本晋司 2005「鷺ノ山石棺からみた讃岐の前期古墳と対外交渉」『さぬき国分寺町誌』、国分寺町誌編纂委員会
- 藏本晋司 2017「東四国地域における古代～中世墓の検討」『誉水中筋遺跡』、香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局
- 藏本晋司 2017「四国における前半期古墳出土埴輪の基礎的研究」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成27年度』、香川県埋蔵文化財センター
- 藏本晋司 2018「飯野・東二瓦礫遺跡の中世建物群について 一中世方形区画建物群成立の背景一」『飯野・東二瓦礫遺跡』、香川県埋蔵文化財センター
- 黒田慶一・栗間実 2000「豊臣氏大坂城と宇喜多氏岡山城の同范瓦」『大坂城と城下町』渡辺武館長退官記念論集刊行会（編）、思文閣出版
- 香西町役場編 1930『香西史』、香西町役場
- 斎藤慎一 2006『中世武士の城』、吉川弘文館
- 狭川真一 2011『中世墓の考古学』、高志書院
- 狭川真一 2022「高松市周辺の中世お墓事情」『史集高松 第2号』高松市埋蔵文化財調査報告第233集、高松市教育委員会

- 佐藤竜馬 2000 「中世区画遺構の変遷」『空港跡地遺跡IV 第1分冊』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 佐藤竜馬 2003a 「出土瓦の研究」『高松城跡（西の丸町地区）II』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2003b 「近世在地土器の検討」『高松城跡（西の丸町地区）II』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2014 「高松城跡における近世初頭の軒平瓦」『香川県中世瓦研究会 資料』、香川県中世瓦研究会
- 佐藤竜馬 2016 「高松城はいつ造られたか」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成26年度』、香川県埋蔵文化財センター
- 鶴中佳輝 2021 「戦国期讃岐安富氏の基礎的研究」『四国中世史研究』第16号
- 城郭談話会編 2017 「織豊系城郭とは何か」、サンライズ出版
- 末柄豊 1992 「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領國化」『中世の法と政治』、吉川弘文館
- 末柄豊 2008 「不間物語」をめぐって』『年報 三田中世史研究』15号
- 瀬戸市史編纂委員会編 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』、瀬戸市
- 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』、東京大学出版社
- 泉保安夫 2021 「絵図を読む－江戸初期の讃岐国絵図－」『香川地理学会会報』No.41
- 泉保安夫 2022 「『天正年間古地図』に描かれた笠居郷」『香川地理学会会報』No.42
- 宗全齋 2020 『香西氏に関する年譜史料』、私家版
- 高田徹 2017 「織豊系城郭とは何か」『織豊系城郭とは何か』、城郭談話会（編）、サンライズ出版
- 高橋学 1987 「高松平野の地形環境分析I」『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第12集、高松市教育委員会
- 高橋学 1988 「高松平野の地形環境分析II」『弘福寺領讃岐国山田郡田団比定地域発掘調査概報I』高松市埋蔵文化財調査報告第13集、高松市教育委員会
- 高橋学 1992 「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市埋蔵文化財調査報告第19集、高松市教育委員会
- 高松市歴史資料館編 1996 『讃岐の古瓦展』、高松市歴史資料館
- 高松市歴史資料館編 2014 『MAPS～古地図の楽しみ方～』、高松市歴史資料館
- 高松市歴史民俗協会編 2010 『歴民シンポジウム－戦国から太平へ－ 戦国武将生駒氏と引田・高松・丸亀の3城』、高松市歴史民俗協会
- 多田真弓 2004 「戦国末期讃岐国元吉城をめぐる動向」『内海文化研究紀要』第32号
- 糸井好幸 2003 『安山岩と大陸の起源』、東京大学出版社
- 田中健二 2003 「中世の讃岐国人香西氏の名字の読みについて」『香川史学』第30号
- 田中健二 2008 「生駒時代・高松城下周辺の地形について」『香川県立文書館紀要』第12号
- 田中健二 2010 「続 生駒時代・高松城下周辺の地形について」『香川県立文書館紀要』第14号
- 田中健二 2017 「『正保国絵図』に見る近世初期の引田・高松・丸亀」『香川大学教育学部研究報告 第1部』第147号
- 田中健二 2019 「歴史資料からみた満濃池の景観変遷」『満濃池名勝調査報告書』まんのう町内名勝調査報告書第1集、まんのう町教育委員会
- 田中健二 2022a 「京兆家内衆・讃岐守護代安富元家についての再考察」『香川県立文書館紀要』第25号

- 田中健二 2022b 「中世の讃岐国人香西氏についての研究」『香川大学教育学部研究報告』第7号
- 田中健二・大藪典子 1988 「細川家内衆香西氏の年譜－香西又六の山城守護代任命まで－」『香川史学』第17号
- 田中幸夫 1994 「姫路城瓦と姫路系瓦工人について」『織豊城郭』創刊号
- 棚橋光男 2008 「嘉吉の乱に関する一史料—讃岐国仁尾浦神人等言上状—」『中世成立期の法と国家』 塙書房
- 土山公仁 2008 「岐阜市歴史博物館本『賤ヶ岳合戦図屏風について』『館蔵品図録 戦国合戦図屏風』」岐阜市博物館
- 津野倫明 2012 『長宗我部氏の研究』 吉川弘文館
- 鶴崎裕雄 1982 「細川政元政權と細川千句—京都大学図書館寄託菊亭文庫本『二月廿五日一日千句御発句御脇第三』—」『帝塚山学院短期大学研究年報』第30号
- 中井均 1990 「織豊系城郭の画期－礎石建物・瓦・石垣の出現－」『中世城郭研究論集』 新人物往来社
- 中井均 2014 「虎口」『中世城館の考古学』 高志書院
- 中井均 2016 『城館調査の手引き』 山川出版社
- 中井均 2017 「礎石建物・瓦・石垣」『織豊系城郭とは何か』、城郭談話会（編）、サンライズ出版
- 中井均 2020 『信長と家臣団と城』 KADOKAWA
- 永井久美男編 1994 『中世の出土銭』、兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男編 1998 『近世の出土銭II』、兵庫埋蔵銭調査会
- 中平景介 2019 「天正前期の阿波・讃岐と織田・長宗我部関係」『戦国・近世初期 西と東の地域社会』 橋詰茂（編），岩田書院
- (財)日本地図センター 2004 『タイムスリップマップ 四国四都』 (財)日本地図センター
- 野中寛文 1990 「讃岐武士団の成立－『綾氏系図』をめぐって－」『四国中世史研究』創刊号
- 信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第16回古代学協会四国支部研究大会 研究発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』、古代学協会四国支部
- 乗岡実 1993 「屋根瓦」『岡山市指定重要文化財安住院本堂保存修理報告書』岡山市教育委員会
- 乗岡実 2001 「瓦について」『史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 乗岡実 2002 「出土遺物について」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
- 乗岡実 2014 「石積み・石垣」『中世城館の考古学』 高志書院
- 乗岡実 2017 「戦国時代の備前焼編年」『東洋陶磁』第46号
- 乗岡実 2019 「瓦から中国・四国地方の織豊系城郭と瓦工人を考える」『織豊城郭』第19号
- 乗岡実 2021a 「岡山城下の瓦作り」『就実大学史学論集』第35号
- 乗岡実 2021b 「四国における戦国期城郭の石積み・石垣」『城郭研究と考古学 中井均先生追職記念論集』中井均先生追職記念論集刊行会（編）、サンライズ出版
- 橋詰茂 1984 「『兵庫北関入船納帳』に見る讃岐船の動向」『香川史学』第13号
- 橋詰茂 1993 「讃岐戦国史における元吉合戦の位置付け」『香川史学』第22号
- 橋詰茂 2007 『瀬戸内海地域社会と織田権力』、思文閣出版
- 橋詰茂 2014 「生駒氏の讃岐入部に関する一考察」『戦国武将と城』 サンライズ出版
- 橋詰茂 2016 「文献・絵図史料から見た引田城」『引田城跡総合調査報告書』 東かがわ市内遺跡発掘調査報告書 第7集、東かがわ市教育委員会
- 橋詰茂 2018 「中世後期東瀬戸内地域をめぐる諸相」『徳島発展の歴史的基盤』地方史研究協議会（編）、雄山閣

- 長谷川修一・斎藤実 1989 「讃岐平野の生い立ち」『アーバンクボタ』No. 28
- 長谷川修一・鶴田聖子 2013 『讃岐ジオサイト探訪』, 香川大学
- 馬部隆弘 2018 『戦国期細川権力の研究』, 吉川弘文館
- 平井上純 2016 『長宗我部元親・盛親』, ミネルヴァ書房
- 広瀬和雄 2018 「石清尾山古墳群をめぐる二、三の論点」『石清尾山古墳群（福荷山地区）調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第 190 集, 高松市教育委員会
- 日和佐宜正 2017 「地方からみた織豊系城郭」『織豊系城郭とは何か?』, 城郭談話会(編), サンライズ出版
- 藤井公明 1983 『香西氏研究』『高松短期大学研究紀要』第 11 号
- 藤井義雄・佐藤博明 1996 「サヌカイト」『新版 地学事典』, 平凡社
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』, 高志書院
- 藤原好二 2000 「山本慶一氏寄贈の資料 I」『倉敷埋蔵文化財センター年報 7』, 倉敷埋蔵文化財センター
- 藤好史郎・森下英治・小野秀幸 2000 「備讃瀬戸地方におけるナイフ形石器文化後半期研究の現状と課題」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 VIII』
- 古野賀 2009 「室町幕府一守護体制下の分国支配構造—細川京兆家分国丹波国を事例に—」『市大日本史』12 号
- 松田英治 2003 「天王城跡（橘城跡）」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』, 香川県教育委員会
- 松田英治 2012 「近世城郭を彷彿する綱張りの勝賀城」『文化財協会報』平成 23 年度特別号, 香川県文化財保護協会
- 松田英治 2013 「上佐山城」『文化財協会報』平成 24 年度特別号, 香川県文化財保護協会
- 松田英治 2018 『香川県中世城跡踏査記録』, 私家版
- 松田直則 1994 「土佐の中世城郭から織豊期城郭への変遷」『織豊城郭』創刊号
- 松本和彦 2003 「西の丸地区出土の陶磁器について」『高松城跡（西の丸町地区）III』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 御厨義道 2005 「讃岐国」『国絵図の世界』国絵図研究会(編), 柏書房
- 御厨義道 2008 「高松城における海辺利用の変遷について」『調査研究報告』第 4 号, 香川県歴史博物館
- 水澤幸一 2014 「戦国期武家の日常使いの貿易陶磁の実像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 182 集
- 村田修三 2003 「香川県中世城館跡詳細分布調査に参加して」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』, 香川県教育委員会
- 桃裕行 1979 「松江藩香西（孫八郎）家文書について」『立正史学』第 46 号
- 桃裕行 1982 「身延文庫本『雄々私用抄』及び『甚深集』の紙背文書について」『立正史学』第 51 号
- 森毅 1995 「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第 149 号
- 森毅 2000 「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器の編年－大阪における信長・秀吉・秀頼期の陶磁器－」『織豊城郭』第 7 号
- 森毅 2015 「大阪出土の桃山陶器」『大阪 豊臣と徳川の時代』, 高志書院
- 森下英治 2001 「遺跡の立地と櫻境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十七冊 中間西井坪遺跡 III』, 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团
- 森下友子 1994 「鎌田共済会郷土博物館所蔵の讃岐国絵図」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要 II』

- 森下友子 1996 「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要IV』
- 森下浩行 1983 「高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺」『香川考古』創刊号
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白碗の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
- 森田克行 1984 「屋瓦」『浜津高櫛城』高櫛市文化財調査報告書 14, 高櫛市教育委員会
- 森脇崇文 2018 「足利義昭帰洛戦争の展開と四国情勢」『徳島発展の歴史的基盤』地方史研究協議会（編），雄山閣
- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』，同成社
- 山田康弘 2000 『戦国期室町幕府と将軍』，吉川弘文館
- 吉成承三 2018 「歓状堅堀群をもつ四国の城」『四国の中世城館』四国地域史研究連絡協議会（編），岩田書院
- 和田英道 1983 「細川氏関係軍記考(1)書誌編」『跡見学園女子大学国文学科報』第 11 号
- 和田英道 1983 「尊經閣文庫藏『不問物語』翻刻」『跡見学園女子大学紀要』第 16 号
- 渡邊誠 2012 「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古文化論叢 2』，高倉洋彰（編），中国書店
- 渡邊誠 2016 「讃岐地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会（編），六一書房
- 渡邊誠 2018 「基準資料集成 松尾寺」『統 織豊期城郭瓦研究の新視点』織豊期城郭研究会

【報告書】

- 雨滝城跡発掘調査団編 1983 『雨滝城跡発掘調査概要』，雨滝城跡発掘調査団
- 一市二町天霧城跡保存会編 1980 『讃岐天霧城を探る』，一市二町天霧城跡保存会
- 一市二町天霧城跡保存会編 1997 『天霧城跡発掘調査概報』，一市二町天霧城跡保存会
- 臼杵市教育委員会編 2005 『臼杵市所蔵絵図資料群調査報告書』，臼杵市教育委員会
- (財) 大阪市文化財協会編 1992 『難波宮址の研究 第九』，(財) 大阪市文化財協会
- 岡山県古代吉備文化財センター編 1991 『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 78, 岡山県教育委員会
- 岡山県古代吉備文化財センター編 2003 『岡山城二の丸跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 175, 岡山県教育委員会
- 岡山県古代吉備文化財センター編 2020 『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第 1 冊 一備前編一』，岡山県教育委員会
- 岡山市教育委員会編 1997 『史跡岡山城跡本丸中の段發掘調査報告』，岡山市教育委員会
- 岡山市教育委員会編 2001 『史跡岡山城跡本丸以下の段發掘調査報告』，岡山市教育委員会
- 香川県教育委員会編 1986 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報 (VII)』，香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団
- 香川県教育委員会編 1987 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』，香川県教育委員会
- 香川県教育委員会編 2003 『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』，香川県教育委員会
- 香川県教育委員会編 2009 『香川県文化財年報 平成 19 年度』，香川県教育委員会
- 香川県教育委員会編 2014 『香川県文化財年報 平成 24 年度』，香川県教育委員会
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 1996 『中間西井坪遺跡 I』，香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 1997『国分寺六ツ目古墳』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 1999『中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 1999『国分寺六ツ目遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 1999『高松城跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2000『西打遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2001『中間西井坪遺跡Ⅲ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2002『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2003『高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2003『高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- (財) 香川県埋蔵文化財調査センター編 2004『中間東井坪遺跡 正箱遺跡 八幡遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 香川県埋蔵文化財センター編 2004『中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ』香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・日本道路公団
- 香川県埋蔵文化財センター編 2004『川岡遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財センター・香川県土木部
- 香川県埋蔵文化財センター編 2008『本郷遺跡 川原遺跡』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター編 2014『兀塚遺跡』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター編 2021『香川県埋蔵文化財センターワン年報 令和元年度』香川県教育委員会
- 国分寺町教育委員会編 2005『堂山城跡主要部の地形測量調査報告書』国分寺町教育委員会
- さぬき市教育委員会編 2014『本村遺跡発掘調査報告書』さぬき市文化財調査報告第13集, さぬき市教育委員会
- 新市町教育委員会編 2003『広島県史跡相方城跡』新市町教育委員会
- 高松市教育委員会編 1979『勝賀城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第6集, 高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1980『勝賀城跡Ⅱ』高松市埋蔵文化財調査報告第7集, 高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1986『かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第11集, 高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1990『平木1号墳試掘調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第17集, 高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1991『高松市文化財調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第18集, 高松市教育委員会
- 高松市教育委員会編 1999『筑城城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第43集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2000『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第45集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2000『香西南西打遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第46集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2000『香西南西打遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第50集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2001『鬼無藤井遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第51集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2004『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第72集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2005『神高古墳群』高松市埋蔵文化財調査報告第82集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2006『牛ノ鼻古墳 牛ノ鼻遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第93集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2008『藤尾城跡 作山城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第117集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2009『石ヶ鼻古墳 御殿天神社古墳』高松市埋蔵文化財調査報告第119集, 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科

高松市教育委員会編 2009『高松城史料調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第122集, 高松市・高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2010『相作牛塚古墳』高松市埋蔵文化財調査報告第125集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2012『史跡高松城跡（天守台）一発掘調査編一』高松市埋蔵文化財調査報告第140集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2013『史跡高松城跡（天守台）一石垣解体・修理編一』高松市埋蔵文化財調査報告第147集, 高松市・高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2014『佐料遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第155集, 香川県農業協同組合・高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2015『相作馬塚』高松市埋蔵文化財調査報告第157集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2015『御殿貯水池南遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第161集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2015『新名氏屋敷跡（新名城跡）』高松市埋蔵文化財調査報告第164集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2015『平賀下遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第165集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2016『史跡高松城跡（地久橹台石垣整備）』高松市埋蔵文化財調査報告第166集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2017『神内城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第178集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2017『高松市内遺跡発掘調査概報』高松市埋蔵文化財調査報告第179集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2017『史跡讃岐国分尼寺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第183集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2017『相作馬塚古墳II』高松市埋蔵文化財調査報告第185集, 高松市教育委員会・株式会社日進堂

高松市教育委員会編 2018『御殿貯水池南遺跡（第5次調査）』高松市埋蔵文化財調査報告第188集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2018『石清尾山古墳群（稻荷山地区）調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第190集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2018『特別史跡讃岐国分寺跡I 遺構編』高松市埋蔵文化財調査報告第193集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2019『特別史跡讃岐国分寺跡 I 遺物編①』高松市埋蔵文化財調査報告第 202 集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2020『特別史跡讃岐国分寺跡 I 遺物編②』高松市埋蔵文化財調査報告第 210 集, 高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2020『飯田西 13 号塚・14 号塚・17 号塚・18 号塚・23 号塚 紙漉 25 号塚』高松市埋蔵文化財調査報告第 213 集, 高松市教育委員会・アイラックホーム株式会社・株式会社ロータリーハウス

高松市教育委員会・徳島文理大学文学部編 2021『高松市内所在剣抜式石棺調査報告書 I』高松市埋蔵文化財調査報告第 219 集, 高松市教育委員会・徳島文理大学文学部

高松市教育委員会編 2021『佐藤城跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 224 集, 両備住宅株式会社・高松市教育委員会

高松市教育委員会編 2021『紙漉 5 号塚』高松市埋蔵文化財調査報告第 225 集, (株)タニモト・高松市教育委員会

鳥取市教育委員会編 2010『鳥取城調査研究年報第 3 号』, 鳥取市教育委員会

長尾町教育委員会編 1980『星宿城跡発掘調査概要』, 長尾町教育委員会

長崎県教育委員会編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 123 集, 長崎県教育委員会

東かがわ市教育委員会編 2016『引田城跡総合調査報告書』, 東かがわ市内遺跡発掘調査報告書第 7 集, 東かがわ市教育委員会

備前市教育委員会編 2003『伊部南大窓跡周辺窓跡群確認調査報告書 I』備前市埋蔵文化財調査報告 5, 備前市教育委員会

備前市教育委員会編 2006『伊部南大窓跡周辺窓跡群確認調査報告書 II』備前市埋蔵文化財調査報告 7, 備前市教育委員会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1995『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』兵庫県文化財調査報告第 144 集, 兵庫県教育委員会

松本考古学研究所編 1999『羽床城跡』, 綾南町・松本考古学研究所

丸亀市教育委員会編 1988『讃岐丸亀城研究調査報告書 昭和 63 年度』, 丸亀市教育委員会

丸亀市教育委員会編 2006『丸亀市内遺跡発掘調査報告書第 1 集』, 丸亀市教育委員会

丸亀市教育委員会編 2015『丸亀の文化財』, 丸亀市教育委員会

丸亀市教育委員会編 2022『史跡丸亀城跡発掘調査報告書第 5 集 坂橋跡発掘調査報告書』丸亀市埋蔵文化財調査報告第 41 集, 丸亀市教育委員会

三木市教育委員会編 2010『三木城及び付城跡群総合調査報告書』三木市文化研究資料第 23 集, 三木市教育委員会

三木市教育委員会編 2012『三木城及び付城跡群総合調査報告書 総括編』三木市文化研究資料第 25 集, 三木市教育委員会

三豊市教育委員会編 2014『橘城 紫雲出山遺跡 山本町大野地区 弥谷寺通路道』三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集, 三豊市教育委員会

湯梨浜町教育委員会編 2019『2019 羽衣石城シンポジウム 羽衣石城魅力に迫る!』, 湯梨浜町教育委員会

米原市教育委員会編 2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』, 米原市教育委員会

米原市教育委員会編 2022『長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書』, 米原市教育委員会

勝賀城跡III

— 総括報告書（考察編） —

令和4年11月30日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発行 高松市教育委員会
印刷 (株) 中央ファイリング